女學世界定期增刊
第貳巻第拾五號

冬木だち

博文館發行




三井呉服店
東京日本橋駿河町
大阪高麗橋二丁目
東京電話本局 特浪三五、一二一七、一八六〇、三三三二
大阪電話東 特四七三、一六五〇
新柄流行の反物品々階上階下にのこらず陳列し尚休憩室をも取設け候間ゆる〳〵御遊覧奉願上候
地方よりの御注文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて御発送可仕候尚注文案内書も有之候

女學世界冬季
第貳卷第拾四號

冬木立目次

敍事文

消息文

名流雜俎

彙報

華族女學校學監　正五位　下田歌子先生著

新題詠歌捷徑

全一册

歌書の世に出づるもの多しと雖も其題を撰ぶこと皆陳套にして今日文明日新の事物を詠ぜんとするには其の用に適するものなし本書は新年天長節觀兵式觀菊會等より振天府金鵄勳章卷煙草蝙蝠傘自轉車電話噴水孤兒院等文明の裝飾利器實業其他の戯具に至るまで總べて斬新のもの百餘題を蒐めて其作例及詞寄せを輯錄せしものにして今の世に當り苟も三十一文字の歌に志あるもの必ず一本を座右に缺く可らざるの良書なり

半紙判洋紙
和裝美本
定價金三拾五錢
郵稅金四錢

國學大家林甕臣先生
文學士棚橋一郎先生　合編

日本新辭林

全一册

本書は和漢古今の語を蒐集し平易なる解釋を施したるものにして書中載する所現時の通用語は言ふに及ばず古言俚言及び外國由來の語に至るまで咸な網羅して漏らすことなし且單に語句の解釋を施すのみならず又其語原を說き而して舊典故事に關する語は成るべく其來歷を明かにし又意義の異なる每に●●●等の符號を以て其區別を示し一々例を援きて其解釋の正確なるを證せり其他斬新なる特色甚だ多く解釋の後に(同義)の語を挿入し又卷首に檢字の門を置きて字音搜索の便に供したる等用意周匝到らざるなし且卷帙大ならず携帶甚だ便に而かも活字の組植に新工夫を凝らしたるを以て世に行はるゝ大本よりも語數遙に多く實に文墨に從事するものと否とを問はず一日も座右に缺くべからざる至寶なりとす

縱四寸六分橫三寸五分●紙數千九百二頁●製本總クロース●挿畫二百五十餘個
定價金八拾五錢
郵稅不要

發行所　東京市神田區裏神保町　三省堂

萩の露



（川合玉堂氏筆）

小川一眞製

佛蘭西の名優

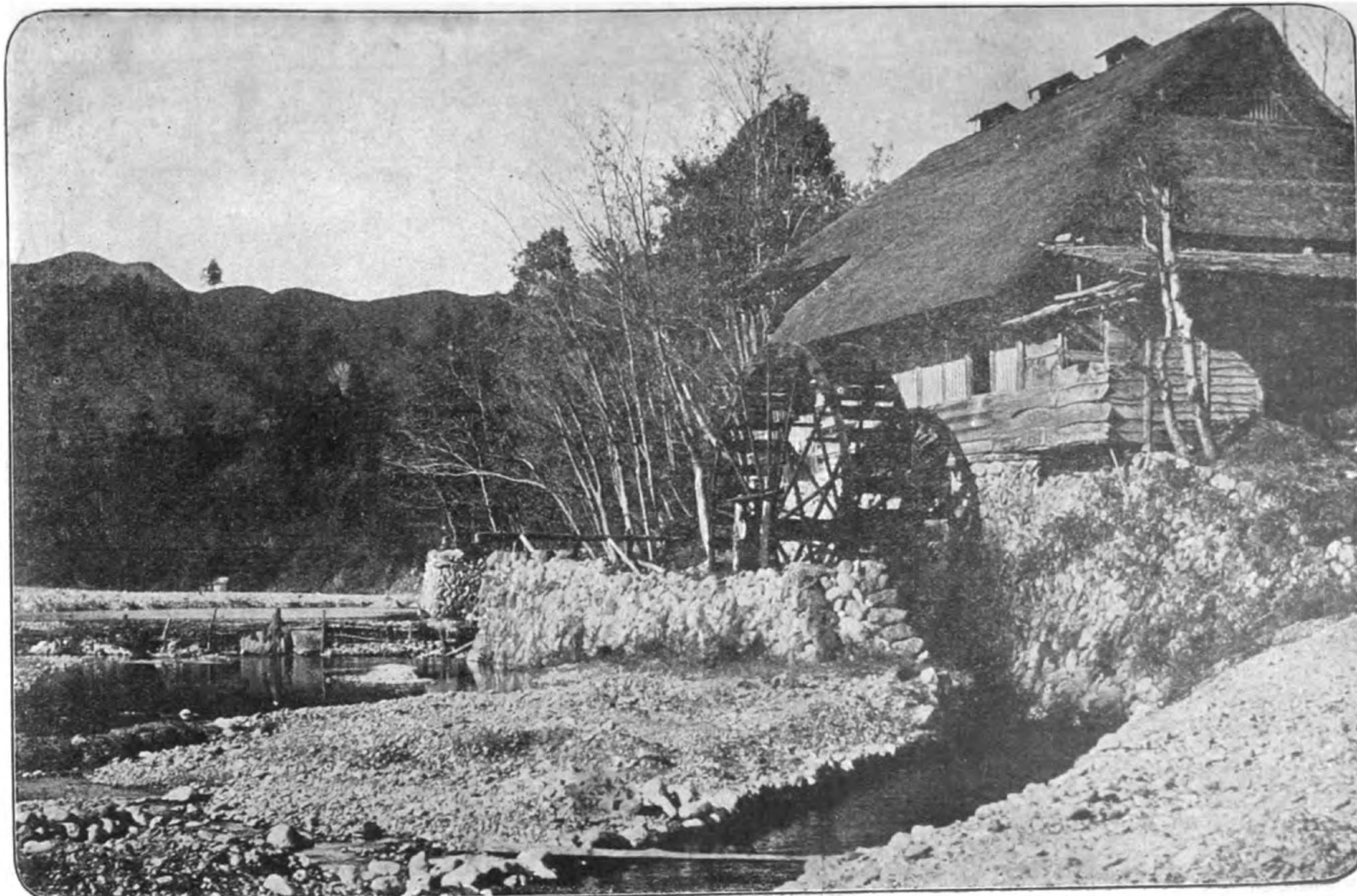


マダムベルテ嬢



マダムエノレーム嬢

冬木立



武州青梅町附近多摩川の上流

雪景山水



(原在泉氏筆)

(甲の一)

英文學研究雜誌

THE ENGLISH STUDENT.

編輯（哲學博士 農學博士）新渡戸稻造

顧問（エー、エム、ベーコン

編輯主任（エム、シー、レナード エー、シー、ハーツホーン）津田梅子。櫻井鷗村

英學新報

毎月二回 一日十五日 定期刊行

定價金八錢 郵税五厘宛

（甲の二）

第廿參號（十一月十五日發刊要目）

社說 外遊日本人の隨感（海外漫遊中本社員某博士の筆に成る奇警一讀を値ひす）英語研鎖要訣（本誌主筆レナード學士）通信 英國來の書簡 講義 英語研究法（第九回）（高等師範教授本田增次郎氏）時報 內外の新事件 逸話 大音樂家ワグナルの少年時代○滑稽家としての獨逸皇帝○獨帝の記臆力○罪人の碑文 會話 京都の秋…簡易會話 撰擧競爭（滑稽對話）註譯 議する勿れ（ブロクトル女史作）武士道（其他）飜譯 金色夜叉（英譯）○西郷侯逸話○英作文修正 書牘 課題答案修正 チャールスラムの悲痛なる書簡 小說 國公之少年武具匠 雜錄 大陽の傳說○露國小說に對する反動○海外文壇消息○讀者の領分○編者の机上○質疑解答○笑話、其他

第廿四號（十一月一日發刊）本誌特色は號を改む毎に面目を新にするは讀者既に認識する處、而して次號（第廿四號）に於て最も注意すべき讀物は島田三郎氏の讀書の快樂（第二高等學校教授デニング氏譯）中村春雨作の無花果を讀む（仙臺デフォレスト博士）天長節（會話）第廿五號（第貳卷第壹號）よりは更に誌面に一大刷新を加へ執筆者記事數頁を増加して讀者眷顧に報するべし。

發賣元 東京神田表神保町 東京堂 外全國各雜誌店に販賣す

●繪畫通信教授規則郵券貳錢＝四　東京麻布區飯倉四ノ木田寛栗
肉筆手本を用ひ新式獨特の方法を以て叮寧親切に敎ゆ

送呈

理學應用光線學上の一大發明により撮影せるパノラマ寫眞五百有餘種の目錄表並に特許商會會則御一報次第贈呈
弊店發賣の自働パノラマ覗鏡は附添人を要せずして自働的に日々五十錢乃至二圓の收入を得詳細は御照會あれ

東京日本橋區鎧橋際
電話　浪花　二番
特許商會

肺病

安房國鱵村千倉

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券封入にて御照會あれ

川名助次郎

子爵小笠原長生公書額面相添
在京都帝國大學小林文武君著

愛國婦人會主唱者　奥村五百

（奥村女史寫眞挿入）
特別減價金拾貳錢
郵税　貳錢
但拾冊以上無郵税

本書は既に新聞雜誌に高評せる如くに文章簡潔詩趣深遠にして諸媛必讀の好著述に御座候今般著者の熱誠なる希望に感じ印刷實費にて御送本可仕候間至急御一讀被下度候

發送者　京都日出新聞社内　桑原安貞

佛國大豪ルーソー氏著
慶應義塾教授管先生著（製本既成）

父母と子供

全一冊洋裝美本紙數二百五十餘頁定價三十錢郵税四錢

家庭讀本　賞與品適當

國家の盛衰興亡は、一に皆人物の如何に依り、人物の如何は誠に子供の敎育如何に依らずんばあらず。本會は有名なる佛國文豪ルーソーの原著エミルーを抄譯せるものにして、而してエミルーの書たる、皆人の知る如く、眞に近代新敎育の源泉たり。佛國の革命を誘起し、歐洲の家庭と學校を一變し、且又有名なるパスタロヂー、及びフレーベルの三大敎育家を出せるが如き、全く本書の賜なりといふ、以て此書が如何に一世の傑作たりしかを知るに足る可し。譯文亦平易簡明、毫も飜譯の跟跡を殘さず。世の子を持つ親、人の子を敎ふる敎育家は勿論、苟も敎育に心ある者は、何人と雖も一本を繙きて有益なる助言と興味とを得ざるべからず。

東京小石川區指ヶ谷町百三十三番地
發兌元　文光堂

大賣捌　東京神田表神保町東京堂●京橋區鎗屋町北隆館●京橋區銀座四丁目東海堂●大阪盛文館●名古屋川瀨代助其他全國書店

（甲の三）



米國女學生の兵式躰操



京都平安女學校生徒

花籠



（十一歳童女　松平輝子の筆）

女子美術展覽會出品

(乙の二)

會員募集

總裁伯爵東久世通禧君

初號は本月廿日發行す

大日本文學會

講習期は一ヶ年業證を與ふ▲講義錄は毎月一回發行一部二百頁以上▲東修卅錢月謝卅五錢三ヶ月一圓▲規則入用者は郵劵二錢を要す

本會は通信教授法により文學者たるに須要の學科を講習せしむるを以て目的とす▲學科は左揭の外に科外講義と會員詞林とあり科外講義には時々名家の文學談を載せ會員詞林には會員の美文詩歌俳句新體詩小說等を名家の撰評を經て揭ぐ▲猶他に時報あり

學科	講師
●國文評釋	大町桂月
●漢文評釋	飯田龍泉
●英文評釋	淺野馮虛
●英詩評釋	戸澤姑射
●韻文作法	鹽井雨江
●文學概論	武島羽衣
●支那文學史	久保天隨
●和歌評釋	佐々木信綱
●俳句評釋	河東碧梧桐
●漢詩評釋	久保天隨
●散文作法	大町桂月
●美學綱要	登張竹風
●日本文學史	武島羽衣
●西洋文學史	登張竹風

●目下入會の好時機

東京牛込區赤城下町四十三 大日本文學會

(二〇三)

新刊圖書豫告

獨逸國ドクトル岡崎遠光君著

銀行政策

（近刊）

全壹册

洋裝菊版
上裝
正價
郵稅

本書は、久く日本銀行に於て日本金融機關の樞機に參與する著者が多年の研究と實驗とにより得たりし、滿腹の經綸を發揮せるなり。從來吾國に於て銀行に關する著書は主として英米の銀行業務に關するもの多く我國の實際に適當して遺憾の點多きに鑑み銀行政策の理論實際と幷に歷史とを詳述し、以て世の續發する財政及經濟の問題に對し最も適切なる參考書たるを期せり、故に世の銀行家は皆至大の稗益あるべく銀行家ならざる人も一讀せざるべからず行文は簡潔流暢にして複雜なる銀行政策上の諸問題も容易に領解するを得ん

増井増次郎君著

銀行實踐法（第九版）

全壹册洋裝紙數五百十二頁
正價金六十錢　郵稅金拾錢

大山五郎君　加藤武男君合著

銀行法規及書式判決例

上製正價六十五錢郵稅拾錢
並製正價五拾錢　郵稅八錢

法學士野口弘毅君著

銀行新論 附 **外國爲替**

上製正價五拾錢　郵稅拾錢
並製正價三拾五錢郵稅八錢

窪川眞澄君著

通俗銀行簿記

全壹册洋裝紙數三百四十六頁
正價金貳拾五錢郵稅金八錢

（乙の四）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

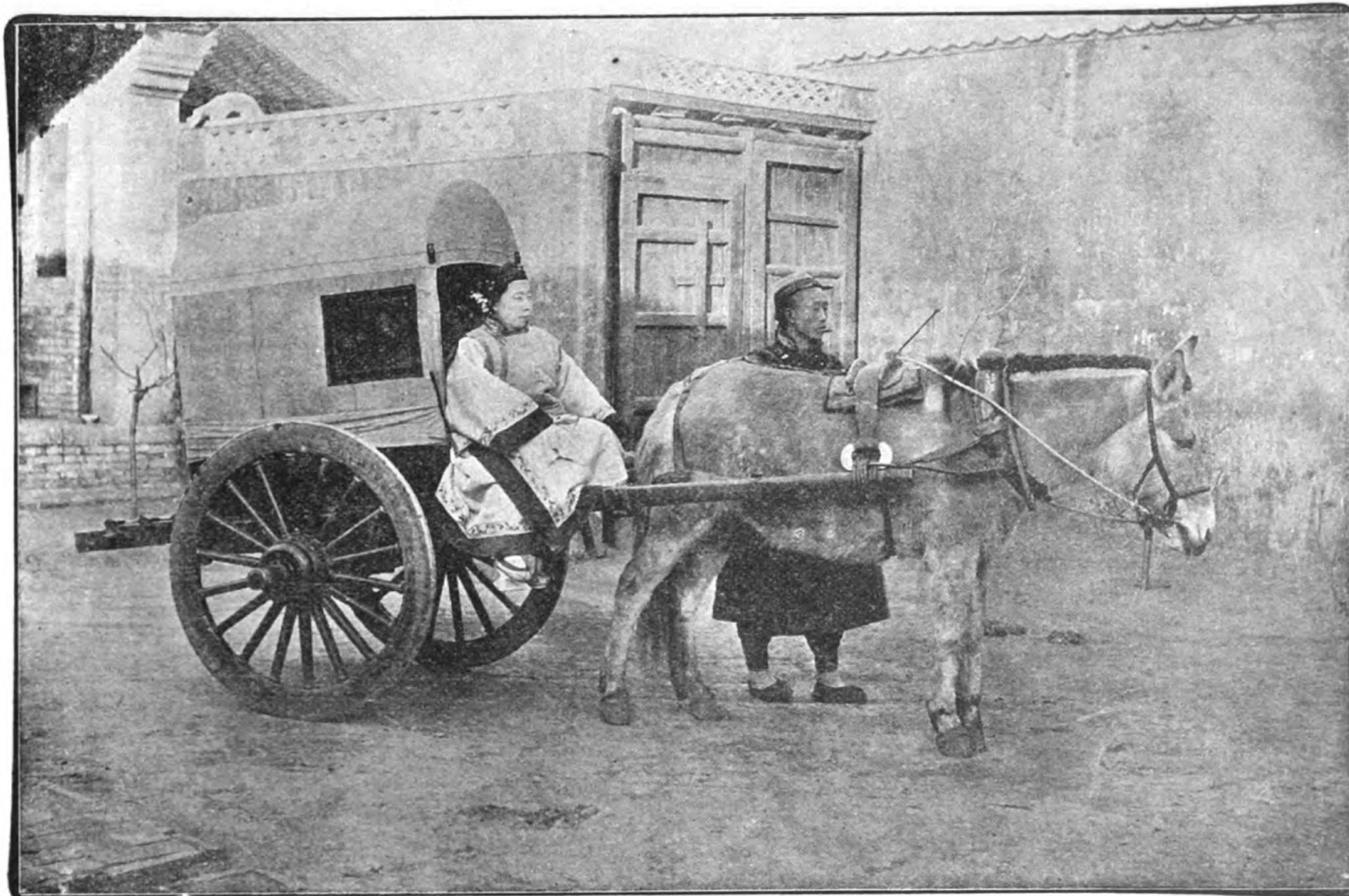
猫



（第九回懸賞當選第三等賞）

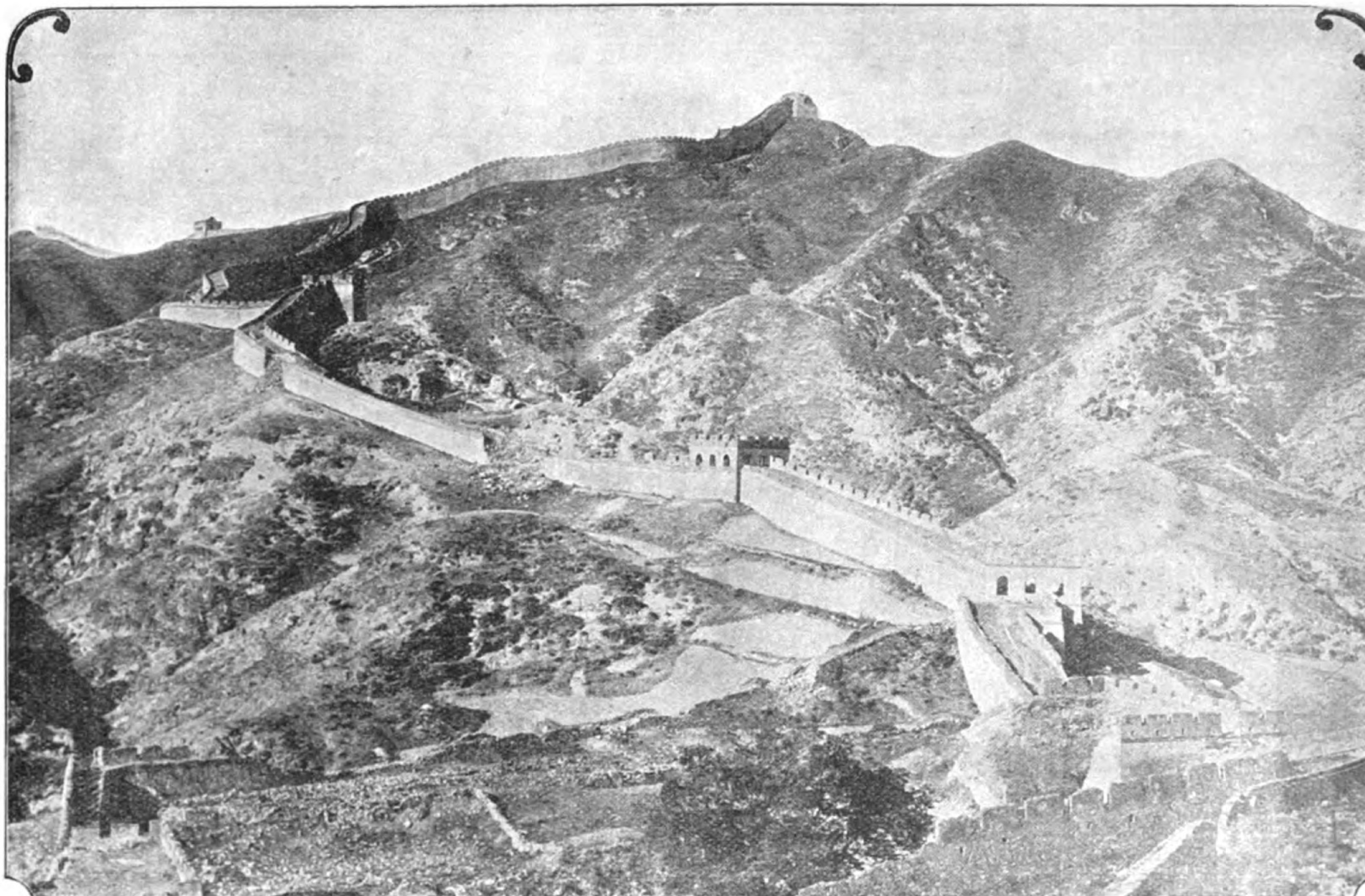
神戸　結城眞之輔撮影

支那風俗



北清地方婦人の旅行

東洋偉觀



萬里長城（居庸關附近）

通俗衛生 目のはなし

岡山縣醫學專門學校教授
醫學士小川劍三郎君著

正價金拾八錢郵稅四錢

眼は生命の所謂眼目にて官能全體の主部ともいふべき所其大切なること喋々を待たざるなり著者は大學を出てゝ大學病院の助手となり縣立病院に眼科醫長となり眼科專門を以て開業し特に其必要を認めて最も卑近に眼の衛生を述べん爲め日常の遊戲耳なれたる義太夫謠曲の文句等手當り次第に引用し勉めて多趣味に說明し挿圖も所々にあれば讀者は容易に了解して大なる實益を得るなるべし

……（十一月八日製本既成）……



發兌元 東京本町 博文館

（円の二）

畏モ毎號 皇太子殿下 上覧ヲ賜フ

總裁 二條公爵　編輯長 中村文學士
議長 本多男爵　會務長 篠田法學士

青年議會

議員七萬餘人支部百九十ヶ所七月十日第五期一號發行す入會金十錢會費一ヶ月九錢六ヶ月五拾錢●見本郵券十錢●規則書進呈

東京神田千代田町 電話本局二五七一
青年議會

淋病

消渇にて痛み強く膿汁多く出て又は痛みなく膿汁少し宛出て醫療薬用も効なく數年根治せず氣候の變り目に起る雑症も必ず根治する直輸出品也

醫學博士新發見藥



一回一丸服用効能著る

發賣元
東京日本橋區小網町一丁目
山崎太陽堂 藥局

●價三日分三十錢一週分六十五錢三週分一圓八十錢

特約 外神町花房町 帝國堂　神田鍛冶町 大木　兩國廣小路 大木　其他藥店に有

華族女學校學監 正五位下田歌子女史著

女子日本小歴史

（全壹冊）

●正價金參拾錢　郵税金四錢

本邦女子の標儀として教育日新の知識を啓誘せらるゝ下田先生は、其劇務の傍、少女子に我國體の美を知らしめ、愛國の精神を涵養せしめんが爲め、特に著されたるもの、神武天皇御即位より、本年皇孫御降誕に至る迄、重要の事蹟を平易簡明に記述したれは、教科書として、又家庭の讀本として、最も適良なる新史なり、乞ふ愛讀の榮を賜へ、

（丙の四）

下田歌子女史序文 須藤求馬先生新著

●日本女史

正價一冊壹圓貳拾錢　郵税金拾四錢

下村忠二郎先生著

●實用料理教本

正價金五拾錢　郵税金八錢

下村忠二郎先生著

●裁縫教授書

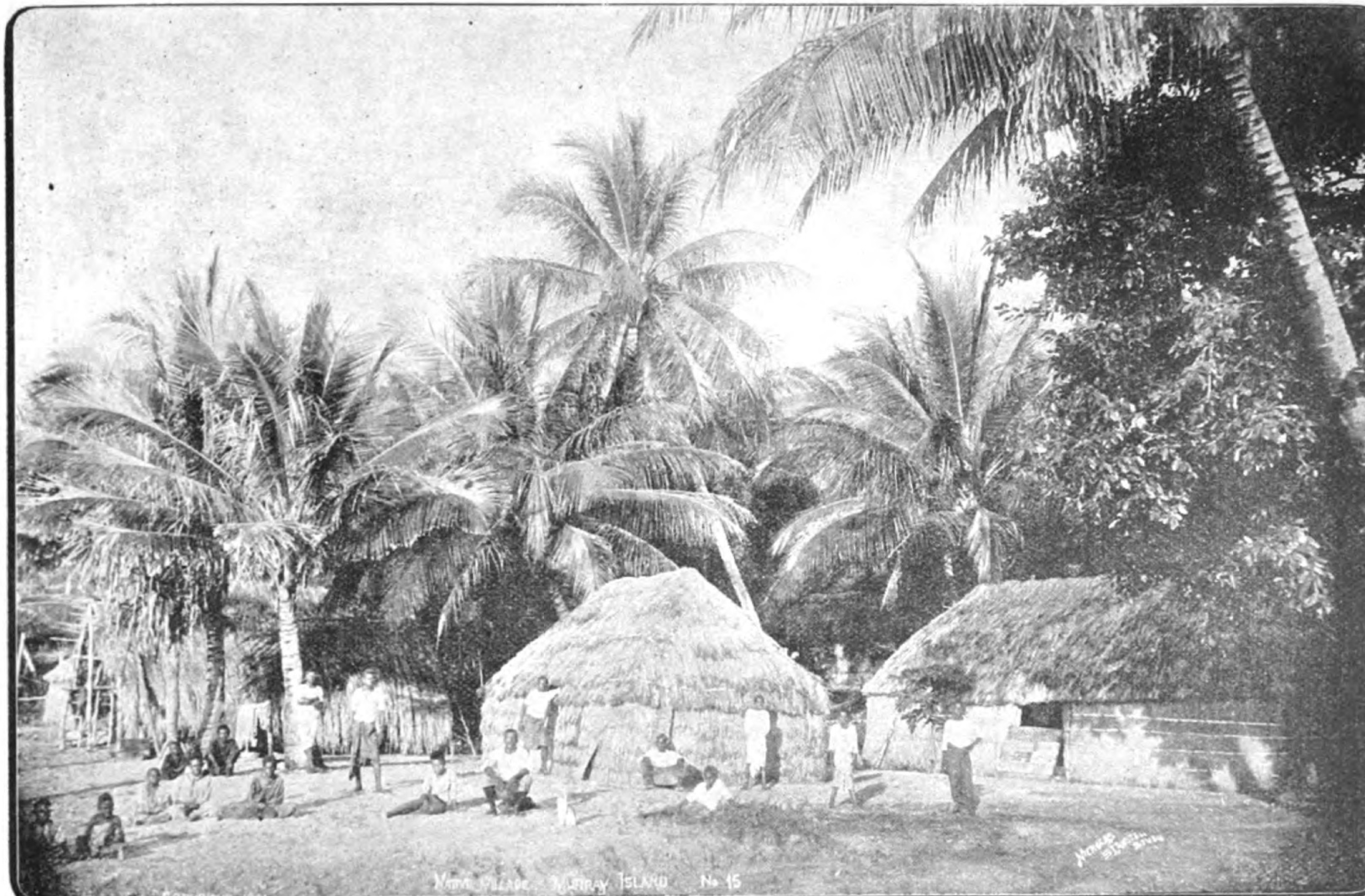
正價金三拾五錢　郵税金六錢

發兌元 東京京橋區弓町 松邑三松堂



獨逸國ミュンヘン市バアリア立像

南洋の土人村



フイージー嶋土人村

新刊

高等師範學校研究科卒業横山德次郎先生著

日本婦女讀本

和装全一册
定價金廿五錢
郵税金四錢

新刊

高等日本婦女讀本

和装全一册
定價金參拾錢
郵税金六錢

本書は曩に發刊して好評を博し十數版を重ねたる日本公民讀本の女子用として法制經濟に關する事項の外新たに修身家政の項目を加へ平易なる假名交り文を以て叙述したるものなれは女學校の修身科裁縫專修學校の讀書科小學校の補習科家庭の好讀書はた學校の賞與品として無二の良書なり

森井貞子
吉岡治子 著

小學校教科用 裁縫書

全二册
定價八十五錢
郵税金拾二錢

廣島秀太郎著

教育術語解

全一册
定價金卌五錢
郵税金四錢

佐藤福雄著

實驗新遊戯

全二册
定價金壹圓卌錢
郵税金十八錢

發兌元 東京神田區甲賀町八 大阪東區備後町四丁目 寶文館

(丁の二)

最も高評ある
最も正確なる
最も便利なる
最も經驗ある

博文館 當用日記 懷中日記 發賣廣告

（十月中旬製本出來）

明治三十六年 當用日記

●紙數 中形大形共、各五百五十餘頁 小形五百三十餘頁

小形 菊判半截	上製（舶來洋紙總クロース金字入）	●正價金三拾錢	郵稅八錢
中形 四六判	上製（舶來洋紙總クロース金字入）	●正價金三拾五錢	郵稅拾錢
中形 四六判	特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）	●正價金五拾錢	郵稅拾二錢
大形 菊判	上製（舶來洋紙總クロース金字入）	●正價金五拾錢	郵稅拾四錢
大形 菊判	特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）	●正價金六拾五錢	郵稅拾四錢

特色！

用紙 何レモ海外製紙會社ヘ特ニ注文漉製セシ特別上等紙ヲ用ユ

印刷 秀英舍ガ新規鑄造セシ活字ヲ以テ注意印刷ス頗ル鮮明ナリ

製本 弊館ガ特ニ歐洲ヨリ輸入セシ新機械ヲ以テ堅牢美麗ニ製本ス

趣向 （當用日記）日々欄ニハ過去同月日ノ重要歷史、七曜、支干等ヲ錄シ天氣、寒暖、受信、發信等ヲ記入スベキ欄ヲ設ケ、普通記入部ニハ細罫ヲ附シ秩序アル記錄タラシムルニ適セリ「附錄トシテハ紙數十二頁の補遺金錢出納表、收支一覽表、交友人住所錄、最新重要

明治三十六年 懷中日記

並製（舶來洋紙紙クロース表紙金文字入紙數三百頁）●正價金拾貳錢 郵税四錢

特製（舶來洋紙頗美本總クロース金文字入紙數三百頁）●正價金拾八錢 郵税四錢

體裁

統計及日常必須ノ諸規則ヲ網羅セリ ●（懷中日記）毎月ノ初ニ當月ノ行事、遊覽案内、食品、月令、陰暦氣節等ヲ掲ケ日々欄ニ過去同月同日ノ歴史、七曜、支干、天氣、寒暖ヲ記スル等當用日記ノ如ク、卷末ニハ金錢出納録アリ又日常有用ノ事項諸税則及最新重要ノ統計表ヲ附セリ

弊館出版の懷中、當用日記の正確堅牢にして實用に適するは玆に喋々の要なし今回用紙印刷體裁製本に至るまで尙一層の改善を加へ懷中日記は本年更に新工夫を凝し縦長に製装して携帯に便し又當用日記は舊に倍して一層優美に裝釘し尙趣向の改良を加へて記入の便を計り小形外の四種には農學博士横井時敬君の農家年中行事及中央氣象臺技師和田雄治君の調査に成る全國氣候一斑を掲け尙ほ最新の統計及座右必需の重要諸規則は漏らさず収めて網羅せり之を舊年の日記に比すれば材料愈よ豊富記事愈よ精確にして江湖坊間の日記と同視すべからざるや論なし請ふ續々御愛購あらんことを

●賣捌所は全國各地（書籍雜誌店及紙類文具店等）到る處にあり

●取次望みの方は種類部數等御申込次第精々御便利に御相談可仕候

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（丁の三）

新刊圖書豫告

法學士 上野貞正先生編纂

法律辭典

全六冊
第一卷近刊
一冊三百余頁

法は人類的社會的活動の反動なり後者が複雜の度を加ふるに從ひ前者も亦之に伴ふて然るは蓋し必然の事理といふべし、之れ現時の國家が立法を以て政治の主たる手段とし裁判行政の如き國家行爲は固より民事商事等私人日常の行動に至る迄悉く法を以て律せざるなく毎歳新に制定發布する法令實に數百を以て數ふるに至る所以なり、此幾千の準繩に則り其範圍內に於てのみ活動の自由を有する吾人が事業の經營日常の生活につき法を解するの必要は固より深く云ふを要せざる所なるべし。

然るに現時吾國に於ける法令の用語法學上の術語等多くは是れ新に作成せるものにして其意義を解するに苦むもの少からず又從來慣用の語を用ゆるも其義相同からざるが爲め誤解を招き易く斯學を學ふものにあらざれば誤りなく法文を理解すると能はざるの狀あり之れ固より何人の罪にもあらずして社會狀態の急激なる變化が遽かに法の發達を促がせるの結果に外ならすと雖も之れが爲め國家は立法の目的を達する能はず私人は法の保護を受くると完からざるべく國運の發達人民福利上少からざる障礙たると疑を容れざる所なり本書の著者は斯學に堪能の士にして夙に茲に見る所ありて此著あり其實用に適切なるは今更喋々する迄もなく斯學研鑽の士亦此書に就て討究する所あれば其稗益決して尠少ならざるなり

(丁の四)

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女學世界定期増刊 第貳巻第十五號

ふゆこだち 才媛詞藻 冬の巻

特賞 小說

蕾の花

前田美子

日當りよき窓の下に坐を占めて縫物に餘念なかりし百合子の何に驚きてか不圖手をとめて美しき面を庭にうつす時廊下に足音して靜に障子は開かれたり、「お孃樣アノ櫻井樣の奧樣がお越し遊ばしてござりますが、お客室へお通し申しませうか」聲に應じて顧向きたる百合子の頰には早くもゑくぼの刻まれたり、「アヽ芳子さんがマア當、では此室へお通し申しておくれ、取散かつてはゐるが」小間使の梅は畏りて去りぬ、「眞個にお珍しいこと……………」いそ〳〵として針箱を傍へに押し遣るほどもなく梅に案内せられて芳子は入り來れり八掛違ひの小紋縮緬にのしめ納戸の紋付羽織配合よく艶やかなる丸髷姿の美しさ立ち去りがてに梅の見惚れたるも強ち無理にはあらざるべし。

「マア芳子さん眞個によく入らつして……」百合子が澄るゝ許りの愛嬌に迎へられて芳子は莞爾と坐につきながら「百合子さんお勝手も伺はないで突然に……アノ御用はなくつて？」「ハアお裁縫にも倦いて仕舞つて何うせうかと思つてた所なのですよ、アノ此様に取散けたまゝで失禮ですが客室よりも却て氣樂で好いと思つてネ、加之紅梅が大分ふくらんで來たの……鶯も時をり鳴きますしネ、妾此室が一番好なのですよ……

「アラ眞にネ、もう近まに咲くでせう」「ハア見に入らつしてよ、坊ちやんも連れてネ」「難有う、だが子供なんか連れることはマア止しませう」「何故」「でも貴女は子供嫌ひですもの」「アラ彼様こと仰しやる、妾子供は極好きですよ

「だつても貴女のやうなこと許りいつてらしつてはお子様の出來つこはないわ」颯と赧らめて反向けたる横顔のいかに美しかりしかよ、

「オヤマア綺麗なおみ帶ですこと、百合子さん是何といふものですの？」「……」「アラ怒つて、堪忍して頂戴ナ、ネ百合子さん、ネ、眞個に奇麗ですわ、西陣でせうネ」お納戸地に有職の古代模様を織り出せる品好き丸帶を手にとり上げての品評め、「ハア夫れ厚板ですわ」「厚板つて是ですの、爾々展覽會に出てをつたのですけれどネ、斯うして拜見するのは今が始めてゞすよ眞個に百合子さんはお幸福ですわ、此様にずん〳〵お拵へが出來て……妾なんかもう自分の衣類を拵へる所の騒ぎじやないのですよ、良人と子供のことに逐はれて仕舞つてネ」「妾衣類なんか些とも欲しかアないの」「アラ勿躰ない、貴女なんか澤山あるから其様に鷹揚な氣になれるのですよ」「イヽエ爾じやないの　いくら立派な衣服や帶なんか拵へて貰つても、着る必要がな　いんですもの夫れこそ勿躰ないわ、だから些とも縫ふ氣がせないのですよ、其帶だつて爾ですわ僅一尺くければ出來るんですけれど、夫れがもう嫌て〳〵仕様がないのですよ」美しき眉を顰めて呟けるさまよさりとては有るが上にも欲りするがならひの年頃には相應しからぬ少女の振舞かな、「着る必要がないつて何故ですの、百合子さん、貴女是け皆お嫁入のお仕

度じやありませんか「……「貴女だつて今こそ其樣立派なことをいつてらつしやるけれど、お嫁にゆくと夫れは〳〵召物が澤山欲しうなりますよ……嫁つた當座は了知らない方許りですから常着だつても何日までも同じもの許り着てはをられませんし、一寸外へ行くといつても三度に一度は變つた物を着ないじや、召使にだつて何だか肩身が狭いやうですよ、だから其樣ことといはないで精々とお縫ひなさいナ了「だつて芳子さん妾お嫁になんか行かアしませんよ、夫れに何時死ぬんだかも分らないんですもの……」透明らん許りに白き頸を衰はしてさし俯向きたる百合子は有るか無きかの聲もてかくいひぬ、「エ何と仰しやるの百合子さん「……「エ百合子さんッてば……お嫁にゆかないつて爾?」芳子はわれとわが聽神經を疑ふかの如くに首を傾けたり。「ア、眞個ですわ芳子さん、妾何處へも嫁かアしないの」少しく自烈つたしといふさまに突如としていひぬ、頰に刻まれたりし愛くぼの跡やいづこ、「エッ眞個ですつて、マア情ない貴女が其樣こと仰しやるからお母樣が御心配遊ばして、妾の樣な者に勿躰ない、手を下げてお頼みに入らつしやるのですわ「アラお母樣が貴女の宅へマア何日?」太く驚きに打たれしものゝ如く甲走りたる聲に叫びぬ、「ハア昨日ですよ、人の親の心は闇にわらねどもッていふてせう、了妾お母樣の御心中をお察し申し上げて昨夜は徹夜泣きましたの……」桃色の絹手巾もて密と瞼を押しぬぐひ、「妾がいはなくつても貴女の方がよく御存知だけれど、マア百合子さん斯うなの、貴女もお妙齢だしお母樣も追々お年を召すから何卒好い御緣があつたらと思つてらつしやる所へ、丁度お兄樣のお友達の松村操一樣から、貴女をお貰ひ申したいと仰しやるので、お母樣も大變お喜びなすつて屹度貴女も御同意であらうと思つてらしつたのに、夫れに貴女は判然とお斷り申してくれと仰しやつたつて了爾てせう、夫れは了是れ計りはいくら親御だつても强いて といふことは出來ませんから、松村樣が嫌なら嫌でどうでもと仰しやるのではないのですよ、今の間にお斷りさへ遊ばしたら造作はないのですから了、だけれどお母樣の御心配遊ばすのは

ネ、貴女が二言目には妾何處へも嫁きませんから、結婚のことはもう言はないで置いて下さい、と斯う仰しやるからですよネ、百合子さんお母樣て御覽遊ばすとたつたお一人の孃樣ですし、お兄樣だつても掛替へのない妹御樣ですもの、若しか貴女に意中の方があつてネ、其處へ嫁つて欲しいと思つてらしつても、其樣ことは恥かしくつていへないなどゝ、若い心で取詰めたことでもしてくれては取返しがないと思召すのは、些とも御無理ではござんせんわ……夫でお母樣は成らうことなら貴女のお氣に入つた方へ嫁りたいと思つてらつしやるので、妾とは斯うして姉妹のやうにしてゐるんですからネ、貴女の御心底を篤とお聞き申してくれつてネ、眞に御心配遊ばしていらつしつたのですよ」身動きだもせぬ百合子宛然死せるが如き耳にも尙慈母の歎聲を聞き分くるの能あるか、實によ瀧なす涙の蒼白き頰に傳ひつゝあるを見ずや、「妾もネ此お話を承つて不審てならないのですよ貴女は是迄始終松村樣のことを賞めてらしつたに、何故急に嫌におなりかと思つてネ、是には屹度仔細があるのでせう、妾が此樣……若い身そらで意見がましいことをいつたら生意氣なとお思ひなさるかも知らないが、是も全くは身につまされることがあつたからですよ」と濕みたる眼元に俯向きたる百合子の面をさし覗くやうにして、「マアいはゞ經驗なのですよ、妾だつて五年前に、爾十八の年だつた今の櫻井へ嫁るのが何うしても嫌でネ、同時に申込みのあつた浮田といふ方へ嫁きたくつて……」肉づきよき頰のあたりに颯と紅潮を呈して嬌羞を帶びつゝ、「だつていくら何でも親に向つて其樣ことといはれたものぢやなしネ、夫れかといつて誰も相談する人はなし、仕方がないものだから拗ねて仕舞つて……ソラアノ時分よく婦人新聞や雜誌などに出てゐたでせう何とか女史といつて、不婚論といふのがネ、彼樣ことに目を注めて女子の地位が何うだの、理想に適はない結婚はせないなどいつて勿體ない親を困らせたのですよ……て妾が餘り我儘をいふものですからとうとう父が校長樣の宅へいつてネ說諭を願つたものと見えますの、アノ恐らしい鬚のお顏で散々お目玉を頂いたの

……芳子さん貴女は全體何ういふ積りで學問をなすつた、私は貴女に不婚論を稱へさすやうな教育はせなかつた、サ返答があるならなさい、といふので退引ならぬやうになつたから、徐々に承知して仕舞つたのですよ……夫れからね婚禮の晩だつても、車の上でイヽヤ里歸りにはもう此世に居ないからなどゝ思つて嫁つたのですが、妾の想像とは全然反對で旦那樣は至つて磊落なオカヽヽヽヽ夫れにお姑樣が眞個に好い方で直ぐ翌日から芳々といつて、劬つて下さるので生きてゐない筈の者が五年もオホヽヽヽヽとう〳〵子供迄も出來たのですよ、妾此間途中で不圖校長樣にお目に懸つた時、何うです芳子さん此節不婚論の研究はといつて揶揄はれて眞個に火のやうになつたわ」と恥かしげに面を反向けて、「加之に意外のことがあるんですよ、今いつた浮田といふ人ね何とか銀行の重役で有りながら行金を私消したとかで蹤跡を闇ましたつてね、此間新聞で見た時は眞個に悚然としましたよ」斯く泌々といひて更に、「貴女は分別に富んでらつしやるから人を見誤るやうなことは滅多にありませんしねお母樣も彼樣にいつてらつしやるのですから、此處は明瞭と胸を割つて仰しやいな、お母樣やお兄樣の御安心遊ばすやうにね百合子さん」ホッと息を吻きて百合子の舉動いかにと窺へり、「よ芳子さん有難う、貴女なればこそ其樣に迄仰しやつて下さるのです……」とめ度もなく流るゝ涙に咽びながら漸く此熱情なる友に向ッて心の底より感謝の意を洩らしぬ、「ア、御合點がいつて……夫れでこそ詰らぬ話も申上げた甲斐がありますわ、で何處の方貴女の想つてらつしやるのは」「イヽエ妾其樣方些ともないの」「じや何故松村樣へ嫁らつしやらないの？」「……」「松村樣が氣に入らないの？」「アラ勿體ない其樣こと思つたら罰が當るわ」「夫れじや一體何うすれば好いんですよ」ガクリと面を振り上げたる百合子は眩しげに芳子を見上げて「ア、貴女に迄其樣に御心配を掛けて濟まなかつたと、心配をさせまいと思つて母にも兄にも秘して居つたのは眞個に惡うございました、實は妾去年の冬風を引いてから何うも不可ので密と病院で見て貰つたのですよ、するとね肺

結核だつて……「エッ肺結核ですつてマア」太くも驚ける芳子は聲打慄はせて叫びしなり、「アラッ其樣に大きな聲をせなくつてよ「だつて大變ですわ今の間に養生なさらないじや……」あゝ芳子の友情に厚き今の今迄も強いて聞かんとしたることの何なりしかをさへ殆ど忘れ果てたる許りに驚き惑へるよ、「マア芳子さん聞いて頂戴妾がお嫁にゆかないといふのも其爲なの、若しか松村樣に傳染るやうなことがあつては……あれ程お立派な方をムザ〱肺病の餌にするのは勿躰ない實にお國の爲に不忠ですわ」殘念そうにキッと唇を嚙みて、「どの道妾の命はもう長うないのだから、人樣に嫌な病を傳染して罪を作つたりなんかせないでネたとひ一日でも永く母や兄の傍にゐたいと思つて……」不意にへだての襖子を開きて轉ぶがごとく馳せ入りしは百合子の母なりき、「百合子堪忍して……もう〱決してお嫁にやらうとはいはないから、安心してお母樣と一所にゐませうネ」泣き崩折れたるわが子の脊撫てさすりて共音に咽ぶさまよ他の見る眼もたゞならずなん、

「アヽマアお母樣勿躰ない妾こそ惡うございました、何卒御堪忍遊ばして……」

其翌日百合子の兄園田清は親しく松村を訪ひて妹のために一部仔什を語り懇ろに縁談を辭したりき、清の面を見詰めたるまゝ熟々と聞きゐたる松村操一は何の答もえせで頻に嗟嘆しつゝありしか、頓て左の無名指に箝めたる指環を抜きとりて清の前におきながら「園田君委細承知しました、百合子君の熱誠なるお心に對しては實に感謝に堪えないです、どうか君からよく傳へて下さい、僕は百合子君のお蔭で死ぬべき命を取止めたのですから一身を捨てゝ社會のために盡しませう……して是は失敬ですが百合子君に差上げたいので、僕はもう精神上百合子君を妻としました」

哀れ百合子の病は次第に重りゆきつ翌年の春となりてはもはや窓によりて紅梅を賞づるの勇なくたゞ僅かに氷囊の紐に結びつけられたる蕾の花を凝視しまゝ永き〱眠につきぬ、「お母樣妾此指環だけ携つてゆきますよ…

……しの一語を殘して。
五年の後松村家にては盛なる結婚の式を擧げられたりされど其夜の聟君はかの操一にあらで實に舍弟なる節二その人なりき。

評、蘆花氏の不如歸と同じく肺病の美人をうつせり。たゞ彼は既婚、これは未婚、彼は長篇、これは短篇、一讀人をして泣かしむ。全體がくとゝのへり。（桂月）

特賞 小夜嵐

かげろふ女史

（上）

紅葉のにしき、目もあやなる秋の末つかた、けふは朝より空うち曇り今にもしぐれなむばかりなり。庭の草木みなしほれはてゝ、ふく風いとゞ身にしむに、あるじの忠雄は障子たてきり、火鉢によりつ。うれひの雲は顏をおほへり。そが妻なる時子は世に美しとの聞えあるかほばせも色やつれ、肉おちていとゞ見すぼらしう、なりはてぬ。しとやかに手をつかへて氣づかはしげに見あぐれは忠雄は小ごゑとなり「おん身をよびしは他の事にはあらず。やさしく誠心もてつかへくるゝ和女をいかなる故ありてか、母上のいとゞしく憎み給ひ、何かにつけておん身を罪におとし入れんとなし給ふはかのお里が奸舌にたばかられてにやおはすらむ。さるをおん身は三とせ

が間、つゆ快からぬかほ色もせでまごゝろ一筋に仕へくれしは我のいたく謝する所なり。然るに今朝ほど母上のめし給ふに何ならむと行きてみれば又しても御身の惡口にて我友淺田雪雄との中あやしと常に思ひ居たりしが果してかゝるもの手に入れたりとて一通の文を示したまひ、よべ里がかれの袂よりおちしを拾ひたりとてもてきぬと以の外のみ氣色にていかに慰まゐらすとも聞きわけ給ふべくもあらず、おん身の正しき操は我よく知れり。この文も恐くは雪雄がそとおん身の袂に入れしのみにて和女にはつゆ汚なき事もよくしれり。されど母上の氣象思ひとゞまり給ふべくもなければ本意なくもおん身にしばし暇をあたふるなり。必ず〳〵あしくな思ひそ。」といと氣の毒げに一通の文を示して云ひぬ。時子は大におどろきつ、はや先だつ涙うちおさへふるふてえかみしめて、「あはれそは餘りにつれなきお言葉にはべらずや。妾は只君をのみ夫としてあらんかぎりの誠心をつくし、母上の憎しみもお里のねたみもたえしのびてつかへ參らせしを。くち惜しとも口惜しや。罪覺えなきぬれ衣。」と云ひさしたえかねて思はず泣きくづれぬ。夫も其心をさつしやり、「おゝさぞ口惜しからむ。それ我も元より察せるなり。されど和女も知れるが如き母上の氣象なればいかんともなしがたし、こゝしばしの辛棒なり。ぬれ衣のやがてかわかん折もあらましを、さのみなげくべきかは。」とやさしくなだめられてもなほ、身に覺なき罪をきせられて離縁せらるゝ口おしき思ひあきらむべくもあらず。されど夫の君は妾を信じたまひてしばし辛棒とのうれしきみ言葉なり。、さるをなほとや角と恨みまゐらせん事のもつたいなくて遂にこの家を去るべく定めつ。其日のたそがれ、萬の支度ども終へて姑に暇ごひし、又夫にも別れをつげけるに又もや愛のことばはそゝがれぬ。「おん身が去りなば母上は必ずやかのお里を妻にせよとすゝめ給ふらむ。されど我はかたくいなみて妻とはせじ。かの罪多き、おん身にぬれ衣きせつる憎き〳〵かれをなどて我妻に、あゝいふも汚はしきよ。我はひたすら和女の無實のつみのきえさりなむことをいのるべければ必ず心弱くな思ひそ。其中には又母上の

迷ひの雲もはれゆかん。思が罪は次第に明かになりゆかん。こゝしばしの辛棒ぞや。」と。時子は感涙にむせびつゝいひいてん言葉もしらず。心はのこれどもしほ／＼と裏門の方にいでゆく折しも召使のおさとは臺所よりいで來たり。時子、「和女にも久しの間世話になりし。」と云へば、お里、「いかで世話など思ひもより侍らず。さるにても別れまいらせん事のお名殘おしさよ。かへりましてもなほ時々はおとづれたまへかし。」など氣味よしとほくそ笑む心をおしかくしてわざと空涙こぼさむばかりのうれひ顔ぞにくき。

(中)

夫に見おくられて門外にいでゝ、夕日は早や西にしづみはてゝあたりほの暗し。おきわたす草葉のつゆよりも猶袖は露けくて去りがたう、一足ゆきてふりかへれば垣根の尾花かへれと招くさま哀れなり。一歩は一歩ごとに死に近づくが如き心地ぞする。やう／＼遠くはなれゆきてかへり見ればうすき煙に包まれたらんが如き中に黑き影のたゝずめるは正しく夫の君よ、なほも見送り給ひてかと思へばいよゝうら悲しうなりつ。やがて夢まぼろしの心地してゆくほどにいつしか小川の水清くすみわたり、枯柳のかげさびしきほとりに來かかりぬ、空を仰げば水の如き天に月はいときよく光をはなち、ひる見し雲はかげもとゞめず、時子ははじめて我にかへりしが如き心地して今更にかなしさは胸にあまりつ。あはれ幸なき身や。あらんかぎりの誠をつくして事ならばあきらめもつくべきを、露ばかりだに汚れなきこの身なるにいかでか思ひあきらめうべき。それもこみ心休め參らせんと思ひし姑には憎まれ、二世とちぎりし夫には離縁せられぬ。それも身にあやまちありてのれも皆お里と淺田だになかりせばかゝる悲しきこともあらじを。憎みてもなほあまりあるしわざ哉。はじめよりかのお里、姑と夫とにこびへつらひ、さま／＼に舌をろうしてひたすらに氣に入られんとねがへるさま、快う思はざりしが姑の君のそれに迷ひてめで給ふに益つけ上り、遂にはあらぬ我が身の惡口、誠しやかに言ひ上ぐる

に姑はそを信じて我をうとんぜられき。されば姑は少しの事にてもいたくとがめ、お里は過あれかしと目をはりてきびしくにらめる折しも身にとりていとも不幸なることこそ出てきつれ。そは夫が友なる淺田雪雄てふなまめかしき男のいつしか我をこひ慕ひ、夫のるすをうかゞひては我部屋に來り、きゝ苦しき言葉のかず／＼いかでかお里の耳をのがれん。みだらなる行ども、いかでかするどき彼の目に入らざらん、よき事のいてきたりとほく／＼喜こひ姑にもつげて二人は一入きびしく我ふる



まひに氣をくばれり。されど我はいつも雪雄をはげしくはねつけ、面を合はす事だに汚らはしくて遁かくれ居たるを夫はよく知り給ひき。さるに姑と里とは我と雪雄

との中あやしと見しぞうたてき。さらでだに禍ひはかよわき一身にあつまれるに又してもなまめきし文をいつか我袂に入れたり。かくとも知らで其まゝゆきゝするうち



その文は袂よりすべり落ちしかば里はそを見つけてひろひしより。さてはかく悲しき有様とはなれるなり。あはれ／＼いかにさちなき身ぞや。つゆ一點の汚れだになき我まごゝろは今すめる月にも劣るましきに。あなくやし。神も佛もいまさぬにや。あはれ月よ。などて潔きくもりなき我心のまことを照らし給はざるか。あゝ。

（下）

こひしき夫の家をいでし時子はうつ〱として樂しまず。うれしきたよりのけふはあるか。あすやあらむかと待わびしかどもたゞ木枯の音のみぞ音づるゝのみなりける。さるほどに冬はきて錦と見えし紅葉もちりはて、久しき盛りを保つてふ菊もうつろひぬ、朝ごとに霜の花白く夕ごとに寒月さえ渡る頃、心地何となうあやしと思ひ醫師に見けるに身ごもりぬとぞいふなる。今更に胸とどろきて又産婆にも見せけるに正しくさなりといふ。然かもはや月さへあまた重ねたりとかや。あはれ、さらぬだに悲しさは身にもあまれるを今又かゝる事のいできしより一入心をいためける。夫の家にありしとき、などて生れざりつる。夫のよろこびは更にも云ず、我もかゝる淺ましきさまともならざりしやもはかられざるものを。今生れなば人には父なし子と指さゝれ生たちての後もさぞや口をしからむ、なくもがなと思ひつゝも母やはらからに慰められておぼつかなくも日をおくりき。やがて日をふるまゝに身、次第におもりゆきしが年はあけてむつき半に玉の如き男の子をあげぬ。なくもがなとは思ひしものゝかく生れてはかわゆさ、いとほしさに床にふせるも忘れてかひいだき、乳やらむとすることも度々なりき。殊に目のあたり夫に似てりゝしく、ばら色の頬ふくらかに 紅唇もゆるが如くそことなく愛をふくめるおもざし可愛しともかわゆし。あはれ早く夫にみせたし。こを見給へばいかによろこび玉ふらむ。姑とても木石にあらざれば心もうちとけてめで給はむ。おゝ早くこの可愛ゆき姿をみせたやと思ひてはゐたまらず。病ひのいゆるを待ちわびたりき。ほどなく病ひもいえ、心地もすが〱しくなりぬるにいかで一日も早くと人々のすきをうかがひ、幼子かきいだきてそと外の方にいでぬ。其夜は月はさえたれど朝よりの雪つもり、ふゞきの風いとゞ身にしむに暖かき肩掛もて幼子をおほひ、ひしといだきてほど近からぬ夫の家のうら門の方に至りぬ。内をみれば障子にうつれる三つの影、一人はこひしき夫、一人は姑、今一人はにくき〱お里なるがいぶかしや丸髷姿なり。まづ胸とゞろきてしばしうかゞへば酒すごし玉ふが如く夫は盃手にして里につがせたり。

をりしも姑の娯として、「さてもこよひの寒さよ。かゝる夜は早くやすみたきが年寄のつね。」とほゝと笑へば、お里、「げにごもつともに侍り。こたつも暖まりたればとくやすみ給へかし。」姑「和女も早くやすみてよ。いで暖まらむ。」こたつに足さし入れ玉ひけむ。「あゝよき心地。」やがて又、「里も次第にふくらかになりけるよ。藤さく頃とか云ひし。さても待たるゝかな。」アと歎きしもあはれ、頼みの綱半ばゝきれしなり。なほもうかゞへば「男ならんか女なるべきか。我は男こそのぞましけれ。」とは夫のこゑ。姑、「我は女こそよけれ。さるにてもたのしきかな時子を今まで去らでありなむにはかゝる樂しみもあらじ。」夫、「まことや彼をなほも置きし時はかわゆきちごのかほ見む事はさらなり。我家にはうれひの雲みち／＼たらんを。よくこそ去りつれ。はじめには心迷ひて母上のみ言葉だに用ゐざりしが思へばもつたいなし。」さも／＼たのしげなる一家のさまきゝえし時子やいかに。あはれ／＼いかにつれなき夫ぞや。別れんとせし時あれほどかたくちぎり給ひつるを忘れ玉ひしにや。里は妻とせじ。おん身の罪のはれなむ事をいのるとの給ひし言葉の末、よも忘れ給はじ。さるをはや心うつりたまひて今のくやしき御言葉、そも何たることぞ。あな悔し、あな怨めし。あはれかばかり可愛き子さへあるを、苦しき思ひをたへしのびて今まで日をおくりしも君のみ情のみそたのみてなりしを。此後、何をたのみにうき世にながらふべき。あはれ今はしも我たのみのつな切れはてぬ。竹にはなれし朝顔のそれにもましてなほ力なく我を忘れてなよ／＼と雪の中にたをれぬ。夢やさめけん幼子は俄かに高くなきさけぶ、今ははやなだめすかさん力もなく己も共によゝとばかりむせび入りぬ。

こほるが如き寒月はこのあはれなる女を憐むが如くさえ渡り、ふゞきの風は情もあらず猛りに猛りてものすごし、寂寞をやぶりて山寺のかね、うき世を果敢なむが如き音ものさびしう響きわたれり。

評、棄婦の身のあはれをうつして簡にして切也。（桂月）

甲賞

わかだけ

白ゆり

薄墨色の雲低くたれて、催し居たりし雲氣の空、入相の鐘の音、遠く響く頃より、ねぐらにいそぐ、烏のすがたもみえわかぬまで、胡粉をちらしてふりきたりぬ、夜に入りてよりは、ひときわ、はげしき吹雪となり、木枯にさんざもまれつくしたる、廣きお庭の、木々の梢に、ふきすさぶ風の音、ものすごく、ことしの夏、葉ごしの月をながめんと、植ゑ置きたりし、窓のもとなる呉竹の、雪折れの音いとさびし、

旦那樣は銀行の御用にて、京都へ御旅行遊ばされし御留守には、書生一人、下女二人の外は、車夫も、宿へさがりてあらず、雪の夜のさびしさに、女共も宵の内より、ふしどに入りて、天井裏をあれまわる、ねづみの外、家の内は寂寞たり、

奥樣、ひとりさびしき閨の中、こよひも思ひにふけりたまふ、郡内の御搔卷、綿ふつくりとせしを、二枚かさねて、伊勢崎の黄格子の、大夜着後ろに起せしまゝ、思ひきりたる、はてなる糸織に、ふらんねるのおひとゑ、かさねたる、おねめしの上に、友仙うつくしき温袍をはをりて、ざしたまひ、まくらべの火鉢、ひきよせて、今しも、松風の音をたてゝたぎる、銀瓶の口より、立のぼる湯氣を、じつとながめて、片手は帶の間に、片手はすびつにたてたる、火箸の上に、かざして、色白き、うつくしき細面の、おとがひなかばは、襟に埋めて、しきりに思ひにうち沈みぬ、やがて「ホツト」吐息つき、「あゝよくふる雪かな、あすは、枯木も時ならぬ花をつけて、さこそ、ながめはふかゝらめ、それにしても、旦那樣、冴えわたるこよひ、旅の空にて、お風など、めされねばよいが」と、ひとりごとのやうに、うちつぶやきしが、又もや、胸にうかぶは我子のこと、あゝ我子は、いかに、こよひをすごすらん、あすは雪戰さして、あそばんと、あくるをたのしみまつみならば、幸ひなれど、もしや、こよひの雪を、うらむる境遇なりせば、いかに不憫の事ならん、思へ

ば、あの子に別れてより、こゝに四とせ、もとの家は、すてに他人のすみてあれど、よもや、あすを苦にする樣なる境遇にてはなからん、あれも、ことしは九つ、よしや、昔しのやうに、乳母よ、もりよと、かしづくものはあらずとも、琴や、茶の湯の遊藝は、まなばんひまはあらずとも、人並々に、學校へも通ふてあらん、母はまゝしき中とても、父は、慥に、血肉をわけし間なり、ましてや、あのお德、お姑樣の姪御とはいへ、もとをたゞせば奉公人、決してまゝ子あつかひはせぬならん、否、そうたしかな事は、いはれず、もしも自分の子でも、できたなら、我子の愛に、ひかされて、いとしや、母なきあの子をば、むごきめみせはせずや、など、考ふれば、猶更むねうちさわぎて、ねられぬに、あゝよそう〳〵、いつまで考ふるも、際限なし、夜もふけて、人もねしずまりぬ、われもねむりて、此苦しき思より、はなれなん、されども〳〵、とりわけて、こよひは、心にかゝる我子の上、もしや、かわりし事にてもありてなるか、あゝ思ふまじ〳〵、いざやねむらんと、眼にあまる涙を、袖に拭ひ、枕に手をかけたまふ途端、胸をつらぬく可憐のよび聲、さむさにうちふるふ聲音あはれに、

辻占や、つぢうら、電信だより戀の辻占、

聲は次第に近づき來りぬ、時々耳にする聲ながら、子に焦れたる折も折、いたく神經を動かされ、此のさむき夜を、不愍やと、われしらず、君子は、岸破と起き上がり現心にて、足元しどろに、障子ひきあけて、廊下に出て、雨戸をくりて、庭に下りんとすれば、雪は、はや止みたれど、つめたき夜風、面をうつに、覺へず、「おゝさむい」と、身慄ひして、二足三足、後退りしが、又思ひかへして、庭下駄はかんとすれば、其上に、雪堆くつもりたるに、飛石のふちにはたき落して、足をのせんとすれば、つめたさ骨にもしむやうなり、つもれる雪にあとつけて、飛石づたひ、御門の方にゆき、犬潜りより、外に出て、雪あかりにすかしみれば、晝ですらさびしき小石川、竹早町の往來、こよひは猶更人の影もみえず、はるかにきこゆる、鍋やきうどんのよび聲も、あはれなるを、今しも、安藤坂の方より、赤き、大きなる提灯、片手

に、すさぶ夜風に火をとられじと、そでもて、口の上のにかぶせて、肩より箱を斜にさげたる、年はまだ十にも、たらぬ位の子供の、つもれる雪に、かわゆきあしあとつけて、寒さに、喉も氷りてや、呼びもせず、無言のまゝうつぶきがちに、足元のみに氣をつけて、とぼり〳〵とさかゝるは、慥に、可憐の聲の主なり、

やがて御門のきわを、通りすぎんとするに、やさしき涙に、われをまつ人の、こゝにありともしらず、あはれ、小さき胸には、深き〳〵、憂の蟠かまるが如く、しきりに思ひに沈みつゝ、あゆみきたれり、「辻占を、おくれ、」とよべば、驚きて、御門の眞中にある、點燈の光に、奥様の顔を、仰ぎみしが、俄に、愛嬌ふりまきて、「毎度有難う、何程あげましようや、」聲もさむさにうちふるえて、齒の根もあはぬいぢらしさ、奥様は、あはれに堪かねて、「みんな買ふてやるほどに、てまはとらせぬ、まあうちへおはいり」、と、いぶかしみて、きよろ〳〵愛らしき眼に、奥様の面をみまもる、辻占賣の手をとりて、人しれず、以前のお庭口より、御部屋の前へ伴ひて、「上へ、おあがり」、といへば、「いゝへ、足がよごれて、居りますればと」、辭退するに、みれば、こはいかに、あつぶすまかさねても、猶、さゆる夜を、よしや、鐵の足なりとて、凍へやうものを、いとしや、素足に、草鞋はきて、此雪を、ふみわけて來りしとは、足は冷さに凍へて、赤くはれ上り、赤ぎれよりは、血をにじみ出せる無殘さ、「かわいさうに、さぞや」、とこゞゆる子供を、椽に、かけさせ、いなむをむりに、わらじのひも、ときてやらんとすれば、結び目、氷りつきたるいぢらしさ、君子は、あつき涙をはら〳〵とこぼして、やがて、子の手をひきて、御部屋に伴ひ御床のかたわらに坐せしむれば、子は唯あつけにとられて、物さへいはず、九尺二間の裏店住居になれたる身の、御部屋の立派さに、氣をのまれて、唯可愛き目を、ぱち〳〵さするのみなり、「さぞさむかつたろう、」と火鉢をひきよせて、埋火起して、そしやりつゝ、花紅葉うつくしき菓子を、あまた紙に包みて、あたへなどしつゝ、影あかるき、洋燈のもとに、今更らに、つく〳〵みれば、髪は梳らねば、ちりだらけ、いつ結びしやら、銀杏

返しの、形よくもしれぬやうなるに、下ぶくれのかわゆき顔は、あはれや、垢にくろみて、愛らしき眼には、あふるゝばかりの、涙をたゝへたり、此寒空に、縞目もわかぬ、洗ひざらしの綿入、一枚きたるのみ、帶とは名ばかり、繩のやうなるをまきつけ、袖の中に、手をちゞめて、ぶる〳〵と胴慄ひして居る、いぢらしさ、辻占の箱を、肩よりはづして、大事さうに、傍に置き、悄乎とすわれるさまを、みるにつけ、君子の胸には、熱き涙わきかへりぬ、岩にせかるゝ白浪の、それならねども、思ひは、千々にみだれそめたり、もしや〳〵、我子てはなきか、姿こそやつれたれ、今も猶、目先きにちらつく我子の俤に似たりとも似たりや、こひしき我子に瓜二つ、さう思へば、此子のあはれが、ひとしほみにしみて、他人とは思はれぬに、心のせいかしらねども、愛嬌あふるゝあの目元、花の蕾のやうな、あの口元のあたり、まして左の頰にある、あのほくろまで、あゝ氣心の迷ひか、よくもにたりと、君子はしばし、茫然と、辻占賣の顏をながめぬ、「遲くなりますと、かあちやんに、しかられますから、どうぞかへして下されまし」、聲もふるへて、ふくやかなる頰をつたわりて、涙の玉、はら〳〵とちりぬ、あゝ此雪を、此かわゆき足に、ふみわけて、商賣に出る子を、歸りが遲しとて、叱るとは、いかに、邪慳の親ならん、此親子、まゝしき中に、相違なし、君子は早くも、かく思へば、我子にあらぬかの疑念はいよゝさかんにもえそむれば、尋ねてみんと、心を決し、「そなたは、母様はありや」、「ハイ、ほんとうの母様は、乳母の話では、私の五つの折に、おさとへ、御かへりなされしとやら、今は、私をそだてゝくだされし、かあちやんがあります」、いひも畢らで、シクリ〳〵となき出し、つゞれの袖に涙をぬぐへば、きく奧様も涙なり、「その バアヤは、どうなされた」、「バアヤは私を八つまで育てゝくれて、私をのこして、ひとりで死んでしまひました」、いひも終らず、ワッと泣き出せり、なきながらも音をたてじと、たもとを口にをし入れて、聲をのむさま、いぢらしとも いぢらし、「あゝ不幸の子かな、生みの母に生別れ、そだてゝくれし乳母に、死別れせしとは、さらばそなたのとう樣は」、

「とうちやんは、私のかあちやまと、お別れなされてから、今のかあちやんと、一緒になつて、まもなく、どこかへいつてしまひました、パアヤがお仕事して、私をかわいがつてくれました、パアヤが死んでから、私は辻占賣になりました、」なきじやくりつゝ、語をつゞけぬ、「そなたの、とう樣の名は、何といふや、」問ひかけたる奥樣の、胸は、波たかくうちさわぎぬ、我子と否とは、此間一髪に、極まるべし、可憐の子は、何と答ふるぞ、可愛き脣は何といふぞ、今や、雷名遙にきこえて、天くもりぬ、疾風襲ふか、驟雨來るか、辻占賣は、涙を押へて、「こんどのとうちやんは、とき／＼くるから、名をしりませぬが、パアヤが、いつも、私にいふのには、今は此樣に、零落ても、元をたゞせば、日本橋の、砂糖問屋の一人娘、ほんとに泣て、きひてくれる、御方があつたらば、本石町の、三ツ星の娘文代と、お答へなされといひました、」奥樣は物をもいはず、ヒシと此子をいたきしめぬ、せきあへぬ涙は、落て瀧津瀨、似た筈、ほんに、あの文代でありしか、いふ聲に。子は「私の名を、知つてお出なさる奥樣は、私のうちをも、御存知でござりまするか」と、なつかしげに、みあげたり、知らずして何としよう、「われはそなたの、……」といひかけしが、ハット、思ひかへして、口をつぐみぬ、子は無邪氣、さりともしらず、「私のうちをしつてお出なら、私のほんとのかあちやまをも、ごぞんじてしよう、ドウゾ、お出の處を、敎へて下さいまし」と手をつきて、しきりに、ピヨコリ／＼と、頭をさげるを、「テヽ、そなたは、母に逢ひたきか、もつともなるぞ／＼、我子なら、共にはやらじ夜の雪、と、ほんに、まゝしき中なればこそ、思ひきりて、此雪に、あきなひにも出すならん、鬼とも蛇とも、譬へんやうなき、あのお徳、にくさもにくしと、齒をくひしばり、黒目がちの、パツチリとせし眼よりは、涙を瀧の如く流して、「カンニ、そなたの母様は、むごき人、いつもそなたを、ひどくするならん、」といへば、子は頭をうちふりて、「いゝへ、かあちやんが、私をかわいがつて下さいますが、隣の久ちやんが、私を親なし子、まゝつ子とて、外へてるたび、いぢめますから、かなしくつて、私はかあちやんがあるから

親なしつ子ではないよ、私だつて、生れた時は、私をうんだ、かあちやんはあつたのよ、といふと、お前のやうな、まゝつ子は、木の股からでたのだ、おまへのかあちやんは、から天竺さがしたつて、ありやしないと、いはれます、」とよく／＼口惜しきにや、涙をながして、ものがたりぬ、きく奥様の胸は、張裂ばかり、そのやうな、目に逢するも、誰のとがでもなし、皆此母が、……否そなたの運と、あきらめよ、それにしても、うらめしきは、あのお姑様、むごきお考さへ、遊ばされずに、お出下されたら、親と子が、ちり／＼になりて、愧しや、いとほしや唯つた一人の娘をば、辻占賣とまで、をちぶれさする様な事は、なかりしならんを、御隠居様、御自分のお姪御を、内に入れんとしての嫁いぢり、それでも、子故の闇に迷ふみの、泣きながらも辛抱せしを、今度は手をかへて、夫にさま／＼の讒訴、さては、家風に合はぬ、あの嫁を置ては、私の行末の世も、心にかゝる、とても、私のいふこと、用ひられぬなれば、私は甥のもとに行きて、厄介とならん、此年して、現在の、子息のそばに居られず居處に迷ふとは、よく／＼の因果と、愚痴三昧にて、出たまひて後は、いくらお詫申しても、お歸りなされねば夫は自棄半分の、待合あそび、とても此身がありては、夫の爲ならず、子の爲ならず、われ一人死せしつもりにて、此家をされば、お姑様とて、現在の孫、可愛がつても下さろうし、家に波風たゝねば、夫とて、放蕩はやめたまはんと、心を決し、逢へば未練の起ろうかと、夫の留守に、子を外に出し、そつとぬけ出てゝ、さとへかへれば、母様例の御氣質、とう樣に、おすゝめ申して、何のあすこにばかりは日はてらぬ、大事の娘を、厄介物、あつかひせらるゝ腹立しさと、直ちに引取りたまひし後、私はそのまゝ尼様となりて、世を送らんといひしを、母様に、さんざ泣て道理をきかせられ、我を折りて、こゝには嫁つぎしか、我出去りしあくる年、お姑様、おかくれなされてより、夫の放蕩いよ／＼募り、さしもきこへし身代を、瞬くひまに失ひての揚句が、いとほしや、一人の此子を、かゝる境遇に泣かしむるに至りしか、ホンニあの時、石に噛りつきても、出るではなかりしと、今更

千度百度くゆるも詮なし、ヲヽつまらぬ事長くきかして、退屈せしならん、これぞなたの母樣、世におはさば必すひきとりて、あたゝかくもし、よき衣きせても下さろうに、必ず力を落さずに、母樣に、孝行せよ、」いひきかす心の底を、子はしらねば、唯我爲に、泣てくるゝが心からうれしく、「なんだか、私は、奥樣が、よその奥樣のやうな、氣がいたしませぬ、」となつかしさに、問はぬ事まで、語り出たり、「私のかあちやま、君子といふて、お歌もお上手で、私の家を出て、おいでなさる時、ベアヤが、お袖にすがりて、お止め申したら、くれ〴〵私の事を、お頼みなされ、泣きて、泣きて、なきつくして、おさとへお出なされし、其あと、おゐまのお机の上に、薄墨の走り書ながら、短冊ひとつありしとは、いつでも、ベアヤが私にきかせました、「ヲヽ、其歌、そなたは覺へて居るや、」「忘れて何といたしましよう、今も私の、此お守りの中に、入れてあります、」と腰なる古びたる、巾着引張りてみすれば、金の色もはげたれど、丸に帽額は慥に三ツ星の紋なり、ハツト思ふ君子の樣を、子は更に心付かず、母がかたみの歌、なつかしげにうたひぬ、ふるひたる聲ひくゝ涙にくもる調もあはれに、

　若竹の世におひ出ん末もみず
　　うきふししげきうきよなりけり

といひつゝ、やがて身を起し、「遲くなりますから」と、立たんとするを、君子は、遽しくこを止め、「マアおまち」と、傍らなる、違棚より、紙入とり出し、中より、一圓紙幣幾何か ぬきとりて「サア、これを持つておかへり、」渡せば、子は受取りて、ジツと、見つめしが、押しいたゞきて、下に置き、なきながら、首を左右に、うちふりぬ、「これは、いりませぬ、よそのお方に、こんなに、いただく、わけはござりませぬ、」いひすてゝ、つゞれの袖に面てを掩ひ、シクリ〳〵となきながら、もとの戸口に、立出るを、君子は、送りてやりながら、「そんなら、むりにとはいはぬ、あすの晩も、またきておくれ、辻占みんな買ふべきに、」といへば、子は言なくて、うなづきぬ雪に氷りて、堅くなりたるわらじの上に、小さき足をのせかじけたる手に、ひきむすび居るさまの、いぢらしさ

を、みるにたえかね、君子は袖もて顔を掩ひぬ、あゝいつそ名告ろうか、旦那に願ふて引取ろふか、いや〳〵、あのお鶴、かゝる非道な行ひするやうでは、必ず素直に渡すまじ、こなたの身分につけ入りて、きつと、三百五百の金を、請求せん、少しばかりの事なら、何ともせんが、旦那にいふもいひにくし、母様に申上げなば、あの勝氣のご性分、必ず、いくぢなしと、はがみして怒りたまはん、家は白山ときゝつるを、あすはよそながら、家のさまなど見屆けん、引取る準備をつけての上て、名告ろう、それよと、思ひかへして、心づよくも、何氣なく、「氣をつけていきなよ、」子はなきじやくりつゝ、うなづきぬ

折から、雪は、またもやふりきたりぬ、あゝ心なの空や、可憐の子が、家にゆくまで、ふらずてゐればよいにと、涙もてる目に、怨めしげに、空をにらめば、子は又奥様の顏を、名殘惜しげに、眤となかめ、ほろ〳〵と落す涙を、君子は、己れの寢衣の袖もて、拭ひやり、「そんな顔してゆくと、いけないよ、サア、おいて」凍へし子の手をとりて誘ひ出でぬ」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

夜はふけ渡りて、天地寂寞、劍の如き、つめたき夜風、ヒユー〳〵と、ふきすさび、みゆるかぎり、ましろにみゆる其上に、又もや、六つの花は、ムラ〳〵と落ち來り、別れを惜しむ親と子の上に、容赦もなく、ふりきたれり、「タントふらぬまに、はやく行くがよい、」立派にはいへども、こらへきれぬかなしさに、君子は袖を顔にあてゝふし沈みぬ、子は、ヒヾだらけの頬のあたりへ、涙をつたはらし、下唇を先へ出して、ピリ〳〵と動かし居たりしが、ワッと、聲たてゝなき出しぬ

やがて、面をあげてみれば、無慘やいぢらしや、卍巴とふりしきる雪の中を、火のきへたる辻占提灯かたてに、さげて、きたなき着物に、手拭かぶり、わらじに雪をふみわけながらゆく、あはれさ、あはれあの、くろ〳〵とした髮を、ちごわにてもむすはして、友仙の袖長き着物に、緋縮珍の帯、たてやにむすばせなば、どれほど〳〵、うつくしかろうに、あゝ情けなや、いつそ、追ひかけ行

て名告ろうか、名告つての上て、どこへても行き、二人樂しく、暮そうか、それてはすまぬ、今の夫に、縁きりし先夫の子、それをしたふて、かけ出して、それて女の操がたとうか、既に〱、此家に嫁ぎしすら、二夫にまみへし、貞女にあらぬみの、何處まて罪をかさねやうぞ、さればとて、あのいぢらしきさま、どうしてみすてゝ居る事のなろふぞや、よしや、此身は、殘る生涯、火の車にのせられて、地獄の苛責にあへばとて、それ迄なり、いつそ走りよりて、我子の手をとりてかけだそう、否々それては、‥‥思ひみだるゝ君子、涙にくもる眼をあげてみれば、はや、いとしき姿は、折からしきる吹雪の中に、かきけされて、そこともわかず、氷る天地にすみ渡りて可憐のみなしごが、せめては母のかたみなつかしとや、遙にうたふ若竹の歌いともあはれにきこへぬ。

評、今様阿波鳴門といへき乎。いとあはれ也。會話は、未だしき處多し。（桂月）

白ゆり子の住所姓名を至急當編輯局へ報知あれ

乙賞

袖の露

山崎壽子

上　無限の感慨

あゝ過ぎつる事は嬉しと見しも悲しと思ひしも束の間の一夢に過ぎざりしよ指かゞなふれば何人も懐かしゆかし離れともなしとぞ思ふなる故郷を我より好みて後にせしは昨日今日と覺ゆれど早くも十餘り二年の昔にぞなりぬる、其折漸う四年目の春を迎へし計りの愛度なき盛りの女を捨て、いかに我には情無しとするも一度は偕老の契淺からざりし夫にも別れ、住み馴れし家居見なれし四邊の風光も顧みて飄然として出てつる己が心のさても怪しや、否とよ、彼時は我心にして心にはあらざりし、恐ろしき物怪のたゝりにやあらなん、惡魔の魅せし故にこそあらめ、我はいかにしても本心よりとは思ひあきらめられずかしと、只一人千々に心を碎

きつゝ小草に宿る露を分けて、消然と來かゝりし一人の尼、嵯峨野の奥に世を捨てし祇女、龍門の草葬に冥福を祈りし辨内侍の面影は見んよしなく幾多の浮世の荒波に漂ひし困苦のあと疊れる面にあらはなれ、まだ失せやらぬ香をこめて巖蔭に依りし幽蘭の風情ある身をこはそも何故ぞ色も香もなき黒染の衣に包み目深に頂く破笠に人目を避けつゝ力なげに杖に縋りたるが、故郷間近くなりぬと思へばさすが波うつ胸を沈めつ、傍の小草の上に休らひて、倘もこし方を繰り返しぬ。

我とても昔は素封家の娘、掌中の玉とめてられて熱かき父母の膝下に平和なる日を過しつる折もありしが、よしなき事よりさる人に思ひ思はれて、父にもそむき母にももとりて賤が伏屋になれぬ朝夕のいとなみも只一人の優しき言の葉を樂しみに日を送る身となりぬ。夫も實にその頃は情深くて、朝に星を頂き夕に月を踏みて己が業に勵み給ひつれば、紅葉ちれども木枯吹けどもこゝのみは毎に春の風薫りて、わきて愛らしき女兒さへ出て來つればまた一層の團欒に家の貧しきをいぶせしとも思はず、實家の父母も今更さきにいなみし言の葉を悔い給ふ折さへありしに、うたてや女が三つと云ふ年ある人の都より怪しげなる女共連れ來しより夫が心の駒は狂ひそめて、妻は病の床に泣き子は飢にせまるをもゝのゝかずとせず家に居給ふは愚か打釋けてもの云ふ事だになかりしかば、夫婦と云ふは名のみにて、茨の籬を拂ひあへず鍼の筵にある心持して、乾かぬ袖の村雨の露の玉の緒絶もやすると思ふばかりの折しもあれ俄に實の父も母も打つゞきてみまかりぬる夢のやうなる悲しみに我心は亂れにみだれて俄に發る菩提心、母が添乳の手枕も今宵限りとしるや知らずや涙かくして語り出す昔々猿蟹のお伽の聲の中無心に睡れる稚子を心強くもふりすてゝ、夢の中に剃落す烏羽玉の髮、やつれし身を包む雑彩なき衣、只々御佛を賴みまつりて故山の空を跡にして大堰の水清くして皎月圓かに虫聲すみたる片邊り、柴門礁くとざして幽にならす鉦の音に流石に萌す煩惱を追ひて行ひすます事三年ばかり、それよりまたも諸國を巡りて只管罪障消滅をい

のり居しが、如何にしけん此一年ばかりは旅寢の夢も圓ならず、果敢なく別れし女はてはつれなかりし夫の上さへしのばしくうたてや御佛の道に入りしを悔ゆ時だにありぬ、あな淺まし棄恩入無爲の偈を唱へて親なし子なしの桑門に入りながら今さら墨染の衣の手前稱ふる六字の名號に對してもはづかしと幾度か心の駒を止むれど、今はしもたへ難きに只一日他ながら會ひて風のたよりに此頃の音づれ洩れきかんのみは何かあらん、御佛なりとて親子の愛はしるものをなど免し給はざる事あるべきと、子故の暗にふみ迷ひては心太く夢心地に來かゝりし故郷の邊り、さすが日ある中は面伏なり、彼處の茶店に憩ひて暮るゝをまためと一人點頭きつ、心靜に立上りて其の方に急ぎぬ。

中　思はぬ音づれ

秋ふけし片山里の夕まぐれ、軒の楓は紅葉してはらはらと四邊に散る風情またなく哀れ深きを、心なげに打見やり居し茶店の老婆、入りくる尼をみとめて忙しく身を起しつゝ出迎へて、こはよくぞいらせ給ひたれ、今日は降り續きし秋雨の空はれて、いと心持よき日に侍るかしと云ひつゝ澁茶をすゝめながら、つく〴〵と打目守りて、さても尼君の心得ぬまだすがれしと云ふにもあらぬ花の身を、かく淺ましき裝ひしたるは何となうゆかしき事のおはすやう覺ゆるにいざ語りきかせ給はずやと問ふ、尼微に笑みてこはよしなき事の尋ねかな、只何事とも分かず嵐にちりし梢の花、浮雲蔽ひし夜半に月を見て轉人生の果敢なさに感じかゝる身となりはてしのみ、飢ゆれば人のめぐみの一碗の食にもあき渇すれば小川の水を掬ひ暮るれば樹下にまどろみて梢を洩るゝ夜露に袖を濕ほし明くれば杖に縋りて定めなき身の行衞は何處としら波の寄する渚も厭はねば虎伏す野邊も恐ろしと思はず、幻の中に世を過すなる身の躓きては薄の刄に足を痛め樹下に宿りては栗の實の礫に夢驚かせし物語より侍らず、夫よりも媼こそ數多の人に見えて嬉しき悲しき種々の語草もおはさんと云へば、あな此人の口重くて己が身を押包み却て我に言問

ふ惡さやと打笑ひつ、さなりさなり物語につきて思ひ出しぬ、世には悲しき事は多かれど彼少女程幸なきは侍らざるべしとよゝと歔泣きぬ。

あゝ其物語てこそ夢にうつゝに束の間も忘れ來たる尼が愛子の上ならんとは。孀のやがて促がさるゝまゝに徐に語り出したるは、尼の世を捨てゝよりの出來事なりき。

少女の父は妻の家出してより間もなう怪しき女を入れて後妻となしぬ彼も始の中は母を亡ひし幼き者の哀れに愛らしき樣にさすが優しくはぐゝみけるが月日ふるまゝに邪なる心を表はしいさゝかなる事も口善惡なく云ひのゝしり、むごく情なくもてなせど、女は只幸なき身をさとりてまた人を恨まず、髮の燃ゆる血の凍るやうなる憤の中に早くも二八の年を積みぬ。

あはれ萬綠叢中の紅一點雨に嵐に惱ませし上、尙も路傍の人の踏にじるに任さんとにや、まゝしき母は窈窕たる花の顏、綠濃やかなる三尺の黑髮、いと臈たけたる女の風情をひそかに打笑み其清き操をもてあそびて己が驕りの代にせばやとて父の負債を口實に言をつくして夫なる人をときし上、尙も女を唆かしぬ、少女はあまりの事に茫然と暫し其顏を見つめ居しが、不束なる身にても金になり父上の難義だに救ふとならば如何なる悲慘に身は死すとも露厭ひ侍らねど、世にも淺ましき女の操を賣る事のみは枉げて免し給へと泣伏して聞入ねば彼は日毎に責めはたりて他の見る目も哀れなりとかや。

かく語り終りし孀はまたも涙に咽びつ打よする波はかへれどかへらぬ人をこひわびて、ひねもす涙にくれながら、まゝしき母の笞の下に身を打伏せる哀れさを實の母の洩れきかば如何なる思ひやなすならんと太き息を吐きて亦語らず、尼も默しつ、持ちたる撞木の甚く打ふるふをみるのみ、秋の日はいつしか山の端にかくれて、四邊は何となうしめやかなる時、草叢に咽ぶ虫聲を驚かし暇を告げて立出づれば、紅葉はひら／＼と墨染の袖に散りかゝりて晩霞淡雲の裡に模糊たり。

下　無明の夢

こゝは四顧寥落たる枯野原萬籟闃として聲なきの時孑然として立てる一人の尼あり、月は前山の松蔭を出てゝ水を照らし、岩をてらし、木をてらしつゝ、碧玉より更に匂やかに、無數の星宿光無からんとしては又ほのかに何物をか囁く、なびく尾花は宛然亡き魂をさしまねけるが如く、叢間の露滴點々たる下に唧切たる吟虫は、尼が薄命を咽ぶにも似たり。

過ちぬ〳〵、かくなり果てんと知らばいかでかく世を捨つべきやは、實に思はざりける我心なりしよ、一樹の蔭に舍り同じ流を掬ぶだに離別は悲しき習ひなるに、況てやこれは過世の緣深うして親となり子となりながら淺ましや人となるまで育てもせで、世にときめける人の女の花に月にあこがれて笑ひ樂しむには似もつかず、味氣無う日を送らせぬる其さへ旣に情なきに、慾深の繼母の爲に汚れし淵瀨の水にまみれん危機一髮、きかざる昔はさまで思はね、知つては魂魄も煎らるゝ計り、打すて置かば女は必ず苦の身を流てや散らさん、さなくも逼る憂き辛さに終には病みて倒れやせん、御佛の道に入りたれば名の上の緣は絕えたれど、血の聯續は絕えぬ間、親なり子なり我こそは實の母ぞと名のり出て、女を後妻の手より取返さん、若し其儘にさしおいて哀しき終を餘所々々しく見ねばならずと定まらば、此世に生存ふ甲斐もなし、來ん世には金の光を身より放つとも嬉しからじ、只一人蓮葉の淸きに其身を置きしとて樂しかるべきや、何とて尼にはなりたりけん、如何にしても女と共に過すべかりしに、鈍くも自ら過ちけるよ、今は後世安樂もさのみ望まじ火坑に墜つるも何かあらん木の片竹の端くれとなり果てたる身は佛の御罰に悶ゆも厭はじ俗に還りて女を救はめとおほひし笠をかなぐり捨てもの狂はし氣に駈出せしが、思はず立止りて、身を顚はせさま苦しき息をつきぬ。

あな賴み難き我心や縋る女を荒らかに椽より下へと蹴落せし彼の西行のそれよりも情なく女が泣聲を臥床の中に聞捨てゝ浮世の塵をさけしより此年月幾多の惱に

打かちて堪へに堪へ居し今に至り如何なる障碍のあればとて年來頼みし御佛に離れ參らせん事うしろめたし世の春秋に変はりて花には喜び月には悲しみ由なき七情の徃來に泣きみ笑ひみ過ぐしつる昔の身ならば兎まれ角まれ、今は恩愛の絆を絶ちし尼の袖にはまつはるべき親も子もなし、殊に今の母は情なしとはいへ四つの年よりはぐゝまれし義理あるものを今更何の面ありて母と名乘りて行かるべきやは、今は早や世をも恨まじ身も悔まじ何事も皆定まれる因なり果なり兩親の心折れて女を愛し其身に恙なき樣とそれのみ御佛に祈らんこそなか〳〵に今の身のふさはしき業なるべし、あゝ哀れなる少女よ汝は世のあらゆる憂き事を嘗めつくし實の母のあるならばと盡きぬ涙に袖をしぼりて我をも恨み世もかこつべけれど、皆これ宿命業報なればぜひもなし、只々御佛を頼みまつりて悟りを開き給へかし、觀ずれば夢の世觀ぜざるもまた夢の世に幸といひ不幸と云ふも只幻の間の苦樂に過ぎず、何を悲しみ何を喜ぶ事やあるべき、我も一度は迷の雲にとざゝれて衣も珠數も捨てんとせしこそ危ふかりし、此れよりは人々の後世安樂この濁世を安ちけく過さんのみを祈りてん、哀れ深き人の物語も再びきかじ花の如き少女の嵐に惱む姿も見まじ、南無佛々々々と尼はあまたゝび唱へて、露の白玉打拂ひつゝ蓐を作り、靜に坐して已が心を清めんとぞすなる。

一度蔽ひし浮雲は尼が英斷の風に拂はれてまたも澄み渡る眞如の月端然と合掌せる其清き姿を浮ふが如くに照し出しぬ。折しも空には旅鴈の一聲しづけき天地を破り一層かなしう、

　南無大慈大悲觀世音菩薩　種々重罪五逆消滅

或は明に或は幽に一念こりて誦しまつる時、秋風颯々と墨染の袖をあふりて、上なく殊勝にきこえ渡りね。

評、露伴の二日物語を學びたるもの乎、男ならぬ女西行、多少の風趣あり。（桂月）

丙賞

ピアノの主

水橋康子

一

「へゝ、其庵崎さんてへのが皆目知無んて、ひよつと所違じや無んてすか。」

「所違つて、たしかに白金台町なのです者、あの此處は白金なのてすか」

「てすか所じや無てすよ、先到から何邊廻たか知やしません、全躰こゝら界わい同じ樣な要垣ても、何間目は誰家とまちがひつ子は無て、が其庵崎さんてな聞た事も無、エ、ツト此頃越た家はと‥‥」、子細らしく首をかたむけて、

「どうもわからねへな、チヨツ」

つるべ落しの秋の日に早、道端の垣根内ては、忙相に干物を取入る張物をはがす、豆屋、とうふ屋、牛乳や、一しきりはにぎあふか、もうそろ／＼くらがりの二本榎あたりの坂道を、行返り々々幾度と無門札を讀ながら通る人力車、人相の善無四拾男の車夫はじれ切ているので、乘て入娘は氣が氣で無、内は知ず土地は不案内成、年若のもうそろ／＼して。

「あの車屋さん、御氣の毒ですがもう一遍廻て見て下さいな、それて知なければ仕方が無、許の品川のステイシヨン迄引ていつて下さい」

「へゝエ、返るつて御宅へてすか」

「ハア、そんなに遠くも無のてす柄、出直と仕ませう、ほんとに御氣の毒てすかね、どうぞも一編」

「何も一度が二度ても、御客様なら仕方が無つてもんですが、何ですぜ惡事は言ねへ、そりやむだでしよう、御見掛申た所が御奉公てんじやなし、きつと御修行なんてしよう學もんの、ねへ是ならちき此先に私しが知て居、靜できれいな極好家が有やす、そこへ居つしやつてはどうて、何氣に入なければ幾軒でも御案内しやさあ、兎に角そこてゆるりと御尋なさる事にしては」

「そう……、でもね何だか……」と氣の進まねば、返事も濁るに。

「無理に進るのじや無てすぜ。エライ何とか仕ねへ段々おそく成から」と先程の心切顔はどこへやら、あゝとんでも無、田舎者と見られて、悪車夫に見込られたかと娘は、夕風のはだ寒いばかりてはなく、わな〳〵ふるへて助てくれる人もと四邊を見廻時、嬉しややぶ道の横から男がくる、然も書生躰のまだ若い、そしてたくましい獵犬を連て、口笛ふきすさみながら通のを。

「おもし一寸、鳥渡お尋申度御座り升が。あの此御近處に庵崎様とおつしやる、御家を御存ていらつしやり升なら、どうぞお敎へ遊して下さい、あの誠に不案内て困切升ので……」

「ア、庵崎、○○番地の庵崎てすか」。とかされて、

「ソンナラ僕の内てすが。貴女は」

「エ、アノ、アノ、本當て、本當に庵崎さんはお宅て、違ては御座升無ね」と念をして、

「マア善つた、それじや車夫さん此所て落して下さい、知ました柄御苦勞てしたね」今迄のこわさ恐しさ、車から落て共に重荷おろした心もちて、ほつと溜息。

「當人に聞きや知る筈だ、フン此日の短けへのに好ひまつかきな、いめ〳〵敷野郎だ」ぶつ〳〵獨言。

「あばよ、おたのしみ――」腰をつき出してたゝく眞似の憎らしさ。やがてから〳〵と夕やみの坂下へ。

「憎らしいつたら無 私はあの鳩が谷の葉て御座升が、貴殿が申か秋男様ては」と足許ばかり見つめて、はにかみ勝な物言も、おとなしやかな。

「そ、そうてす、私が秋男、貴女が葉さんてしたか、やそれは、」と帽子に手を掛た、男の顔はさつとくもつたが、名殘無日はどつぷり暮たので、見附られぬを幸とつとめて、

「然し好御一人てお出てした。母さんは無一人で困て居しやるだらうつて、非常に氣をもまれるので、實は先刻ステーシヨン迄、見にいつたです、無理な咄で、お互に知んのてすからな。然好所でお逢申た、仲々喰想も無車夫ちしかつた、心配なすつたでしょう」。といつた時

娘はそつと涙をふいて、そして、
「あの御用つて、どちらへか」。
「僕ですか、イヤ別に用では無です。それで荷物は。ああそうじやもう着てしよう。サアレビーお客樣を御案内しろ」。
お客樣といつた時、於葉はちらつと、秋男の顔を見上た樣て有た、が秋男は知らずに。
「どうもしどひ坂道て、くらくなつていけませんな、氣を附て下さい」。

二

「酬だつたろう共、嘸困たろうよ、秋男を向にやつたのだけれど、こんな呑氣だし、夫に紅葉時分なので滊車もこんさつなのだらうよ。掛違て何時も咄てばかり御互に顔を知ないのだから無理も無、其くせ幼時分、御近所て在た頃は、夫は〳〵仲善て在たのだよ。とうぞ是柄も仲を善しておくれ、二人に孝行をしてもらへば、明日が日寝ぶつても心殘は無、こうなるのを待たの處ては無、實家の母さんも御存生でなら、どんなに悦なさるて有う。若い時分御一所に御奉公をして居た時分から、貴女に男の子が出來たなら、私に女の子が有たならと、ふるいも〳〵折紙附、永年の私等が願だわね、ヲホヽお笑て無、二人共お振袖の高まげだつたのさ、御狂言の時には、仲が善といふので、二人道成寺をした事もあつたつけ、ヲホヲホヽヽヽ」。松だけ蒸の香いきりたつ、八疊の坐敷をしめ切て、老婦人は二ツ三ツ、かたむけし盃にほろ酔の、此上も無上機嫌、於葉も嬉し相に、にこ〳〵して優敷まつ毛の長い二かは目、豐なほうはぽーつと櫻色に染て、年よわにしても拾八にはあどけ無顔かたち。
秋男は廿三の若者二人にくらべても、嬉敷無てはかなはぬを、唯無言ではしのさきばかり忙しないは、何かかんがへているらしい、何時か於葉の我家の者に成と云事は、とつくにから承知なので、母親の年頃待久しかるのを聞なれて、むしろ我家の者が遠く、はなれて居思がした事もあつたのである、是を今更否、いやては無ともうるさいと思のには、いはれの有事て、其いはれといふは、お今も聞へるピアノの音。其かすかなる調に、秋男

の若き血はおどり、心は空に走るので。

三

「秋男さん、是が私に似て居るといふのですか、好御覧なさい、誰か外の方に、似て居筈です」。聲の主がピアノの主、そして此邸の主である。父君は多く熱海の別莊住居去母君の故郷は羅馬とやらの都とか。父君が洋風好の母君は又無此國の美術を好れたので、邸の構も外に見られぬ趣か有。秋男が住居も此邸の地所はづれ、柴戸を出れば櫻の植込に續ので。薄紅の窓掛かけた二階が、ピアノの主桂子の居間。秋男とは親敷友達とは人もいふ自分達もいふ。桂子は廿を一ッ越て、其美くしさ氣高さ、母君の面影に鳥羽の黒かみ、大ようなは父親に似て氣位の高のは母ゆづりであらう。

「カヤア之は葉だつてんですか、似る所が足許にもおよばんですな、此尊さ優しさ、とても〱誰が見ても、決して似てはあらんです、決して似ては居ません共斷じて」。

「ヲホヽ大層な勢ね、でも好は私しや葉さんのつもりでかいたのです者、てうど葉さんが櫻の散時分、こゝにこうして立て居らつしやつたら、きつと此繪の通でしようと思つて、」

「だから貴女だ、貴女だ、神のような。……我々の……くく〱苦しみをなくさめて下さる天使……貴女のような女神だ」。と意味有氣に力をこめていつた、聲はかすれくちびるはふるひて、眼はかゞやいて居る。

「マア大變な、私しや人間じや無のですと、ヲホヽヽヽ大層はめられた者ね、お禮には今よい者をこしらへて御馳走しませう」。と高く事もなげに笑つて、植込の中をかけ拔て見へ無なつた。秋男はむなしくそこらを、おても無あるきながら、ほつと溜息自分のくつたくに、木陰に忍泣人の有事も。おくれ毛そよぎて櫻の紅葉風も無に散てさら〱と、土の上にうらみを語るをも知らぬらしい。

四

小草の露冷やかに、朝風の梢を吹聲どこと無秋も更て、もう冬らしい詠になつた。彼二階には狂咲の美事の菊

の鉢植、二鉢三鉢ふさこんだ廊下にかざられて、四邊の白かべに一幅、美しさが見立、室内には桂子の作らしい緋ちりめんに黄菊白菊を、大きく四隅に縫とつた、机掛の掛つて居上に、其出來榮を一人ほこる、落花の美人の油繪かざられて、是を一心に見つめて居る葉の、横顏をのぞひてそつと、桂子は其かたに手を置ば、お葉はふと振返て、又あかず見とれて居を、痛はし相に桂子はのぞきこんで、

「ネエ葉さん、私に何て似て居者ですかねへ、秋男さんは此頃どうかして居つしやること、そらねそうやって私の顏を下柄。御覽なさる樣子つたらそつくらよ、自分ても餘程好似せたと、思つて居んですね」。

「イヽエ、私しやとてもこんなに美く敷は無わ、こゝらあたりがどこと無、貴女の面顏があり升」。

「そう、それては之は貴女と私と二人に似ているのね、私失禮だけれ共、貴女が可愛くつて、まるで妹の樣な氣がするのよ。あらまあ私どうか仕たのよ、御免なさいよ私は人の否がる、雛の子つていうのでしよう、そんな者の妹の樣にだつて、かんにんして頂戴、怒ないてね」。

「とんでも無怒なんてそんな事、わたし嬉しいわ、貴女の妹のようつて。すこしても似ていれば、秋……」と口ごもつた。桂子はさもあはれむ樣に、

「お可愛想にね」。と細く息をして、しみ〲と、

「私よく知ていますよ心配なさるな、私も父樣一人て隨分便ない身ですけれど、貴女は御兩親は無し、お兄樣は義理のですつてね。私便に成て上度も、女ではあるしけれど秋男さんの事は安心なさい。是丈位の事はきつと仕て見せ升柄、氣のせいだか此頃、貴女すこし瘦たわ」とかたをなぜて暫は無言、やがて

「きつとよわたし、貴女を妹と思つて、きつと貴女に滿足させ升柄。いつ迄も〲私をわすれてはいやよ」、さも思入たように熱心に、葉子の手をじつとにぎつた。

「勿躰無どうか私をこそ、お見捨なさらずに、こんな者ですけれど妹 共思召て頂戴、ですがねとても秋男さんは、あの大層何てす者……、とてもわたし」。

「知て居升知て升、何がこんな私みたいな者がいゝので

しよう、こんな可愛い〻方があるのにね、若い方って物好なものね、其事なら決して決して心配仕ないてよ、よくつて私ちやんと、胸にきめた事が有の、何そんな大仰な事では無から。大じよう夫」。と一段聲をひく〻して、
「此繪ね、之は來年上野の例の會へ、出そうと思つたのですけれど、やめにして貴女のお祝に上るわ、何つてさヲホ、結婚の、そして早く赤ちやんを生て頂戴、私人形の樣に抱たりか〻へたりして、」お葉はふる〳〵つとふるへて泣ふして、泣て泣て、漸く涙のひまにとぎれ〳〵
「かんにんして下さい。ゆるして頂戴、貴女の御心を知らずに恨て、私今迄貴女をうらんでいましたの。すみません〳〵、神樣の樣な貴女をうたがつて」。
「ヲホ〻貴女も又私を神樣にするのね、いやよ此方は」。
と笑ながらそつと涙をぬぐつた、
誰であらう、たしか今階段を登てくる足音が、したのであつたがはたとやんて。
桂子の
「殿方つてうぬぼれな者ね、たとへば秋男さんだつて、私の方じや唯男女の違丈で、矢張友達と思つて居のだわ、それを戀人氣取か何かで、氣障なつたら無、まるで小說か何かのつもりで居のだもの、私青白い若方大きらひ、權式のある意志のつよい。大柄な立派なこわい樣な人でなければ夫には仕無わ、秋男さんの樣な方には、葉さん見たいな、優敷人て無ては」と倘咄つがうとするを、於葉の顏色をかへて桂子の袖を引。室の外を指差のを、承知とうなづきながら、
「かんがへても御覽なさいな、人にはつり合つている者が有じや有ませんか、」ときつぱりいひ切ると、室外には、
「ウーン」と苦相な人聲、やがて階段に恐しいひゞきがした、
桂子の顏色は青ざめ、くちびるはかすかにふるへて居る。於葉はたゞ泣のみて。
冷たい風の窓より吹込に、菊の香さつと匂うて、吹こんだろうかの、あちこちらの隅に、狂菊のむしられたのが、飛廻り飛くるうので、籠のおうむの、

「美。美」、と一人よろこんで居る。

五

秋男は其後隣へゆかなくなつた、於葉をもあまりやらぬ様にする、以前よりは大人らしく眞實になつて、とりわけ於葉にやさしくするのが、母親の眼に迄見ゆるので、内々心配したのも事無すみし悦やら。此時をはずさず婚禮をもと、日に二三度は火鉢の引出から、暦を出ぬ日は無、於葉もそわ〳〵と落附ず、三井が好とか白木が好とか、流行は何といふことは老婦人より於葉より、秋男がくわ敷のであれとかこれとか、家内わけも無さゞめいて、愉快な家の様に、秋男も昨日の夢はたどらず、唯もう之に満足するのであつた。

桂子も熱海の別荘にいつている、於葉から細々と其事をしるして手紙をやつた時、悦をる由書そへた手紙と男女の帯一巻づゝ、御いはひの印ばかりにと、奥向をあづかる老女がもつて来た、秋男は怒もしなんだが、納よとも返せともいはず、母親が無事に納た、其時妹共思う葉子ぬしへと、まき繪の手箱内々にと贈られたをひらきて見れば、指輪、帯留、香水、錦の紙入、かんざし笄櫛、半襟、帯止、其外女のよろこぶ小道具を、一通揃へて中には随分高貴の品もあつた。於葉は自分一人極にて納るも如何な物と、秋男に相談仕掛て、箱のふたを取た時秋男の眉は、氣のせえだかうごいた様に見へた。

其年も暮ての春には、主の留守の時には引かへて、庵崎の家庭のにぎはしさ、花やかな新夫婦の笑聲、折々は垣を越てきこゆる事もあつた、樂敷日は暮やすく、去年紅葉てあつた櫻の植込も、薄紅の絹を掛た様な盛とはなつて、彼二階の窓も珍らしくひらかれて、同じ色の窓掛もかゝげてある、明日は御歸京と聞た時は於葉、さすがはづかしくもなつてか。結始に丸まげを氣にする振の、それが又をかしいとて母親は笑うが、笑つて居られぬ事がおこつた、それは今秋男の讀で居る、新聞の記事なので、

「今回女子にして始て、何々會出品の油繪に、金牌を得たる有名なる桂子女史には、愈々其技を磨かん爲、かつは亡母君の故郷にて、多年懐敷思をられし羅馬に、ゆか

りあれば留學せらるゝ事と成、明何日熱海より歸邸、其翌朝をもつて、出發途につかるゝと聞く」。

と讀上たまゝ秋男は無言の腕組。老婦人もお葉もまあといつたまゝ暫は無言　お葉はやがてほろり〱泣出たが、姑の手前氣を兼て、何とも言葉を言出し得なかつた。

六

出立といふ其晩、薄紅の窓掛をもれて、ゆかしくかな敷、雄々しくピアノの幽爽なる音がもれた、夜一夜ねむり苦敷もだへた、秋男夫妻は急ぎ雨戸明て、つゞいて柴戸の外に出、櫻の植込にと來て見れば、有明の月空に殘りて、朝がすみのほの〲と。尊樣な此曉に調の音、ふとお葉はひざまづいて、櫻の根方に置てあるものを見れば、あゝ、あゝ、それ彼金牌を得しといふ、落花の美人の繪なので、それと夫に告て共共にすゝげて見れば、薄紫の繪の具にて、ふん〱たる落花の上に、

天使と君がいひたる言葉かりて
よろこびつぐる春のあけぼの、

二度三度くり返し〱誦返してお葉は、

「旦那――」といつたまゝ感極まつて、ほろ〱とこぼして涙をぬぐひもせず、泣つゝ窓にむかつて手を合せ、土の上にひれふした。

秋男は無意識に、繪の上柄眼もはなさぬ、ピアノの音ははたと止つて、白き服着たる氣高き姿、櫻の梢に薄紅の絹につゝまれてちらと見へた、曉露か、かすみの雫かきらりとこぼれたが。かきけす樣にすぐと影は見へなくなつた。

秋男もお葉も其まゝ、つい知らずに過去た。

ばら〱と散櫻の中より、窓を見上しお葉の、其繪のそれに似ているかいぬか、あらそひし人は今か行か、表の方の敷石に馬車の廻る音がした。

二人は息もつかずに立つくすので。

秋男はお葉のあるをわすれ。お葉も秋男の共に立ならぶをわすれて居た。

たゞ神の樣に氣高い、桂子の姿を思〱に思うかべるので、此しばしは。

評、我愛を犠牲に供する處女の高潔、よく人を動かす。天使の語を點綴して、殊に躍動す。初め二段は今一工夫あるべし。後半大に好し。(桂月)

秀逸

雪の呉竹

玉井さゆり

(上)

冬三月雪で閉すてふ越の山奥。晴れし空の大空に、白梅清き雪姫の日影眺ゆき山々を、遠き雲井の果に見給ふ、花の都の姫達には、を旅挿かせての御歌がたり、都こそ冬ぞ住みよかりけりなどの給ふも、あながち無理とは申さじかし

されど浮世の習とて、世を住吉の浦にまへ、つらき嵐は吹くとかや。生れて乳母の懐離れず、學校通も馬車や伴、寵深うのみ育ち給ひて、墨田の花や愛宕の月、是が我世の有様ぞと、心得召さるゝ姫達の、甘き理想は守の夜の夢、醒めては何れ苦き世の、同じ涙に濡るゝ身ぞかし。

此山奥に近頃雪落れたる家あり。げに花は梢にある程の眺め、散つて雪れて泥となりては誰振り返る者もなし。紙より薄き人の情や。十年は遠き昔ならぬを、其折は村人も懐き親みたる此家の富、一朝女房が歸らぬ客となりしより、兎角物事の齟齬ひしぞ、抑も破産の源因なりけり。主人の喜左衛門は一向妻の死を悲みけるが、娘一人を切ての慰に、後の供養に心を盡し、檜の佛棚けれ共、輪燈の灯は幽かなれ共、片時佛間に絶えし事なく娘靜子が手向草、主人が回向の普門品、かくて一年は過ぎにけり。

母親をのみ頼とするは世の小旗の心ぞかし。翼も伸ひぬ雛鳥や古巣に一羽殘されて餌を呼ぶ聲の悲しからずや。月照る夕風吹く朝、何れ涙を増す鏡、優き心も曇りては、母持つ友の妬ましく、村の祭禮に山車さへ見ず、終日室に泣き暮し父が慈愛の雪の花を、折りて拐りて投げ付けし、余りの自棄に心付けば、あゝ勿体なや、父様へ、愛計りの悲ならぬを、此頃は御氣色もつやつや勝れ給はぬ御様子、其御心も辨へず、海士の苅藻のわれからと、悔れて何と致すべき、大人になれよと母様の御遺言、今から心改めてはと涙を拭ふ健氣さよ。靜子は十四の蕾の花、瑶臺の月に愛なき顔ばせは、十人勝れ百人拔き、村一番は愚かな事日本天竺韓三國に勢至菩薩のないからにはと、萬事を大袈裟な村人が異同も、無理とは云へぬ標緻ぞかし。越は名所雪の肌、み山の楓か頬の紅、額は富士の遠霞、底に露珠の滑むてふ、琵琶の湖そのまゝの、眼に細き翠の眉、拉一ト年の物思、ちと寠れしが一入とは、愛も情も辨へぬ、欲一筋の若者が三人集りての品評。世に妙齢の女兒を持ちし親心、まして母なき不緣より、あたら水晶疵もつきなは、悔の八千度甲斐なしと喜左衛門が心配りは中々ぞかし。心も顔も清き兒の移さば雛て大奥の、御庭に咲かむ八重櫻、仁義も誰も辨へぬ此山奥の莚めらに、折らずは惜しき一もとと子故の闇に親心、迷暗路のあやめなく、儘の知人に依頼して東都の空に旅貿ふて旅立たせ、さる學の舍に入らしめしぞ、靜子が不幸の始にて、十年の今日の冬籠、未だうら若き花の身を、孤閨空しき賤が屋の、薄き衾に冷ゆる沙、義理と情の二道に、せまりて泣くや血の涙、沐る枕の雪寂も、憖ひ都に出でざりせば――

(中)

落花鴻毛の比喩は愚か、かき寄すかと降る雪の、積るに早き片山里、日

暮るゝ頃に切り上げしが、又もや降らむ空模様、灰色の雲一面に塞りて、凄ごや凝たる此光景、幾尋越路の雪の夕暮、見渡す限り野も山も白妙多き冬衣、櫟の林や杉森や、たゞ白雲の湧くが如、其處に彼處に聳立ちて、乾きし枯を渡りたる昨日の風は跡もなし。落つる夕日の力なく雲の破に輝けば、氷に閉ぢし黒姫山、天水峠猿が嶽、磨き上げたる寒水石の肌其儘に美しく高う聳ゆる嶺高さよ。銚子谷、切崩などの險岨はさながら燧石積み上げたらむ樣にいと恐しう、鳥も啼かず兎も見えず、野はほの〲と暮れ殘れど、み空は闇に鎖はれて、人は皆苦雪深き冬籠、千里聲なき寂寞の境、世は今日限り死せるかも。

聞き馴れて聞かぬも淋し松の聲、げに山風は筧より滴る水の音をさへ、惜しき折の友ぞかし。今宵は寒さに水屋も氷れば、病む人眠る睫が屋の閑寂何に喩へなむ。薄敷きたる八疊の間、壁も障子も煤に塗れて、光小暗き角行燈の隅隅までは照し兼たり。

『まあ寂とした晩だ事、余程降つたと見えてれえ』

煙管さす手を膝に休めて、傍の爐端に餘念なく注連縄綯ひ居たる十計りのいと愛らしき童に向ひたるはお靜なり。櫛卷の毛筋あやなく亂れて、頬に櫻の色褪せぬれど、十年の昔忍ばるゝ、倘も眉根の美しき哉。

「おゝよ儂あまう先刻から淋しくて……」

色白き其丸顔をふと擡げて、然に散る燄を傍におしやり、指頭や氷えし、榾火つくろふ手の優しさ。つくづくと其顔目守りゐたるお靜は、いと堪へ難き容子にて抱かん計り躪り寄り

『金彌は淋しいの!?む、何が、何が淋しくつて、』と云ひつゝ其手を緊と取りしが、清き眉根を八字に顰めつ、『まあ冷こい手をして、御前、』と急ぎ身と抱き寄せ、懐寛げて引き入るゝぞ、げにもわりなき母子の情。

「金彌は淋しいの?む、」泣かむ計り戀しき顏して金彌の面をさし覗けば、ばち〲と愛らしき瞬しつゝ

『爺居さあ遊びに來ないし……』何故にやあらむお靜が身内はいたく顫へぬ。『金、金彌ば多作の爺居さが好きだのかい』云ふ聲も甚く顫かり

小供心の思はさま〲、金彌は是には答へずして

『若しか祖父さんが死なんだらうか?』先刻より餘り病人の靜かなるに怪しみて聲を忍びて氣支はしげに問ひぬ。祖父を思ふ此兒が心は如何ならむと、思ふに涙はせきくれど、何ともなげに仰向きて唇堅く嚙みしめつ、

『金彌は何故馬鹿げた心配なんかしるんだい。大丈夫だよ先刻睡眠劑を上げたから善く眠つて居なさるだれ』先だつ物は涙にて、胸は身にのみかゝるぞかし。

『阿母あー泣いちや嫌だ、おらあ……』おろ〲聲に勢るゝ樣子、見るにお靜は絶え兼て、わつと許りに泣かむとせしが、氣を勵まして息をこらしつ

『ほゝゝ金彌はまあ、阿母は泣きなんかしないのにさ。それ〲此薪が餘り煙るので……』

夜は早いたく更けぬし。不捨宗の鐘聲に籠りて、遠く〲八萬奈落の大底へ、此魂を誘ひ出すかと思はるゝ迄あはれに細く響く哉、折から窓にさら〲と音するは又雪なるらむ。歪める板戸の隙間より土間へこぼるゝ二片三片、つれなき風に誘はるゝ、花の運命を見よとてか。

（下）

燒芋に慰められて、金彌臥床に入りし後、胸に充たる血の涙、一度にどつと迸れ出て耐え兼てぞ泣き伏したる、お靜が姿は狂へるに似たり。過ぎしは夢と諦むべきを、諦めかねし是非なさよ戀し慕し嫉ましき杉山

樣、直之樣、嫁入の日の樂しさは、今も中々忘られぬを、何たる淺き縁ぞや。世に情ある殿御をもちて、添ひ遂げられぬ悲しさよ。あれ程むごい奧樣に、優しい若樣直之樣の御ありなされしが恨めしや。誠に妾は賤の女故、男爵方へ嫁入など思も寄らぬ事にとて、くれ〴〵御辭退申しゝ物を、何故あの折に直之樣の妾を捨てゝ給はざりしぞ。奧樣があれ程妾を厭ひなされしも道理や、姪なる花子の君をこそと、思ひなされし御心に悖りて、直之樣の御所望より、御心ならぬ妾を納れ給ひし事とは、後にて知りて悔みしが、直之樣の御情が身に染々と嬉うて、奧樣が針持つ御百樂、光子樣（直之の妹）が意地惡な御仕打、も更々つらしと思はざりしが――

あはれ思ひ出るだに悲しや恨めしや。秋なほ淺き頃なりき。唯ならぬ身と悟りしが、何時か乳頭に炎しき、櫻花の紋の印されたるに、小女心の何とはなく、聖き希望の胸に滿ち、唯わけもなき樂しさに、若き血潮の湧き立ちて、そゞろ庭面にあくがれ出でしが、秋の上風靜かにて、天照る月の影もさやけく、み空高う澄み渡りて、鼠の如く兎の如く、鼬鼠の如く山羊の如き種種なる小き雲の、白銀黃金に綠どりて、追ひかけ走る美事さを、たゞ恍惚と見とれしが、秋の花垣さゝやぎて白き萩散るよと見えしが、其萩を袖にして笑み乍ら來給ひしは、あの御優しい直之樣。折からの嬉しさ樂しさ胸に餘れば、妾は恥かしさも打忘れて、其れと御話申しゝかば、吾君の御喜は如何なりしぞ。かまで目出度き事はあらじ。汝は母樣に話してか、よし予より申上げむ。こは神樣の二人がえにしを守へ給ふなりとて、露に濕るゝ殘菊を、束ねて祝ひ給ひしにも、御心の程は見えしぞかし。

か迄わりなく睦みし中を――鬼にもあらぬ奧樣の、よくも氣強う割き給ひしよ。命種をお腹にして悄々里へ歸りし時の此胸は、怨、悲、口惜しの焰に焦げて張り裂く計り、ならば情なき世の中を燃ゆる血潮に燒いて〳〵燒き盡してと、思ひつめしが病の本、御產は安々と出來たりしも、後のなやみに三年五ッ年、勿躰なや父上が、御百度踏みての御信心、家產を傾けての御心盡し、其甲斐ありて母子は今の身となりしが、引きかえて父上の御病氣、居ながら食へば黃金は何日か煙と消えて、大恩ある父上の御介抱さへ思ふに任せぬ貧の悲しさ。下にも置けぬ一人兒の、金彌が輔助を藥の代、霰ふる日や雪の日や、市の四辻に徘徊きて、往逢や門松やと呼ぶ聲も、哀と人はきかざらむ、是が杉山男爵の、一の君とは理も非も見えぬ世の中や。あゝ一層此身は死にし氣になり、村の衆が勸め通り、多作が隱居に身を任せなば、あの子も樂に父上にも――十年二度の音信もなきからは、御別れ申す其折に、生涯汝を忘れはせぬ、我戀人は汝一人と、熱き涙を灑ぎ給ひし御詞は、花子の君と御契り深ふなるにつれ、早や御忘れになりつらん、忘られし身をば思はずひたすらに、殿御を思ふは女の愚痴、大恩受けし父上の、御病氣なさへ他にして、女の操も何の爲、さらばふッつと諦めてと、思い定めても罰さるゝ、情の糸の纏れては、何れを道と辨へ難く、又一頻泣き入りぬ。

燃え盡したる榾の尖頭より、白き灰のほと〳〵と落れば、赤き火のちらと燃えて後は幾條の細き烟のみはら〳〵と舞ひ昇れり。行燈には油乾きて燈心のピチ〳〵と音立てさま青き洲をボッと立てゝ其儘消えぬ。折からいと苦しげなる呻の聲の咽せ返る刻の間に〳〵次なる部屋より洩れて聞えぬ。靜は急ぎ障子を押開けて父が病床へ侍りそへば、棄のやうに痩せたる腕を、胸の邊りに攝り縮め、齒は堅う喰ひしばりて額に玉の汗漲りぬ。お靜は身も世もあらで父上やよ父上と呼はれど、呼吸のみ忙しくて應へ給はむ樣もなし。

煤や破れし。破窓を洩るゝ月の光り青白く、病夫の顏にさし込めば、驚

は粗らに頬骨高く。いたくやつれし御有様。斯は冷たき手を取りしまゝ、無言の涙せき敢へず。

積りし雪に堪へ兼て、軒端に枝の折るゝ音、若木にやあらむ、枯木にやあらむ

（完）

村時雨

山口すみ子

（上）

ざくり〱と霜柱を砕き乍ら、脚には惜しき妹姉二人、背には籠、手には鎌をたづさへつゝ、貧に苦しめはにや、いさゝか面窶れせし頬に朝日をうけて、朝雀ちよちよと喧しき明神の社を通りぬけ、落葉音する小路を踏み分け乍ら、緑色濃き遠の山々遥かに薄霧かゝる筑波の巒を後に見て、霜にうらかれし田舎田圃を只管急げば、恰や寒風颯々と面を拂ふに、オヽ寒むと思はず肩すぼめて二人はひたとよりそひぬ。

粂代さんさぞ寒いだろうれ、勘忍しておくれよ、今少しの辛抱だわ、いつ迄こんな仕事はさせて置きはしないからねと、先己が身よりも氣遣るゝは妹の身。何の姉さん、私なぞは少しも寒くはありませぬよと、苦しき思ひを笑にまぎらす二人、脚袢手甲に身を固めて色褪た薄袷の襟かき合せ乍ら、飾つて待ば豪華有徳の縁にもつくべきあつたら容色を、もざく〱と泥にまみらせて惜しともせぬ姉妹は、猶も只管道を急ぎぬ。

姉のお常は小野の小町とや、花恥しき姿をよそにして今年二十何才のいたづら臥、我こそはく〱と言ひよる人の情を風に柳と受流して、嬉しからぬにあられど何故か心が進ませぬと、同音葉に何人かの失望男見も迎らず、果ては村中にすれ者の名さへ謡はれて怒もせれば短き花の盛を惜しともせず、何をか思ひ何をか樂みて日数過し行く心の中を、妹よりは絶へて知る者あらざりけり。

世は飛鳥川の淵瀬定めなく變るに易き人心哉。お常の家といふも土浦きつて呉服屋の老舗なりしかば、幼い折も窓のとばりの奥深くお嬢様〱と冊かれて、浮世の風も荒きを知ず、人喰ふ鬼は何處に住むやら、苦しいとは何、辛いとは何、悲しいとは何な事と、涙の人をおかしと見て身も心も長閑に暮せしが、満ればかくる世の習ひ、お常の父といふは昔者の何事も曲つた事の大嫌ひ、其堅い氣質が當世の人氣には容れられて、主人があんな故番頭が一徹者小僧の奴か横柄とかと、女二人の井戸の邊には陰言ののぼらぬ折なく、客の出入も少なくなり行くにかてゝ一夜の病に父も一縷の烟と化し終りぬ。それよりは春の海の靜けかりし家内は乱脈、今が今迄忠義者よと思ひし番頭はいつの間にやら帳尻に大きな穴開けて姿を隠せば、それに從ふ小僧若者は後足に砂の譬ひも古けれど、一人去り二人去りて見返る者もあらずなりければ、木より落ちし猿同様、途方に暮れしを親切顔に跡の片付け何やかと世話焼て、お常には叔父に當る人の愁に燃え立つ聲やさしく、親子の者は我家へ引取つて世話しませうと言ひ出るに、例になき事と首傾し親はあれど、兎に角我家に事なかれ親類縁者は何なろうとまゝよ、何事も早く決まるが宜かろうて埒の付く世の中故怨相談一決して、夢心地の親子は叔父の家へ引取れぬ。さるに此家を鬼の住居か、ありとあらゆる動産不動産はいつ誰が手に渡りしにや、無一物となりしよりは邪魔物よ食客よと出行がしの擧動情なさに、無念の涙に掌握りて、母は二人の子を携へて名のみ床しき藤澤村のかりの宿りに雨露をばしのぐ身となりけり。

憂知り初てよりは姉妹の心のなげさよ、夢にも見し事なき荒仕事に骨身砕きて、此處五年が長の年月泥と土とに埋れて、未明に出て月に歸り網

靜なる母を養ふいぢらしさ、朝夕龕の陰に手を合しては、悲しきか、あらず、嬉しき有難涙に咽び泣く母の心の哀れさよ。

ちよろ／＼と流るゝ小川を渡りて姉妹は漸く畑へつけば、四方の山々の頂より光線白く八方の蒼空に散りて、吹きくる風も生暖し。

お常さんもお榮代さんも、大層今日は遅かつたれとちんまる／＼とせし一人が言へば。さうで御座んす、皆がどれ程待つたか知れませんと合鎚打つは、縮毛の何とやら言ふ女。ほんに濟ませんでした、其かはりみつしり今日は働きませうと、雪の様な指先で鍬もつ姉妹の姿をと見こう見て、あゝおよしなされ／＼、それでは餘り似付かない、紫檀の机によりかゝつて筆もつ様な其指先で、鍬もつてほんにをかしい、私等も其半分容色よく産れて來たら、こんな田舎に土いぢりや穴堀りなどはとくの昔に御免を蒙つて、髯のはへた立派な旦那殿と面白をかしく、紋付の羽織に奥さん然と濟してゐるが、何を言ふにもこのお多福、死んだ親父や母親へ怨みをいつてもきゝめになし、あゝほんとに思へば情ないと、大眞面目な女の述懐に皆はどつと笑ひこけぬ。折柄せまい凹凸道を掛聲勇しく走り行く人力二輪、それ／＼お松さん、今言つた樣な旦那殿が通りますよと一人の女の打わめくに、どれと見やれば二十七八の若紳士、車上豐にまにらの煙草くゆらしつゝ、そが後の車は奥様か、厚化粧に口紅青く一の字髷重たけな頭俯向せて朝日に映ずる衣飾の立派さ、さながら目もあやなる斗りなり。人々の見とれて立つ後にお常はきりゝと唇堅く噛ひしばりて、何處迄もいづくまでもと、涙に曇る眼に屹と斗り車の行衞を見守りぬ。

（中）

男心を秋の空とは誰か言ひ初し、それにも増る女心の頼み難なや。さても若者盛りの年頃を獨暮さするはあつたら者、たとひ堅いといふても若い内、としやわびしき心なぐさに、大禁物の花の巷に迷ひいりなば家の不爲、惡い事は言ひませぬ故是非に一人お貰ひなされと、何迄呑込顔の媒介口、棚から下す相性本にあれではいかぬこれでは猶お氣には召まいと、頼まれもせぬに身柄詮鑿、白髮ひねりて頭傾け、さて世は廣き大野原、つむに興なき醜草は足本に山なせど實あり色ある花の少なさよと、幾度かぢれし其果てに容色なら心ばへなら立派／＼嫁御殿、此老父が骨折つた甲斐があると受合ふた言葉の頼もしさに、それならばとその氣になり。目出度事の運ぶに早く、迎へ取しよりは初めて家庭の樂しみ、誠もつべき者は妻なりけりとあれもお糸これもお糸と、人も羨む情交なりしを、世は葛の葉のうらおもて、猶それよりは變りやすく、優き夫の心を仇にして最愛き者さへ設けし中を、人妻のあるまじき事に夫の威光散々地に落して、秋風誘ふ初めつ方可愛き幼兒ほりなげて身を行く衞のいづこともなく出て行きし出來事に夫は口惜し涙に明暮無念晴間なく、己れやれお糸めと拳握れど流石に子の平次のみは可愛くて、土凍ふる霜の夜にねん／＼ころの子守唄血を吐く思ひの歌の節に、秩を捨りし人もありし。

それよりは世をすねもの丶酒に性根を持崩して無法の振舞漸くつのるに、人の不幸を幸と微笑む鬼の親類縁者、其様な者は家へはおけぬ、山村の滅亡を傍觀出來ねば、財産を我々管理すべしと言ひいづるに、何ともせよ勝手次第と酒が言はするたは言を、幸にさらば我も／＼と爭ひてさしもの財産いづこに入りしぞ、あと白波と消へ失すれど、數代續きし山本家は亂離荒廢、それよりは哀れの平次を從へて藁屋か軒に月を眺め、無慚のお糸輕薄の緣者を恨みつ怒りつ罵りつ、狂ひに狂ひし末遂に野中の古井の底知らぬ下のもくず[illegible]身をなし終りぬ。

遺りし平次ぞ今日の[illegible]の若紳士、とる年十二の可憐の子を引取人なき

にお常の父の哀れがり、我身一つに引受けて何やかの世話萬端、四年の後にはお常と只ならぬ約の成しとか、そが聞しよりはお常の心明暮れ只にはあらざりき。

一家の破滅せし折ぞ、けなげにも平次の思ひ立ちて、私だけ上京しともかく方向を定めんと、惜しき袂を涙にわかちて出て行きしは五年後、草深き破屋に母と妹を言葉がたきに此年迄の苦勞散々、袖に涙のかゝる折もお常は別れの折の嬉しき言葉を楽しみに、心に思ひ胸にくり返してほと〳〵涙をおさめてゐたりしものを、夢か、あらず、今朝の若奥樣こそ面憎けれ。



夕風の吹くがまゝに身をまかせて、暮行く空を眺め乍ら低き山茶花の小柴垣、中に大木の松に身をもたせて亂れ苦しき胸の惱ひにそむお常の、口惜しげにほつと吐く一息は焔となりて身や燒かん。

エヽ口惜しい、初めて知つた人の心、自分さへ榮耀榮華に此世を過せば、それで可いと思ふのか、私達一家の人は什麽ならうと、空吹く風と見過すお心か、あの意氣揚々と濟し切つた御樣子の小面憎さ、恩も義理もお忘れなされた事であらう、今日が日までの憂苦勞もやがてはと末の望を思へばこそ、すれ者の名さへ謡はれて誰が爲守りし操ぞや、今よりは夜半の手枕風寒う、涙に明し涙に暮せよとの御心ならん、黄金の花もて若き奥樣と手を携へて、上野の花隅田の月に浮れ給ふ時、此處を宿に同じ月に恨みを吐き、飢に泣けよとの思し召しか、よし妾とても女一人、たとひ力足はずとも小面憎い君樣のお袖にはすがりませぬ、憎い々々お心知つてからは何の懲しうも懐しうも思ひませぬ。と屹と斗り見上る雲の絶へ間より、柳の枝にかゝる月さへ片割れて、落ちくる雫滴の松の雫に我爲注ぐ涙かや、流石つきつめても女氣のまたもや悲しさ口惜しさに嗔恚の炎は燃え上り、身も燒く斗りに思はれて、心は狂ひに〳〵て遠き都の空へ走り去るが如く思はれたり。

お常さん、何を考へて被居の、私はちと御相談があつて參りました、立話しては氣が落つかぬ、ともかく家へ這入つて下されと、胸の內儀の事ありげな樣子にいなみもならず、澁々と家へ這入れば、先煙草一ぷくと嫌

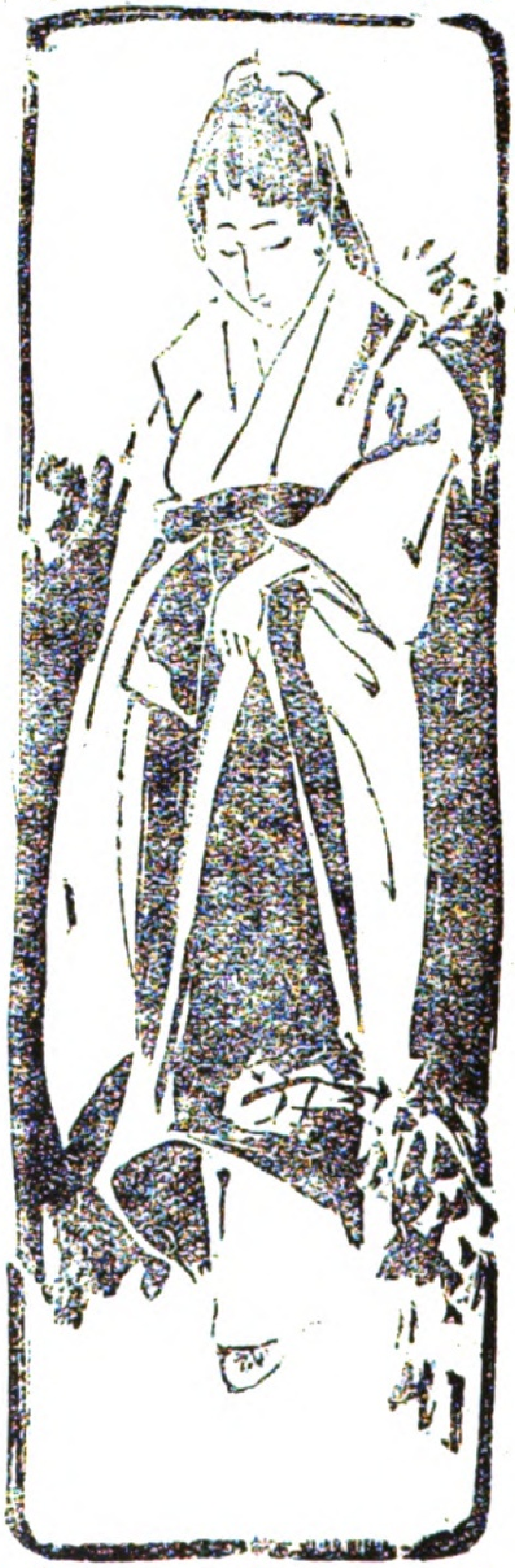
肺ぶつて、さて家の中を見廻して困つたらしく膝を推進め、ねーお常さん、こんな事を頼まれるのは私厭で厭でならないけど、是非にと杉村の旦那樣のお言葉で據處なくあがつたわけ、話しといふは他でもないが、そらいつか、さう〳〵去年の春お母樣の大病氣の時、一時用立て頂いた金子の事、あのまゝちつとの話しもないが餘り長引ては何なもの、それに期限を切てゐる故、抵當の家屋敷を渡してくれるか、それとも外に爲樣のあるなら、明日中にとちらても宜い故返事をしてもらいたいとのお賴、私ぢやとて隣どし故、家の中の不如意な事も知つてゐる、それを今日明日に返事をしろと言はれてはさぞお困りだろと、道々心配して來たけれども、お常さんにはまだ別にお見込てもありますかえと尋ねられて、何と答へも太息吐くより術もなし。

今年の暮には必ず都から嬉しい消息がある、そうなつたらあれはこうこれはこうと、望の柔のあつたればこそ借もしたれ、母にも妹にも未來の樂みを語り聞せては、せめて憂中の心やりとはしてゐたものを、五年の憂苦しみも水の泡と口惜しき宣告受けしが如き今日の有樣見て、俄に憎い〳〵あの情なしの袖にすがるは辛し、さりとて朝から晩迄動たとて半圓とは取れぬ身の今日明日中にどうまア返金が出來やうか、といふて家屋敷を取られなば、親子三人明日より路頭に迷はればならぬ、よし巳が身は什麼ならうとまゝよ、只病み上りの母樣を何しやうと思へば悲しく口惜しく情なく、思はずはら〳〵と落す涙を内儀は哀れと聲やはらげ、ねーお常さん、これが十か二十の端金てはなし、五十とまとまつては女の身には中々の大金、それを今直ぐと言はれては途方に暮るももつともなわけ、けれど貴女さへ或話を呑込てくれたら、其貸金にも棒を引う、その外お父さんが健康の折と同じ樣な榮耀榮華な身にもしてやろうといふ、それは〳〵旨い事が御座んすけど、貴女は承知してくれますかとの問ひ樣に、ヘイ此急場さへ逃れる事が出來ますなら、何な事でも致しませうと、袖の下からの返事をさこそと内儀は點頭て、それで私も頼まれた甲斐があるといふもの、其話といふは別でもないが……と何かいひ淀みつ、實は旦那が一昨年の春お内儀さんに死なれてからといふものは、強くお前さんに御熱心で、何かして〳〵と思つてゐたさうな、だから此事さへ御承知してくれたなら、何にでもならうと仰有つたのよと顏覗き込むに、はつと驚くお常は思はず口惜し涙がはら〳〵〳〵、エヽ聞耳もたぬ汚はしい、たとひ黄金を山に積ふと、私賤女ぢやありませんよと、咽迄出づる言葉を熟と噛みしめて、どうぞお内儀さん、今少し考へさして下さいましとさりげなう口には言へど苦悶の樣は顏の色にもいちゞるし。

（下）

口惜しさ悲しさ胸の思ひの千々に亂れて、寢ぬに明せし朝より顏の色蒼白う、頰の痩れのいちゞるしく目に立て、どこに暖かい笑の影求めやうもない淋しい〳〵哀れの風情、峯の松風み空の月に思ひをよせては、優しき心の戀しき人の夢路に通ひてと願ひし事も春の夢、關て果敢なき秋風に身はうらがれ行く女郎花と、つく〳〵行末を觀じては浮世厭々、いつそ口惜しき一念晴して己も共に双の露と消えんかと恐しき心の起れど、母ある身と思ひ返しては只心行く迄泣きに泣けど、遂には泣くべき涙もかれて冷かな〳〵笑浮べ、凄き眼に屹と許り睨めらるゝは都の空。其うればしけなる樣を見るにつけ思ひは同じ妹の身。姉さんとお美代は悲しげにすりよりて、何卒餘り心配してくださいますな、もしおかけんでも惡くなられたらほんに私は什麼しませう、たとひ平次さんがかまつて下さらればとて、飢も凍えもしますまい。と宥め乍らほろ〳〵と打泣

けば、何の／＼あんな情なしに未練などが殘りませう、私の泣くのは外の事故、決して若勞にしておくれてないと、口には言へどさしぐむ涙に眼も曇りぬ。それては姉さん何の御心配、昨日隣の小母さんからのお話の事ならば、決してくよ／＼するには及ばぬ事、あれは私の身を沈めて事を濟すつもりで御座んす、家の爲母さん姉さんの爲と思へばどんな辛い務でもするつもり、私の居ない後はさぞ御不自由の事も御座んせうが、何卒お母さんを大切に、お身をいたはつて下されと流石にしほれていひいづるに、まア飛てもない、よしや何な事があらうとも、お前の身を寶なぞといふ事は出來ませぬ。と深き思ひに太息吐きて、私こそ世にいれられず、樂みもない體故、何事もあきらめて杉村さんへ行くつもり、お前こそお母さんを大切に、私の分迄孝膈に此世を送つてくれますやう。エッそれでは姉さん、あのお妾になるつもりで御座んすか。さア、何の自分から好きこのんで妾になぞなりたからうぞ、けれど今の世の中は金次第、金さへあれば名譽も位置も買はれやう、尊い／＼女の操も金故には汚れるならひ、それが爲今この苦しみてはあるまいか、いゝかえ美代さん、何卒私の心を察しておくれ、たとひ女ぢやとて意地はある、金に心をくらまして恩も義理も忘れ果てた憎い／＼男の目の前へ、綺羅か飾つて見



せつけたい、ならう事なら父が代迄の濃簾かけて、立派な店をおこしてやりたいが私の望よしや操は守つても、一生土に埋もれて過したら、あれ見やあの樣と後指さゝるゝが私口惜しい、とても泣くべき一生なら、憎い男に臍いせして杉浦の妾て大泣きに泣き通す心底、最う何にも言つておくれてない、それよりは美代さん、何卒新さんと夫婦になつて、私の歎をくり返さぬ樣にしておくれと、觀念の眼閉づれば今は思切て涙も出てず、冷かな／＼笑さへ浮びぬ。れー美代さん、返事がないは新さんと夫婦になるが嫌てすかえ、そりや新さんはあの樣な醜な容色故、美しいお前の目からは虫唾がわく程厭かは知らないが、あの優い親切な心を何と見ましたえ、心ばかりはたとひお金でも買れませんよ、それもまた顔の美麗な小才の廻る平次さんの樣な情なしがお好か、今の私の苦勞をして見たいがお望か、れー美代さん、決して惡い事はいひはしませぬから、え、え、分りましたかえ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

お常は如何にお美代はいかに、今年も落る木の葉に秋の色深うなりて、畑毎に赤きたすきの乙女は見ゆれど二人の姿は影もなく、只村の豪農杉村に美しき女子一人ふへたりとか、さては野末の破屋も黄金の花に輝く

べく、醜き夫に美しき妻の冊きて誠の楽みや見出しならん、只杉の梢を吹き拂ふ秋風のみ音騒し。

雪中松

藏田常子

一

出羽の山形と云へば水清く山青く温和の人氣も自然に伴ふ靜てあらう南方には千歳山をひかへて居る、此の山、昔し藤原の實方卿が陸奥の國に謫せられて、暫くが程を假り住ひ、詠歎に粧ふ閑日月、時しも紛ひ名づけある阿古屋姫、焦れ慕ふてはるぐ\と此山奥に訪れ來て、あしたには殘れる月の影に覺め、夕べには草の枕の露に臥す、まぼろしの此世の契り淺くとも、情けは深き碧色、千歳の世迄も變るまじ、

北の片ほとりに藥師河原あり、遙かに東を見渡せば馬見ヶ崎の松緑々として操を變へぬ山より流れ來たる水一度全市内に溢るゝ時はノアの洪水にも異ならぬ有様、今をさる十年前堤防を築かれた、高さ十丈、仰げば壯觀百里の長堤、

堤防の西半面は千歳公園と云ふて藥師堂のある處。松や櫻の樹木鬱蒼と生ひ茂り、御堂の側の古池に滴る雫の聲聞けば秋の夜更けてさめぐ\と世の鳴く佳人の血の涙、

此公園内に西行法師の住んだ様な風流の團子屋がある、藥師詣でに來た人は此所に立寄るが常てある、團子の風味の好いこと増して、此家に一人の美人が居る芳紀二八か二九の年、平家の落人維盛卿の其れならで、過ぎつる春の頃、物珍らしく草中に綺にある様な姫君の御入りと、噂つぽい義太夫を語るもあれば、焦れて通はゞ千里も一里と近村の若物等の溜息、或は時に軍人やら兵隊やら、酔ふては枕す美人の膝極めては握る天下の權、何も彼も此美人には憂ひの種、此美人何ぞ元を訪はゞ貴い身の上、羽前の米澤を去る十五里、北越の國境に小國と云ふ三萬石の城下がある、其城主に松原男之進と云ふ小大名があつた、之れぞ此美人の祖父てある、此美人名は照子と云ふ祖父代迄は三萬石に鎭として賢君明君といつて侍かれた身も、男之進の沒後新に家を嗣いだ此娘の父に當る子爵松原眞元はやんごとなき身に生れながら、世の零落を排して奮然笈を東都に荷ひ安井息軒先生の門弟となられた、天は非凡の才を捨てず眞元二十七の折り某國の警部長を勤められた當時或る華族より駒子と云ふ室を迎へられたが不幸十年の昔娘照子を殘して世を去られた、子爵は最愛の妻に別れて未た涙の乾かぬ間に、遠く陸前の仙臺に赴任された、書記官より知事、貴族員と功勞多かりし身も人生は定め無し、去年の夏、胃癌の爲め遂に黄泉の客となられた、殘るは繼母のお仙、此女一時は仙臺に婦名を博したる有明樓の小仙とて子爵が書記官を勤められし頃、旅寐の夢の淋しさにお忍び辿きも小仙が許、不圖した事から縁となり切るに切られぬ孫の蔓やかて我宿の手活の花、

至誠を國家に盡したる子爵、一家を顧るの暇なかりしならん、別けて官員の身は果敢なきもの、死後は僅かの恩給と保險金とを頼みに細き煙を吾妻山の麓。羽前の米澤に立てゝ居る、

養子駿之助は二十五の若盛り。當時法科大學の學生。明年卒業の曉はあつぱれ養父の素志を貫かんと望み居る身ゝ繼母の惡事より一家の亂れ、性根は多情の藝者故、養子駿之助に横戀慕、片腹痛き事さへありしと世間の人の噂さもまんざら虚てはあるまい、其れさへ憎き所爲なるに娘照子を邪魔物としての無慚な仕打出て行けがしの打擲照子はそつと家を出てゝ亡き父母が位牌を守りつゝ。遠き山形へ獨り旅、明け暮れ忘れぬ孔

母が許へ訪問た、小さき藁屋の詫び住ひ、昔しの愛の湧き出てゝ十有餘年の離別の夢今更破れし思ひである、照子は乳母に别れてより意地惡き繼母に責られて泣くに泣かれぬ辛らさを思へば羽生の小屋の其中も玉の臺に勝るべし手馴ぬ業の赤襷丸める團子も愛らしい之も乳母への手傳ひと思へば一層疎勝氣に見ゆる

二

わび人は月日の數ぞ知られける明け暮れ空を獨り眺めてと昔しの人の詠まれし如く照子は獨り茫然と山の彼方を眺めし折り、川のほとりに冴へたる聲て

遠く離れて互に辛抱
　あひるじやなけれと、みずに居る

一層聲を張り上げて

離れ〳〵のあの雲見やれ
　末へにや一つになるわいな

オヤお竹さんと聲かけたお竹は姐樣被りて、裾を高く引き揚げて米磨ぎに餘念ない。照子は又も「お竹さん、一寸お竹さん」お竹は貌を振り上げて「アテ嫌やた、お照さん聞いたんべい耻しいなあ、ほんに」照子は思ひやりの涼しき目元て「何に耻しい事はあるもんか、ほんにお前さんは見かけに寄らぬ意氣な人だと感心したのよ」玆に二人が同情の絲が結ばれし初めてある、お竹と云ふは團子屋の隣りなる餚屋の女中てある之も何にやら可愛相な身の上「お照さん貴孃が妾の身の上を知つても居なさらなかんべい妾あ苦勞も難儀もして見たよマア〳〵一通聞かしやい、どつこい」と立ち上りて照子が側にすり寄つて打明け語りも可愛らしい「お照さん、ほんに妾の樣な因果なものはあるまいよ、天道樣も見捨てゝ下さつたに違いない妾と云ふ身は生れぬ前きに何な惡い事をしたんべいよ、父さん母さんにも幼い時に死に别れ、叔父さんに育てられて妾が十六の春、隣り村の權兵衛と云ふ立派な百姓に貰はれ姑が死んでから妾の亭主の權次と云ふは好人物は通り拔けてのお人善し。夫婦中も宜かつたけれど妾が姙娠した時に同村の若い衆が呑み譟とやらて料理屋へ行つて初めて女郎と云ふものを見たとの事、其時分から親しくなつて遂には財產も何も無くして仕舞ひ女郎と二人イ駈け落ちをして今は秋田の横手とやらて暮して居ると云ふ事を風の便りに聞いた時妾が胸は一ぱいになつてお飯が支いて食べられなかつた、あんな馬鹿者は思ふまいとしても迚も忘れぬものがあるんだもの……妾あ每日あ丶り泣き「去年の秋生んだ可愛い男の兒があるんだもの」と筒袖を貌に當てゝすの兒の事を願懸けてするにや母子で暮す樣、神樣惠んで下されと祈らぬ日はないんだよ、昨日藥師樣に來た子は妾の兒に宜く似て妾あたまらなくて抱かして貰つて、乳を呑まして見たり、頰摺りをして見たり、ほんに離し度くない樣になつて。自分の兒と思つて權散權散と云つたわい、其兒母人が側に居て何んと思つて見たんべい、妾あ他人の子やら我子やら分別が出來なかつた、其晚は夢に坊の事斗り見へて丸〳〵と肥へた手足や、にこ〳〵と笑ふ貌やら、見た時は嬉しくてたまらなかつたが、醒めてから妾が泣いて〳〵大泣きしたんだ」と又思ひ出しては淚を浮かべた、世は不如意とは云ふものゝお竹の夫が律義て今も居つたなら土藏の三棟四棟の世話女房、腰のほとりに鍵下げて無邪氣な農夫の主婦さん。今年の刈り入れは濟うムんした、オヤお酒迄下さつてほんに難有いと小作人に賞めらるゝ身も愚な夫の罪惡で罪なき妻子が泣く樣なさても無情な世の中だ、

三

お孃樣何を考へて居らしやる又何かお考へ遊ばすてしよう、そう考へて

斗りいらしては第一お躰の毒ですほんにお優しい内氣な方だから、若しや御病氣にてもおなり遊ばしたら此乳母が何んと致しましよう、少しはお氣晴らしても遊ばす樣に山にてもお出遊ばせくよ〳〵なさらずとお好きなものでも在らせられたら御遠慮なく仰りませ」、と心付く愛の温さ、

昔しを思へば三萬石の姫君、小國の山の風をも厭ひ、纖な廻る荒川の瀬の楽末への露にも當てじと育てられた照子、五才の時生みの母に死に別れ、乳母を頼みに思ひしも。卑しき繼母の邪見より乳母のお米は追ひ出され、照子は泣いて、泣いて、泣き明かしたるは幾度か、折ふしは氷の刄で切らるゝ思ひ其れにしても父君の世に在る時は陰になりひなたになりての御教訓もあつたのに又も父君に死に別れて照子は最早暗闇の谷へ突き落された心地、何故に此樣な因果な身に生れ遊ばした事やなとつく〴〵と往き來し方を考へて照子の貌を見詰めて居つた「乳母や心配おしてないよ、妾は此世に望みの無い身、早く父樣や母樣のお側へ行くのが何よりの樂のしみじや、母樣はあの世の樂園でどんなに妾を懸いていらしやらう、美しい花も久土に咲いて居るだらう早く行き度くてならぬ樣だ」乳母は悲しき涙を呑み込て「お嬢樣何を仰ります、貴孃は苟も松平樣の姫君じやありませんか、父樣は世に知られた敏腕家、母樣は貞烈な方と今の世迄も云はれていらしやる、其娘として其樣なお弱い御氣性嘸御兩親はあの世で歎いていらしやりましよう、何んで其樣な女々しくじい御心誰にお似遊ばした、此乳母がお幼い時分から抱き上げ申て。寐ても起きても貴孃を立派な堅固な方にしたいと思ふて居りまする、そうでなければ中々あの松原家を抑ゆる事は叶ひません、妾の願ひは夫れ斗りでムりまする、情けない此米がお育て申た甲斐のないモウモウ云ふて下さるな、」と叱かり付けては見たものゝ可愛さが彌増して泣くに泣かれぬ沒る姫、照子が無意の其姿、見れば見る程哀しい、生みの母親に生き寫し實にや浮榮の雨に惱みし風情である、乳母や考いてお呉れ」と日頃の煩悶、直入殿之助と繼母との關係を打明けては又ほろりと落す一ト雫、乳母が憤慨に堪へ得ぬ樣子、「ほんにお可愛相でムります、其内には何んとか御運も開けましよう、妾も色々と手懸りをして居りました、若樣、あの殿之助樣に限つてあんな方ではあるまいと信じては居りましたけれど男と云ふは弱い物で情に懸けては脆いもので、女と申は悦いものでムります、もしや世間で云ふ通りあれが眞實でムりましたら何と云ふ情けない方か、先殿樣はあれ程に可愛かつていらしたのに話る處はあのお仙の爲めに惡弄されなさつたに違いない、エゝあの毒婦、昔しからお家に對して惡事を働いて居りまする事、斯う申したら定めし亡き御父樣をお怨みなさりましよけれど、殿樣だとてあのお好ててはいらしやりませんでした、御心の中では密かに泣いていらしたに相違ムりません、一時のお過失は後の世迄の鐵の塊となりました、元を申しますればあの女をお屋敷にお入れになる時も隨分昔の家來共などが不同意を致しましたけれど、中々お仙は承知しませんで殿樣の御名譽に關する迄の双物さんまい、やら、何やら大騷き、旦那樣は世間への外聞も在らせらるゝ御役柄據なくお入れになりました、ほんにあの女は並大躰の畜生とも違ひまして、海に千年、川に千年と云ふ獸類でムります故に法律などゝ云ふ樣な六ケ敷い小理屈を識つて居ります者で畜妾の身では一生は通されぬものと思ひましたてしよう或る出入の辯護士を手に入れまして遂々御本妻の籍に入りました、何と云ふ情けない事になりましたらう、ほんに思ひ出しまする、奥樣が臨終のお枕に妾をお呼びになりまして、貴孃樣を指さしなされて此娘には立派な良人を持たせてお呉れ夫れ計りが願ひであると拜まぬ斗りに仰りました、アゝあの御言葉も水の泡と消へ失せて仕舞た、

妾は何んとあの世で奥様に御詫びを申しましよう」と昔しを想ひ今を憂ひ忍ぶ涙をほろ〳〵と双の袂に受けためて照子を思ふ眞實心、流石は忠義のお米とて嘉はれし心の 光り暗の世道も羽生の小屋にほのめいて居る、

四

時は霜月十六日の夜あたり森として人無く、秋風も松の 葉越しにヒウ〳〵と喧さへ淋しき其折りにお照は獨りほの暗き洋燈の下、裁縫に餘念なき様子、折柄頼む〳〵と男の聲、お照は一層身が振ひ「はい誰様でいらしやります、あの今夜お伯母さんは近在へ餅振舞に招かれまして行きましたから何な御用か云ひ置いて戴きましよう」男は左も得意の調子、覺へずガタリと音をさせ「イヤお照さん別人でない何時も來て居る、岩村だよ、陸軍少佐だよ、潔白な岩村讓だよ、安心して居給へ」、と暇乞に出掛けた歸途ならん略服、略帽のまゝ三尺の劒を腰に下げてズカ〳〵と入つて來た「お照さん又閉き込んで居るのか困つたれー、ヨシ一ツ貴孃の憂ひを取り去る術が出來た、今後は心もさつぱりとなさりましよう、眞に思ひやられる、其れ程嫌やがられて居ると知りながら何故思ひ切る事は出來ぬだらう弱虫少佐、泣き男と嘲つて下さるな、貴孃に懸けては願くムんしよう、けれとも日清戰爭の時は遼東の野を切り捕つた、北清の際に太沽の砲臺を突き落した、だが僕には一つ落されぬものがある、今夜こそ決心の丸を僕に抱いて來たのです」と側にあるビールを取り出し傾け盡す三本のビール、カツト赤色を帶びて「お照様悦ばせる事は外でもない僕が明朝此日本を去つてあの雪降る露西亞に參ります、何卒是迄の神聖の愛を余ふして兄妹とも思つて下さい、斯う申たら貴孃が心の中で顔もほろゝな挨拶をしたくいらしやるは山々だらうけれど兄妹と云ふたら左程嫌な事もあるまい、其れとも又日光きて宜いと云つて說けどうせ明朝からは居ないもの心善く送つて遣らうなと、思つて居らるゝかも知れぬ、ほんに男と云ふは馬鹿な者です、自分ながら馬鹿だと云ふ事は識らぬでもない、古來一婦人の爲めに一身を誤り方向を誤つた男も澤山ある、百夜の契り深草の少將殿を振り捨てた小野の小町、或はロードバイロンを歎いたマダムなど隨分無慘な事を致しました、思へばシベル灣の霧の雨はバイロン卿が戀の情けの間へてある、我が愛も恐らくはシベリヤの野にさまよふて氷結ともなりましよう、僕が此上は貴孃が理想の友として遠く露都のモスカウに孤衾を濡らして居りましよう、花咲く春の鳥の音も、秋の夜長に照る月も貴孃と思ふて居りましよう、萬一戰爭でもあつたなら討死は覺悟の前、其時は少しは可愛と思つて下さるだらう、それとも又死んで宜い氣味た、虫の好かぬ男早や死んで安心たと思はるゝかも知れぬ、チーお照さん」とうるみの目元で照子を見上げた見れば見る程神々しい、「チーお照さん少しは思ひやつて呉れても宜さ相なもの」と燈火に背いて男泣き、恨み怨らみの數々を比べ立つるも憐れなる、照子は悲しさを胸に秘し盡りし聲を勵まして「岩村さん妾は何んとお答ひ申て宜しいやら勿躰ない御友情必ず忘れは致しませぬ、御考へ遊ばせ、貴郎は軍人じやありませんか、家國の爲めに葬らるゝは御本分じやありませんか、此度參謀本部よりの御命令で露國へ御出と聞いた時は嬉しくて嬉しくて嬉し涙がこぼれました、御出世は目に見へて居りまする、もしや戰爭がありましたら隨分御功名遊ばしませ、斯う申たらとんなにかお氣にも障りましようけれど、妾の氣性として迚も其様な女々〳〵しい事は出來ませぬ、泣いて悲しんで其れを御滿足に思召ば何程泣いても上げましよう、けれども假りにも兄妹と誓つた上は貴郎が男氣を挫くに忍びません、勾當の内侍は離別を惜しんで義貞を誤らせました、靜は笑ふて九郎判官義經が鎧の紐な

結びました眞の佳人の直情は男氣の含んだものでありましよう。早く御出立遊ばしませ、他日お歸りと聞く時は、長崎の港か北海道か何れへなりとも出迎へて懷き御顏を拜しましよう、情ないお照と恨んでは下さりますな、露をだに厭ふ大和の姫百合を憐れと思ふて下さりませ」直に默して忍び泣き聞こゆるものはゴゥ／＼と藥師河原の水の音、愛別情は迫る岩村少佐。戀と云ひ難し無量の涙、丈夫木石にあらず胸裂くる計り密かに覺悟す最後の言葉、「お照さん隨分御機嫌宜う、寒くもなるから厭ひ給へ、「さよなら」立ち出てゝ外にほつと恨みの溜息。秋の夜更し月影に惜しき名殘りをはら／＼と

あはれや、百萬の敵を破る勇將も。佳人を落すの男無き乎、理想の戀、おろしやの雪、積り／＼て幾千丈、遠き雲井に達すべし

五

雁や旅寐の人を憐れまばホームの秋の夕暮れに鳴け、東京は本郷森川町の下宿屋の奥二階に茫然と外を眺むる若紳士あり、手に洋本を持ちながら何にやら思案の體、急に何か思ひ出したらしい、手に持つ洋本をハタと投げて腕をこまぬき、頭をたれ、やがては獨り言、「アゝ詰らん／＼人生は僅か五十年、區々たる名利に縛られて何時世に出つる時あらう。幸に世に出てゝ職務の犧牲となるとても何の樂しき事あらう、汚れた俗務の棚職業、其れ式に滿足して一生を終へんか、糊口を凌くに足るならば乞食となりても同然、アゝ金錢窮、何物ぞ盜賊しても得らるべし、眞の人生の價値を識る人幾人かある、詰らん／＼顧つて此身を想へ、幼き時父母へ別れ人生の沙漠にさまよふ折り松原の養父に拾はれて慈愛の露に濕らされ、暖き床の間に撫子の眺めは若し我れ彼の時救はれずは路頭に迷ひし乞食も同然、アゝなぞて恩義は忘れましよう、今我が人となりし皆養父の賜た、彼れを思ひ此を思ふと我腸もちぎれる樣た、養父が臨終に鋭き目付きに涙を浮べて照子が孤獨となるからは側る者は外に無い何卒中睦しくいたして呉れと我が手をシカと握られた時の言葉今も耳の底にある樣た、あの御遺言は決して反古には致しませぬ、照子は未來の我妻と淀るゝ斗りの情けをかけてあれ程愛して居つたのに何たる忘想の薄弱な事、如何なる惡覺の誘ひか、此手紙、繼母が細々と認めた手紙。見れば胸も湧き返る樣た、照子は情夫と携へて生家さへ脫走したと云ふ事た、何と云ふ馬鹿者になつたらう、あれ程教育もあり、宗教も信じて居る、未來の我妻と理想とを畫いて居つたのも何の役に立つものか、彼の女は常に口口にして居つた。終り迄忍ぶものは幸なりと。皆彼の言は僞善であつた、勿論繼母は惡人である、罪人である。照子が迫害に會ふ事は充分承知して居つた、幽慾らからうとは思つて居つた、だか善を以て惡に勝つは宗教者の本分なるに、あの藝者風情の繼母にも劣つた其の振舞、墮落するも程がある、情夫は何と云ふ男たらう、何處の何國にさまよふて居るたらう、奧州の果、仙臺くんだり不義の戀の手を握り詰めておめ／＼と此世に永らう面憎さ、エ、あの照子は人てなし妻て無し、穢らいしい、惡覺た、エ、此寫眞假令人間の皮を被て居るとも心は畜生た、此畜生の寫眞、見るのも穢た、有れば兎角思ひ出す事ぞ燒き捨てゝ仕舞と明け暮れ眺めて摘んだ花の樣な月の樣な清い佳人の面影を寸斷／＼に引き裂いて傍の火鉢にパツと投け入れた、二十有餘年が今日迄も夫と呼び妻と呼び焦れ慕ふた其愛はあはれ一篇の灰と消へ失せた、又も雄之助は決心の體「僕は松原家を離緣して此汚名を洗ぐに如くはなし汚れた女を妻として社會に立つ事は出來ようか、社會はともあれ良心に對して濟まぬアゝ斷然思ひ切つて仕舞、養父の恩義は決して忘れぬ、社會何と云ふか輕薄と云はん殘酷と云はん、良心に照して愧つるなし、エ、思ひ切つた、思ひ切つた」、茲に愈々決心の城を築いた、時しも筋雁悲々と鳴き

雲井をさして行く、駿之助は机にもたれてうたゝ寐の姿、稍々ありて目を醒まし、「アヽ今のは正夢かあり〳〵と照子が居た」出羽の奥山形の霧西河原のほとり忠義のお米が團子屋にひたすら夫の行末へを祈る姿の愛しさ。

小夜嵐

秋好女

上

「ちよいと伺ひます、あのこちら様が大月様のお宅で御座いますか」と小夜ふけし軒におとなふ女の聲、家には五十に近き老婢のおたけが中惱の眼に、雑巾ぬひかけの手をやめて、オヤ今頃どなただらう、私や三年もこのお家に御奉公したが、夜になつてお女中が入らしつたためしはなし、旦那様は今時の若いに似合はぬおえらいから、おつゝしみの深い方と常平常、感心しぬいて居るのに、それではやつぱり、おなじみがあるのかしら、とらちなき推察、外には再びやさしき聲のしかも稍音だかうおとなふに、奥なる牧師はきゝつけて、おたけは居らぬか、といひつゝも、客なる人、もしや、もしや、靜子にてはあらぬか。

ヘイ〳〵こちらが大月で御座います、唯今すぐ戸を明けてさし上げますと、お竹年に似合はぬそゝくさと、あわたゞしう格子戸明くれば、夜目にもしろき、麗女の姿、持ちいでたるランプの光に其人の中面白う、白う反射して、はやくもぬぎし東コート右手に、優にきなかしたる黒縮緬の品よき奥様、水したゝるやうの大丸髷に珊瑚の珠もかゞやきぬ。ふだんに能うきく、これが天の使かともおたけの妄想さすがになかしう、貴き佳人の前、過失あらじと、眼ひくう疊へ手をすりつけて、其名と姓をとへば、うつくしき人の懐より取りいだしたる名刺、うつくしう小さく　下田千代子　といへるをわたすに、下女は取次て奥へ其よしかたれば、わかき牧師は頭かたむけて、幾度となくくりかへしぬ。

きよろ〳〵といぶかしげに、うちまもるおたけを其儘、自ら出むかへば、夜目にもしろき戀人に瓜二つ、唯こなたは年やゝたけて、靜子よりは丈高く、瘠せぎすの、いはずとしれた姉様ならん、それとさとりし牧師は胸の内俄にあやしう、顔おのずから火のやうになりつ。上野の森にがうとひゞく鐘、小夜ふけし都大路に音すごし、例の辻賣が、よき聲して、花のたよりといふも手に取るやう次第に近う、またとなく、よろづの音、眠りにしづ〳〵入らんとするを、我のみはかくも全身の血わきかへるならん、神よ我が心を沈め給へと默禱ひそかに奉りし甲斐もなく、いろなき口唇もふるへがちなり。客はおとなしやかに、物なれし應對ぶり。

「あなた様が大月様で入らつしやいますか、夜分に上がりまして、とんだお邪間を申上まする、あの私は靜子の姉で御座いますの、どうぞお見知りおかれまするやう……」

「あゝ左様でゐらつしやいますか、私は大月、して今晩おいでになつたのは、どういふ次第で？」

「私が今晩實家の父や母に内々て上がりましたのは外でも御座いませんが、折いつてあなた様のお袖にすがり、お願ひ申したい事が御座いましてれ、あがつて御座います、靜子はよほど六づかしいので御座いますよ」。

かれて其人病床にありとはきゝぬ、一月の餘も其人のきよく愛らしき姿、教會内にも見へれば、音樂學校へ通學の様子もなく、見舞にゆきたき願切なりしも、其人の父母君、唯我が教をいみきらひ給ふがゆゑ、却て我がゆく爲うれひをまさしむるに忍びず、忍び〳〵てこのかなしき一月を

すごしけるに、さては其人、あつき病に離れんとするか、牧師はそゞろ歎せまりぬ。

「御病氣は、ど…ど…どんな御樣子で」

中

「加減がよくないからと、實家から私迎をうけまして參りましたところ、情けないじや御座いませんか、あなた肺が惡いそうで御座いましてれ、それに急性だとか申しまするから、お醫者樣も餘程氣をつけないとあぶないと仰つしやいますので、私、たつた一人の妹で御座いますれ、助けてやりたいとおもひまして、昨晩も皆がれましてから、力をつけてやりましたら、あなた、靜がれ、ほろ〳〵と泣きますの、姉さんまことに私はすみませぬ、私は惡いをおもつて居るのですから、と申しますから、どんな惡い事を、おまへに限つて、そんな事はあるまい、私は信者でないから知らないが、おまへは罪とか惡に就て、餘計な解釋をしてゐるんではないかと申しましたられ、お恥かしい次第で御座いますが、あの、あなた」

といひさして客の顔は赤らみぬ。

あはれ可憐の君よ、君に一言半句我がくるしき戀の物語はせざりしに、心より心の通ひて、我をこひしとおぼすか、我が心をあはれとおぼすか、くるしき病床に我が名をいだいて、君問へつゝあはすか、知らざりし、知らざりし、よしやこの戀、神よりはた人より罰せらるゝとも、我は悔いじ我は泣かじ、うつくしき靜子よ、やさしき君よ、君が肉躰ほろぶべくんば、我もまたこの肉すてゝんに惜しからじ、靈はとこしへの世にと、いくたの妄想わきいてられつ、まさしう、まさしう、靜子のおもひ知りたらんやう、おもへるに、客はうつぶきがちにつゝましげに再び口をひらきて。

「靜がれ、申しまするには、教會の牧師樣はほんとに御親切なお方、だから姉さん伺つてと、泣きながら申しますの、」

「な…なにをおたづねなさるのです、信者は我が子も同然、私が靜子さんの苦痛の幾分を助けてあげられますれば、幸な次第早くおつしやい、な…なにをいはれましたの」

千代子お物語は大月牧師にいたましき惑をあたへぬ靜子は彼を父の如く兄の如くたよらんとせり、靜子はくるしき戀の煩悶を、牧師の袖にすがりていやされん事を願ひぬ靜子は同じ教會の、小峯靈雄といへるをおもひそめ、戀ひそめて、夢のやうなるれがひをいだきけるがそをまた非常に罪の如く、惡の如く、自ら身をいましめ、さいなみ、神にかけつる祈願は心の底より靈雄の姿の消へまするやう、神樣のまへにいかゝする事が出來ませぬが、あの尊い牧師樣が私の心をおさとりにならぬやうと、苦痛の數々、新らしきたゝかひは小さき心に干戈を交へて、そゞろ涙催さるゝゆふべもありしを、ものがたき父母より突然、他家へ結婚の申しわたし、おどろきいなむ靜子より、父の怒の甚しう、日本には立派な宗旨がいくらもある、爾後、教會へなど出入してはならぬ、とおもはぬ壓制、いやがるをば、ひとへに教の罪に歸せり。

「ヘア…そういふわけですか靜子さんにはお氣の毒なれど、あの小峯靈雄、小峯靈雄といふ男には國にれ、結婚の婦人が立派にある身、誠にお氣の毒な次第なれど、あれが大學を卒業すると同時に、結婚の都合になつて居る…あなたから靜子樣にようく、いつて下さい、小峯靈雄には妻があります、既に〳〵定まつた婦人があると…」

客はうれしき使命を病床につたへんと、慈悲深き牧師のもとをたづれしに、おもひきやこの答、これも無理ならぬ事、唯可愛相なは妹の身の上と、涙ながらいてゆく後姿、靜子に瓜二つ、牧師はくるしきおもひにか

られて、ま……ま……まつて、狂氣の如くかけいだせしが、折りから小夜嵐、つよう吹きて、庭の落葉のかさこそといふも寂しう、其人が乘りゆく車の音、いたづらに、ひゞき渡りぬ。

下

靜子は其まゝながき／＼眠に入りぬ。

わかき牧師が名聲は都門の宗敎界にいよ／＼高く、生神樣のやう、老いたる信徒のあがめ尊めば、青年黨は熱あり血あるの彼が說敎を、またなきものにおもひて、西のはてよりも東のはてよりも集へば、さしも廣き會堂の、せまきまでに善男善女の加はりて、失意の人、孤獨の人、罪ある人、涙ある人、愚なるも、不具なるも、皆そがもとにひざまづきて、偉大なる慰藉をぞうくなる、妻をと人のいへば、我が事業はこれ妻なりと、決心なか／＼動しがたく、若きはこれをばほめたゝへぬ。牧師は數多の青年等が中にわけても小峯輝雄と親交を結びて弟の如くしたしからんとする折もあり、また彼を怖れおのゝきて、一刻も彼よりかくれん事を欲する折もあり、滔々と救世の道を說く講壇の上より、ゆくりなくも眼、其人の姿におよべば、彼は震ひわなゝきて跪れんとする事數度。然かも信者は彼が蒼白なる面を見て、人の心のひく、信仰の薄きをうれふるならんと、其いぶかしき處置は、いよ／＼尊敬をまさしめぬ。かくて春去り、夏ゆき、秋またゆいて、世は再び落葉かきばの音淋しく、籬の菊のかれ／＼に、下田千代子がおとづれの夜もかゝりけるよと、牧師は胸の中かきむしらるゝやうにて、捧ぐる祈禱の、いとかなしげなりけるが、門にこゑあり、あゝ我が命は終りぬとさながら天よりの宣告ありつらんやう、わなゝくを、客はそれとも知らず、心やすだてのまゝ、障子さしひらき、オゝ君こゝにか。

「小峯君、ゆるし給へ、何事もゆるし給へ、僕、僕は非常の罪人だ、まあこの劍で僕をな、刺してくれ、殺してくれ、わ……わけはこれと」、しるしゝは五尺にも餘るべし、見る／＼輝雄が顔色は變りぬ、知らざりき、知らざりき、今ぞあり／＼と、胸にうかぶは靜子が面影、白くふくやかなる頰に、桃色暈せし美顔にほひ濃く、處女がはじらひ深し、髪はあげまきに白のリボンなまめしからず、どこまでも／＼品格備りたる人の、バヰオリンもちし手振、それよ天使とのさゝやき、耳につたひ傳はりて、我も惡くからぬおもひし君、妻もたばあのやうなのをと、妄想あやしう、夢にまでみし君の、さては、我を戀しとて、病の床にうち沈みしか、知らざりき、知らざりき、惡くきは月岡、劍にて刺すは易し殺すは安し、我は外なる復讐なと胸の憤怒のすさまじかりしが、どこやがに奧妙の御聲やさしう、主の御ことばうちきかされて、彼は泣き伏しぬ、たゞ泣きになきぬ。六疊の室、淨とやなるらん、祥とやなるらん。

輝雄はつとたちて、劍を取りぬ、月岡牧師は最後の祈禱をさゝげつゝ、死の宣告をまつごとし、彼は[illegible]僕めがけて刺せり、かくて牧師が手を握りて、さゝぐるいのりの、これはうつくしき願ひなりき。

＊　＊　＊　＊

谷中の墓地、月白うてらして、松風の音とこしへにすむあたり、宗敎界に其名たかき月岡牧師は夜半ふくるまで去りもやらず、たゝずむを、世の人ありがたき事にいひ傳へて、譽は日にたかくぞまさりゆく。しかも苦痛は健康をいたくおとろへしめぬ、小峯輝雄、未生めとらぬの決心かたく、卒業の曉は、ひろき世界に船出すべしとや、かゝる人よりぞ血ある熱あるの文字傳へらるらめ。

靜子か在天の靈、ほゝゑみて戀人か、成功をいのるらん、しかも牧師が罪とは、これは姉なる千代子が述懐何事もらのむづかしき世なりけり。

嵐のひとよ

ひさかた

頃は秋の末つかた露は尾花の末に泣く萩の下葉になく虫も弱るか聲のよなく〱に遠ざかりゆく哀れさを身にしみ〲と思ひ入りてさらぬだに病ある身の寢覺がちなる露の床今宵は殊に風立ちて木の葉ちりしく音のさわがしきに夜更くるまても得れむらず越し方を忍びゆく末を思ひ詫びては樂み思ひては泣きはては浮身をうらみ世を恨みて窓に狂ふ嵐と共にもだえにもだゆる乙女あり

玆は上州桐生町軒を連ぬる數多の機屋のうち殊に目立ちし一棟濱田屋の工女部屋なり二三十人にもあまる工女は晝の疲れに前後も知らず軒の聲高きうちに幾度か寢がへり打ちつ折々吐息もらせる樣なりし一人の工女ふと蹲りに疲れたる同じ工女のお村の起き直りさし入る月影に背きて絶えぬ思ひに悲む姿見やりて思はず胸の塞がりたらむけしき慰めやらむとやをら起き上り「お村さん寢られないの妾しも今夜は何だか目が冴えて仕様がない話さうぢやありませんか明けるまで」いと活潑なる物の云ひぶりこはお村につげる玆の上席工女なりお村はあわてゝ涙を拭ひ青白き面をこなたに向けて「どうもれ寢られないの然しよるもひるも横になつてるのだもの無理はないさそれにはいろんな事を亦思ひ出してれ詮ない事とは知ながらさ然しお秋さんお前さんは思ふ事もなし晝は機場へ出ておいてだのに何故眠られないの可笑しいれ「何妾しは妾てれまた思ふ事が有つてさ、つい何だか目が冴えて仕舞つたのだよと稍萎れて云へば「オヤお前さんにも思ふ事があるのそれが心配で寢られないのかい人事ぢやない何うしたの どんな心配なの お聞かせよえお秋さん」お秋は意外の面持「アラお村さん妾しの思ふ事つてのはれそんな眞面目なのぢやあないよ、云ひましやうかあの此月末のおまつりに着るが好つてお内儀さんが下すつたのソラお前も持ておいてのあの大名縞さあれの最少し派いのを慶がれそれに占る帶がないのさだから最前からいろ〱考てたんだよお前のあの白い友禪の帶れあんなのが有つたらなんて下らない事を考へてつい目が冴えて了つたの」またも何をか思ひ出てゝ伏目に成たるお村の顏覗きこみ「どうですお村さん妾しの心配は大したものでしやうネ、、」氣樂げなるお秋の言葉にお村はほつと息つきて「あゝ羨やましいれお秋さんお前さんは氣樂だ事妾しも前はそんなだつたが、あゝ最一度そんな氣になつて見たいよ何に妾だつてお父さんやお母さんにあんな事がなきやあまだ〱そんなで居るのにあゝ〱思へば思ふ程妾しは不幸な身の上だよ、お秋さん察しておくれ眞實に妾しは不幸なと云ひかけていろ〱と思はずも涙は膝にこぼれたり、病み疲れたる身を慰さめむとてつとめて快活をよそほひしお秋も思はずホロリとして慰むる言葉も頓には出てず沈とお村の顏を眺むれば涙に顫ふ聲顫しく「ほんにお秋さん世の中に人は多いけれど妾しの樣な不幸な者が亦と有うか、もう〱妾は此世がいやになつた腕が好いの仕事が早いのとほめられて嬉しかつたのは昔の事こ んな心細ひ身になつてたつたひとり此世にふり殘されて何、何たのしみがあるものか、お秋さん妾しの病氣がよくなつたのでお内儀さん初め誰も〱も喜んで吳れる人ばかりだが妾しや泣いてるのだよ一人だけ泣いてるのだよ人目にや生きてる樣にも見えるだろうが心は疾くの昔お父さんやお母さんの傍に行つてるんだよ、此身體はれ只息をしてるばかりさと云ひさしてさしぐむ涙に言は切れたり、お秋はつとめて笑顏を讀り「お村さん知らないよ身體は有つても心は死んだお母さんやお父さんの傍だなんて氣味の惡い、それに病氣がよくなづたので涙く

なんてどうしたの全てそりやお氣狂ひの云ふ事だよ「氣違にもなろうさあゝ最う一層の事そうなりやあいゝのにね、そして少しの間でも此悲を忘れたい、妾しがこんなに思ひ出づめの泣きづめぢやあお母さんやお父さんが行く處へも行かれまいと思つて成だけ忘れようと思つてもれどうしても／＼忘れられないほんに思へば／＼妾しや不孝者だよ此世においての間はこんな所へ放れて仕舞つてるし後生を弔はなきやあならない時にはまたこんなに泣いてばつかり」お秋も今は絶えかねて袂にてそつと涙を拭ひ「無理はないよ親身の二親を一度に失くしたんだもの察して上るとも妾だつて十五の年に二親に別れて泣いて泣いて腹一杯泣いて來た勝たよ十分察して居るさ、けれどもお村さん人つてものはね自分が悲しい苦いの日に逢ふとね世の中に不幸な者は我ひとりと云ふ樣な思ひがするさけれども年を取つてよく世間を見て御覧世の中ば廣いものまだ／＼自分より不幸な者があるから妾しやあ二親に別れてから恰度八年此頃やう／＼これ丈けの事が悟れた實を云やあれお前さんより妾しの方が早く放れて居るから心細さも妾しの方が一しほさ「けれども秋さんお前さんは傍にゐて十分に介抱が出來てそうして臨終までつききりでそして別れたんだろうイエお前はかりぢやない世間の親が無いつて云ふ人は皆そなんだよ、けれども、けれども妾ば、妾ばかりはね」こゑはいとゞ曇りきて不覺の涙は雨とも下るなり「お秋さん妾はね死目に逢はない處が、逢はない處がお母さんにもお父さんにも、ものゝ十年顔を見ないのだよ、わ、妾しが國を出てから十年の間こちらに沈として國へも歸らなかつたのは何故だとお思ひだ、お、お秋さん妾しはたつた一人の女の子でれそれは／＼可愛がられて育つたのだなら親戀しいのも人一倍逢ひたい見たいと思はない日は十年の間只の一日も無かつたよ、頼みば年に一度位暇のもらへない事も無いのに沈と辛抱して仕事に精を出したのは何の爲だとお思ひだ、皆んな末でお父さんやお母さんに樂をさせよう爲さ。二親に樂させるを樂みに苦を苦とも思はず自分の欲を押へて一心不亂に勉强してさお最う年期も勤め上げたし腕は桐生で職人と云はれる中へ這入つたから此秋には一本立になつて樂をさせますと云つて遣つた其手紙の着いたか着かないかに思ひもよらないあの大水で幼馴染の村の人も畑や岡の草木も戀しいなつかしい二親まで影も形もなく流れて了つたのぢやあないか、あの時三上山の上から家も畑もなくなつて只濁水が恐しい響で流れて居るのを見た時は涙も出なかつたよ」亦今更に荒涼たる當時の山野を追想して流るゝ涙は止らず

「思へば妾しは馬鹿だねえ、人の命つてものはこんな果敢ない物とも知らずいつまでも生きてお出での樣に末の事ばかり考へてひとり苦んで居たのだ、こんな事に成ると知たら、だ、誰が十年もこんな處へひとり放れてくるものかたとへ栗をかぢりても二親の傍に居るんだつた、そして一所に死ぬのだつた、こんなこんな世の中に一人殘されて何、何たのしみに生きて居られよう、お秋さん妾しやもう一層の事、妾やもう死、死んで」聲は次第に怪しう亂れて今は言もえつゞけず千古つきぬ恨の涙滾々とはてしも知らず打ち泣くなり、お秋も今はえも堪らず、共に絞るゝ四つの袖下る涙は落ちて聲あり

月も哀れを泣かむとか閉める雲の奥深く隱れ入りぬふけ行く夜の靜けさをひとり怒りの風すさましく猛りては行き狂ひては引返し或は高或は低く木草に撒し天にほえ揉みにもんで常闇の闇に叫べば虫はいつしか音を絶えて流るゝ水もをのゝくなり

今をかぎりの哀さ添ふ音に立てゝ梢放るゝ老葉の亂れ、あはれ亂れ／＼て末はいづこに朽つらむ

嵐と一時雨しぐれの雨のパラ／＼と窓をたゝけば雲にや迷ふ孤雁の聲答

ふるかと哀れなり
尋ありてお秋は乾度面を上げ涙を拂ひて死せるお如きお村に向ひ「お村さん、ぢやお前は死ぬる氣なんだねえ死んで仕舞いたいとお云ひだつたね」と言葉あらためて問ひ出づればお村は涙の袖もて顔を蔽ひながら「し、しにたくもなろうぢやないか妾しやみんな世の中には少つとも居たくないよ、いやだ〳〵「それは不可ないお村さん氣を落つけてねよく妾の云ふ事を聞いておくれ、年の上でお前さんに高慢な事云ふ樣だが人と云ふ者はね、此世に生れて好いかい天子樣の御恩で安らかに今日を過さしていたゞくからには何なりと一生の中に御國の爲になる事をして其御恩におむくいをしなけりやあならないものだよ、これが取も直さず人の務だつてよ、世の中にやあれ大きなお金を持てゝ五十年も六十年も生きて居ながら自分の望ばかり足して、これつぱかしも世の爲にならない奴もあるがね妾等は如何に貧乏人の賤しい者でもそんな人非人にやあなりたくない、まあこれは妾の量見だがねもしお前さん今死んでねお父さんやお母さんの傍へ行つた時貴君方が戀しかつたからやつと一人前になつた身體を我からすてゝ來ましたと云つたらそれはよく捨てゝ來たと親達は喜んで下さるかね、え、人の務も盡さないで親の跡を追つてくる樣な頬な孝行者だとはめて下さるかい」お村は泣けるか怒ぜるか身動きもせず、お秋は疲れたる工女の方を見返りしが皆夢安げに眠れる者のみ心安しと言葉を續けて「お前の兄さんが兵隊になつて戰に行つて到底命を落してお仕舞なすつた時お父さんやお母さんは昔ならこんな土百姓の子悴なぞ人の數にも這入なかつたものを御時節柄とは云ひながら御國の爲に命を捨てたとは何と云ふ幸福な奴であろうと云つていつも喜んでおいでだつたとお前さんいつか妾に話たてはないか、そんな心掛の親達を知つて居ながら情に動いてする事も打捨てて死んで仕舞いたいとはどういふ氣だ妾しは譯が分らないお前さんは常からよく落ついたどんな事があつても心の亂ないまごづかない人だと思つてたが今度はどうしたの、え、お村さん」此方は石佛の如く一語を發せず「お村さん何故返事をしない、ぢやあ矢張り死ぬる氣だね」お村は猶も言葉なしお秋は恨みの涙に聲も亂れて「お村さん餘りだよそりやあ餘りだよ妾しやお前が居なく成つたらどうして暮して行くと思つておくれだお前は死んで本望かも知らないが跡に殘つた妾の悲みも少しあ察しておくれ、そそれちやあお村さん餘り人情がなさすぎると云ふものだ妾しはお前をたつた一人の友達と思つて居るのにお前は何とも思つてお呉れぢやないの、あ、餘りだよそりやあ餘りだよ」お村の膝に手をかけて動し〳〵かき脫きしがハツと心づきて「お村さん笑つておくれてない今のはありやあ妾の愚痴さけれども先きに云つた事れ理屈つぽい事を云つてすまないけれどもあれ丈けは眞面目に聞いておくれよ後生だから親とも姉とも思つて居るお前さんの身を誤らせまいと思つて云つた心から底からの言葉なんだから、よく考へて見ておくれ、何の妾の身體位どうなつたつて構やあしないんだからお前さんにさせていゝ事なら跡で妾しにどんな悲みが殘ろうがどんな難氣がかゝらうが望んで居る事だもの望み通り死なして上げたいけれど、お死になさいつて云つて上げたいけれどそ、それぢや心實お前の爲にならない、妾しやお前の お父さんやお 母さんに彼んな事が有つて以來お前さんの身の上をどんなに心配したか知れやあしないよ惡い事は云はないから今度だけお願ひだから妾しの量見通りに成つて置いておくれよ、後生だから、え此通り拜むからね」友を思ふ厚き情の涙はお村が膝のあたり誠の色に輝きぬ
お村は身を起すよと見えたるがお秋が前に捨とふし其手を取りて「お秋さんよく云つてお呉れだよく諭しておくれだつた成程此まゝ死んでは親

達に申分けがないあゝ有難い嬉いよお前が無かつたらまた不幸を重ぬる處たつたあゝ悟つたよく分つた、お、お秋さん安心しておくれ最うこれからは二度と再びこんな心得違は仕無いからお秋さん眞實にお前の心切は忘れないよ一生妾しは忘れないよ」感谷まりて今は云ひ得ず只泣るゝ涙ぞ感謝の音にぞ流る、お秋は嬉くも亦いぢらしくて共に涙に咽ぶなり友が情に迷ひの雲もうち晴れて雨後の明月殘る方なく思ひすませばまた心の海に通ふ風もなし「お秋さん妾しやあ翌日から機場へ出るよ出てそして此間お内儀さんがお前達にやあ出來ないかと尋れておいでだつたあのソフ佛蘭西とかの織物れあれを二人でやつて見ようぢやないか是れが出來れば少さくして桐生のほまれ大きく見れば日本のほまれになるつて云つておいでだつた日本の譽れとは嬉しいぢやないか二人で腕を揮はうれ妾は親達の命のある中に孝行が出來なかつたからこれから先き御國の爲に成る事をしてせめてあの世で喜んで貰ふと思ふよ「おゝお村さんよく其氣に成つておくれたあゝ嬉しい「妾もお前の樣な友達が有ると思ふとどんなに嬉いか知れやしない」お村は面に初て笑を浮べぬ

今宵を語り明かすべく共に窓に立ては訪づれる雨は木々の上葉に名殘止めて跡なく風條露葉物さびたる夜半の色

仰げば廿三夜の月高く中空にかたぶきて光も寒しあゝ此月の御船にぞ我なつかしき父母はいまさむ、うらめしや天地とへだゝりて今はつてだに、あはれ憂き世

雨だれ

金田隆子

（上）

降りみふらずみ木枯まじり、うたてや名も時雨町の片ほとりに、荷車一つに足らぬ手道具をからげて、遷り住みしは、思へば三月の昔なり、若き心には命よりも惜しと思ひつる、縮緬の二枚重ね、今は亡き里の父が、大事の品を拂ひて求め下されたのを、實殘りの單笥の底より、夫の前へ取り出せば、珍うも嫣然と微笑まれて、すぐ風呂敷にくる／＼と包みて、家を出て玉ひしまゝ、何處へお持ち被爲し事ぞと聞くも心苦く、之より家の收入も怪き迄に少くなり、我身は如何にしのべども、幼き者のむづかり不憫しさに、長持單笥針箱果ては鏡臺まで拂ひ散らして、口をぬらせしも、思へば忘られぬ身の辛さなりかし、母様此樣な汚ない處いや嫁と、幼き者に泣かるゝと、馴れてはさまで慰とも思はずなりしも、はた今更の口惜さ遣る方も無さに、旦那様が、朝な夕なのご機嫌のむづかしさよ、目覺むれば今日如何にと心を傷め、夜は夜すがら明日を氣づかへ共甲斐ぞなき、日毎の御出勤に、朝はお早うと恐る／＼敷臺に兩手をつけば、怒ち額に青筋目に立ちて、早く歸らうと遅く來ようと、こつちの氣儘、そなたの世話はいらぬ、ひつ込めと叱り飛ばさるゝ、思へば羨ましいば向ふの婆さん、息子と孫の三人暮し息子は、朝はやぶれたる笠に星をいたゞき、天秤肩にし、芋子大根の聲勇ましく、家毎に之が一番鶏より響きわたれば、暖かき夢路破られて、もぐりこみたる夜具の中より、オゝ吉か早きよと、欠伸交りに洩るゝも無理ならぬぞかし、綿入重れて猶寒しとかこたるゝ昨日けふ、ぼろ襦袢一枚に、貴しめの手拭頬かぶり、汗しる流して一日いつぱい働き通し、夕は月踏む頃の歸りに夢ゆめ居酒屋の、のれんに髪の毛一本觸れた事なく、其はそれは無類の孝行者、只今歸りましたと草鞋ゝ脱けば、盲の婆さん外口迄はい出て、さぞ／＼疲れましたろといたはれば、七つになる孫、父樣水を汲んだよと可愛らしゝ、オゝ不憫や此顆、母樣ほしくないかえと頭をさぐれば、吉は詰なさへきり

て、イエ〳〵私女房持ちたく無いと、子の可愛さ、盲母のいとほしさに己不自由は爲れど繼母持たせたく無きなり、假令盲なりとも、吉の如き孝行者を持たなら……一日、なりともさる仲睦まじき家ほしゝ。

（中）

空には月冴やかにてりて、木枯にきほひ亂るゝ落葉の行衛も見ゆる宵なり、破れ障子のすき間より、名もなき紅葉、はら〳〵と飛び入りて、細き燈火しきりにまたゝく。

何叔の事などは、奈何ふても宜こざります、其より叔母樣のリウマチスは、少は宜い方でござんすかえ、と二十四五の柔順げなる女のいへば、叔母はなやめる膝を進めて、咳まじりに、ほんにこまるぞえ、快いのやら惡いのやら、頭から足から手のさき迄、是や宜いと思ふ朝有れば、につちもさつちも出來ぬ夜中もありても暖い中は宜けれど、此頃のやうに、北風ピユーピユー簿ふては、夜中の寢ざめに、是や冷いと思ふてもそつと手をのへて肩もつゝめず、孫が祖母樣鼻がというてもドレとすぐ袂から紙も取れず、ほんに思ふ儘に爲らないで、吾乍ら呆れまする、なれどもはや明日知れぬ老の身故、不自由するも一寸の間、爲方が無いとあきらめるれど、若いそなたに……オヽ氣のせいか何處やら瘦せましたれ、頸差しのべてつく〳〵と顏を見て、これお松聞いてくれ、そなたの兩親亡くなられてから、私等夫婦て世話して嫁た事は知て居ま升其に其樣に澤山苦勞をさせて、萬一煩ふ事ても有たならそなたの父樣臨終に、お松の身の上引き受けまするると受合ふたは彼の世て逢た時、兄や姉への申譯何とすまない事、ねエお松年なら漸々、二十を四つ越した許り、其に容貌は十人並、針縫も上手い、氣は優し何處取て云分の無いそなた何が氣に入らぬとて、人の苦勞は色々有りますが、貧乏苦勞は一番辛かろ、つまらない、働いていぢめちれて苦勞をして、何爲やら、これお松こゝの處を區分けて、ヱヽ暇を取ておくれ……之はしたり叔母樣、思ひもよらぬ事、奈何してどうして如何樣な辛い思ひをいたしまするとて、一旦死ぬ家と決めましたものを、今更夫の見込が無いとて出られませぬ、可愛い此子に憂き目を見せて、私獨樂はしませぬ、安坊もはや五才、是許も立派ゝ學校へ通はせまして、何卒一人前に爲度いと、其許を憖の中の樂みとして、暇無い中からも、兎に角出來ます人樣のご洗濯や裁縫をして、行末安坊が學費の片端にもといらぬ裝飾物、賣り散らす仕末となりし今日迄も、得たお金の片端をば、必ず貯て置きまする……いつかは夫の機嫌も直りますから、骨身惜まず辛棒しまするとホロリと一雫、見せじと拭へば、ほんに常なみならぬ心掛尙更不憫と、叔母も鼻紙取り上げぬ、オや〳〵何時の間にやら睡た樣子、ドレ風邪でもひかしちやなるまじ、ほん柔順い此子、必ず孝行者になるに違ない安坊はそなたに許り似て居ます、薄いけれど掻卷でも掛けて置きなさいと、愛しげに母の憂苦も知らで、笑まひ睡れる幼子を見つむれば、まだ自家には色々用事も有升るし、其に夫の留守の間に參りました事なれば居らぬ後に歸られては、尙更機嫌をそこねまする故、いづれ又近い中に參りますとも、今夜はもはやお暇をしまするると、お松は立ち上りかけぬ、何未だ好かるべれけど、そう云ふ都合なら、早く歸た方が宜かろ、して安坊は奈何します、おぶうと聞て、重かろうけれどそうせればなるまい、外は明いけれど風は寒し、氣を注けてお出てよと、叔母の親切に、お松はいとゞ戀うて、明日食う米もなき家に、何の樂み有て歸りたかるべき、オヽ恐や、思ひ出すさへ彼のめつき、鬼の樣なる夫の側へ、歸りともなや、いつそ叔母樣の仰に從ひ否いや腑甲斐ない私の了見何もかも自分の勤の足らない故、辛棒しまする、必ず〳〵

（下）

人生の浮沈、ひとへに斯くの如しと、知らする樣なる空摸樣となりて、雨の聲かしましう、絶えては、又。先まづ早く歸てよかりし、今夜もお歸り被爲ぬかや、さても夜の更けぬるよ、何時ぞと、形許りの床を見てお松はやゝと驚きぬ、今朝迄在りし置時計の影も無きは、何時間に質屋の店に行た事ぞと、呆れ返りて、思はず後の柱によつかゝれば、睡れる幼子ムク〳〵と動きぬ、オヽ忘れて居つたと背に心付きて、のべ置し敷床に、目の覺めぬ樣にと、コロリと下し、着のみ着のまゝ外着と平常着の差別無ければ、羽織をたゝむと云ふ事もなく、すぐに巳れ幼子と共に、乳房含ませ横になれば、いつしかうと〳〵と夢路に入りぬ、恐き夜中、荒山に獨捨てられて、せんすべなく木影に彳み居しに、颶風天地に鳴り渡りて大鬼一呑みにせんと頭上に現はれぬ、ヤツと叫びしまゝ何處何如にして、逃れけん、魂も身に添はず、追ひ來る樣子もなけれど猶もと彼方の木、此方の暗をくぐりて、ほつと息呼き見返す途端、如何にしけん足すべらして眞倒樣に落ちぬ、見上ぐれば數千丈の絶壁の巖に、先の鬼きばむき出して睨まへたり、驚き四邊をすかし見れば、目の前に大なる湖ありて、岸の柴舟此處へこゝへと招ぐに似たり、オヽ宜き物こそ有れと忩ぎのれば、自らゆらゆらと動き初めて、いつしか眞中に出づれは、冷風さつと顔を撫でゝ、懐かしや父上と母上左右より我手取りて、宜くこそ來つれ、永久樂しき園に導かんと仰せられしに、忽ち舟くつがへりぬと見て覺めぬ、妙な夢よと起き上れば、軒の雨だれ間遠に落ちて、夜は更けぬ更けぬとしらする樣なり、細きランプ又かき出して安坊が袖口のほころび縫はんと、小さき箱より針刺出さんと手掛くれば、誰ならんコト〳〵と軒下づたひもしやと胸に響きて、針持つ手を離せば、足音は我家の前にひたと止まり、ホト〳〵と戸を叩きて、寢んだかえ松此戸を明けてくれ、はい只今とランプ片手に出迎へて、先刻の雨にお傘をあげやうと存じ升たれど、お居處がわかりませんのでと、こわ〳〵のぶれば、なに彼の時は、新町の萩屋の軒下には入つて、晴らしてから來たのさと、いつに無き上機嫌、殊更氣味惡るし其はまア宜うござりましたれ、お前は今迄睡らずに居てくれたかえ大きにご苦勞樣、お禮は今夜澤山する、と、ニヤリと笑つて怪き目色遣ひぬ、お禮と云ぶは外でも無し、我身故重なる貧乏に苦勞をさせ、此上又どんな憂苦を見せるかもしれぬ、其ては誠に申譯ないし働きの無い男に六年添ふて、ほと〳〵愛想が盡きたろうから、今夜只今出ておくれ、そなたの樣な別嬪樣は何處へ嫁ても幅がきく、己の樣な者の妻には、勿體な過ぎて神樣から罰があたるぞ、サア松出て貰う、何を其樣に考へ込んで居る、願つたり協つたりの婿さを空涙まぎらさんとはむづかしかろ、安坊は巳の子供さ學校に入れまいと入れやうとこつちの氣儘、そなたのお心遣ひ皆ご無用、早く鬼の側を離れて、娑婆へ出るがよい。鼓から枠に涙もつかへて、あれ旦那樣、無情い、其樣な事を被仰らずに、奈何でも私はお氣に召さぬなら、せめて安坊が今少成長きくなります迄、置いて下され願ひまするると泣き伏せば、馬の耳に念佛とや何處が風吹くとき流して、何のと煙草吸ひつけ、吸ひつけ胡座を掻いて、後を向きぬ。

秋の空ならねど、變り易きは人心許りかは、晴れし月又もや曇りて、時雨しほ〳〵淋き、冬の初めの眞夜中過ぎ、哀やお松、睡れる幼子今一度、別離名殘り抱き見るよしも無く、彼の綿入もお寢卷も、未だ手もかけずに置きし、彼のお襦袢も、明日なり洗ふてあげやうと思ひ居しを、明日にも雪ふらば、奈何なさるお心ぞ、お風邪召しは被爲れぬか、母樣〳〵とむづからば、如何ばかりおこまりなさる事ぞ、と無情き夫をうらみつやて、永き悲哀の千々の思ひを、小さき胸に搔き亂して、着のまゝ雨に消え行く後影、叔母の家をも素通りして、片手に涙を抑へ、片手に白張

りの雪傘さして行衛もしら浪の、よせては返すみなそこなば眞ばしと、浪かき分けて、双親のあと、追ひしかやあはれ。

雪の夜

宮内榮子

(上の卷)

一旦墮落の淵に沈みましては、知らず知らず深底に這入つて、しまひには浮ぶ事が、出來なくなると申しますが、丁度兄が其通り、父が未だ生きて居りました時分には、能く學業も勵みまして、高等學校でも、俊才であるとか、何とか賞讃をばうけて居りまして、數ならぬ私も賴母しう春風は我家のみ、吹きまするやうな心持て、樂しく月日も送つて居りましたが、父が沒してからといふものは、恰て嵐の落葉を返す如うに、變つてしまひまして、あの網部に誘はれましたのが、そも〳〵の初めて、それからと申しますものは、あられもない女狂ひ、吉原洲崎、さては新橋柳橋、と所々方々遊び廻しまして、家をあけます事は、度々になりました。

母私は申すに及ばず、親戚の者までが、色々と諫めて見ましたが、中々聞き入れません、何處を風が吹くかと、いふ如うな顔をしまして、益々深底に這入つて參るので御座います、母や私は、此時分どんな心持が致しましたらう、御察し下さいまし、嫁をとの相談もしてましたが、新聞にまて、兄の不身持はさらされました事故、なか〳〵應じて下さる方もなく、その儘立ち消えとなりました、彼方此方からの借財のお尻も、幾度てしたか數知れませぬ、母も餘りの事に立腹致しまして、最早どうなつても構はぬから、意見もするな、歸つて來ても決して入れるな、私は子とも思はぬ、又彼も親とは思つて居なからうから、と申しました、私は實に此時悲う御座りました、然し燒野の雉子、夜の鶴とやら、斯樣に怒りましも、母は眠も致さず、今頃は何處に馬鹿を爲て居るであらう、斯樣に夜深し而巳しては、身體が惡くなりはしまいか、などゝ申しまして、兄の爲に泣き明かした事は、幾夜てありましたか、知れませぬ、いかに物言ふ花を側に、絹布の中に眠りますのが、よろしかつたとて、斯樣に心配して居りまする、母の心も知りませず、あたら月日を、遊蕩に過ごし果つる兄は、餘程因果な者だと、熟々可憐そうに思ひました、僞の手に汲まれまする酒は、それ程結構なもので御座いましやうか。

去年の七月十五日の事てした、夕暮私が格子の前を、掃除して居りますと、兄が歸つて參りまして、もぢもぢして居ります故、母に隱して、裏の茄子畑に連れて參り、母の心配から段々に、意見を致さうと思ひまして、二言三言申しますと、其樣な事は聞き度くない、といきなり網れ付けまして、早行かふとしまする故、袂に縋りて涙ながらに、兄上貴方は什麼しても、改心して下さいませぬか、と申しますと、まあ貴女、腹が立つては御座いませんか、知らない、八釜しい、と私を突き飛ばして、その儘母にも會ひませず、出て行つて了まいました、茄子の枝と一緒に、仆れました私は、餘りの殘念に、自分の部屋に歸りまして、すゝり泣きをして居りますと、母は私の擧動に氣が付きましたのか、後から直ぐ參りまして、何を泣いて居るの、と優さしく問はれますのに、猶更悲くなりまして、こらえきれませず、思はず聲を立てました。

其の後は絕えて顔も見せませぬ、然し斯樣なめに會まして、矢張血を分けた兄妹、情にからまれまして寐ぜぬ時とては、御座りませぬ、門邊に物音が致しますれば、そつと戶も明けて見ました、すると寒い風が大路

を吹いて居る而已、人影が見えます故、恐々庭に出て見ますと、傾く月に早い雲、新様にして一夜まち、二夜まちして心配して居りますのに、歸りませんのみか、音信も御座ませぬ、木枯は叫いて、世は心淋しい去年も暮れ、いつか堤の櫻は咲き亂れて、麗な春はまゐりましたが、歸らぬ兄をまち侘びて、結ぼれ果てた母と私の心は、解けて浮ぶ瀨も御座りませんでした、涼しい流れに短艇競漕の、賑ふ夏はまゐりますれど、唯ま夜中に名乘る、不如歸の聲に泣き明す而巳、過年は打ち連れて、木の間に賞でた冴かな月は、今年も變らぬ光を見せましたが、兄は居りませぬ世は何時荒れるとも知れぬ此頃の空、母は絶えぬ涙に痩せ細り、私の邸も、何時散る木の葉同然に、なりまする事やら分りませぬ、苔の下では御父が、くやし涙に咽んで居るで御座いましやう。

先頃から親戚で、度々勸めますには、兄雄は迚ても歸つてきまい、又歸つても來られまい、よし歸つて來た所で、彼を元の如り相續人として置く事は出來ぬ、未だ行衛不明になつてから二年、失踪の宣告を願ひ出る事にも行かないが、現に角お前が婿をとつて、家を繼がねばならぬ、とそれはもう、左様申しますのも道理では御座いますが、譬斯様な兄でも相續人、それを除けて戚りますのは、私には什麼も氣が進みませぬ、露子様、什麼致したもので御座いましやう、貴女には學校に居りまする時分から、何にや彼や御世話に成つて居りまして、決して他人と思へぬほど御慕ひ申して居りまする、御意見は如何で御座いましやう、兄はあの儘戻つてしまいましやうか、家を戀ひしいとも思ひませず、親も妹も振り捨てゝ、恨めしい兄ではありますが、又今夜の如うな雪の夜には、何處に什麼過ごして居りますかとも、氣遣ひまする、病に罹つて仕方なくならぬ前に、改心して歸つてまゐりますやうに、して下さる神や佛はないものでしやうか、露子様、什麼致したらよいもので御座いましやう」

雪は全く降り止むで、何時しか空も晴れ、戸外は沈々たる銀世界、蕭屑十一月七日ばかりの月が、研き上げられたる光を放てば、今しも向島隅田村なる冬野の邸の二階にて、手にハンケチを握りしまゝ、言葉なき露子と霜子との、青白き面わには、夫れ涙の露そしたゝる。

植中の離れ家より、三絃の音は聞えそめぬ、雪見の酒宴にやあらん、其の調の遠く近く、高く低く、さも面白げに風に連れて。

霜子は我知らず起ち上りて、欄干近くさし倚りぬ、露子も無言にて是に續きぬ。靜かに廻る按摩の笛は、今宵同の門にとまりて、あとは幽な犬の遠吠

* * * * * * * * * * * *

（下の卷）

柱時計の十二時を報ぜしに、驚いて露子の邸を辭し、月影氷る雪の細道三町餘辿りて、同じ村なる我が邸に歸りし枯野霜子は、父の靈前に額づきしまゝ、眠るともなく、いつか微睡みぬ。

* * * * * * * * * * * *

それはもう、御父様の御立腹は御尤で御座います、菅の根の永き年月愛で給ひ、まして御隱れの後は、御父様に續いて御名を擧げらるゝ兄上、私のやうな鵜に交つた鷗のやうな者が、押し除けて其の位置に据りましやうなどゝ、淺ましい考を起こしましたのは、過てした實は是も私の一量見では御座りませぬ、御伯父様や御伯母様の度々の御勸故、私も說破つまりまして、あの御父様も御承知の、露子様に御相談申した末の事で御座います、什麼か其樣な恐い御顏をなさらないで下さいまし、最う其樣な考は決して起しませぬ、御伯父様や御伯母様にも、御斷り申し上げます、左様して是から兄上の御行衛を、必ずお尋ね致し、篤と御意見申して、「元の賢い兄上にかへし上げます、御父様も什麼か御力を御添へ……あれーッ」

明くなりし神棚の燈火の花は、はッと落ちて室内は烏羽玉の闇目覺めし霜子は苦しき吐息、恐ろしげに首をめぐらせば、母は今如何なる夢路を辿るらん、やす／＼としたる寐息、はッと胸を擦りぬ。

折りしも淺草寺の鐘は、雪の曉を破りて、身にしむばかり響き渡りぬ。

（完）

▲（選外佳作の分）

運命 （仙臺） いち子
未亡人 （松江市） 佐々木德子
、瘦世帶 （羽後國） 河野安女
○親子 （大阪） をちば
秋の名殘 はま子
、恩愛 （京都府） 橋本信子
花はちす （筑前國） 栢林歌子
叢叢 （東京市） 大河内よし子
○大和撫子 （大阪市） 宇野翠子
わかれ （信濃國） 春江女史
、一夜がたり （長門國） 岩田章子
○園遊會 しらつゆ
離別の妻 （筑前國） 千枝子
◎雲のゆくへ （京都市） 竹下季子
憎惡の微雲 （仙臺市） 里の秋
姉妹 （三重縣） 雅子
、水馴棹 （丹波國） 田井かね子
○枯尾花 文好女史
いなだのみ （東京市） 喜美子女史
行末 （大阪市） 後藤艶子

樹の蔭 （新潟縣） 吉田苗代女
夜嵐 （三重縣） 美惠子
思出草 （仙臺市） きみ子
○不如意 （播磨國） 小路春子
野がたり （高知縣） 高橋ゆき子
ひと村雨 （東京市） 權野榮子
◎失戀詩人 （東京市） 帆峯道
◎山寺の月 （米澤市） 白菊
一家の磊落 （羽後國） 小西秀子
○あはれ少女 （名古屋市） 王村多歌
、夕時雨 （伊勢國） 河原芳子
、行脚僧 （駿河國） 藤井たか子
、ゆく水 （甲斐國） 駒井とし子
ちぎれ雲 （三河國） 野本しげ子
○一本柳 （肥後國） 坂口小苗
旅の子 （靜岡市） 馬場笛子
花ぐもり （岡山市） 琴女
わか後家 （仙臺市） 松前いは子
風の日 （土佐國） 中屋たへ子
一夜咄 （姫路市） 松本とき子

和歌

佐々木信綱先生選評

【天】 枯野

名古屋市木挽町六番地 奥島ひて子

霜夜風寒けく吹くに吾脊子は
今か來まさむ枯野萱原

景情あはせ備はれりといふべし

【地】 枯野

山形縣西田川郡鶴岡字與力町 野口菊子

旅人の後ろにほゆる野良犬の
聲ものすごき枯野原かな

枯野のさま寫し得てよし

【人】 枯菊

河内國北河内郡交野村大字私部 大矢たね子

時めきしうたひめ老いてわひ居する
かき根に殘る白菊の花

老しうたひめと殘菊との配合おもしろし

秀逸

●虹 伊賀 村尾倘子

虹の橋の片くつれせる江の南
蘆間かくれに白帆ゆく見ゆ

●枯野 尾張 間瀬三芳女

冬枯の裾野の末に見ゆるかな
いたゝき白き富士の神山

●虹 埼玉 林若葉

七色の色美しき虹とりて
帶にたまへと幼子はいふ

●虹 出雲 白梅女

繪の具ときて天津女神の御手づから
染めますものか七色の虹

●殘菊 牛込 富永憲子

咲きのこる野邊のしらきくをりそへて
やまひの友をなくさめのふみ

●枯野 大阪 井上貞女

ゆきふかき枯野の末に月さえて

熊おふあいぬかげさやかなり　伊勢　河原芳子

●殘菊

寒き世にほゝゑむ菊の一本を
歌にそへてや君におくらむ　相模　安齋けい

●枯野

風あらき裾野を北に大鷲の
夕日をぬひて天かけりゆく　肥後　秋野つゆ子

●虹

美しく今見し虹の色はあせて
夕空淸し三日月のかげ　神田　千鶴子

●枯野

僧ひとり馬子ひとりゆきて冬枯の
野邊の片道日はなゝめなり　長野　今淸ふさゆき

●枯野

菅がさに殘る夕日の影追ひて
山伏一人枯野原行く　長門　中田德子

●虹

雨はるゝ大島わたり虹たちて
蓆帆はりし船漕ぎきたる

●虹

征矢に百合に男神女神のみてにとりて
いまわたらしぬ虹の浮はし　尾張　鷲尾米子

●殘菊

庭のおせの風はたゞ寒き夕暮を
名殘の菊に人思ふかな　佐賀　小林みつ子

●枯野

鷹狩のぬり笠の群見えずなりて
吹雪に暮るゝ枯野原哉　信濃　山崎淸子

●虹

紅葉狩雨になやみて歸るさの
野中かや原虹たちわたる　薩摩　原田則子

●虹

かけ渡す虹うつくしき野の路を
見かへりしつゝ行くみ僧かな　長崎　淺山雪子

●殘菊

垣の上に長尾しだれて庭鳥の
夕なきさむし殘菊の花　肥前　中島ひで子

●虹

淡路　青木柳月

漕ぎ下る淀の川瀨の夕凪に
うつりて清き虹のかけ橋　名古屋　彩錦女史

●枯野
病院の窓より見ゆる夕くれの
枯野細路人ひとり行く　筑前　春山しつ子

●枯野
ふく風に野邊のをすゝき冬枯れて
ひゞくもかなし入相のかね　越後　小林しつ枝

●枯野
うすれ行く夕日さびしき枯野原
旅につかれし僧ひとりゆく　名古屋　佐久間藤香

●枯野
うら枯の尾花の風は寒むけれど
君來とあればたちうくもあらず　横濱　長谷川さく子

●枯野
枯野原横ぎる滊車の影きえて
みる色もなく日はくれんとす

佳調

◉虹
苔はれて仰ぎ見る沖の壹岐對馬横たふ虹のかけくらき哉　伊豫　鎌田眞佐子

◉枯野
けだものゝ足あとみえし枯野はらおく霜さむしあけかたの月　信濃　竹鼻はる子

◉枯野
僧ひとり立てる曠野の檜林梢さひしく北風すさぶ　東京　吉野はる子

◉虹
立田姫錦織るとて渡るらむ高雄の山の虹のかけ橋　山口　齋藤芳子

◉殘菊
いとせめてこほるゝまでを手向けなむ一もと殘るしら菊の花　越後　横山光子

◉枯野
妹と來て薹つみにし野は枯てむしの音ほそり秋の蝶飛ぶ　河内　巽かつら

◉枯野
折々は月あらはれて霰早し旅僧過ぐる木曾の枯道　陸奥　たちばな

◉枯野
寂しさのはてこそなけれ武藏野は虫の音かれてたゝ冬の風　京都　上田和歌子

◉殘菊
細殿の籬はやせてたゞ白くのこれる菊のあはれやさしき　東京　近藤きそ

◉殘菊
けさ見れば霜のまがきにたゞ一枝殘るもゆかし白菊の花　神戸　柳田のぶ子

◉虹
むらさきの烟靜けき賤が屋の東しの嶺に虹消くたつ　岡山　黒住たか子

◎枯野　松山　信子
妹らと千ぐさつみてし野は枯れておく霜白く虫の音ぞする

◎枯野　東京　芳賀仙子
おく霜にちくさの色もふゆかれて野中の小川けふりそめつゝ

◎枯野　名古屋　鷲尾米子
里の子か鳥網はる野の冬かれにちはらさびしき夕あらしかな

◎枯野　伊豫　石川君子
霧かひて踏る枯野の細道を逢ふ人もなく日は暮れんとす

◎枯野　向島　吉野すゞ子
只一つ古塚みゆる枯野原旅人ゆきて日は落ちんとす

◎虹　牛込　富永應子
淡路島しまのかなたは雨はれて虹おもしろし船の上のたひ

◎枯野　高知　中澤はな
枯野原なゝめに過ぐる荷駄ぶのたてがみなぶる夕ぐれの風

◎殘菊　高知　中澤はな
秋深みまがきの黄菊色あせて君とたゝへし面かげもなし

◎殘菊　若狹　板橋常子
尻寺の柴の裏戸に一もとの殘んの菊のさびしげに咲く

◎枯野　埼玉　高野たえ子
おく霜に千草殘らず枯はてゝ廣野に獨り石佛立つ

◎殘菊　岩代　早田きち
訪逝きてさびしき庭をさまよへは古井のほとり殘菊のさく

◎殘菊　靜岡　立石ちよ
虫の音も千草も枯れし荒園にさきのこりけり菊の一本

◎枯野　駿河　菊池武子
もゝ草の枯ふす野路を朝行けば哀れからすの凹風に鳴く

◎枯野　佐賀　坂本直子
夕暮を枯野に立ちて只一人入相告くる鐘の音を聞く

◎枯野　麴町　上山春美
男がたを狐一つさまよいて枯野二十里雨になりゆく

◎枯野　岐阜　ふさ子
今ゆきし旅人のかけも見えすなりて枯野にまひぬ木の葉二ひら

◎虹　東京　奥津らく子
村里は時雨ふるらし虹みえてやがて入日の山に落ち行く

◎殘菊　和歌山　谷井清子
霜しもをしのきてのこる白菊はかれたるよりもあはれなりけり

◎殘菊　信濃　ゆき子
うせし子がつらきかたみの乳ながす小川の岸に殘ろしらぎく

◎虹　河内　大矢たれ子
姉さまよとく見そなはせ立つ虹の帶に似たりと少女子のいふ

◎枯野　河内　大矢たれ子
枯草をふきしく嵐空さえて月氷る野にきつれなくなり

◎枯野　伊豫　靜子
弓張の月物すごき枯の原山伏一人さびしげに行く

◎虹　福岡　井上綠子
みいくさに勇む男士のうたげをへて望むもうれし虹のたけはし

◎枯野　神田　曉女
冬かれの野邊の細道霜さえて賓女の一群とほ〳〵とゆく

◎殘菊　神田　曉女
山寺の背戸の茶畑のかたかけにのころもあはれ白菊の花

◎殘菊　佐賀　野口とし子
いとゆるく烟はふなる草小屋のかげに殘れるしら菊の花
◎枯野　福岡　井上桂子
枯野原鳥飛ふ見えてあやうくも袖かすめゆく征矢の一筋
◎雁　志摩　濱口しづ
夢覺めて思出多き此夜中に一聲高く雁鳴き渡る
◎殘菊　信濃　山崎近子
秋深き谷間の清水汲みに來て咲き殘る菊を折てける哉
◎枯野　麹町　白すみれ
美しき人の來路の心地して見渡す枯野に涙ぐまるゝ
◎虹　横濱　増田春子
ふりつゝく秋雨はれて遠かたの山の端ちかく見ゆる虹かな
◎殘菊　四谷　渡邊まき
枯葉ちる野邊のあはら家物さびてひともと殘るしら菊の花
◎枯野　京都　佐川廣
あやもなき野はたそがれて穗芒のそよぎに出づる淡月の影
◎虹　大阪　田島匡子
雨はれて山端つゞき温泉のゆ烟ほそく虹となりゆく
◎虹　伊豫　眞佐子
皆はれて仰ぎ見る沖の壹岐對馬横たふ虹のかげくしきかな
◎枯野　三重　龜井ゐと子
枯野原旅僧ひとり行くみえて夕日かすかに時雨ふるなり
◎枯野　神戸　鶴子
枯野原かれの音さむくたそがれて馬子かへりゆく歌もうたはす
◎枯野　茨城　山口粂子
二人して花見し野邊は枯れはてゝ虫の音細り月傾きぬ
◎殘菊　靜岡　角替歌子
わが宿のまがき破れ垣霜早み殘る黄菊の眺めさびしき
◎枯野　群馬　村井秀子
霜になりし枯野が原の夕まぐれ乙女子一人馬ひきかへる
◎枯野　和歌山　佐山靜子
戰死者の魂飛ぶなる枯野はら月かたぶきて狐なくなり
◎枯野　和歌山　平田靜子
夕鳥群がりかへる影消えて枯野の夕霰たばしる
◎殘菊　靜岡　さだ子
中〳〵に殘るにほひやまさるらん一もと咲けるませの白菊
◎枯野　長門　福永きよ子
旅僧の衣寒けき枯野原黒雲ひくゝ雪降らんとす
◎枯野　埼玉　清水きよ子
屠りたる牛の皮むく穢多見えて枯野の空になく烏哉
◎虹　和歌山　平田靜子
うつら〳〵消えゆく虹を眺めては思ひ出おほき夕まぐれ哉
◎枯野　東京　佐々木和子
露まよふ枯野の夕日は落ちて尾花の袖に月さやかなり
◎枯野　羽前　海老名てい子
城あとは薄野となり畠となり枯野となりて木枯ぞ吹く
◎枯野　弘前　今ちか
岡のべに小鳥あみ張る人見えて枯野の末に日は落ちんとす
◎枯野　富山　長谷川初枝
ひろ〳〵と草も木も葉もかれはてゝ見渡しさむく野はなりにけり

◎枯野　和歌山　柴山敏子
柴負ふて賤の女かへる枯野はら夕月淡く狐なくなり
◎枯野　小石川　平井岩子
見かへれと人氣も見えずあき風の枯野を渡るおとばかりして
◎虹　羽前　平瀬幽谷子
うき雲の流れにわたす虹の橋如何なる人のふみ初むらん
◎殘菊　赤坂　關隆子
さきのこる野菊一もと地藏尊に手むけて去りぬ旅僧ひとり
◎枯野　和歌山　高内秀子
かるかやもすゝきもかれし冬の野はたゝこからしのこゑのみにして
◎枯野　伊賀　服部かつ子
牛ひきて冬野すぎ行く人一人淋しく見えて霜がれにけり
◎虹　駿河　林すぎ子
雨やみて雲井に見えし虹はみな天つ乙女の帶にやあるらん
◎虹　埼玉　林若葉
茄子の實の露美ほしく雨晴れて東遠山虹たちわたる
◎枯野　埼玉　林若葉
風のすさぶ枯野の夕ぐれを旅にやつれし僧たどる見ゆ
◎虹　佐賀　田代はつ子
美はしき虹をみてより幼兒がまはらぬ舌に虹虹と呼ぶ
◎殘菊　名古屋　磯田きん子
霜がれの庭に一もと殘る菊やがては枯れん時をしぞ思ふ
◎枯野　小石川　村岡つる子
我戀は蜘蛛の夢と消え果てゝ今宵枯野の雨を泣くなり
◎枯野　鹿兒島　中島文子

空は皆野火の烟に掩はれて枯野の末を鳥鳴き舞ふ
◎枯野　大阪　山本ひで
旅人の菅笠遠く顔消て枯野の末に日は落ちんとす
◎殘菊　大阪　小野まさ子
朝附日眞の桑畑の霜烟り烟に匂ふ黄菊白菊
◎殘菊　鹿兒島　原田則子
破れ垣のあたりや園の跡ならむ黄菊しら菊咲きて殘れる
◎虹　麹町　宮内俊子
虹の輪のきゆるにやすきかけをみて戀のゆくすゑおもひけるかな
◎枯野　常陸　馬場とし子
獵人の落を夜く焚火はれて枯野原三里は火におそわれぬ
◎殘菊　安藝　松坂榛子
うたを添へて殘れる菊のひと本を千代子の君にけふは送らん
◎虹　下總　三田はや
神や守る我子の幸を鹿島立つ大路に高き七色の虹
◎枯野　芝　下村文子
武藏野はいづこが冬の果ならんゆけど／＼も木枯寒し
◎枯野　高知　なみ江
一つ家の窓のともしひかげくらく枯野三里に小雨そぼふる
◎枯野　大村　吉田みれ子
夕暮をかりうど行きて人絶えて山僧ひとり冬枯の野を
◎虹　大村　吉田みれ子
人目さへ枯れゆく冬の山里をしぐるゝことににほふ虹かな
◎枯野　佐賀　大隈藤子
秋深み野邊の草葉もかれはてゝ夕暮けきこからしのかせ

◎虹　　三河　藤えふ子

櫓をとめて笠ぬぎ捨てつ見上れば波の上たかく虹かゝりけり

◎枯野　　志木町　三上静子

すきし秋虫の音したひ來し野邊に枯し尾花の招きかほなる

◎虹　　羽前　佐野蕗子

かさゝぎの橋もかくやとみる虹の消へつるなへに降る時雨哉

◎枯野　　横濱　中村繁子

はてしなき枯野が原に風寒く一人くれ行く價ぞさびしき

◎枯野　　芝　濱林露子

小鳥とると行きにしせこはかへりこてまたも枯野は風にくれてゆく

◎枯野　　安房　和田きん子

草葉皆冬枯れはてゝやせこまのいなゝく野邊に風ぞ身にしむ

◎虹　　信濃　平澤ふみ子

亡き妹が奥津城あたり七色の虹あらはれぬ秋雨のあと

◎枯野　　下谷　みき子

はてもなき枯野の原の夕月夜虫の音かれて雁のゆくみゆ

◎殘菊　　甲斐　神奈なみ

冬枯の曠野にたてる一つ松の下草のまじり野菊のこれり

◎枯野　　麹町　神谷よし子

見渡せどなほ見わたせど果もなき枯野の夕日早や入らんとす

◎虹　　仙臺　國井ゑい子

あれ／＼と稚兒のゆびさすかた見れば紅葉にかけし虹の浮橋

◎殘菊　　仙臺　町田周子

霜おりて一人わがもる花園の岩根に殘る菊の香のうすき

◎枯野　　仙臺　町田周子

戰やみて敵のむくろを埋めたる枯野淋しく時雨ふるなり

◎殘菊　　愛媛　鈴木そよ子

菊作る翁は逝きてあれ庵の殘んの菊に時雨そほふる

◎虹　　弘前　成田きよ子

松蔭に宮の白壁ほの見えて瀧を横ぎる虹美しき

◎殘菊　　弘前　平山ちい女

世をしのぶ伏家の籬やれはてゝやせたる菊にみぞれふるなり

◎虹　　筑前　太田とも

山寺の森の梢に塔見えて夕にじかゝる空のさびしき

◎虹　　神戸　今村竹子

ぬれ帆ほす磯邊のあまも幼子もゑみてなかむるにじの浮はし

◎枯野　　伊勢　岡部文子

枯野原怪鳥飛んで空高し潜める虫は聲も立て得ず

◎虹　　阿波　深尾波奈子

かしましき乙女がこゑに出て見れば鎭守の森に虹たちにけり

◎虹　　神戸　五百枝子

いつのよに何の御神の手すさひにゑどりましけむ虹のかけはし

◎枯野　　長門　岩田幸子

村芝居ありし屋形も崩れ果て里の秋野は冬さびにけり

◎殘菊　　神田　桑田久子

力なく蝴蝶のひとつたつねきぬ庭に殘れる白菊のはな

◎枯野　　伊勢　岡島櫻子

西をさすにぶき夕日を笠に受けて旅僧急ぐ枯野路一筋

◎虹　　伊勢　岸田ちゑ

獵の男が馬牽きて渡る夕川のみ空に淡く虹あらはれぬ

◎殘菊 岐阜 中村ます子
家出せし兄のたよりもたえ／＼に物思ふ空に殘菊のはな

◎虹 備中 大西益子
盲目なる父のゐませはそと立ちて虹の夕ばえ眺めやる哉

◎枯野 大阪 田中俊子
汽車過ぎて日は暮れはてゝ枯野原月高うして狐なくなり

◎枯野 香川 月子
夕まぐれ急ぐ老翁の影きえて十里の枯野月になり行く

◎虹 豊橋 土屋松枝
知らぬ間に夕雨晴れて淀川の川の面に虹立ち渡たる

◎枯野 伊勢 山本しげ子
たそがれに旅僧一人たどり行く枯野路一里雨降りしきる

◎虹 豊橋 土屋松枝
稲田十里人影見えず山見えず稲より稲に虹のかゝれる

◎虹 伊勢 植木みづ子
晴れたりと皆をおろして汐合をかへり見すれは虹立ち亘る

◎枯野 伊豫 篠田眞佐子
熊引きて踊ろアイヌの鬚長し北の大野を木枯らしの頃

◎枯野 德島 大久保愛子
風寒み旅僧急く夕間暮三里の枯野霜降らむとす

◎枯野 大村 吉田みれ子
夕暮を行く人絶えて風絶えて三里の枯野物音もせず

◎虹 横濱 岡野はな
箱やまの大空かけていつこよりたれかよふらむ夕にじのはし

◎枯野 安藝 松阪梅子
枯尾花かせになひきてちからなき夕日さひしき野への一つ家

◎虹 安藝 松坂梅子
天の海に虹のうき橋かゝりけり雲間を神やわたりますらん

◎殘菊 攝津 堀やす
たふるれとおこす人なし長月の十日の後の菊のまかすは

◎枯野 東京 ふみ子
枯野原送る柩の影みえてあなたの寺にかれなりひゝく

◎枯野 名古屋 鈴木蓮子
姉君のみはかあらはに見ゆるまでのべの草木はかれはてにけり

◎虹 駿河 林すゞ子
七種のたえなる色をたきつほのけむりにうつす夕日影かな

◎殘菊 長門 藤川はつる
しもさむみ撃あはれなる花實女それにもにたるかどのしらぎく

◎虹 東京 春山とし子
夕燒のにほひ消えたる雲間よりあらはれいでぬ虹のかけはし

◎殘菊 和歌山 西口華子
村時雨はれたる夜半の月かげに忘れし菊のにほひぬるかな

◎殘菊 和歌山 寺崎初子
村しぐれ晴れたる窓の月かげにわすれし菊の匂ふ夜半かな

◎枯野 人吉 山田早苗子
野をせまく咲きし千草のかれはてゝいつこも道になりにけるかな

◎枯野 神田 松栗女史
虫取ると子らかむれたる野は枯れて銃もてる人の犬つれて行く

◎虹 淡路 岸岡芙蓉
わが背戸の森より立てる虹の橋渡り行かばや君が家まで

◎殘菊　信州　小林春子
霜しろき古井の桁に鶏なきて朝日さすなり庭の瘦菊に

◎枯野　東京　吉野春雄
菅笠をうしろに負ひし旅僧の寒き枯野をひとりゆく見ゆ

◎虹　和歌山　山本千代子
夕立ちし富士の麓に濃く張れる虹に向へり若き畫たくみ

◎虹　横濱　長谷川さく子
零ちる蛇の目の傘に日をよけて尾上橫ぎる虹をみるかな

◎虹　遠州　みわ子
わが里とわが背子居ます島かけて虹立つらむかこの夕暮を

◎虹　遠州　佐藤秀世子
わが背子が居ます島山雨はれて五色の虹の今し立つらし

◎虹　備中　大西歌代子
出來秋を憂ひし長雨やゝはれて鎌研ぎ居れば虹たちわたる

◎虹　東京　古里花子
罪に迷ふ世の夢さめて虹の橋こゝにわたすはあはれいつの世

◎殘菊　新潟　吉田梅子
こしなれて殘る姿もあわれなりうゑすておきし庭の白きく

◎枯野　丹後　林文子
刈入れて人影もなき千町田のあせみちさむく尾花袖ふる

◎殘菊　麻布　佐々松ふみ子
稲かりて置きわすれたる錆び鎌に立つ白霜ときそふ白ぎく

◎枯野　埼玉　田島はるかせ
早馬の武士猟り過ぎ行きし枯野の末に月ほのめきぬ

◎枯野　下野　神山ふみ子
よろ／＼と芒かくれをゆく水のあらはるゝまて枯れしむさし野

◎虹　備前　重松竹子
雨はれてあそへる子等かあれ／＼とゆびさすそらに虹たちわたる

◎枯野　千葉　石橋たか
星一つ流るゝ見えて枯野原そよぐ木の葉の音の淋しさ

◎枯野　神田　千鶴子
枯尾花闇邊になびく顔みえて月影寒く野狐のなく

◎枯野　北海道　持田はる子
兵士の砲音たかく月くらく尾花枯れゆく石狩の原

◎殘菊　札幌　持田はる
里の子を教へてうまぬ大人の庵の垣根の菊の霜に香高し

◎枯野　博多　神代みれの
かり穂つむ馬のいなゝきとくすきてひろきかれ野はからすなくのみ

◎殘菊　山形　木岡喜久
今よりは眺めん花もなきものを心して置け菊の上の霜

◎虹　芝　水野君子
平和なる運命をかけて虹の輪は早くも消えつ村の夕暮

◎枯野　麹町　平井錦子
紅葉せし秋經へて葉は散りて枯野千里はたゞ月のかげ

◎枯野　伊勢　白井きの子
小狐の一聲なきてかくれたる枯野の末に月落ちにけり

◎虹　岡山　しらはぎ
久方の空に懸れる虹の橋天津乙女が下る路かも

◎枯野　美濃　坪内清子
鳥邊野の道を右に眺めつゝ僧と語りて枯野原行く

◎虹　横濱　加賀川花子

さらばとて仰ぐ夕空風さむき易水のほとり白き虹たつ

◎虹　河内　矢守はぎ子

晩稲刈る賤か少女のほゝゑみて虹みる笠に夕日さすなり

◎虹　信濃　竹鼻はる子

あさひ山さぎりの上に虹見えてきぬたうつらむ音のきこゆる

◎虹　高知　高橋ゆき子

かへりくる背子をむかふと我出れば日はくれそめて虹のかゝれる

◎枯野　高知　高橋ゆき子

ものゝふのつゝ音さゆる枯原にこがらしあれてあられたばしる

◎枯野　東京　吉野はる子

かへりゆく馬子の影うすくたそかれて十里の枯野日暮れんとす

◎殘菊　和歌　前川道子

庭の角につかはずなりし井のほとり殘れる菊に霜あはれなり

◎枯野　久留米　飯田しげ子

夕さりて秋風すさふ枯野原人待ち顔に立つ少女あり

◎殘菊　丹後　林　文子

やしきあと見るかげもなくあれはてゝ殘る黄菊にこがらしぞ吹く

◎枯野　仙臺　服部ぶん

山越えて枯野小一里暮るゝ中を小唄なからに馬曳きて行く

◎枯野　伯耆　水上ふた葉

冬枯れの野への石文旅僧の讀みてまた行く夕まぐれ哉

◎殘菊　河内　櫻井喜子

花咲かばかざしにせんと樂みし白菊あせて妹また逝きぬ

◎枯野　河内　櫻井皆子

霜を踏む蹄の響とふく絶えて枯野の末に茅屋見ゆ

◎枯野　河内　櫻井濱子

枯野十里日は傾きて狐鳴きて墓道いそぐ乞食の群

◎虹　長崎　古賀ひで子

降りつゞく雨晴れ渡り大空にいろ珍らしき虹の橋たつ

◎枯野　神奈川　吉田智惠子

ひとすぢの小川は消えて枯野原すさひにすさふ風の聲々

◎殘菊　信州　鉦　子

ほこりかに霜にもあきず菊は咲けど手植給ひし背子は在さず

◎枯野　牛込　牧野照子

ぬき捨てし草鞋が上に霜見えて月影寒き枯野原かな

◎枯野　熊本　松　子

霧わたちるすゝきの中をおし分けてかげもかすかに山法師行く

◎虹　大阪　清野美子

幽の世と天つ御そらの通ひ路か野末に高き虹のかけ橋

◎虹　奈良　林原みつ

七色のいろとりふかきにしのはし誰かためにかもかけ渡しけん

◎枯野　高知　河井つぎ子

いくさはてし枯野十里に月さえておく霜白く狐のほゆ

◎虹　神奈川　高下美子

中空に七つの色をたくみにもかきあらはしゝ神の名や何

◎殘菊　播磨　森島つや

むかし見しみ寺の門はくちはてゝこけむす庭に殘る白菊

◎殘菊　佐賀　坂本直子

白菊の花の盛の過ぐるまで植ゑにし兄は歸り來まさず

◎虹　本郷　秋野露子
久方の天つ乙女もめてまさむあなうるわしや虹のかけはし
◎虹　栃木　川上かく子
むら雨ははやふり過て大空の雲にかゝれる虹のかけはし
◎虹　赤上初子
もみぢ葉のもゆる錦に色そへて峰よりかけし虹の長橋
◎虹　鹿兒島　加藤清子
荒磯に寄せてはかへす大波の波のしぶきに虹見ゆる哉
◎虹　和歌山　守井歌子
いそぎゆく旅路の袖をぬらしける時雨もはれて虹のたなびく
◎残菊　神奈川　安藤信子
あはれとふ人とてもなき伏々家のまがきに残る一りんの菊
◎虹　大和　藤川しも
誰がために雲と山とにかけぬらんいろをこめにし虹の浮橋
◎残菊　人吉　山田早苗子
はつ霜と思ひけるかな山みちの小徑まじりにのこるしら菊
◎残菊　武藏　春田英子
君逝きしあとの園生をさまよへば破れし籬に殘る白菊
◎残菊　東京　興津らく子
枯れ殘る秋のかたみの菊の花霜おきてこそ色まさりけれ
◎枯野　長崎　古賀秀子
枯れはてし冬野の原の霜寒く月のみひとり冴ゑまさる哉
◎残菊　安藝　岩崎芳
香も高くさきのこりたるきくの花亡きつま君に折りてさゝけん
◎枯野　和歌山　守井うた子
霜しろき枯野をわれのさまよへばやまのあなだに狐なくなり
◎残菊　三河　矢富ちか
植えたりし妹はなくして白菊の霜にもめげて尚のこりぬる
◎残菊　岡山　丹後たま子
おく霜とまがいこそすれ門のべに残て咲ける白菊の花
◎枯野　甲斐　矢澤みち子
旅僧の面わさびれて枯野原霜に冴へゆく夕月の影
◎虹
おばしまにたち出てゝみれば我家内向のやまに虹のはしかゝる
◎残菊　阿波　春山とき子
人すまぬ館はあれて霜おきて庭のさむしろ菊ひとりさく
◎虹　甲斐　かほる
虹のはしわたりゆかなんよしもがなわが故郷のそらにかゝれり
◎枯野　飛驒　紫子
かへり行く馬車の轅もたそがれて三里の枯野日暮れんとす
◎残菊　信濃　諏訪あきら子
庭は荒れて木の葉ふりしく我が宿の古井のそばに殘る白菊
◎枯野　横濱　春波女史
枯野十里日は傾きて霙落ちてしぶきに惱む旅人の群
◎枯野　肥前　長井瑞子
ひとすぢの山火は消えて枯野原くらき夜道を馬子一人ゆく
◎虹　青森　北星女史
かけ渡す虹うるはしき夕空を仰ぎ見つゝ行く少女かな
◎残菊　東京　豐田とき子
尼寺の柴の裏戸に咲き殘る唯一本の白菊の花

◎枯野
折々は月あらはれて雲喰し虚無僧過ぐる枯野細道　攝津　山本まさ子

◎虹
天つ乙女虹のうきはしわたるらんながき裳裾の彩のかづかづ　名古屋　彩錦女史

◎殘菊
紅葉ちり霜さへ置くにと歌ひてし妹はあらずに菊は今年も　東京　古里花子

◎枯野
野もりする翁が庵かたぶきて霜がれさむきまくづの〻原　越後　栄野よし子

◎枯野
たどりゆく野の道三里冬枯れて霜より外に見るものもなし　臺灣　小野のぶ子

◎殘菊
冬枯れのそれにはもれぬ庭の面に一本のこる千代の白菊　駿河　眞かれ子

◎殘菊
まれひとに一枝送らん庭もせに殘んの菊の咲きほこりたる　青森　ます女

◎枯野
枯野原横ぎる駄馬のたてがみをなぶる夜風の寒けかるらし　備中　野口琴風

◎殘菊
山寺の脊戸の墓場の片かげに殘るもあはれ菊の一本　越後　高田稔子

◎殘菊
殘菊の花いろあせし山本の寺の尼君あはれと思ひぬ　水戸　寺田かれ

◎枯野
見渡せば雲は流れて日は落ちて枯野を渡る入相の鐘　伊勢　黒田とみ

◎虹
大寺の屋根より空にかけ渡す虹の浮橋尊しと思ふ　紀伊　浦野和歌子

◎枯野
百草の枯れふす野路を夕ゆけばあはれからすの北風に鳴く　京都　宮田のぶ

◎虹
幼兒があれと指さす方見れば夕日の空に虹だちにけり　靜岡　佐野はま子

◎枯野
霜野三里見渡すかぎり霜をきて人目も草も今ぞかれぬる　伊豆　尾崎八千代子

◎虹
こゝにしも天津み神のたゝずみて國見ますらん虹のうきはし　神田　桜栗女史

◎枯野
やち草の咲きにほひにしさまはなくて霜枯れさみし武藏野の原　遠江　佐藤よし子

◎殘菊
この朝げ立ちいでゝ見ればおく霜に殘んの菊の咲けるさびしき　近江　雨宮いし

◎虹
天つ神の夢やのせたる虹のはしそこともしらにたちかゝる見ゆ　仙臺　池田やすえ

◎虹
嶺路のしぐれたやみて夕日さす山のあなたに虹たちわたる　北海道　宮川たつ

◎殘菊
姉君のみ墓のそばに色あせて殘るもあはれ菊の一本　甲斐　高木いと子

◎殘菊
國分寺の跡ときこえし破寺の庭に殘る白菊の花　武藏　秋田よし子

◎枯野
こがらしの身にしむ野べにおちばかく乙女のすがた見ればかなしも　名古屋　鈴木紫雲

◎虹
見るがうちに天つ乙女の渡るらん高くかけたる虹のそり橋　攝津　和久與津

◎枯野
落葉かく翁をまちてや風寒き枯野の中に童女立つなり　駿河　三田秋錦

新體詩

文學士 尾上柴舟君選

《天》 秋夕

信州高遠町大萬壽　守山藤子

影も淋しく一人たつ
秋の廣野に日は落ちぬ
白露は葉に輝けど
草蔭の花色弱き
寂びたる風に聲はなく
黃き銀杏は色あせぬ
靑空摩する若枝を
護るは靑き星の影。
金色の葉は散りそめて
梢はなるゝ小さき實は
つめたき床に目をとぢて
光り待つらし春の日の
秋の夕を野にたちて
くれゆく空を眺むれば
愁の岸に高汐の
滿つるが如き思ひあり。

評、思想幽遠、林調高雅、妙云ふべからず、天となす。

《地》 賣花孃

名古屋木挽町一丁目　奧島ひて子

夕つゆしげき野に摘みし
風はつめたき朝明の
霧の中よりめせ〱と
市に花賣る乙女子よ
神のつくりし花賣りて
塵にさすらふ市人に
高尙き慰籍あたふべく
汝は花うりと生れけん
籠にみちたる秋草の
花紅の色深く
にほへる頰の幼さは
さながら神の子に似たり
天使のごとき汝をこそ
神うつくしと思ひつゝ
その暖かきふところに
とはに安けく守るらめ
されど野に咲く八千草の
中にまじれる戀ぐさは
摘むことなかれもしつまば
神は汝を見はなさん

評、淸麗溫雅花の如く玉の如し、地たるべし

《人》 水の曲

宇都宮淸住町八十橫操方　坂本まつ子

夜のまの露と生れきて、

苔に育ちしいにしへは、
塵にあくたに埋もれて、
消えんとせしも幾度ぞ。
あくたを滑り塵をいで、
清き谷間に降りたちて、
いく同胞を得てしより、
世を脱れんとかたらひつ。
岩きりとほしやまをぬき、
瀧とくだけて霧と降り、
憫捲きたちて諧ひつゝ、
走るいのちの危うきよ。
はしる汀に咲きいてゝ、
とゞめ顔なる白かれや、
こがれの花を我は見し、
さばれよどまじ長へに。
世の歌人に似たる身は、
雨の夜もまた月の夜も、
しばしの間だにやすらはで、
われは諧ひぬわが歌を。
むかしのわれは苔の露、
きのふのわれは岩清水、
こよひのわれはわたつ海の。
からき鹽路を辿るかな。
今ぞわが身は白浪の、
風ればもとに歸るてふ、

冬　木　立

果なき運命につながれて、
泣きつ歌ひつ碎けつゝ。

評、才情流麗、些の澁滯なきところ猶溪水の海に向て朝宗するが如し、人たるべし

秀　逸

夕の歌

神田西小川町　赤上はつ子

秋風さむき川くまの
　すゝきの路を分け入れば
　　畑のをちに日は落ちて
　　　堤を歸る人もなし

流れなつたふ川舟の
　下る姿をうかゞへば
　　枯れたる蘆はたそがれて
　　　汀の波も音立てず。

あゝ詩人の美しき
　思ひみちたるふところに
　　映るかたちを望みなば
　　　この夕ぐれに似たらむか。

さなりかすかにおだやかに
　乙女の如くかくれ行く
　　光り送りて夕ぐれは
　　　今人の世にのぞみたり

名無し草

佐賀市成美女學校寄宿舍　坂本直子

なみしづかなる順流の、
うしほに戀の舟浮けて
快樂の玉を探ぐる子が、
如何で修なき戀に泣く
ひとの心を知り得むや、

富貴の城にたてこもり、
權威の武器に身を包み
傲れる者が如何にして
嶮き夜路にふるへ居る
人の苦なめ得むや。

千里のこまに才のむち、
加へて走る若人が、
あゝ足疲れ氣もなへて、
路傍のくさに倒れ伏す

ひとの矢車を羨まむや。

うたひと

伊勢宇治中之切町　河原芳子

白羽の征矢を背に負て、
尾上の星の影をふむ、
猟の女神のをゝしくも、
弓弦鳴して勇むごと。

清く尊き魂ゆゑに、
うき身を寓す詩人よ、
胸に秘めたる微韻の響の、
み空影とる幸あれや。

聖き気吹のうたなれば、
永しへ消えぬ神の聲、
自然を活すひめごとに、
奇しき霊音奏づらむ。

花束かざすえんぜるの、
若き神のがゝやきは、
秀才ゆるしゝ神の手に、
かづけ賜ひし命かや。

球の小園をはだにして、
み空かけらふ馬の上、
愛の弱きをわかつには、
矢れよ光栄ある笑みあらむ。

さば、涙ある人の子の、
夢なき運命哀れみて、
暗く明映ななぐさめの
甘き響に酔しめよ。』

景情微吟

信州　春江女史

國生の清水

國生の清水ながれては、
君がみ池におつるとき、
花のすがたの寫るやと、
にごしもやらぬわがゆめ。
中の泉かさひまあらみ、
流れてくゞるその水に、
せめて一夜は身を換て、
君と相見むすべもがな。

湖畔

湖のほとりの藤かげに、
われ只獨りやすらひて、
ものを思へは展けあふ、
青葉も夢に似たりけり。
そもいつよりかこゝにきて、
かの優しき幻影を追ひ、
長き日かげの暮るまで、
思ひにふける身となりし。
ひくき調べにうた誦せば、
片頬の微笑にさも似たる、
小なみ遠く寄せも來て、
懐しき君の影ぞみえける。

佳調

伊勢　岡島　盛子

秋

かなしき時は来りけり、
さびしき時は来りけり、
森は衣を失ひて、
風は木の間に咽くなり、
野も黄ばみゆき山も枯れ、
嵐にたへぬもみぢ葉は、
吹きくるごとにまひ散りて、
鹿の足跡うづむなり、
圍める森のしたかげも、

落葉の丘と辿りゆき、
よろづのものもうたふ聲、
虫の音ならであともなし、

琴

本郷　森田つや子

神世のむかし津の國に
はしき處女のありけるが
詫びて寐ぬ夜の重なりて
つひに病みに臥しにけり

玉の緒今は絶ゆべきを
海に入らんと行きけるが
靜める水にこゝろ消え
渚に伏して泣き居たり

岸の姫松風絶えず
磯うつ浪はほのじろう
月水底に沈みしが
處女は尚も泣きやまず

この浦守る住吉の
神やあはれとおぼしけむ
十緒の小琴を取り出てゝ
處女にこれを賜ひけり

『胸の秘事言の葉に
上ぼす便りはあらずとも
かぼそき指を觸れむ時
緒は思ひを傳へなむ』

離り種

わかやま　めかり女史

み神よ何の戯れに、
遣りましゝか斯かる身を、
人草しげきその中に、
われ一本の離り種。

父は千里の波の外、
遠けき國と聞きしのみ、
はゝその蔭の下露に、
われは乙女となりにけり。

乙女とわれはなりぬれど、
人に見られん姿かや、
思へば赤き顏塞の、
みだれて長き恨みかな。

水汲みやめて姉の、
朝わが身をあざみては、

牛ひきかへる童の、
夕われみてのゝしるよ。

人の指さし笑ふとき、
眉うちふりてそしる時、
若き血汐のみなぎりて、
胸もさけなんおもひ哉。

あゝ世の人のなどてかく、
かくまで我に情なき、
みどりの眼にも清らけき、
涙の露はあるものを。

人なき折をたゞ獨り、
堀川堤さまよひて、
うつす姿の水鏡、
あゝ我が影に泣く身かな。

夕暮林に立ちて

金澤　白井久子

一人ゆくなる秋の野に、
夕へ寂しく日は落ちぬ、
葉に輝ける白露は、
草葉のかげに色褪し。
風は靜けく聲なくて、

枯れて葉もなき黄金樹の、
殘る梢を蒼穹に、
唯だ畫かきたり星の影。
枝をはなれて紅葉は、
根に歸りけり小さき實は、
床にねむりて幸の、
光待つらんあすの日の。

林に立ちて夕暮を、
あふきみすれば星の海、
岸によせくる永遠の、
波の音低く定まりぬ。

暸雲

白百合

嗚呼美しき夕雲や、
空飛ぶ鳥のかげ落ちて、
西の端山は七色に、
思ひ思ひに散る雲の、
綵彩どる夕日かげ。

神通自在の翔して、
何處ともなく翔り行く、
雲のあなたぞ懷かしき、
浮世の海に覊れざる、
光はそこに照るらんに。

あゝ雲よ雲よ心あらば、
我を翅に輕くのせて、
けがれ穢れし人の世を、
逃れいでゝよ空遠く、
清き光のある處へ。

暴風

東京 吉野春子

千草に渡る金風の
露ふきこぼす夕まぐれ
日脚短かく野の寺の
木魚ひゞきて暮れにけり

闇を領する夜の神の
風を頒り雨を射て
枝を劈き梢折る
あらびの響きの凄まじや

五更の鐘は水に落ちて
寂滅爲樂と響くなり
流星江に落つる時
冷たき風はすさむなり

滿天赤く東海に、
旭の光浮びけり
迷へる雲の一縷は
碧空が中にたゞよひて

懸風慘憺天くらく
一眸十里野も山も
たゞ荒涼の原となりて
無絃の琴のみ微かなり

秋思

長野 鈴子

行くてはるけき人の世に、
なやみは多しその岸に、
かすけきのぞみ消れども、
靜にものをおもほえば、
ありとしもなき此身かな。

あゝ頼みなき現世に、
戀もはかなし破れては、
何慰のひあるべき、
暖かなりし血も冷えて、
なげきの息の深きかな。

それよ此世は夢に似て、
たのしき春は只一時
悪よ。惱みよ。苦みよ
これのみ盡きじみな人の、
都に入らんをはりまで。

あゝふる里に秋たけて、
我父老いぬ母老いぬ、
老いし父母くびのべて、
身にはにしきを着て歸る、
其對のみを待らんに。

失意に泣かじ戀を見じ、
月もふけゆく丸窓に、
むし聲高くかぜきよく、
桐のひと葉も飛ひ落ぬ、
長夜の夢をさませとて。

滿足

東京　古里花子

銀河は白く月は落ち〳〵
きらめきわたる星の影
幾千万の其の中に
殊に輝くその星よ
高き希望の輝きか

冬木立

愛の光明か
問へば彼の星笑ひつゝ
しづかに下りぬ我が傍。

なこなる汝がおもひ故
希望はいかに高くとも
永は理想のまゝならず
見ずや幾多の青年が
運命の夢に苦しむを
たとそれ人の一生は
その運命をばつかさどる
神の心と知らずして。

愛の女神は消けれど
伴ふ悪魔を如何せん
見ずや數多の少女子が
うき世の戀に苦しみて
無情と天を恨めるを
こも運命とは知らずして
希望のいかで輝かん
愛のいかでか輝かん。

我は希望の星ならず
はたまた愛の星ならず
運命なりと世を知りて

（七八）

希望にふけらず戀に泣かず
神の定むる運命なれば
喜び持ちて世を送る
人に光をわかつなる
我は滿足の星なるよ

見よやまがきの朝顔を
果敢なき運命も喜びて
朝な朝なに咲き出づる
されば夜毎に我もまた
下り來ておのが光をば
淋しき彼女にあたふなり
はや曉も近づきぬ
いまやあたへて立去らん。
いつしか星の影はなし
夜はほの〴〵と明けそめぬ
見ればまがきの朝顔の
くれなゐ、水色、濃紫
色いろ〳〵に咲き出てし
清く美しき花の上に
ルビーか非ずサファイアか
非ず輝く露の玉。

くれ竹

河內　安尾歌子

老ての後の友にとて
　なちのみことか植ゑましゝ
軒のくれ竹としとしに
　みどりもふかくすくよかに
いや生ひ榮えひこはへも
　杖にきるまでなりにけり。
植ゑにし人は空蟬の
　もぬけのからとなりぬるを
知るや知ずやなりくに
　とざせしまどをうちならし
音づるゝかと聞ゆなり
　あはれなち君世にまさば
いかによろこび愛まさん
　月影しろき秋の夜の
長きうらみはさえかてに
　葉末に置る白露も
涙の玉と見ゆるなり
　よみをなつゝに行還ふ
死てのたなさの夫ならで
　はかなく聲も聞えなば
せめて思ひの一とふしを
　笛に調して吹ならし
笛にきりとり調しつゝ

行く秋

ゆのかきりすさひてん

伊勢　神尾政子

虫の音ほそる秋の野に
置く霜繁くなりぬれば
千草八千草うつろひて
もゆるにしきは夕嶋山
思ひ入る日になく鳳の
秋は深くもなりにけり

げに行く春の夕まぐれ
花に別れを惜しみしも
森の下かげひとりして
老ゆる青葉を嘆きしも
嗚呼今にして思ほへば
さむるにつらき夢の跡

それよ果敢き少女子の
世の憂き運命侶びては
常に悲しくうなだれて
病るに似たる秋の眞の
寂し面わにたゞえたる
寂しき笑のなつかしく

一人やらんは何となく
こゝろほそきを秋姫よ
つらき運命の襟よけて
暫時別れを惜しまんに
去り行く君な厳すには
恨みや袖のひろからぬ

泉

東京　興津らく子

ひとりすみつゝありへんか
　くむ人もなく埋れん
おちてうき世へいづべきか
　濁らむ末やいかならむ
定めかれたる庭ひなば
　知るやしらずや月影の
打ほゝゑみつのどやかに
　遠き空よりさしのぞく

かりの宿

河內國　大矢たね子

ふる里こふるこゝろより、
　かりの宿りのうかりしよ、
厭ひなからも十かへりの、
　月をはこゝにながめきぬ、

はゝ君きぬをぬひたまふ、
　くらき燈のそのもとに、
　　うつゝに殘るふるさとの、
　　　山のすがたも語りしよ、

空はしぐれておきの夜の、
　定めなき世のさまゝくや、
　　をち檐こふるうたかきし、
　　　ふすまもそこに殘れるを、

ふる里さしてかへるべき、
旅ならなくにうらうへに、
　なほ遠さかるしらくもの、
　　行方のそらのつらければ、

はしをわたりて松ばらの、
　はなれはなれてゆく川の、
　　日あしみじかき渡し場の、
　　　つゝみの柳いくかへり、

いまはとばかり菅笠を、
かたむけながら見返れば、
すゝきになびく夕ぎりに、
それかと見ゆる家のかげ、

紀元節

長野　山下勝子

籬邊の梅花三五點、
九皐の鶴唳二三聲、
色高潔に花薫し、
調高亮に聲響く。

森羅威嚴の感起り、
萬象歡喜の情をひく、
普天恩賜の露充ちて、
率土めぐみの風起る。

夏尙寒き石狩の、
川の流も春暑き、
新高山も榮え行く、
君の御稜威を歌ふらん。

嗚呼帝國の紀元節、
皇祖即位の大節よ、
日章國旗ひるがへり、
歡聲高し四千萬。

月

神奈　中島みね子

月よ知りてや在すらん

櫻花さくにはもせを
朧に君がてらすとき
はしき乙女が手をとりて
とひつ語りつうれしくも
こひにふけにし春の夜を
月よ知りてや在すらん
木枯すさぶ墓ばらを
凄くも君がてらすとき
我を見すてゝ入りにたる
我が妹のはかにいつきつゝ
涙にあけし冬の夜を
空行く月よ我はしも
すぎにしこひのかなしさを
君に向ひて歎けども
こたへもあらずなつかしや
よしや答へはあらずとも
なつかしき哉月の君
こひしき妹の今の身も
君の宮居の人なれば

抒情文

塚越停春君選評

（甲　賞）

臨終

本郷通り四ノ十六加賀屋方

齋藤はな

閨の板戸を洩る風を寒み、枕邊近うさし入る月影ほの白く、梢を拂ふ風に、あへなく散る木の葉の、はら〳〵と雨戸を、うちし音も、はたと止みて、靜けき夜の水にも似て、あたりは只森々と更け渡りぬ。

とても長くは保たざるべしと、いと氣の毒げに云ひて歸りし醫師の言葉に、いたくも胸を打たれながら、病衰へたる妹の面わを眺むれば、今更乍ら變り果てしものかな。

彼の微笑む毎に齒の見えし頬は、哀れにも殺げ盡し、其林檎の如、紅なりし色も全く褪せ果てゝ、只昔の儘に房々とせる黒髮の艶はしきが、四五本痩せたる顔に懸れる樣のいたく〳〵しさよ。

兩の手を乳のあたりに確と押えて古への賤の苧環繰返せば、定めなき世のさまの悲しさに、心はあやなくも亂れそめて、只双眼より熱き涙のはら〳〵と滴るのみ。

夜は寂寞として幾多の秘密を包みながら、闃然として更けわたりぬ。病める妹は、如何なる夢に襲はれけむ一聲高く唸りしが、又すや〳〵と眠りにつきぬ、折々、またゝきし燈火も、いつしか死せる如く、細くなりゆき、四邊暗慘として、何とも知れぬ怪しき氣の、いづくよりか、此室内に襲ひ入るにも似たり。

なにとなく心後るゝまゝに、妹が蒼白き手をさすり見れば。――あな――あはれ――妹は遂に此世の人とは思はれざる程、いと冷かに冷かに冷え果てたるなり。我眞心より湧き出づる双眼の熱き血の涙さへも、妹の腕に濺かれては、次第に凍りゆくかとも怪しまるゝなりけり、あゝ妾が妹は。天にも地にも唯一人の同胞は、今や其の左の手を死の神の手に固く握りしめられて、無慘にも、果敢なき最後を急かれつゝあるなり。妾は、ひしと妹が冷かなる手を握りて見つむれば、幽かに〳〵に開きたる眼に、妾の在るを認めけむ、唯淋

しげに笑みて、又も眼は、固く閉されぬ。蒼白き死の色は、已に手足を染めて、今や今や顔に迄も！、――――顚より唇に、頰に、額にと。かくて死の神は妹のみ靈を、其笑める唇に殘して、遠く彼方に。

評日。讀み去り讀み來る、陰々として鬼氣の室に滿つる如き思ひあり。

（乙 賞）

紅葉

名古屋木挽町六番戸 奧島ひで子

君十歲、われ九つ、われより一つの姉さまなり。秀さま。と聞き馴れしこゑ、はた〳〵と小走りに、優しの小さき足音は近よりぬ。はや來ませ、此處なり。とわがいらへは遲し、すでに傍に立ち給ふ。

壺のうちの山茶花は、時雨をさそふ初冬の寒きより持ちて、幼なかりし蕾を、きのふ今日の小春日和に、やう〳〵破りそめつ。

その小春の暖かさ、わきて午すぐる頃の日影は、きら〳〵とげに春の日かと思ふばかり、心地よく照らす椽の日向に、母上はわが琴の溫習會の晴衣を縫ひ給ふを。いまわれは寄り添ふ如く座りて、小さき布切れに小石包みたるを、高く、低く、右に、左にうち振り、五ついこしつゝ唯ひとり遊び居りき。

五ついこして遊ばんと、ちんけんに君は石、われは鋏われ負けたり、椽に上りて相向き合ひ座り給ふ、君が稚子髷に、深き紅のゆらぐを認めつ。

美しき紅葉よ。とわれは言ひぬ。母上も、美し。と……

……。

芳さまの家の庭は、わが家のより廣かりき。われは紅葉を貰ふべく來にける。いく夜の霜や染めつらん、楓の一本くれなゐの露志たゝるが如く。君は小枝を折りて、わが垂れ髮に挿して給ひぬ。何にまれ君と同じやうしたきわれは、いかに嬉しかりしことよ。

もと葉枯れし萩の垣ねをよぎり、菊の花壇に出てぬ。若楓なす小さき柔き手はいつしかとられつゝ、聲涼しう唱歌の節、『青葉しげれる』にてはあらぬやう覺ゆ。黃に、白に、赤に、花の間を飛び舞へる胡蝶を捕へんと、われは走りよりつゝ何に躓きけん、轉とばかり其處に轉ひぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

まばゆき夕陽は、植込の梢を斜に照らせるなり。芳子の君の家より貰ひて、小瓶にさせし紅葉の一枝、わが机に倚り臥してありし間に、其一葉は揚卷の上に恰もリボンの如く。捨つるに忍びず、昔の栞となしぬ！。あはれ夢なりしか。君は今内日さす都の學び舍に、遠く離れて…………。君とわれと、十をと九つの昔に返るとの得ましかば…………。

評曰。筆致清麗。意趣可憐。靄若として掬すべきものあり。

（丙賞）

默念

長門萩奥玉江　岩田章子

飢えし梟の叫び一聲、夜半の片破れ月落ぬらし、殘んの光、美しう窗に映らうよと見えしが、そも暫し、軈て蔽ふが如く暗うなりぬ。霜おく夜か、淋しき枕邊の行燈は、獨り燃々の音を立てつ。折しも、丸窗なる障子の破れを啜る凩のしはぶき、あはやと思ふ暇もあらせで、瞬く燈し火を呑み去り、彼方の衣桁にさら〳〵と衣を摺りぬ。後は只、闇を流れ行く遣水のさゝやき細し。



あゝ、幽か！、寂寞！。默念は暗の夜こそ。

邊り靜けく更けて、烏玉の闇徐ろにわが身を包めば、想ひは、宛ら糸と繰り出され、望みのふし、樂しみの節、もぢつ。縺れつ、遂に醉へるが如きわが心。そこに聲なき聲を聞き、影なき影を見る。

そは何？、そのまぼろしの聲や、そのまぼろしの影や。

言はじなと、溢るゝ笑を堰き止めて口を掩へど…………いかにせん。暗に聲あり…………ながし思ふ人⁉うるはしき人⁉

評曰。語簡にして意長し、心そらなる妙齡者の樂意を狀して、情景躍若。

（秀逸）

婚禮の前

和歌山　前川みつ子

何れの世にか人の親の女もちたらんを願ひけん、果敢なくかよわき身のおのれさへ木のはしのやうに覺ゆる

に、まなびやへの通ひ路に七年八とせの年月さへ夢のごと過ぎ行きつれば、花によそへていふらん俤もふつとなくなりにしを、いかなるよそ目にしも心にくき所を見えけん、家刀自となりうしろみ給ひなんにはいかに本意ならん、とつ國人の云ふらんやうに美しきおのが半身としも頼まんなど、せちに聞え渡らるゝ君ありと母君の傳へ給ふ、その思ひより給ふさま異なる心ばえの程も怪しきまでふと覺ゆるやうなるに、かつはあはれに憎からずあれど、いかでかはまほにえ打ちも向はん、何ともいらへですべり出てしまひに昨日と過ぎ今日とくらして、飛鳥川の早も思ひ定めつらんと今將たせめてそゝのかし給ふ、何事もうらなくものする日頃こそあれ、例のふし目にのみなられて胸つぶるゝわざなるは、おくれ毛のそよめきにもさとは知られなんかじ、いと艶がり物耻のみするよはひの程にしもあらぬをいかでかくはおほどき子めいたるぞと、あやにくに兄君さへ傍に來給ひてことと加へ給ふ、いとくるし、後の御心も身に一つの仕出てたるふしもなきに、さださへやゝ過ぎなんとし蝶鳥もすさめぬかたちなれば、餘り人のかたじけなさに覺束なくたどられずしもあらず、人

のさなゝりと見給はんも物やさしさは尙ほえなん堪ふまじかりける、されど物げなかりし程に父君を亡ひて後は母君一人の手しておふなくかくもおほし立て給ひしを、今も情なくのみさてなしてうべなはざらんにはいかに心おちゐぬわざと、さしもあるまじき事につけてだに涙もろなる老の身にはなげき給ふらん、そもいと心ぐるしくいとほしければなど心一つは庭に散る木の葉としげく思ひみだる、誰が袖たずぬるしぐれの雨か、さと硝子窓に音づれて、色づく梢に木のみ搜れるなえ鳥の一聲を籬になき捨てゝ行きし行方の末は何所かその末も知らじ、今もしらじよきにかへし聞え給はなんと聲いきの下に引き入れられつゝかつ〳〵いらへしは、いと程へて後のことなりけり、山のちごのかい餅するに空寢入りしけん昔にも事のさまの似通ひたればいかにはしたなくをこなりと顏見合せてほゝゑみ給ひけん、そも仰ぎ見ねば知らず、かくいらへし一言にあやしくおのが浮きたる宿世は定まり果てゝ、調度やきぬやと家ゆすり今更なるいそぎにかゝづらふ程に、年立ちかへり松竹に引はふるみしめ繩の長き君が代祝ひつゝ訪ひ來給ふ人達の中には、わざとならぬ顏づくりを

も誰が爲にかなどかすめいひ給ふもあり、さるは何所の口さがなき人かいひふらしけんとゆゝしく妬くて、ひたやごもりにかくろひにしが、月日はこゝにもつれなく巡り來て契りおき給ひてその日はあはれ明日とぞなりぬる、二十年餘りをなづさひ來し家に過さん日はたゞ今日の一日のみぞと思ふだにあるを、何心地せん、まなびやにいかめしき試驗あすはといふ日も胸ときめきしかども、今日の今の耳鳴り目くるめくやうなるに比べてはまさに物の數ならんや、こゝにたとへば金剛の山の四つも五つもあらずが目の前につと峙ちたらんやうにもおぼえ、舵緒絶えたる小舟に乘りて荒海にさまよひ今に鬼の棲むならん國に吹き寄せられんの心地してむくつけくおそろしく、物げなく大路立ちならす人さへいと〱羨まし、さりとて世づかぬ女のかゝらば皆がらかゝらましをなど思ひなりて、はつかに心慰むるもあへなしや、道々しき作法さへはゝ君のけ近くねもごろに教へさとし給ふを、心入れて聽きしものから、おのれと思ひよらんとすれば、こゝ元に覺えながら出ても來ぬはいかにぞや、あなあはれ思ひやりとなること無き窓の内に人げなくとも獨りすみして長閑に世をあり經んと思ひ定めし昔のまゝにあるべかりしを、かゝる物思ひしらぬ程の追羽子や鞠つきやと、此の名にし負ふ睦じ月を笑ひさゞめきぞ中々に戀しきや、あなあはれかゝる時にも倘ほ文見るにこそ萬の事忘るゝわざなれと、枕守る火影に机の上なる手に任せてとり出づれば、今は亡き叔母君が手づから寫しておくり給ひたる伊勢物語なりけり、此の程は妹に貸しつるなればそがすさびにやしをり物せし所あり打ち繙くすなはち、あな覺束な明日の夜のことゝいへる歌のふと目にとまるもいとをかし、ともすればあらぬゆく末の事さへそこはかと無く思ひ浮べらるゝほどに、隣のちごの寢おびれて泣く聲聞ゆ、さはれ子うまんには男子なれかし、女子はいといふ甲斐なきものよなど、引かへして雄々しくさだ〱と思ひなるも、かつは物狂ほしの此の一夜やな、額髪に手かいやればしとゞになれる、汗のわざにかあらん、涙にかあらん。

評曰。穩平なる文字の中に、眞情の躍若たるものあり。深窓の處女が婚禮前一夜の狀、情けに斯くやと想はる。

墳墓

仙州　蓬萊女史

あゝ墳墓は悲哀の標榜なめり、寂寥の化現なめり。

夕陽既に虞淵に沈み、暮色蒼然として襲ひ、何處ともなくゴーンと一聲鐘の音のひゞく夕、累々として立てる墳墓の下白張の提灯、破れしまゝ悲しげにそを守れる處を彷徨へば、誰か冷たき石碣をなでゝ千行の涙にくれざるものあらめやは。

あゝ墳墓もとこれ頑たる一塊の石、はた一杯の土のみ。さはれそが下には老幼男女のへだてなく、或はその胸裡に戀の炎のもえたりし少女もありなむ。あるは未だ世の荒波にもまれざる稚ゐ兒もありなむ。あるは殘衣颺る宮城野に鳥をたてゝ落花を弔ひたる英雄もありなむ。あるは一刄の下に君主を弑してもろくも粟津の露と消えし武士もありなむ。貴賤貧富の別なく、死すれば同じく苔の下露、おなじ枕に夜をふかみ、おなじ雲井の月や見るらむ。

月朧ろなる夕比翼塚に一枝の花を手向け、一片香の煙をたきてその亡き靈を弔はむか、あはれなる聯想はむらく\/と胸に起るべし。塔影冷かにして地に印して黑く、落葉片々として墓頭をうちて聲なし。あゝ蒼苔滑かなる奥都城のもと、戀にやつれし男女の、いかに相愛の情思をよせて安らけく眠るらむか。墳墓間へども答へず、答ふるは峯の嵐か。知らず、彼等が現世にて願ひしあの世の戀情は、地下に成功して、相笑ひ、相語り、相慰め、以て互に相樂しみつゝあるか。あらじか。

さはれ戀しき親はかこてども、親しき友は叫べども、はた又懷しき同胞はなげゝども、また歸らぬ此の墳墓の、はては何處にかつゝくらむ。落花の雪にふみまよふ都の空にも、手向けの鉦の寺々漸くおさまりけるものから、あはれ死の神はそが冷たき手もて、明日は誰が身をさそひ行くらむ。弔ひし人の弔はれ、見舞ひし人の見舞れて、いくその涙をくりかへす、げに思へば流石はかなき極みになむ。

つらくも果敢なきこの世の、波風あらきにえ堪えて、そゞろ越し方行末のとども思ひ浮べ、獨り墳墓の畔に佇めば、千々の思を惹く暮の色、吹くは亡き魂をみちびく風の音か、と見仰ぐ空にたかき星影一つ。露か涙かはら\/と色褪めしわが顏に!!………。

評曰。宛として一篇の無韻の詩。

忍ぶ草

芝區南佐久間町二ノ一ノ七　椎野榮子

此月夜!。此景色!。何が故に斯く吾が袖を濕すや。

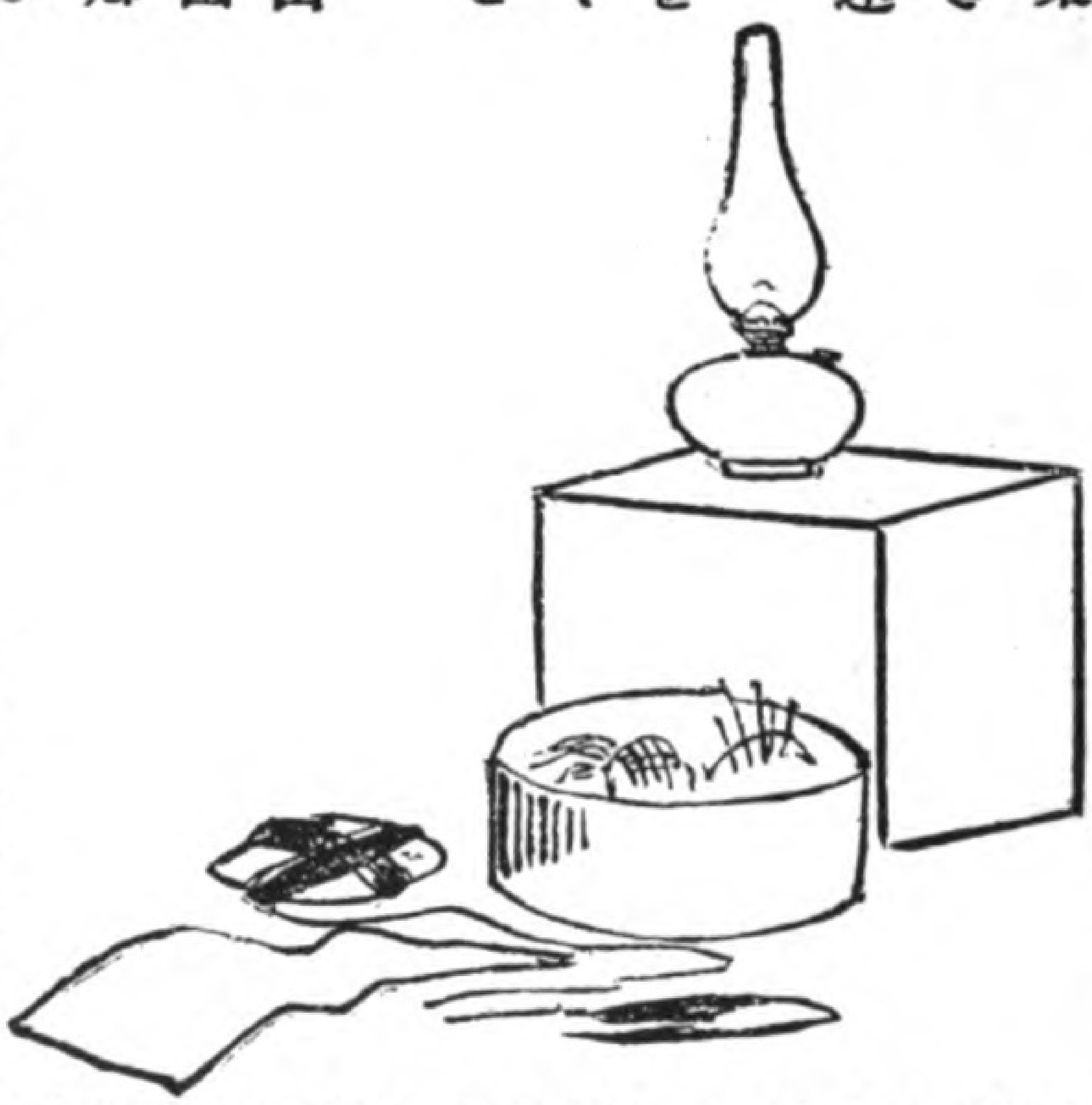
何が故にかく吾か心を悲しましむるや？
われの愛慕せる君はやをら立てり。吾の心柄にや、さらば!!!と云ふいと悲しげなる聲は、彼のいとゞしく噤める口より出てゝ吾の胸を穿ちぬ。

彼の君の麗しき口より出てし言の葉の、吾に別れんことの悲しげに聞きしは眞にか、あらず、さては吾心の迷ひなるか。

されど〳〵彼の君の別れに悲しみを帶べる詞のなどてかく吾のうれしく聽取りしにや？。吾は此間の消息を深く語るを恥つるなり。

此愛慕せる君は、先つ年物學びに出し後。都に上り、學の業をとある學園に修め給ひしが、凌ぎ難き暑さを郷里に避けんとての道すがら尋ね給ひしは、吾の病を父母の膝下に養ひ、再遊の地をかたらへる折なりしよ。

思へば十年の昔、吾は我父の從弟に當れる君が家に寄寓なしが月に叢雲花に嵐、逢ふは別れの始にて果敢無くも別るゝ時幼心にも悲しくまたの逢ふ時を尋ねぬ。



彼の君のいふやう。岩にせかるゝ瀧川の、分れても末は逢ふ例、まして馴れにし故郷なれば、君かへりませ。花咲く朝、月照る夕、共に手を取りて、今日の悲を夢幻のそれともなさんにと。

さるを、君かへり來し今、吾病みて茲にあれど、君は再會を喜ぶ色も見えず、昔の言の葉に露をも置かず、今日一度の訪づれはし給へど、親しき一言をだに交へざる恨めしさ、又悲しさ。吾は唯一言の餞を贈りぬ。言葉は少きも吾心の思ひは深く籠れり。

君が行く百里の山河を隔てし空、彼地を照らす月の影、光はこゝと變らねと、今日別れては炎陽の夕を待たぬ朝顏の何地の露と消え果てんも知らず、またの逢瀬は賴むべからず、などて涙なきを得んと、濱の眞砂の數ほど思ふ我心の一をも君知ろしめすや、あらずや。君の此地を去りて其が母を訪ひ給ふてふ廿日あまり四日と云ふ日は、愈夜一夜、日一日に近づ

きてあはれ今日の月も西に傾きぬ。
翌くれば海いたくあれて君の待てる舟來らず、日延となりし其間よ、我は遂に都に上ることに決し、善は急げの其ならで八月二十六日と云ふに、あはれ吾は東の都に空を眺めて君が再上を待つ身とならんとす。君や我心に思ふよりも深き心のありやなしやと、後髮引かるゝ心地し見かへる眼に露の結ばれ、見上る空に連雁數行、鳴きつる聲はかすけく聞くを得たり。飛び行く雁に比翼の羽はあれど、吾行く路に連理の木なし。湧き出る煙のなつかしき山、戀しき森の上を掩へる隙より、朧に見ゆるは君が宿れる家か、其かあらぬか一人影一つ、呼べど答へなし。悄然として座す舟中の一小室!!!。茫然と手を拱ぬき思は深し海底十里!!!。
斯くて夢に遊びし花の都に文學ぶ身となりし吾、またもや九月の半より病にかゝり、醫師の勸めのまに〳〵、江の島の客舍の病床に空しき夢を結びしより、音なふ者は稚兒ヶ淵の怒濤と、鎌倉山の嵐とのみ。戀しき君はまたも都なる學の園生に美はしき花を手折りつゝ、こを知らてか、將た知りても他所に見てしか。
嗚呼夜毎に置き增る霜に弱りゆく虫の聲々、よどみ勝なる十月の空。新月缺けてさやかならずと雖も、光り銳くして劍の如く、吾胸を透して物あはれなり。只さへ來し方、行末思ひつゞけられて、置く露しけき病の床。一穗の青燈冷にして埋火白し。欄によりて眺むれば、天地寂として眠り、萬籟閴として聲なし。醒めたるは只月と吾。氣息つくは只風と吾とのみ。

評曰。文字に生硬なる所なきにあられど、其生硬なるの所却て嶄新

ある夜

下谷區二長町五二　嵯峨淑子

いね難き夜の思ひは思ひと辿りて夢もならねば窓かなた此方と打ひらきおばしまに倚りて都の夜を詠めやる、まだ宵ながら賑々しきはた煩らはしき兩劇場のあはひなる此わたりはさながら鄙の町にも似たる寂しさ見渡す空淸らうすみて淡鼠の色に向ひなる會堂の屋根のほとりに白雲一片からう浮べり天の河白うきは立ちて銀の砂子まき散らしたらんやうなるみ空の星の數々、まだ幼かりし折よ從妹に敎へられてそれとしりし光彩に强きは宵の明星とや今宵もあざやかにてねむの葉陰よりさしきらめく若うてうせし色しろう髮つやゝかにふくらかなりし美はしき從妹もこの數ある中の一つと

なりてとはのよろこびつきせざるのみ空より家世を見下しおらずやなど思ふに其人いとこひしうて。

本郷臺のあたり燈火あまた打連るはゆ比濱にて望見ける北坪の海の漁火にも似て近き庭のおもは只靜けく彼方ともあなたともなう秋を悲しむ蟲の聲々絶々なるも折につけていとつき〴〵し木立暗う繁れる小山に颱に露立ちて萩紫苑桔梗なども壹の艶なる俤なくそゞろに物あはれなるけしきいとをかし花ちる春の夜の艶なる空には比ぶべくもあらねど露の色風の音蟲の聲萬づさびしき秋の夜の思ひはいと清し、梢の方いたうひろごりて團扇の如き形せるもみの老樹のまに輝く電燈の光新聞うる子が鈴のひゞきすべて靜けき趣味をそへて折々轟く人車の轆轤たる音のみこの寂しき夜の沈默を破りゆく。

哀れ彼車のぬしよ美しの人か恐ろしの人か利の爲に走るか情の爲に急ぐか家はしらずさはれ高くかなしきめしひの流しゆく按摩の笛の聲よりは心よからず哀れならずきかるゝはいかにややう〳〵ふけゆく夜の風の單衣きの領にひやゝけく當るをも打忘れて何とはなけれどうせましゝや時めき給ふや樣々の友垣が身の程はさては又我身の上を思ひて立つ池の鯉二度三度躍りぬあすは雨か覺束なと妹をかへり見れば先頃まで騷ぎ居ける渠女はいつしか夜の物引かつぎて華胥の國へと旅立ちぬかすけき呼吸の紅薔薇のやうなる小き唇より洩れて。

評日。取り出てゝ言ふべきふしはあられど、筆の運びも想ひも清らかにて、雨後の新月にも比すべき趣あり。

あるあさけ

しら菊

よべの雨名殘りなうはれて、大空にたゞよふ雲のちぎれもなし。今日幾日熱だになく病いと怠りぬれば、妾はいともうれしくて、黄なる羽織をとりて、久しく馴れし三號室さまよひ出てぬ。よろめく足ふみしめて、ゆくえやいづこ、山に野にはやあくがれたき我身かな。やう〳〵池の水きよきあたり、秋草の露しげき邊り、我にもあらであくがれつ、露の玉の朝日に光る草むらを、同じみどりの小蛙とびたち、水の面より吹きおこす風の扱あたゝかき事よ。例へば、世はなれし山里より、はなやかなる都にいでたらむ樣なり。

かくてなほ木立深うわけ行けば、料らざりき彼方の橋

ぎはに人あり。しかも束ねがみ少し亂れたるやさしの少女なりけり。妾はかの少女を知れり、そは隣室の患者の妹君なり。うれしうて走りより、「君よ、などてひとりこのあさけを庭に過したまふにや。兄上の御上いかゝ在すらん」といへば、少し赤き目に强ひて笑うかべつゝ、「早やそゞろあるきだによき御身こそうらやましけれ。我が兄は、兄、妾は實に明日知れぬ命にて侍り。餘りはかなさに只ひとり眠る間をしばしこゝに越しかた思ひいてゝ」と、えたへてや聲たてゝ泣く。

餘りあはれさに言葉もなく、妾はたゞ「さな歎ひ給ひそ只心こめてみとり給へや」とのみ彼の女の脊さすりつゝ。

日の光り斜にうけて、彼は語りぬ、「げに妾は世に便らん人もなし、父なく母なき我、只兄上のみぞ杖とたのみ柱と便りぬ。兄上はいつも妾にやさしく、いかに失望し給ふ時も、いかにうれしき時も、未だ妾を忘れ給ひし事なし。今は昔都に畫まなびたまひて、業ならずむなしく鄕にかへり給ひし時も、只妾をいとしう思ひ給ひ。曾つて都に物まなびし時、雨の日も雪の日も日曜としいへば手たづさへていづこかゆく。あゝやさしかりき我兄上、兄上よ、などて妾をば捨てゝ死のみ國に急ぎ給ふぞ。世は無情にも兄上の技倆を捨てき。人は皆四年の業を笑ひぬ。されど妾はいつも其成功を期しゝなり、其成就を待ちしなりき。聞きたまへ同情ある君よ、我兄上はますく多年の望みの一もかなへて、今や土に埋れんとす。母上いまさは……。父上おはさば……。兄上よく、今しばしだに世にましませや」とひた泣きにぞ泣く。あたりに人ありとも見えず、心狂ひしにも似たりけり。

妾いふべき言葉知らず、共に泣きぬ。共に淚拭ひぬ。折しもあはたゞしう彼よぶ看護婦の聲。彼は遂に走り去りぬ、裾をけたてゝ。

その時よ、木立俄にゆらきて、颯となく風颭さむし。

評曰。あはたたしう看護婦の喚ふと云へる一句、全篇をして活動せしむ。

賞外佳章

悲しきしらせ

伊勢 河原芳子

このわたりにてはさばかりいみじともおぼえさりし暴風雨の聞くも魂消ゆるほど狂ひ廻りしとよまいて海嘯さへ襲ひ來し處ありて目もあてられぬ有樣なりとのしらせありたるにか弱き胸の得耐えぬまでうちおのゝか

れて黑煙り雲嗔れむもむならぬ突嗟の間にも先づ思ひやらるゝは友の上なりけり。

聞けば幾百千の人命は風と水とに奪ひ去られ幾十萬の家宅は見る影もなくなりはてたりとか中には母の手より掠められたる幼兒もあらむ抱かれしまゝ攫はれしもあらむ子のみ助かりて父母を慕ふもあらむ兄弟の慘死を救はむとて共に流れしもあらむ共に壓せられしもあらむ樂しき家庭を形作りて初産の紐ときしまもなく一家忽ち此の慘災に遇ひしもあらむ思へる人に嫁ぎて暖かき光明に浴したるまもなく夢は忽ち地獄の底に落ちてあえなくなりしものもあらむ木に壓せられて骨砕け肉やぶれしもの風波濁流に取捲かれて溺死せしものなど千狀萬態の我が同胞は皆一瞬間に慘酷なる死の宣告を受けたることよ

後に殘りて重き創に惱み住むに家なく食するに米なきさすらひの人も尠なからざらむたよりなき身の心細さに彷徨さ迷ふわび人も多からむさるにても我が二つなき友はあはれの數に入れりや入らずや。

相州の沿岸はわけて無慘の有樣なりとあるに友の安否如何にか定まりつらむあはやと見る間に山なす波に呑まれて鮫の餌となりしには非るか或は異變前に後の山寺に逃げ行きて安全に大難を免かれたるか逃げ損なひて潰れ家に壓され身首處を異にせし悲酸の最后を遂げしには非るかよしや創傷は輕からずとも危き命を失はざりせば人皆の喜びいかばかりならむ友には老たる兩親あり幼なき妹あり千代を誓ひし夫の君もある身の聟時とて某校の教師に赴任せられしなるにあはれ天變其の地に下りて生死の程も辨へ難き悲しさ口惜しさ其のたよりなき子の成行憂ひて狂氣の如く所嘆を盡し給ふ母君嫁君の心の内そもいかばかりぞまして其の地に出立せし父君夫の君のみ心遣ひへなかなかに推量る可くも非ぬを元の身にて歸り來まさむ日のいつにてかあらむあゝその歸りまさむずるしらせのいつ我が耳に入ることぞや

くだち行く世の人道を惡みて天つみ神の罰し給ひしとも思はるゝ當暮疫の流行はいみじう蔓延し島々噴火して夥しき損害と大いなる慘禍とを殘し靈驗の大火吹靄の奇難辨悲哀の涙乾く間もなきに今又此の大打撃を蒙りて天下騒然たることよあゝ我れ多く言はじ只願くばあはれなる同胞のいたみ少なからぬことと我が友の安全に生存せられつゝあらむことの二つあるのみ。

評日。選者。



秋月夜

埼玉　倉林孝子

障子にうつる矢竹の風にゆすぶるゝ影さへもいと明なるに、そゞろ心をさそはれてはし近ういざり出てぬ。

東の山の端三竿ばかり上りし月影、とぎすましたる鏡の如く、清く澄みたる清麗の姿は、水色の空にかゝれり、其銀色の光りは、見渡す野山に霜とてりまさり、草の葉末におく白露は、玉と見まがふばかりなり、千草のはたをあやなして、月のあかきに織るならん、はたをり虫のこゑたかし、折りしも遠き砧の音、來る夜寒の用意にや、なさけある母の子のため夫のためとにうつらんか。

今し薄墨をもて畫きたらん如き武甲の峯かけて、北より眞一文字に一群のかりがね、なき渡つて余韻長し、さむ風蕭々と袂を拂つて葉末になる

や、月の光ますます親く澄み渡りぬ。あはれ、あはれの月景色や、胸ひき入らるゝ如き悲寥の感は、青春の樂手が感興の糸にふれて、ほの走らん許りの情熱を傾けたらんが如く、一しほわが心を亂すべう覺へぬ。

心なき空の氣色、唯見る人の心から艶にも凄くも見ゆるとか、あはれ今眼の前に悲しき事ども身におわず、兩親は息才に兄弟は親密に、圓滿なる家庭の内に生へる今の我身にも、うら悲しくぞ見ゆる此景を、不幸にしづむ人々のながめは如何に、去る月二十八日の大風雨に、海神一度怒りに怒り、くるひにくるひて、兩の大腕打ちひろげつ大浪するどく陸をのみ去りし其のわたりは如何に。無殘にも呑み去られし輪廻を跡問ふ其人々、今宵彼の月の下に、悲しみにたへて、こゝは我家のありし跡か、我子は何れに今迷ふか、母や何處、父は何れ、いとしの姉や弟は何處にかとまどひ泣くならめ、その人々の悲しみ思ひやれば、そが悲景を見る心地して、たゞたへ難く袂しぼるのみ。

仰げば月影、意味ある無聲のさゝやきに、かなしみの情韻一ふしを語るににたり。

木がらし

下野　神山ふみ子

木々の梢の紫りそめし頃よりいたづきにふし給ひしわが背の君はまだいえざるに、つばめは歸りて、かりはきて、桐の一葉に立ちし秋風の、やがて木の葉をはらう木からしとはなりぬ。

くりやのすみにすだくこほろぎの聲もたえ／＼に弱りゆきて、涙に堪へぬ夜ごと／＼、やれ窓をもれくる月影の物凄く、見かへれば背の君は蒼白き顔の半面に白銀の如き光をあびて瞑目して居給へる、あはれ今更見違ひるまでにやつれ給ひける事よ、過しかりしまなざしもふくやかなりし顔も見るかげもなく衰へましぬ。

あはれふけゆく木がらしよ、わが宿のみは心してふけ、今し病の苦みを忘れてしばし樂しき夢に逍遙ひ給ふ背の君を情なくさましなば、かく涙たゝへて看護する妾を見ては、死するにまさる悲しき思ひやし給ふらむに。

あはれ悲しきかな、くやしきかな、何をれたみの神の手は病をいとしきわがせの君にあたへつゝ、鴛鴦のゆめ暖かなるわれらをいかなれば涙のふちに沈めんとはする、すさぶ木からしむすぶ霜にかれゆくむしの聲をきゝては、はかなき明日の運命をなげきつゝ、空にしられぬ小夜しぐれにかたみに袖をしぼりては、あはれ二人して幾夜か泣きたりけむ。

今にして背の君失せ給ひなば、あとに殘りし妾はいかにすべき、あはれ悲しき狂ひ女ともなりやせむ、ふくな木からし、心あらば病になやむわがやどをし吹くな。

評曰。結句有力。

殘んの月

向島　吉野春子

足穗榮ゆる小田の景色はいまし西の宮に入らんとする日の御車の餘光をうけて晃然たり。塒に歸る鴉の一群二むれの影うすくなりゆく方より暮れそむれば鎌を肩げて郡狀節面白く謠ひくる畷の男さてはあねさむ冠りして赤き襷を綾なし勇まし氣に語りつゝ土橋を渡り行くなど一幅の繪中の景色なり。吹渡る冷風枯し葉に聲する外折々馬子の追分節の消々に聞ゆるのみ。夕日の名殘とどめるとよはた露も消えゆきて勇ましげに軒を突せる里の家々より淡き燈火の二三つ見えそめぬ軒を繞れる小川の水ひとり自然の音樂を奏し機織させてふ虫のいましむるなど何れか秋の心ならざるやは。

夜の神は次第に社會をその靜かな面も淡暗き懐にいだき入るれば遠近の

景色さながら鏡の面の如し、吹き送る風いよゝ冷かに軒近き姫松に音づれて月の女神を慰むる天津乙女の音楽もかくあらんなど思へば恰も天女になりたる心地のせられて心ゆく限りなれば歩むともなくさまよへば甍を露のぬらしつゝ嘻きを偶に辿り来る人の気配する程に雲破れて洩るゝ十六夜の月影下淋しき御寺の新しき木標たてる御墓の前によゝと泣き伏して何を怨むか紛々として枯れし芝生の上に隕す涙の月に輝きて宛然水銀の玉ちらすが如くなり。やがて涕ながらに生きたる人に語るがごとく、やよ君よ年の十とせ睦みし君の数ならぬ我身ながら何事も隔てなく語り給ひて月に花に楽しく月日辿りしに、あはれ今君はいかに見そなはすらむ偶なき我をすてゝ独り遠き〳〵月の世界に。あゝ我も其折供してゆかましものをと幾度か愁ひの翼たなびかせたるよ。

萬里雲へだゝりて明月空しく兩地の情を照して孤雁哀れに渡る夜半、昔は共にこの月に語りし事もありしとそゞろ君の偲ばれて思ひたえなんとする今宵月に向ひて踵をたつ人の心の懊悩おもひやられて我にもあらで立つくせしに、只見る、地に寫る我影の餘りに鮮かなるに驚きて仰げば限なき一輪の月痕、天津御神のにらみ給ふかと思はれてそゞろに犯せし罪の恐しく身を縮め月を拜みてぞ泣きし。

* * * * * * *

五更の鐘は水に落ちて萬籟寂なき夜半ひとり思ひ寐の枕辺にかたむきし月影の松ヶ枝に懸りさやけき光を閨の中まで送れるは如何に浮世の外の悲ぞや。

評曰。文字餘りありて、却て意思の明暢を缺かむとするを惜むべし。

秋の夜友を憶ふ

周防　松村とし

秋の夜ふけて、叢にすだく虫の音、ものさびしく、とぎいてたらむ如き緑月の、するどくかゞやき、窓前の竹の葉の淋しげにざゝ〳〵と、音たてゝ何やらむ、ささやくやうなるも、夜更けたればにや、一しほさえてあはれさいはむかたなく、燈火の影ほの暗うして、餘命幾くもなし、木枯のさと一しきり吹きて、桐の朽葉のへ〆〳〵と、窓をたゝきておとづれたる、荻の下葉の色づきて、さをしかのこゑ、身にしみ冬めきて冴えたる空に雁がねの、行く秋を、うらみてにや、哀れになきわたりたる様、異郷にさすらふ身は、いとゞあはれに思はれてなむ。

秋もかくよふけになりぬれば、思ひなき身だに、袖しぼらるゝを、まいて才學並び秀でし友垣の、露おくれにしを思ふ身には、いたくかなしさの、たへがたくなむあはれ儚なきは人の命なりけり、槿の花、夕の風にちりて、仇し野の露、きゆるにひまなき、此の世のならひなりとはいへ、かくまでにもろきものとは思はざりしものを。

思ひいつれば去年の秋のことなりき、學びの庭に旅立つわれを見送り給ひて、あゝ君よ、逝く年月は流るゝに似て、三年四年は、またゝく間ぞ、決してあしき友になしたしみ給ひそ、錦をかざり給はむことを待ちてあらむ程にと、せきあへぬ涙を抑へかくして幾度かわれを、うちはげまされしは、そも夢なるか、あゝ。

學びの庭に、のぼりてよりも、雨に風にたゞ君が俤の慕しうて、獨り夜半のねざめに、うつしゑとりいでて見るさへありき、さるにあゝ、思はざりしな、一月とたゝぬまに君が悲しきしらせにふれんとは。

追想すれば君とわれとは、ふりわけがみの昔より、親みよくて、日に學びの舎に通ふにも、かたみに手とりかはしてありければ、二人の間つゆへだてなかりき。

光長閑き春の日は野邊に蝶をおひ、落葉吹きまく秋の夕にも、共にさびしき山路に落栗を拾ひつ、雨に風にとひつとはれつ、睦まじきまとゐの

中に、いかにたのしき月日を送り迎へしか、今更思ふだに、いよ／＼その事のしのばるゝぞかし。

暫くうなだれありし世の事ども、思ひうかぶれば、胸ははりさけむばかりに、つきていでくる涙のいつはつべしとも思はれず、いよ／＼亡き友のこひしさまさりきぬ、折しもみ空を渡る雁の音のあはれにて、かれも友こふにかと、あはれふかし。

冬夜の思ひ

佐賀　坂本直子

読みさしたるよべの續きを播かむとて埋火かき起し例のごと文机に向へど今宵は窓打つ時雨の音わびしくて何となう心進まず目はいつしか打ちひろげられたる文の上よりそれてまづ思ひ出ださるゝは懐かしきふる郷のことにこそ。

あゝ思へば遠き故郷の空妾が懐しの父母は幸くいまするかいつぞやの玉章なりけむ今年の秋はげに嬉しの實のり汝が書齋の代も昔にこそまた裏庭の栗もはや熟したれば僕あり次第に送りてむなどと眞につけて妾が身を慈み給ひてのみ言葉子を思はせ給ふみ心の程ぞ迷ひぬるまでとなむ書しや。

散る木の葉の一ッ毎に寒ぅなりまさる此冬天六十路の坂はや中坂に昇らせ給ひし妾が老父母はいまいかに起臥し給ふらむ殊に父上とはうらうへにて体弱く在す母上暑き時は暑し寒き時は寒しとていたづかせらるゝに此頃の寒さには早も火桶を抱きては在さざるか妾が歸れる時の御喜び猶に蓄えし御懐紙に包める梨子など愛しき妹が心盡しの手料に設けむ計の後の茶受けに出ださせ給ふも嬉しき涙の種なれや。

あゝ思へば懐うなりまさる妾が思ひ、思へば嬉しの極みなる父母妹の心あはれ嬉しと思ひ續くれば妾が心悲しく……悲しうと思ふ心の本ぞ嬉しの極みなりけりな様々懐ひ廻らす程に夜や更けぬらむ埋火も白うなりて人の往來の足音も絶えてあたりはたゞ森々と靜まりぬるに宵の間の時雨は又一としきり降り出てゝ落ち葉をたゝく音いとものすごし。

いざと心を取りなほして再び文に向へば紙の面は怪しうも涙の露もて文字さへわかぬばかりにしげく濕はれぬ。（おはり）

雀

和歌山　佐山静子

それの日、已れ朝まだきより、例のごと机によりて、ふみどもくりひろげ、こゝかしこ読み居けるに、いづちなるらん、妙なる聲をかしく聞えければ、怪しうとて、そとそうじおし開きうちて見やるに、日頃めづる竹の小枝に、雀のいとふし面白う、はやしつゝ居るに、驚かしてはと、なほ餘念なく聞きいたるに、いつの間にか知りてむ、聲をやめつゝ、訝しげにおのが顔みまもるに、已れいと愛らしうなり、そと米櫃より少しばかりの米取り出して、庭にまきちらしけるに、いと驚きけむ急ぎ逃げ行きぬ、あくる日も同じ事くりかやすに、其日は驚きもやらで、ことごとくついばみぬ、かくてひと日たち、三日四日とたつに、いたう親しうなり、日ごと／＼、おのれ學びのやより歸り來るたび、ひときはうれしげなる聲して、おどり舞ひなどするを常としたりき。

ある日、おのれ要ありて少しくかへり時遅うなりしかば、いざ彼まちなむ、早うとせきあえてかへり來るに、弟のいつになう嬉び走り出でつゝおのれ迎ふに、如何しけむと尋ねしに、やよ姉君、おのれ父上に給ひし、かの空氣銃にて、よき獲物た……おゝ獲物、そは何にやと、問ふ言の葉の終りもやらで、雀なり、いとよく肥ふとりたる雀なりよと云ふに、おのれいよ／＼いぶかしう、そは日頃愛せし雀にてやあらぬかと、急ぎ庭に行きて見るに、雀居らず、たゞ毛ばかり處々あちこちにこひちらさの

ら、風にちりかふばかりにて、且つは竹の小枝に、少し血しほのつきあろに、彼の悲慘の最後をとげし事わかり、おのれ悲しうて、覺えず涙うち流しぬ、折しも亦弟の馳せきて、おゝ姉君、こゝにおはせしか、いざ給へ、雀は煮えぬと、奪うやうに、おのが手携へて行く。

切なき思

羽前　鈴木とみ子

女は兎角心配多きものとは聞けど、何故此の樣に苦勞をしなければならぬて有らう、新太郎樣は何故あんなに心變がしたて有らう、また大學に居られた時分には親にも孝行他人にも情深く愼み深く、妾の樣な者にまて親切にして下さる故、只卒業のみを待て居たのである、が去年大學が出來、今年の春よりは、あの優しき愼み深き新太郎樣が、變り易きは秋の空と男の心とは云ふが、あゝ新太郎は何うしてあの樣に變つたて有らう。

あゝ新太郎樣は、何うしてあんな藝者なぞを愛しなさるて有らう、何うしてそんな心になッたて有らう、一時男の浮れ心に出たのか、否妾の勸めの惡いのか、それなら何うても改めもし新太郎樣の心に合ふ樣に勸めもしやうが、萬更妾の心も知らなくもあるまいが、新太郎樣は兩親を泣かせ妾を泣かせ、自分は愛せる女の傍に笑ひつ戯れつする時に、何故一家團欒の樂さを思出ぬて有らう、兩親か妾か家て泣て居るとを知らぬて有らうか、妾のとは何でも、山より高く海より深き親の恩を忘れ反て心配をかけるとは、是れても人といはれやうか、今や六十にも近き父上樣が每日腰辨當にて御役所へ通たのも皆子を思ふ親心、これを思ふてもそんなことは出來まいが、新太郎樣は何んな考で居るてあらうし●



二度と持たれぬ親を泣かせ妓樓に上り美酒佳肴を味てそれても樂みが有らうか、新太郎樣も忘れはしまいが、一昨年の夏休母上樣新太郎樣妾の三人湯の濱へ入浴した時、新太郎樣は何う云はれたか、もう來年は首尾よく行けば大學も卒業するか、今迄は兩親樣にも大分苦勞をかけた故、是れからは安心をと云て妾を見た其の眼――其情、妾の嬉しさは何んなて有たらう、母上樣も何卒さうしてと兩の眼に涙を浮へられたのてある、此の貰ひ親の涙を新太郎樣は無駄にするので有らうか●

袖のふり合ひも多少の緣とやら、幼き時より同じ家に養はれ、のみならず未だ華燭の典はあけないが、互に親の許せる未來の夫婦、あゝ新太郎樣、少し位は妾の心も……、此上田家にのどけき春風の吹きめくるも凄しき時雨の降るのも榮へるも衰ふるも、新太郎樣の心一つ、あゝ新太郎樣はなぜ兩親樣や妾を泣かせるて有らう、あゝ此の世に神や佛が有るてあらうか。

月の夜

伊勢　西井よし子

窓うつ木枯の音に、ふくろともなく夜は更け渡りつゝ、天地はいたくも靜まりはてゝ、たゞ折り／＼犬の遠吠の物すごく聞こゆるのみ、その淋しさ身にしみて、寢もやらぬ苦しさに、ひとり机に倚しが既往のことゞも思ひ出されて、心は千々に亂れつゝ其座に居たまらずなりければ、そと雨戸くりあけて庭の面にさ迷ひいてぬ。

見上ぐれば十六夜の月はさえ／＼と中天に懸りて、其光りは庭の草木、池の面、さては己れの衣服に至るまで隅なく照らしつ、げに畫とも思はるゝあたりの景色に、今までは霧りに曇りゐし心の何となく晴れ／＼と澄みゆく心地して身は次第々々に浮世はなれし境に進みゆくかの如く思

はれぬ、

されど〳〵そは一時にて、忽ち心の月は再び暴き雲におほはれ、以前にまして深き懊惱の淵にぞ沈みゆく、あはれみ空の月は露だも曇らざるを。

あゝ、思へば今宵の如き月あかき夜なりしか、妾がいとほしき妹は神の使のみ手に導かれて、歸らぬ國へ旅立ちしなり、悲しいかな、み空の月は今猶昔にかはらず光れるを、など人の身ばかりは永久の運命なくして妹のこと一度逝けは二度世にかへらざるらむ、あはれ慕はしき妹よ、あはれいとほしき妹こゝ、なれ今何處にかさ迷へる、汝にやさしき心のいさゝかあらば、かく悶えに悶ゆる妾が心を汲みて一夜の夢にだにも妾に生前の麗はしき面影を見せよかし、さるにても悲しきは妹逝きてよりめぐりあふ月あかき夜にぞあるな。

歸省墓參

尖市　佐野海花

山河遠く百里に餘る長き旅路も歸省と云へば嬉しさのあまり勞れも覺えて昨夕事なく着きぬ今朝早う床を出て屋敷と云ふべく廣き家にはあらざれど空地なく茂げれる樹木の下陰をさまよへば幾重の青葉を通し吹きくる微風冷かに葉末に宿る露玉はかゞやく朝日に照らされてげに美しく爽快なる事謂わん方なし本日は晝過ぎより父上の御墓に詣でんと仕度を整へ用意の草花を片手に午後三時頃より出で途ちぬ道すがら四面見渡せば忘れかたなき彼方此方の山々森林茂げれる樹々の翠りの色爽かに遠きいぬゐの方より幾千石の稻田に青波立てゝ吹き來る秋風心地よく畔路に生ふる雜草の眞白に咲ける花あるも見る人なくとや懐ふらむ風のまに〳〵なびけるは尤と哀れなり一里にたらぬ道なればいつしか過ぎて墓前に到りぬ塋下の墓地にあらざれば手向ける人のなきのみか、傍ら名なき諸草の唯茫々と生ひ茂げり手向けの水も枯れ果てゝ底には小石と枯葉の數多殘るのみ碑には緑りの苔むして刻みし文字も跡分かじ見るもそゞろ過ぎし昔の忍ばれて此處ぞ眞に父君の眠り給ひし處かと思へば無量の悲みいやまさりて胸もさけむばかりせきくる涙拂ひもやらで漸時が程は打ち臥しぬ嗚々會者定離生者必滅は人生の常とは云ひながら山に蘭へ出る若翠り庭に咲き誇る櫻をも後に殘して、はかなくも五十路の坂も遠さかるに歸らぬ路に旅出し給ひし日より今日の今まで何たる音信もなきのみか御顔だに覺へもやらぬ幼な心のわりなさよ今にして如何に嘆けくも甦方なけれどせめて一言なりとも我が名をば呼び給ひてよと、れぎろうも何のいらへもなくあたり寂しき草むらにすだく虫の音の尤とも哀れなるに折ふし夕日は將に西の山端にかくれ入相告くる遠山寺の鐘の音は諸行無常の聲すなり

聞かまほし嗚呼懐しの父上やせめてやさしき其言の葉を

時しも吹き來る夕風肌寒しく松の調べも物凄う歸途を促すに、よう〳〵氣を取りなほし涙ながらも墓前を辭しける

御顔だに覺へもやらぬうたてさよせめて佛夢になりとも　（完）



敍事文

秋の一日

（甲賞）米澤市上花澤仲町二千一二番地 本間菊枝

先つ頃のあらしにて、栗の實は大方落ち失せたれど、茸は今や盛なるなど人々の言ふに、いかて一日はと心はしきりに行けども、いかにせん賤の手業の隙なきを、さるにうれしくも一日隙を得たれば、つとめて立ち出て籠を手にして只一人そこはかとなく、秋野の露にそぼちつゝ行くに、吹く風冷やかにして打招くますほの薄われを迎ふにやといとうれし、やがて朝霧の消え行くにつれ旭の光さら／＼と山の端をのぼる程にし、分け入る奥は松並山、誰が結び捨てけん尾花が袖を道のしるべに、小高き山に登りぬ、見渡せば山姫の織り出でたる錦の色も淡く、林間に酒を暖めん頃はまだしかるべし、松の梢には自然の調かなでて、小鳥は歌を合すなりあはれ此幽清なる秋の氣色や、日頃の身にも似ずいとすが／＼しうなりて思はず「遠音にひゞくはつゝみか琴か」と聲高に歌ひぬ、鳥は驚きて飛び去りぬ、うたて甲斐なき事してけりいざや之より家づとに何かなと繁みをもぐりて彼方此方と彷へば、何やら得ならぬ香のするに、心ときめきせられてひたすら匂ひを便りにそこゝとあさりあるく内ふとつゝし株に袖ひかれ、あはやと云ふまにからくもふみしめし足の下、こはいかに其處一面松の雫の霑ひに匂ひ出てたる松茸のきみよさうれしさ、何にか例へんげに來し甲斐ありけり、など氣も落ち居ずうれしうて、先は眺め盡さばやと割籠打開きて匂ひをそへつゝいとゆるやかにたふべ終り、谷の清水を木の葉に汲みて飲めばゆかしう香りぬ、水にも移れるにや。やがていそ／＼と取り初めぬ、稚きはさすがにいとしうて後の人にゆづらばやと殘し置きぬ、松葉などしきて籠に入るればふち高になりぬ、此品よさ書にもかゝまほしなどひとりほゝゑみつゝ、いと高う唱歌などしてやをら林を分け出づれば、秋の日脚のは

や山の端に近うなりぬ、いざや歸らなむ父君が晩酌の御肴に參らせばやさぞや喜び給ふらんかしなど思ひつづけに走りに山を下りぬ、道の小笹をふみ分けつかへり見れば紅葉の上に夕日のさしたるいと美しう、吹き下す夕風に尾花が袖のなびき合ひ我を送る樣なるもをかし、裾野に至る程日は全く落ちて四方は皆暮靄につゝまれ、草の葉に置く露やう〳〵繁うなるにつれさゝがにの糸にかゝる無數の白玉がほろり〳〵、其下よりは何をかごとがましうなき出でし虫の聲にあはれなるに折から天涯遙に孤雁の一聲

評、文繁ならず簡ならず、景を叙する綿密にしてよくその情を描きつくしぬ

樂しき一日

伊豫今治町　小松崎はき子

【乙賞】

夜中の地震におどろきし名殘りにや、七時前に目覺む。心にかゝりしゆふべの雨やいかにと見れば、雨戸の隙よりさし入る朝日影いと嬉しく、急ぎ支度とゝのへ豫て約しゝ心合の友そが令弟、わか弟と四人打ち連れて瀧の宮さして出てたつ。戸毎の日章旗吹く秋風に翻る樣いと勇しく、蒼社川は打續きし雨にて水量まさり、橋も落ちたれば、皆下駄ぬぎて渡る、げに今は面の移るばかりに澄める此水も過ぎし年の今の頃、堅き堤防打破り、幾多の人畜田畑を流しゝよと思へば、いとゞ氣味わるし、尙行く程に、ゆふべの雨はまだ殘り居しか、一むらの浮雲光を、おほふと見るまに、心なき雨は降り出でつ、されど我等は事ともせず露繁き草むら、踏分け、はかなき事ども聞えかはしつゝ十一時頃ゆきつきぬ、いつしか雨もやみて、四方山に色つく薄紅葉玉なす露に映じて其樣譬へんようもなし、峯を廻りて落ち來る瀧の音、轟々と響きて互の聲音さへ聞分難し、秋風に誘はれて舞ひ散る木の葉げに春の花にも優りてあはれ深し彼方、此方と山路を辿る程に友の令弟、松茸獲たりと呼び給へば、我もと興じ尋ぬれど甲斐もなく、いさゝけき谷川に沿ひたる岩根に腰打掛けて休らふ。錦飾れる山あひより遙に今治市街を望み沖邊に列る島々の間に見え隠れする眞帆片帆、滊船の烟をあとに進み行くなど最と面白し、我等は此大畫幅を眺めつゝ樂き晝餉をぞ、すましける、瀧の音につれて折々聞ゆる賤の男の歌も珍く興深し。萩、女郎花、刈萱、芒、手に〳〵手折りつゝ、

御社の所迄下り來て世の塵を離れし淸き庵に暫し足を休むれば、あるじの汲みし心盡しの茶、げに釜の色に似通ひたるも、渴ける折とて其味えもいはれず、別れを告げて再び登れば昔し未開の民の住みしといふ塚穴あり地を堀り大石を積みたるなど、そゞろにむかしの忍はれぬ。瀧水に足浸し餘念もなく遊び居る內、早三時も過ければ「名殘はあとに殘れども」など歌ひ乍ら鹿子の池の小さボート形の島、忘れ難く、又元來し道を辿る、とある農家にて茶を乞へば、嫗は我等が持てる萩など見て「如何て斯る草花を持ち給ふぞ我等は常に折捨て乍らあるものを」と四季の友に飽ける山里の嫗の思ひさもありなん。時の移るも知らで池邊に佇みしに、疾く歸らんと友に促されて道を急ぐ日も傾き暮雲西山の邊に彷徨ひ、凉風肌を掠めて、流石の單衣の袖の輕きをぞ覺えし。黃昏過ぐる頃ろ家につきぬ、あゝ秋季皇靈祭……淸き流に眞萩たれ、路の邊の野菊匂ふ其折々は思ひぞ出てんけふの一日

評、筆未だ到られど暮れゆく秋の山家の景色を描きて情趣饒し

日記の一節

〔丙賞〕

岐阜蛸結町　山田ふさ子

十月三日、雨そぼ〳〵とふりくらす、陸奥の叔母上より文ありいとうれし、別に變りもなくて過しつ

十月四日朝のほど少し雨ふりしがのち晴れぬ、まなび屋のかへり路寫眞とる、かへりて客數名いとせわしく、夜は靜まりて妹と共に琴をさらふ雲の上、虫の音、薄衣さては淸少納言などとり〳〵いとおもしろかりき、十月五日けふ日曜なれどもとく目ざめつ、久々に髮結ぶかの桃われなり、母上束髮の方いかはかり似つくらんとのたまふ、されど余り久しう結ばねばいとうれしく、て芳枝子の君がりゆく笑ひさゞめき澄子の君の御うつしえいたゞきかへりぬ、夜は生理を淸書して十時床につく、十月六日夢よりさむれば六時なり、きのふ結びぬる髮いさゝかも亂れでまなびやにゆく、皆々わが頭ながめたまふにいさゝかはづかし、けふ師の君より御訓戒あり、そは整頓につきてなり、又地理は臨時作文となる、歸れば東京の叔母上居たまふ、餘り〳〵突然故いとゞ胸さわぎしも且つはうれしくて氣もそゞろなり、お土產とり〳〵白き花にてきうすきりボン幾片は靜子さ

まより、叔母様よりは帯のはなやかなるなりき、妹は紅のリボンの巾ひろき、まゝ事道具かず〳〵、末の正雄はポンチ繪に風琴など、忽ち琴風の音しどろなり、けふ待ちし女學世界遂にこず、十時半ふしどにつく、

十月七日早う目さめて例の事ともす、けふ日曜がなやとぞ思ふまなびやにゆく、裁縫の時家の事のみ思ひて運ぶ手おそし、けふ久々にてチュスす、少しの間に美登利の君いとう上手になりましぬ、かへれば女學世界來てあり、いと〳〵うれしく口繪くり返し見る、夜は母上叔母様まとゐしてかたるいと樂し、叔母様明日京都に上らるゝとや、今一日もがなと思へどかひなし、秋の長夜もみぢかく語りかはして十一時少し前床に入る今宵の夢やいかならん。

評、文意簡潔、日記の體を得たり土佐日記を學びたるものといふべし

秀逸

秋

下野國足尾銅山
通洞田島方　岡本匡子

一

夕ぐれ静に東の窓にもたれ一本女郎花の、露をかざして今日を、はれ、の装ひ又なく美しきに現ともなく思ひ見入るあなたに赤き首環に鈴つけたる小猫ふとあらはれて、何にじや戯れんとての心か少さき丸き手差延ばせば眞白き背にハラ〳〵と黄なるものゝ、そは、花瓣か花粉か見れば女郎花の色薄らみて露さへ見えぬ淋しき風情、さも心ありげなり、小猫なほこりずまに小手、かざゝんず身搆に我は思はず呼びぬ玉ッ玉とは故郷の妹をおきて可愛の〳〵小猫なり驚き様とぶが如く〳〵に逃げ行く姿のあどけなさにそゞろ、ほゝえまれつ、見渡せば暮色沈々と森を蔽ひて鎮守の鳥居赤きにとふ鳥一つ二つ又一つ少さう見ゆるほとりたが焚くらんの夕煙、さと、こなたに靡けばいづことよりともなく窓に吹き込む桐一葉

二

白雲谷を出づれば妻戀鹿の路ふみ迷ひてかなたに高く一聲呼べば女鹿ならぬ山彦のこなたに强く一聲答ふ、小萩を渡る風肌寒く落葉亂れて高く舞へば、今道蔽ひし、白雲はかげさへもなく、消えうせて上弦の月淸く湖山の峯にかゝる

三

巡禮さまよふ道の横手古寺寥う垣あれて燈明少う堂の

奥に光る折柄の夕鐘水に響き悠々と流れ行く小川に沿ひて紫の一むら處から神々しさ限りなく佐保姫の天降りましたる雲かとばかり思ひ惑ひつ、近く見ればそは藤袴の行秋をうらむらさきに亂れ咲けるにてありき

四

秋も暮れがての肌寒むければ野邊を尋ねん人もなく名なき千草の己がじゝ競ひし色香跡もなく、妙なる調べ、可愛の音、歌へ月に花に、と人はたゝえし虫の聲も身の運命を果敢みてか、慨きかこちてはては泣き狂ふが如くあはれ、悲しく聞ゆるぞかし友におくれし胡蝶、そよ吹く風にも堪へやらで、うらぶれ翅危く薬陰によけて此處太平樂を夢むすぶ風又荒く襲ひくれはいぢらしや身は二つに裂けて地に落ちぬ、あはれ無限の哀情其處此處にやどる枯野茫々として水車の音のみ凄う、仰げば遠山の上に雁一つら

評、叙事纖巧、小山文の趣を得たり

夕べのひと時

末廣英子

上野のかねのさびしき七つの響は、うすぐらき夕暮の空氣に物かなしくあとをひきぬ。今まで時計臺のうしろより半あらはれて、今日といふ日に名殘を惜みがほなりし日は、いつか入りて、蝙蝠ふたつみつ、はたくと飛かふ。

鈴虫に餌をやらむとばかり、打よる窓のほとり、凉風袖をはらひて、軒のしのぶいときよらけなり。

私ひとつ星見つけたから、長者になりますよと、かはゆらしき聲俄にかどのほとりにおこりぬ。そがぬしやたれと、見おろす窓の本に、やう／＼七つばかりなる、愛らしの少女。螢かごもちて、母らしき人に手をひかれたるが、あらはれぬ。かのかごにいれられしほたるよ。虫賣のほそきかまどの煙と、かへらるるものに比ぶれば、いかばかりさち多きにか、次には今日の試驗問題かたりあふ中學生三人、つゞいては連の女に奥様とよばるゝ二十ばかりの女、えび茶袴のむかししのばるゝ、夜會まきのこゝろにくさ、そが袖をすりぬききて、ゆきすぎ樣ふりかへりし、はでなる衣きし二十五六の若者。天使のマーチの曲かと、あやしまるゝ妻琴のこえ、いづこよりかそが曲の時鳥なるも、時にとりていと興ふかし。となり門に、いまかへりと高らかなる車夫の聲、つゞいて

聞ゆるあんまの竹笛、琴に和していたく思ひあり。次第にとほざかり行く笛の音の、質屋のかどとおぼしき邊にて、はたとやみぬ。しらずかの家の隱居が、蚊やりの本の話合手によび入れしか

前の家のまどに人かげさして、今までうつりゐし筆立のかげうせぬ。つゞいて、君子さんあちらて習ひませうと、いふ聲もろとも窓はやみとなりぬ。われもとむかふ机のほとり、しらゆりの香いとつよし。

日記の一節

攝津國豐能郡豐中村大字岡田　中　瑜璡子

十月十日晴天　今日こそはと樂しみて起きし甲斐もなう新聞ばかり机の上に置れたり女學世界はと尋ぬればにくやまだ參りませぬ。力おとして臺所に出てゆけば早や妹等は學校行の仕度にいそがはしげなり、てうずもそこ／＼妹の髮なでてつけやりぬ

今日は栗節句の御祝儀なりとて母上より皆々栗と柿と頂き共に樂しくたうべぬ。

仝十一日晴天　今日は必ず机の上に置るゝならんと勇みつゝ床を出づればわれより前に小間使は御本はまだ參りまぬ。いつ外出せしかさへ忘るゝ計りにて明けても暮れても同じ庭のみ眺め暮す日陰の身には文こそこよなき友なりさるにまてども／＼來らぬ腹立たしさよ、妹等を學校へ送くらせし後針箱出して妹の小袖手にもちぬ、さるにても袴のむづかしき事よ幾度縫ひなほせしや知れず漸く出來上りし時の嬉しさ身に堪えぬ肩の重りの取れたらん如き心地しぬ

仝十二晴日天　今日も來たらず餘りのぢれたさに本屋へ富を催促にやりぬ、此頃の天氣の好さ暖かき日光の貼り換し計りの障子に照して鞍馬岩の側に笑みもらす秋海棠の花を針もつ手を止めつゝ眺むればさと大名竹の枯葉吹き落す秋風の面をはらふもいと心地よし。午後は妹の髮結びやりぬ形ちの氣に入りしとて嬉ひ鏡のみ眺め居る愛さ姿もなんとなく嬉しくて。

秋とは云へど未だ寒からず障子あけはなして靑燈の下に大町先生のかた袖ひもとき行けば藤子の憐なる樣身にしみてかなしく便るも知らず心は文の中に入りぬ讀み終りて元にかへれば淸けき月は我が半面を照らし氣つかざりし虫音さへ一入高くさえて苔におく露きら／＼と輝きぬ

評、簡單なれとも文意よく到達せり

ふくかぜ

東京市本鄉區駒込
千駄木林町九、物集方　芙蓉女史

秋の日は空高くのぼり行きかふ人は皆瀧の川紅葉見にと威勢よく腕車走らするもあればおひろひて行くのもある中に小學校の生徒一行は列をなして瀧の川へといそいてゆく。

瀧の川のがけ下て一寸こ休みして又行くのは小學校生徒等の一連てある。遙か彼方の掛茶屋で此樣子を見て居た二人の娘が居る。一人は十九か、廿ほそ面の太い、への字眉、目付のこはい鼻のつんと高い口元のしまッた娘、もう一人は十七か八位の娘色白の目の極めて涼しいはなの高い眉は地藏眉口元の怜悧らしさが、いかにも引きたたせて居る

年上の方は髮は夜會に結び糸織の着物に黒縮緬の羽織を引つかけて居る年したの方は高島田に結び紋織御召の着物に古代紫に袖もようの羽織を着て居るのである年下の娘は一寸四邊を見まはして、「愛子さんもう返りませうねエ」「はい返りませう、てすがお幸さん貴女どこをお通りになつて」「私はねエ鈴木さんの前を通るのはよしませう、彼處を通ると大變な人にうらまれますねエ」「大へんな人ッて誰れてしたッけねエ」「そらそら松さんねエ、困るわほんとに」「あゝさうさう隨分困るのねエ宅へねエ未だ貴女のこないうちには隨分いやみの手紙が來たのよてすから兄が困つて返事を出さないもんてすからねエ其度に松さんの家のお守をねエ使ひに手紙を持つてこさして待つて居るから早速お返事を下さいと仕方がないから返事を遣るの、そうすると來いと云ふ人てすからしかたが無しに行く〳〵てすよすると御母さん始めお叔母さんても誰れても皆ンな出て來ていや味を云ふんてすッてねエ、てすから兄さんも困つて居たッ」「まア」「貴女御存じないから良いけれどもそれからと云ふ物は毎日毎日のやうに鈴木さんがおしかけて來たッ」「まア」とお幸は今しも返りをうながす車夫を見やりながら「それては貴女も大そうお困りてしたてせうねエ」折しも吹く風は紅葉の枝よりつたはッてお幸の肌をしみる。

下

四方を見渡せばもう薄黒くにしきをかざる紅葉も見えない車夫の返りをうながすのも其はづてある。

お新さん電報が參りましたよ」「おやどこから」と云ひ

しは先の日瀧の川にて逢ひたるお幸てある。松島さんからてムますよ」「まアお見せ」と開けるや否や見る眉はひそみ目には涙のかげ見えて早や電報紙がぬれて居る。

まアどうしよう困つた事が出來たよ之を愛子さんにお目にかけて見やうかいやいや愛子さんはもう此頃ては其樣な親切はして下さるまい今はもう力になる人はなしあゝどうしよう困つた事に成つた』『お新さん早く御印を捺して下さらないと郵便屋が待つて居りますよ印をおして下さいッて居りますよ』『はいはい今おして上げますよと手函より印を出しておしてやる。下女の歸つたあとで『あゝ如何しよう國のお父さんは大病だと云ふし母さんもまア何んと云ふ事であらうどうして逗子へ何しにいらつしてまア保養にさうしてまア波にさらはれてそうして行へ知れずどうして之は何にしても家に行かなればならないけれそれでも內は無人どうして愛子さんが遣つて下さるものか、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌る日愛子はうす暗い時より例の常病がはげしくなつたのてお幸さんお起きて下さいよお幸さんウウ……お幸さんくるしいあゝくるしい起きて下さいつてばいつになくお幸さんは起きて下さらないッねエお幸さんはと襖をさはりつゝおや、いらつしやらない事どうしたのだと云ふのだらう、あれどこから風が來るおや雨戸がどうしてはづれてまア　（をはり）

賞外佳作

日記の一節

富田俊子

年頃飼ひ置きし猫を、家居移したれば率て來たるに住みつきけり。子なと生みて愛くしければ可愛しきなぐさと思ひ扱ひたりし程に、かい消え見えずなりぬ。子は大きに成りもてゆく。月頃になりたれば、死かもせしと押當てに憐がりなどす。人にも折にふれては語りしに、古く使ひ馴らしゝ者の來て「住みすと給ひし彼の邊に有り、呼へばいらへなとしけり」と云ふに、あさましくなりぬ。怪しうかゝるものも、猫故郷や戀しき。二年才になれば生れたるが親よりもけに大きくなりたり。一夜々中ばかりに、いみじう猫の聲どき啼がふけはひに驚き、手燭さして見るにこと猫の入來たれば、家なるが咎むるなり、やゝと云へど物のはざまに入りて動きもせず。燭さし寄せて見れば、此咎むるが親なりけり。いしくも此所はた思ひ忘れざりしよ、まてこの通路も案內は知りたりけり、あはれがり物食はせなどす。朝に起きて見るに消うあらずなりぬ。誰がひ止みたれば憎たる程に、なほ親見しらで追ひ返したりけんと、かなし

かれば母君偶の笑ひおはさらしぬ

散りにし紅葉

神戸 青木京子

我身の上罸れとな、はかなきこの身に何のゆかしき事かあらむ、されど嬉しき御情かな、いざきかせ給へ、

枯れはてたるが如き梢よりうらゝかなる日かけと長閑なる春風とにもよほされて垠深くもえいでにしが生ひいづるまゝに色はあはてつかくてこと木にひとしき緑の梢となりはてにたる頃花さきて花ちりにしかどめではやす人はなくたゞ此木蔭涼しとて書などたづさへて來しがありき秋風ふくまゝに其人も來ずなりてよりいくほどもなくつゆじもに染められ時雨にふりそゝがれていつしかくちなし色にはたうすくれなゐにうつろひてつひに千しほの色にそめはてられたり夕づく日に同じ梢のともがらと其美をきそふ福に二月の花よりもなどいひてもてはやされしも夜のまの風のあらさにえたへてはらはらとちりつゝ下ゆく水にうかびて流るゝほどもなく我と等しき運命をもてる木の葉のさながらしがらみわたせるやうなるにせかれて我もとゝまりぬさそふ水だにあらばいづくまでも行く秋のあとおひてと思へどかくて朽ちはてむも前の世のちぎりとしもいふべくやされど君心つよきさまにもてなして梢にちりとゞまりぬともかの霜などにいためられてあさましうくろうなりて見入れられざらむよりはなかなかに散りにし我身のさちこそまさりたらめさならずや君我等が上にさへなほ散るべき折に散らずばうきめはあるものを思ひかへせばかのめでられし色こそわが最後の榮なりしかあはやしがらみこえて水はゆくよさらばいづくまでも浮びて行かむをさらばよ君

とて色美しき紅葉の一ひらはたゆたひつゝとある谷川をながれゆくに其汀にたてる我は夢のやうに遠く遠く見おくられぬ

秋晩の一日

牛込 はる子

朝‖有明の月、山の端に影うすれ、池より立ち上る煙ま白う、笑しき鶏鶏はれ上る時、暴き洋犬は霜にとぎしし生垣のほとり行きつもどりつ、折しも祖父君は咲き殘りし菊の花壇たゝずみ給へば、弟は朝稽古にとて師がり行く、下駄の音氷りし道に高くひゞく。

晝‖今朝よりの小袖の襦はやあぐみてふと頭上ぐれば、婆娑たる矢竹影をかしき丸窓に物干竿の影亦おもしろさに、針おきて窓おせは、干したるシャレのカフスの上より、赤き蜻蛉の三つ二つあすの命も知らずして、殘りの葉影あはれなる白薔薇の蔓にとびつくるひつ、

夕‖白き時雨今や晴れて、晩秋の光景たゞ闇々愁色深き夕、老松高くそみだるゝ古城を過ぎて、悲哀と沈思との境にいりぬ、折しも黄みたる日光は山の端にかくれんとはしつ、行きかひし虚無僧の影遠くなるまゝ晩秋の色と調和してあはれ。

宵‖あたり靜かに更けゆくまゝ、磯の松風波の音一入香くいかにおかしき海上の景ならんと、二階の欄によれは寒き月影はや冲天にかゝりて、漸く小さく波ごとにうつろふ其影渚にくだけて面白し、今色さびしき燈臺のほとり、燈え殘る篝火の色白き二つの釣舟ゆられゆられて、波上いと靜かなり。

評、練熟の鮮才筆ほの見ゆ。

先方のよろこびは云はずもがなこなたもいとゞよろこびあへり又我父上にとりては初孫の事とて一しほ嬉しかりけりその當座は赤樣の顏のみにて持きりいつれの伯父叔母に似たまはしならんなと云ひあへばみなく／＼すく上なる兄君の姉君に似たまへるよりそれならんと云ふに妾はひとり已に其儘なりとつきまきぬとく寫眞送り給へと四五度も申送れは漸く一枚たよりにまかせて送られしに兄上等とつなひぎてみるに顏は大方妾なるにうれしさいはん方なし百ヶ日も過きて姉君には和子を伴ひて來給ふよしきゝけれはいくたひとなく指をりて日を數へ其日はあまり外出せぬ妾も停車場まて出迎へともに車をならべて我家へつきぬ其よりは朝まきより夜はいぬる迄かたへはなれず學のおろそかになるとしとかめられしも打棄てゝ室内乳母車にのせてそこらこゝら押しあるき泣き出せにいたき舉けて哺乳瓶を懷に入れ管を含ませ片手に風車もちて笑はすなどいろ／＼いらふに兄上なと來り給ひて母樣氣取と冷評し給へとかへりてうれしく覺えぬ同し事をくり返し面白く嬉しく一週間程しらぬまにすきて明日は歸國し給ふと云ふに何となく名殘おしまれいねりしをむりにいたき舉けぬれは愛らしき黑目を開き我か身をみるにいかてはなすへきと思へとも又姉上の怒り給はん事を恐れて小さき臥床に卧し父母日まみえんと云ひて己れの室に歸りぬ明くる日は朝日影また窓にさし初ぬまにおきいて朝の身仕舞もおろそかに赤さまの室にとゆきて別れ際まて膝にのせなる中に時計の針の一分一分進みて最早發車の時來るをおしくも別れこん年きたまふ時はせめて片言にても語り給へ殴子たよりに歩み給へと云へば汽車は波留一聲跡に殘して出てゆきぬ

ある一夜

靜岡　和田みさ

如何なれば今宵はかく心の亂るゝにや文はあまたよみつれど何事のかゝれたるかを知らず徒に來し方行く末の事のみ思ひ出てらるゝ、心こゝにあらされば見れどもみえずとはむべなるかな、されば一夜を思ひのまゝに過ごさなん

窓のもとに立ちよれば入日ばかりの月は今や賤機山のかなたに落ちんとして淡き光りをはなち虫は幾にあはれなる音にそなく、蕭々たる秋風身にしみて心せかるゝ今宵かな

つらく／＼考ふるに我れこの學びの林に入りてより如何にもして高峰の花手折らばやと日每にいそしみしもあはれおろかの悲しさは是とて得るともなく二年あまりの春秋をすぐせり其間師の君友たちのあたゝかきみめぐみの下にたのしく暮したることのうれしさよ、さはれ此のよろこびも今は十日ならずして再び見られぬ夢とならんとす家事の都合とはいへ此のしたはしき學び屋を別れ去なんとはさても悲しきかきりなり

あはれ親しき友とたづさへて眺めつるあの櫻木はもろくも風にさそはれておしげもなく葉を散らすことよ我れも田舍に引きこもりてかの落葉と共に朽ちはてんと思へば身も魂も消え入らんとするに今は月さへ影をかくして無常をかこつむしの音のみいとかすかなり

評、文意到達、秋のあはれによたへたる身のうきなし言ひ得てよし、

うなひこ

京都　六月竹子

この度伊勢に嫁ぎ給へる姉上は一子を舉け給へり殊に男の子なりければ

四季の月

わかやま　ゆかり女史

○春の月。手儀たづさへて野にあくがれ居りし乙女子も、夕ぐれ告ぐる鐘の音に去りて、あたり靜かになりゆけば、東山のほとり、面耻かしげにまろび出てける春の月は、うすき霞の衣をまとひ、朧ろに咲き匂ふ花を照したる風情、得もいはれず。肌寒からぬ風のいづこよりか吹き來りて梢に觸るれば、花びらの三ひら二ひら舞ひ落つる樣、月の光りに映じてほの白く、時ならぬ雪かとをもはれて、一しほいみじう覺ゆなり、夜のふけ行くまゝに、よに露を帶ぶる頃ほひ、月やゝさへて、香り清う眠るが如き花の影を、うす明るき地上に浮べますゆかしさ、げに一刻の價を千金といひしも月の景色のあるがゆへなり。

○夏の月。一しきりつよく降りにし夕立の、熱さを曬りさりしあと、空はくまなく晴れて水の如くなるに、緑り滴たる東山の端のほのめきて、涼しき月の花やかに澄みのぼれば、草樹の葉末に玉なす露の濃やかく、うす青き影を宿して、いくつかの星かとあやしまれて　いと爽やかなり。月の明るさに、そよぐ稲田の風も見へ、さては、遙かあなたに連なる山の、うす霧もて蔽ける如く、近きより遠きにいたりて、屑を散く影の消ゆるけはひ、涼しく見ゆるなど、繪の如しとやいはん。やうく夜更け行きぬれば、血に叫ぶてふ杜鵑の鳴き渡りて、森のあたり、影うすれたる月の、落ちなんとするさまは、あはれ深き趣きなむある。

○秋の月。はらはぬにこぼるゝ萩の露もろく、吹く風のいと淋しき秋の夜ごろ、高うすみ渡りたる大空に、滴たるばかりなる月影の、鏡の如く輝きて、招く尾花の痩せたる姿を照らし、あるは蟲の音かれし八千草のあたり、置く白露に影をみせたる、いづれ秋の夜のあはれをそへぬはなし。三つ四つ二つ何にむせぶか雁がれの、聲もたへくに鳴きつ、月なかすめて渡り行く樣、げにや、天涯孤客の腸をたつなむめり。あるは父母を思ふらん、あるは心をある郷に馳すらん。鬼をも拉じく不識庵さへ、霜滿軍營秋氣清。數行過雁月三更。と、ばよこたへて歌ひしにあらずや　金殿玉樓に榮華の夢をむすぶ詩伯王建は、不知秋思在誰家。と口吟みしにあらずや。あはれ、秋の月こそ人の情を切ならしむるものにはありけれ。されど、染むる紅葉の色濃やかに、蘆の花雪と咲き亂るゝ秋江のあたり、月に添へなす夜の景しきを、一葉の舟泛べて愛づるなど、たへにゆかしきことにぞある。

○冬の月。雪のふりにし冬の夜、木枯らし吹きなすすさみて雲はれゆけば、凍らむばかりの月、物すごき光りを放ちて、寒げき景色のいやまさるに、犬のほゆるこへ遠くより響くなど、いとさびし。あはれにうち伏したる枯野草のなかより、骨あらわなる木枯の、六つの花を巧みに粧ふて、月の光りに明らけく立てる樣、これや無聲の詩なるかも、白妙まとう山々は、月の光りにいよゝ白く、三三五五の家は水晶の宮かと眺められて興いと多かり。または、片割月の影くら、霜がれたる柳の枝にかゝりたるも面白きものなり、されど、寒き月影のまばらに照し入る茅屋に、空うちあほぎて、飢へと凍へとをかこつなる、賤が母子の喘ぶを聞きては、誰かあはれを催さざらめや。

秋夜亡友を思ひて

岐阜　華子女史

秋の夜ふけて叢にすだく虫のね絶々なるに遠く近くきこゆる砧の音はい

つくの讀が誰が爲に衣うつらむ雲井の雁は時をたがえず鳴き渡る者をあはれ我友はや音づれもなき數に入る友はやと思ひ出てはれやに入りても川なすやうにてれむちるべくもあらざりけり
去る者は疎しとかやきける世に靜子の君ん戀ふる秋は年月に從ひていとゞ深く忘れんとして忘れがたき我友の此世を去り給ひてより數ふればはや四年の昔とはなりぬあはれ思ひ起せば四年の昔は心合ひたる靜子の君ともろ共にそてをつられて共にひざをまじへて共に手とり交して終日打興じつゝ又の年にもかくこそと堅く契りしものをそのかひもなや月は昔にかわられどちぎりし君はあはれ其秋いとも烈しき腦充血てふいたづきのためあはやと云ふ間にははやいらへなし給はずなりぬもとより君には諸々の道に秀て給ひわきて御心ばえ温順しくましく〳〵しかば心合の我共と尊び慕ひ睦らせしにいかに頼みがひなき浮世とは云ひながらいともいとも果敢なき御命なりけるは亡骸送りまゐらせて後も夢心地のみしてともすれば猶おはするものと思はるゝもわりなしや秋の夜の淋しき身にしみていしをれられぬまゝに例のくりごとくり返してまたも枕をうるほしつるおろかさよ折しも軒の音虫のねもやみて夜はいたう更けぬるに友にやおくれけん親にやはなれけんかすかに聞ゆる孤雁の聲いともく〳〵あはれなり

亡友

東京　大江秋子

あゝなつかしの歌子の君よ思へば夢の世なりけり。實に去年の今宵ならずや。我が姉君なる否妹よと爭ひ樂しみしは。あはれ學び屋にては五年の後は諸共に夏き成績得て榮を許へん其の時こそとやせんかくやと手を取

りては人となりての後の事までかたみに語りあへりしに君には秋風にさそはれ風の心地とふし給へりそはかりそめと思ひしも日數ふるにいよなやみの淵に沈み給ひはかなや萩か枝におく白玉のきえうせ給ふと聞きし悲しさ。杖とも柱ともたのみし君を失ひていかにせん。あゝ此時かの時と千々の思ひにふくる凉しの夜や文机に向ふもいつしか秋は闌さへやどりぬ。折から雁の二聲三聲きゆるはとこよの君のおとづれか否かなしとやうたふならん。

犬

十才童女　高木にわ子

浦の小菊が奇麗に咲き揃ひました故其れを見て居りました時後俯（うしろから）庭さんと呼んで走つて來たのは本家の茂さんてしたから私が庭さん此花上げましようかと尋れますと茂さんがわたし其の樣な花きらい犬が大好きよどうぞ犬を頂戴よと云われました俯犬ですかはい大着物（おゝちやくもの）ですけれど飼つてやつて下さいよと云ひますと茂さんがあゝ嬉しい事だどれ内へ貰つて行きて御さかなても遣(與へ)つて庭に繼いて置いて明日は浦に小さな板て家を建てゝ其中へ入れようそうして御飯は赤色の御茶碗て毎日三度づゝ持て行つてやるのすると嬉しがつてわたしに夏くなじみ其中に家から出しても庭さん所へ來ぬ樣に成る俯そう成つたら出してやつて馬の代りに乘つて歩くのそうして仙吉さんも犬をつれていらしやつて二人犬の競馬會を仕て一等賞は金平糖拾個にするのあゝ嬉しい〳〵と云つて早や何時の間にやら犬をく〳〵して連れて行かれましたあゝほんに男の子だけて犬の競馬會なんてまあ勇ましい事よ内の國さんも早く彼の樣に成長すればよいにと思ひました

涙

河内　大矢たね子

今宵は月冴えわたりて霜もおきなん斗りなれど、風の音靜かにはや初夜をも過ぎぬらむ、あたり物寂しきに、母君の御病みしひまありと見えて、暫時眠りに入り玉ひぬ。今はとて捨てはてゝも一筋殘る學びの道辿らむものと、ほの暗き燈火の下に文繙けど、何なく心落ち居ず、あやにくなる思ひ胸をつきゝて讀めども意味の通ぜん由なきに、あゝとばかりにかいやれば。またいたくもやせ玉へりし御面影、凹みたる御眼の目に殘りて、悲しさやるかたなし。あはれ、いかに涙は人の世の常とはいへ、悲しみの外に何事も齎さず、自然の懐を辭せしめて、塵の巷に迷はしむるの外、何事も示されざる此身を、天つ神はいとほしと思召さずやなど、心にかこちつゝある折りしも、たゆげなる御眼開きて、ふと此方を見おこせ玉ふに、涙見せまつらじと、さりげなう打笑みて、看護りまゐらすの心、くるしともくるし。

評、想いと哀なり、されど文に今一息あらまほしき節あり

秋夜思をのぶ

秋田　庄司きん

あたり淋しきま夜中にひとりかなしむ虫の音はなになからちてのわざかつれなき野分に吹き別られて親にやはぐれし友にや後れしあないたましの虫よさりながらはぐれたりとて又逢ふ時もありなん後れたりとて追ひ付く折りもあらなんに吾のみはあはれなる此むしにもましてたよりなき身のいかにかなしき事よ

たゞかりそめの夢にのみ逢ひもし又語りもすれど現には見なかぎりに呼べどさけべど絶えていらへなく又影もなき戀しき戀しき父君の今は五年のむかし無常の風にさそはれて遠き遠き常世の國とやらにだきすがる吾等をのこして逝かれぬるあはれ父君のいますみ國いかに遠くとも吾等と同じ此世なりせば千里萬里はものならねどいかていかてあゝ情なき世やたとへ所は變り鳴く虫の音は違ふとも五とせむかしのわが身なりせば今宵の月はたむし皆わが友として見もし聞きもしつべきものをいかなれば大神のお許を……あゝ是れ前世の罪か否

きぬたの音

和歌山　郭雪子

秋の夜のやう〳〵ふけゆくまゝに、肌いとさむく、くさむらに咽ぶ虫のねにあひて、そこはかとなく音の響き來るを耳とめてきくに、夜はしづかに。遠く聞ゆる賤が手業のきぬたにぞありける、人はみな靜まりたるに、まだねぬことよ、よもすがら打音のいさゝか挽みぬるは、あるは秋風の身に染むか、あるは心にもあなて月をか見るらんと、さま〳〵の夢だにまどふ身には、なんとなふきぬただにそゞろ哀れに思ひやられて、ものかなしく、音はふけゆくに、玉ともまがふ月のさし出てたるに、取り合せて雁のなき渡りたるもあはれなり。

くれゆく秋

菫花女史

◎野分

もろ〳〵の賢者おどろかんとてや、ことしははげても野分凄まじう、風は叫び雨は狂ひ、海のほとり怒濤またなみたらぬ蠻力に幾千が生靈を飲みぬとの悲報傳へきく身のつらう、我に罪あり我に惡あり、今、今、今、この瞬時に死あらんか、我が靈はた天地のいかなる處に迷ふらん、懺悔なる哉ざんげなるかな。

見よや野分のあした、露ふきこぼす萩原、きのふの秋に、世の愛、世の富、まれき〳〵しそれと異りて、よべ一夜の默示に、うつくしき悔いの姿たかき穗先のうなだれたる、優なれや、尾花よ、きのふの榮華ゆめまぼろしとさとりなば、かぎりなきチーゾョチーの御前に俯して、我と共に讃美あれな、懺悔なる哉、ざんげなるかな、心なき千草、つよき野分におもふことふるう、人間に教へ顔なるもをかし。

◎秋の風

天宇高うして雁影稀なるの時、これや秋より冬に移らんとする過度時代ならめ、悲風颯々と音して、萬葉、寂寞をうたへるが中、こき紅葉の一は二葉、寛のもとに落ちぬ、御身もまたほろびの片影か、細けれど一首を、

くれてゆく秋のあはれを水の上に
　しばしとゞめてちるもみぢかな

◎朝霧

靜なる春霞のそれと異りて、山の姿、森羅とあはれに寂しう、包まれたる小村か中より、朝煙ゆら〳〵と棚引きて、籬の小松が枝にかゝるを、やがて上なると一つになりて、霧か煙か定め難きに、稲刈男の鄙歌突如として起るはさすがにをかし、千町田の黄なる穗並も、あなたこなた霧たちこめて、里の少女が手もわなゝくらん、鋭き鎌もてる人、三々五々右左の小路より畦道づたへに、うたひつゝも、忽に姿かき消たれて、聲のみぞ殘る朝まだき、蟲聲また啾々たり。

◎夕霧

たれやらが句に、七景は霧にかくれて三井の鐘、夫省畧法とやらんもこゝにいたりて絶妙、俳句の力ある事をさとりぬ、夫れ近江湖邊のうつくしき自然が、霧につゝまれてものいはぬゆふべ、江に横ろは白露をも碎けよとばかり、三井の暮鐘陰々として響く、詩人涙なからめや、句なからめや、まことに七景は見へずなりぬ、唯あり、三井の鐘、幾世幾歳の歴史を傳へて、おうとなり渡る、湖邊の民登しおもひにむせぶなるべし。

○鴫

西行法師うたふて曰ずや、心なき身にもあられは知られけりと、法師果して心なきか、黒染の衣に七つの慾をつゝみて、拂ひて、情とたゝかひたるの面影歴然としてこの一首に現はれつるをおぼゆ、彼はあたゝかき心の人、能く秋の寂寞を傳へて餘すところなし。おもひ見るこの法師破笠襤衣、あなたこなたにさまよひて大悟のみちに入らんとするなるを、濁世の秋なるものに想のおよびて、九重の宮、洛陽の花、愛の御かたがたをおぼしいでられけん、身は他郷に悟道を求めて、夕陽落ちんとする澤のほとり、いひ盡されぬ情緒亂れ〳〵て、まことに秋の孤獨耐へがたう、心なき身にもとうたひて、美くしき露をこそもらし給ひしにはあらぬか。

あはれ世の秋に遠ざからんとせし人の、なか／＼近うなりてこの欧やなりけん、きのふけふ垣根の小田の鴫が羽がき、夕ぐれ寂しうきゝなさるゝまゝ、法師がうたをもおもひいだされて。

○きぬた

砧聲次第にとほく、折ふしの斷續怪しと窓の月あくれば、くれゆく秋の夜、ふかくして山月高う百蟲のこゑいよ／＼きよし、賤の女等も衣うつ手のたゆみて、月とやかたるらん、うしろの山には鹿のなくねのたかくなりぬ。

○霜

赤う赤う熟したる柿の實に、霜のおきたるはいふばかりなくをかし、霜ならんには寒きあした氷りやすらん、さすがに冬ならぬ嬉しさは、よろづの草木霜にほこるの色ありて、東籬の菊花それいふまでもなし、楓葉霜に飽くの風情をかしからずや、こは立田姫が老いたる侍女ともおもはれて、終生嫁せずめとらず遂に冬なるものゝ手に捕はれの身いぢらしう、かくても猶守るべきの忠を盡して、姫をば天の御座へ歸し奉りておのれ猶この土にとゞまりたまはんの勇は、姫が手なみのゆくえ見屆んとの如し。見よや黄葉は風なくしておのづから舞ひ、秋雲は雨ふらずしてとこしなへにくもる、蓋し霜の術ならん。

○紅葉

「紅葉あるのに霜が降る、さぞ寒かろ、つめたかろ……」箱根山に於ける佳人がおもひをくりかへすにはあらねど北信の天寒う、紅葉を賞づるの暇乏し。漸う中腹のあたり、濃き色そむるや、頂きに霜ちら／＼、ましろにおどろかるゝあしたあり、里に霜ふかき夜は、峠三里雪とや、されば短かき命の紅葉、我また多くいふまじ、つゞるまじ。

○虫のね細し

秋ゆかんとす虫の音枯々に細う、ほこりし菊花色おとろへてまたきのふの聲もかけもなし、かゝろな世とや、蕭然又寂寥折には置く霜しろし夜や更けぬらん、中酔中睡の人間刻一刻老いゆくを憂しとて、雲のあなたを見やれば、こゝへこゝへと招きがほなる月の、これのみぞ永久の光とや。

○古戰場

城山といへるより見渡すかぎりの川中島、一世の英雄が干戈を交へし古戰場とそゞろに昔のくりかへされて弓矢の音、血の叫び、聞ゆるやうなり。

さてもいにしへに變らぬ濃き霧はうばすて、妻女山見へぬまでにつゝみて、川中島もおぼろ／＼、一將功成て萬骨枯れつるいくさの陣に、人のおもひの猶殘るらんと悄然又惨然、我はこき霧の中より鬼哭の啾々といへるをきくがごときおもひあり。

○西洋朝顔

西洋の種とて朝顔まきし垣根のあたり、花は少さけれど、てる日にも凛として、多くはしぼまず、野邊の晝顔と婉をきそふて仲秋のよそほひをかしけれと大かたの花は枯れゆく園生になほ意地つよう三つ四つ咲けるはにくけなり、これは老處女にたとへまほしや、霜白きあした東籬にかゝらむ執着は夏の露にまさりて淺間しとながめ入りぬ。

◎雨の日

時雨はら／＼とをとして世は冬に移らんとす、ましてや夕陽うしろの山に沒して、田の面つめたうなりゆく折、時これライフなるものゝ消へゆく心地して、そが臨終の一滴なるらん、宇宙をつゝむ時雨の響、かくして秋はくれんとぞする。

○柿

葉ごと〳〵に落つれば、赤き實いよゝ赤くして花よりも紅なり、子等は身の丈よりもながき〳〵竿もて枝をはら〳〵と打つ音すれば、三つ四つ五つ淚々と落ちて、袂に入るゝもの、前垂につゝむもの、直に口へ容るゝもの、心々のたのしさはいふばかりなかりしを、今年は町住居、纍々たる葡萄の房ながきをも、柿の實の赤きをも、はた栗のゑまひも、商家が店先ならでは得がたくなりぬ、さてもこひしきは古里の野山なり。

◎畦豆

田、盡く刈り去られたるが中に、ひとり畦豆の葉黄ばみて落ちて、豆の實げにうら寂しう立てるは、主人まちがほの心地こそすれ、一村薄のかれ〳〵に殘るもあはれなれど千町田に殘るこれ何となう寂しきおもひのしてけり。

◎野末の庵

山里の秋のあはれを見玉へと、嗚きくる雁がねにことづてゝ、はるばる叔母君より云ひおこせ玉ひしに、いとうれしくて家を立ちいでつ、白雲まよふ深山の里に客とはなりぬ、月影薄きたそがれのことなりけり。何處とあてかなう野中に出てゝ、さゝやきそむるみ空の星を數へつゝ、そゞろあるくほどにいつしか道は盡きて小さき山門の前に出でぬ、ひそかに庭をうかゞへば、かゝるところにも秋はきにけむ、刈萱の處得顏にしげれるが夕べの風にサラサラと打ちなびきつ、柴のいほりの傍近くには眞白き萩の今をさかりと咲きみだれたり。折から雲をはなれし月影の、さながら庭に流るゝよと見れば、露にすだく虫の聲々一ときは高くチリンチリンと玉の如くに鳴り出でぬ。かしこの草むら、こゝの芝かげ、め手のまがき、左の籬側。ふと耳たつれば庵の中にて經よむ人の聲する樣なり。ふた足三あし、五足、六足、靜々戸口の方へと近づく折しも、俄に聲張り上げて誦し出したるは、虫の音にもまがひぬべう、優にやさしき女の聲なり。そのほがらかにして曇りなきは胸に憂ひのあらざればなるべしさるにても浮世をすてゝかゝる野末の庵の中に清く行ひすませる人はいかなる人にかおはすらん、床しさに堪えかぬるまゝ、そと音つれんとも思ひしが、讀經のもなかを驚ろかせまゐらせんも、さすがに忍びがたければ終るを待たんと、其まゝそこに佇みしも、いつはつべしとも見えざるに、殘り惜しくも月を踏みて靜に庭を立ち出づれば、かれの響きか鈴虫の音か、チリンチリンとさやかに澄みて、尚も後ろよりきこえきたりぬ。

秋

佐々水和子

秋の御空のたかへして
　ゆうべ淋しき鐘きけば
　　すみまさり行く思かな
雲間を渡るかりがねは
　たか玉章をかく行く
　　月をかすめてたゞ一羽
にし三百里やまをこえ
　海をわたりてゆきし友
　　今いづこにかもの思ふ
誰をこふらむ袖ふりて
　招く尾花のはらはらと
　　こぼす涙はつゆのたま

消息文

文學士　塩井雨江君選

(天)

故鄕にある友のもとに

下野國下都賀郡中村大字下河原田四十九　神山ふみ子

きのふ今日いとゞしく吹きすさぶ木枯しに、むさし野の芒がくれをゆく水の、それと見らるゝ迄冬かれ〳〵候。ましてや、信濃路の見る目かひなき山里にて候へば、身も心も覺えぬ程にわびしからむは、人事ならず察しまゐらせ候。龍田姫の衣とて織りなされしもみぢ葉は、はや殘り少なに散りはてゝ候ふべく、夜ごと〳〵寢ざめの友ときゝし砧の音も、打ち絕えては、なか〳〵に、夢結ばれぬ夜寒の床に、さらでだに淚にもろき御許樣の千々にみだれし斷腸の思ひ、さこそと、雲山遠く隔てたる身も、一つ心によそながら袖を絞りて候よ。あはれ去年の春、共に手をとりあひて、上野の森を逍遙ひし折り、何にをか語り候ひし、何にをかきゝて候ひし、とても世は夢にて候。朝ごとにおきまさる霜の氷りて瀨戸の堀井もくむに堪ずとこそ思ひやられ候を、今朝何となう雲ゆきあやしきまゝ、いよ〳〵心許なき故鄕の空あたゝ、遙かにふりさけ見つゝ、一筆のたよりまゐらせ候になむ。あはれ、今宵はしも、雪になやめる兒狐の悲しき聲をきゝつゝ、空に知られぬ小夜時雨に、ありし昔を忍びておはすらむか。さぞな。

筆、みやびやかにして、しかも、しめやかなるは愛すべし。且つ、短くはあれども、苦心しての作と見ゆるも愛すべし。(雨江)

(地)

紅葉をば必ず訪はんといひし人の遂に來ざりしかば

神戸市山手通二丁目　青木京子

世のおとづれも稀れなる山里、人の戀しさは、とても都には知られぬまでに候。さても、何處の梢に御目のとまりてにや。かねてより紅葉せばおどろかし給はむやうのたまひしを、一すぢにたのみまゐらせて、今日は明日はと待ちくらし候ものを、御車の音もせねば、昨日今日

の霜に色變りゆく梢、うらめしうのみながめやられ候。そよとの風のたよりは、きかせ給はざりけむ、御かへりごともまゐらぬは、そのふみ如何なる處にか紛れたると、心もとなく候。つれなき木枯の風は、なかなかに、人も來ぬ此のあたりにまでたづね入りて、今朝は、其の名殘とや、門の小川に、からくれなゐのしがらみかけわたして候。さばれ、風のさそひしを、二ひら三ひら封じこめ候を、せめて哀れとも御覽し給はらばや。こゝなるは、かく色濃く候へど、都の方はうすくやあるべきとおぼえ候。紅葉も本意なかりしなるべし。まして、あるじのわびしさ、かへすがへすも御察したまはるべく候。心づよう風にもまかせて散りとゞまりたるも候へば、なほおぼしめしたゞせたまふとならば、この二日三日のほどに、いかで一度と、ねんじあげ候。かしこ。

評、さつぱりとして、而して、多少の文才も見ゆる、愛すべし。（雨江）

（八）

都にのぼる友を送る文

和歌山縣海草郡湊村大字今福百五十五　郭　早苗

天とぶ雁の聲さへ、いとゞ悲しさまさる秋はてがたの風、身にしみじみとしみ渡り侍る折りしも、遠く東の都路にかしまたちて、學びの道にいそしまんとし給ふ御心のほど、げにげにをゝしうなん。まことや、逢ふは別れの初めとか。思ひかへせば、幼きより姉君のごとしたひ參らせて、たゞ御袖にのみすがり居りしに、今日よりは甲斐なき夢路ならでは逢ひ參らするすべもなしと思へば、いひしらずはかなく悲しうてなん。せめては、一日も早く業を終へ、譽の花をかざして、かへり來給ふ時をのみたのしみに待ち奉る外はなく。さばれ、秋やは人にと、この後のなげき推しはからせ給へや。さこそ都にては御事しげくおはしまさめとは推し參らせ侍れど何卒、花のあした、月の夕のかりがね鳴き渡るとき、翼にかけて、その折々の御消息はかりはたまひてよ。今よりはそれをのみ樂しみの故郷人のありといふ事を、くれぐれも忘れたまはてや。あなかしこ。

評、簡なれど、其情は細にきこえたり。多少の文才も見えたり（雨江）

秀逸

都に出し友の許に

伯耆　蓬萊女史

恙なくてとの御玉章まゐらせ奉るも中々にて、東の空ゆく

天つ鴈かねのたよりに、御許樣の小車のあと追はせたる此の文を、何とか見そなはすらむ。さて、御許樣には水上の梅花の如く、水面に浮びて希望の海にのり出し給ひ、妾は水上の柳の枝の如く、影をば水にうつしながら從ふ能はず。いかに遣る瀨なき悲哀の情にくれ侍りけむ。御許樣に別れて後は、心細さのまづせめ來りて、情深き面輪の偲びいでらるゝになむ。あはれ、察し給ひて、御面影おくり給はずや。思ひやる月淸き江畔の秋、さては、風うろ寒き孤村の夕、いかに御許樣の腸をたつらむ。孤枕崎津の里に妾あるを忘れ給はで、悲しみあらば分ち給ひてよ、共々に慰め侍るべければ。いざゝらば、霜さむき今日頃日、都の空、心してしのがせ給ひてよ。妾も音づれ怠り侍らぬ程に、鴈のたよりを聞かせ給へ。夢、立つ秋霧にな へだて給ひて。あなかしこ。

良人に別れし友の許に

攝津豐能郡岡町　田中璁瑤子

庭の百日紅、日毎に色あせて、降り續く雨に散る枯葉の音も身に染む昨日今日、わけても物思ひにくれ給ふ御許樣には、いかに淋しくおはしますらん。一度御伺ひ致し度きは、山々なれど、淚脆き妾の事とて、御慰め申すべき身の、却て御悲みを增させ申すやうなる事もあらばと、わざと差しひかへ、拙なき文のみまゐらせ候。



月淸き夜、妾方の例の數寄屋にて、御主人樣、拙き手前の御うす召させられて、後、火と共に、女郎花、紅葉守など太くほがらかなる御聲にて謠ひ遊ばしゝがこれぞ御名殘の謠曲なるとは、夢思ひ浮べざりしに、桐の一葉よりもろく散り給ひしこそ、いともはかなき限りと存じまゐらせ候。

御主人樣、御生前、殊の外愛で給ひし庭の橘、漸く一枝二枝色づき候まゝ、雨をおかして折り取り差し上げ申し候。何卒露ちらぬまに御供へ下され度、せめて香だに佛の御側近く通ひなばと、あらぬ事迄思ひうかべられ申し候。また、此の菓子は、都の友よりわざわざ送りこしゝ物なるが、味もいとよく、且つ、淡味

なる故、御子樣には至極宜しからんと存じ申し候。つれ〲の御慰みにもならばと、取りそへ申し候。

勇樣のりゝしき御姿拜し候度毎に、私てさへせめて今一度此の樣みせたやと思ひ、涙にむせぶも幾度か知れ申さず候を、まして、御許樣の御心のうち如何と思へば御慰さめ申すべき言の葉も御座なく候。

かへらぬものと思へばこそいとゞ戀しきなれと、誰やらの申されし言も御座候間、今更御あきらめ遊ばせなぞと、さる冷かなる御諫言は申さねど、さりとて悲哀のきはみ、大切なる御身體を害ね給ふ如き事もあらば、御子樣の遠き行末、誠に心細く存じられ申し候。勇樣をあつぱれなる御代嗣と御養育遊ばすは、今後あなた樣の重大なる御任務かと存じ申し候。また、御主人樣にしても、有難き讀經よりも、其方をこそ嬉しく思し召し給ふならめと推しまゐらせ候。妾風がかゝる事申し上ぐるは、如何と思ひ候へ共、是れも親しき間柄故と、みゆるし給ひてよ。

栗の實も、此頃は大分こぼれ居り候よし、山守の助平、今朝程も、臺所にて、松に話し居候ひしまゝ、近きうちに參り度くと存じ申し候。あなた樣にも、勇樣御つれまし、御出てかけ遊ばされては、如何にか。結ばれし御心も、少しはとけんと存じ申し候。何卒うれしき御返事給はり度く願ひ上げまゐらせ候。

先づは御見舞ひまで。かしこ。

妻を失ひし人に送る文

仙臺市本柳町五十一番地和知りい方　町田周子

きのふ伺ひまつりて後、御病勢いかゞと、夜もすがら案じわかし、如何にもてと神佛に祈り居候甲斐しなく、只今の御しらせ。今は中々推しまつる我が袖、先づ露けくて、廣き野原にたゝずむ樣思はれ候。思ひ返せば、妾とは幼馴染の二人となき御友達にて、御家に嫁がれたまひし御時も、日こそ違ひ候へ、妾が此の家へ來たりし時と丁度同年なりしとよ。いかなる御契りかと、御逢ひ申す毎に、御話し申し來たりしを、先だゝせ給ひし御事さては御恨みに存じ候。御病中も、常に御そばにわらせられて、御快復の後は、菖蒲田濱に避暑せん、松島に棹さゝんなど、あなた樣の仰せられ給ひしを、せめてもの御慰みにて、御暮らし遊ばされ給ひしに、秋とすぎての今はのきはに、最早氣力もつき候樣なれば、近き中は起きて見んなど宣ひしに、扨も〲、御心いたはしき事に

候。妾の心もちぎれんばかりなるを、まして、あなた様の御嘆は如何ばかりかと御察し申し候。しかも、乳放れもせぬ信雄様を置き去り給はられしあなた様の御心中、思ひ上れば、只かなしくて、筆も。さりながら、御緣組遊ばされ候ひし時より、一方ならぬあなた様の御親切には、深く感じ居られ候御もやうにて、妾には御病中も屢、御話りきかせ成され候事も候ひき。又、信雄様の御生長を待たせられん事の一つは、せめてもの御あきらめ處かと、恐ながら存じ上げまゐらせ候。何れ後より參上、よろず御弔詞申し述ぶべく候へ共、さし當り別封御ぬさしろ聊ながらさゝげたく候間、御取りなし置き下されたく候。先は取り急ぎ、みだれ心の一ふし聞え上げ置き候。かしこ。



都に上りし小弟の許に

大阪東區南谷町一丁目　小野まさ子

羨欲しげなる小猿の聲に、幾日かふりそゝぐ村時雨の、いとも心寂しき折柄、こま〲と書認め玉ひし御文、昨夜は母と共に、幾度も繰返して、拜讀致し候。其許様にも、無事御着京、豫ての目的通り、首尾よく御入學の趣文筆の陳頭に立ちて、初〱しき名乘を揚げ玉ひし其許様か御行末、天晴の御譽もがなと、先以て目出度存じまつり候。

扨ても、御許様は、こゝに十あまり六歳の月日は、唯々温かき母上の御懐にのみ起臥し玉ひ、露ばかりも浮世の浪に足踏み出ししことなき身の、他人の中の心使ひ、如何おはし候はん。是も修業の一端なれば、何事の辛抱が第一に御座候。門出の節にも、母上より呉れ々々も申し含められ候通り、心の知れぬ怪しき友達は、決して御交際爲さる間敷候。由來男子門を出づれば敵七人ありと申す事の候へば、優しの人と思ひて、必ずこゝろ許し玉ふな。世には鋭き刺を、美はしき薔薇の花の中に隱し、利刄の穗尖を、笑顔に包めるためしなきにしもあらず候を。近頃東都學生の醜聞を、往々耳に致し候が、誰れしも自ら好んで幽暗の邪徑に踏み迷ひ、一身の方向を誤る者とては、無之候

へとも、不知不識惡友に感化せられ、金石も爲に鈍りて瓦礫となり、遂には身を亡す基となる者に候。此の邊の處、篤と御熟考なさるべく候。ゆめ／＼由なき女の戯言とのみ聞きながし給ひそ。

御渡りの空は如何に候か。鄉里は、此の頃、峯も谷間も紅葉の錦に埋もれて、見るかげもなき我が家も、宛ら立田姫の住家と見まかふばかり、美はしく候。このまゝ深山も落葉に任せんも、いと口惜しう候まゝ、一片二ひら笈に封じこめ置き候。此の間野分けせし朝、裏山の栗の實、一斗ばかりも拾ひとり申し候。其の明の日、母上が一日かかりて燒き給ひし栗の實、本日小包にて差し送り候間、夜學の窓につかれ給ひし折りは、取りいでゝ母が深き情を味ひてよ。

賞外佳作

折にふれ親しき友の許に

谷中　原田耀子

春日和のうらゝかる、學課の復習は名のみにて、机に寄りしまゝ、何時ともなく見やる垣根のほとりへ白菊の一二輪置く霜に匂ひ合ひ、愛らしき小鳥の聲さへ、葉影よりもれ來る、いかで花さく春にも譲り候べき。さらでだに外出好きの身の、一入野山の影のみゆかしうかゝひ出てられ候よ。

君にも定めしたのしう眺めさせ給ふらんに、あはれ御庭の風情さへほのめかし給はぬは、いと／＼御うらめしうこそ中すれ。ほのかに承れば、日々たれこめてのみ、ひたすらなる御はげみぶりとや。げに御勉強もさる事ながら、少しは御保養なども怠らせ給ふな。埃深き都の中は見まれ風清く、山青き、田舎の景色など愛てんも亦をかしくは候はずや。さて去年の春、君と野遊せし折、物賣る媼に教へられし彼の松林を、君も知りまさん。かしこには松茸の多く生ひ出づるとかやいひたる事を、ふと思ひ起し、實はかしこにこそ茸取りて見めと思ひたちてなん。げにかしこは靜けき村に候ひしよ。又かの媼の深切なりし、已が亡き孫に似たりとて、妾等をいたく勞はり呉れし事など、折々思ひいで候よ。媼が家の前なる土橋や、一本柳の影のせてゆら／＼流るゝ小川の水や、み社の森う見ゆる山下の松林、形おもしろき山や岡など、その比の春景色は今いかに、秋の色ふかく染め出てぬらん。はたかの媼が頭にはいかに霜の積りぬらん。とり／＼に思ひやられ候。さはれ、淸き心はいづれも元のまゝにて、かの土橋まで腰かゞめつゝ送り出て、又來よといひし媼や。殘り惜しげに見送れりし山や岡、定めし妾等をまてるならんに、いかで一日の程かの地へ思し立たせ給ふまじくや。久々にて媼をも訪ひてなぐさめ、又媼か手づからなる番茶に醍醐味はひつゝ、共に語り暮さんには、よしやえものはあらぬとも、など思ひなぐさみぬ事やは候ふべき。はた又、數つめし枯松葉の岡より、あまた生ひ出てたらんにはいかに……。あらぬ事ども思ひ亂れては、取るこの筆さへあやしうもつれ候を、君にはいかにはしたなとしや見たまふらん。あなかしこ。

雪の朝友の許に

德島　大久保愛子

夕べの風の寒かりし恨も忘られて、あはれさびしき冬木立あらはなる迄に成りし折から、狹き庭ながら、色とりどりの菊もみぢ、千草の露に咽びし蟋蟀のすみかも、尋ぬるによしなく、獨、花桂も咲きぬれど、けにや朝日まつ間の命なるを、今朝はいと清らに、白雪のちりひぢをうづめて降り候ものかな。賤が伏家も、富める家居も、一夜の程に玉樓銀臺とかはり、寒林枯木一朝にして花咲くとは、げにかゝる眺めをや云ふにあらんと覺え候。見渡すかぎりの白妙の眺め、匂ふはかりの銀世界、うるはしくかぐはしき御言の葉も、定めし多くありつらむ、其やと端だにももらし給へな。かつは、去年のこのごろにてやあまりけん、雪を冒して訪はれたりしとき、愛でたまひし梅が枝、綻びかけ候ものから、一枝折りて參らす、やさしきみ詞たまはらば、花も冥加にこそ思ふならめ、吹きくる風にたぐへる梅の匂をしるべに、何の風情も侍らねど、花をあはれと思され、むさくるしき庵なれど、訪ひ給はずや。かゝる景色のあたらしくて、かくは。

姉君の許に

久留米　飯田しけ子

桐の一葉に色つきて、手のひら程の園生すら、日每に目あたらしき折から、並みならぬ故山の御庭前、姉君樣には如何に眺めもし玉ふらむ、時に年老いたる母君には、まして御見どころのおはすべきものから、嫌々情溢るゝ御性の上、御身もさほどまめ〳〵しからぬ御方故、朝夕歌に咏し文に物してはかりは、樂みくらし玉ふらむ、まことや、去年の長月八日、御許を立つとて、御姉君の奏て玉ひし離別の曲の中、ともに紅葉ふみ別け、姫君の山わけ衣着こなして、見返り勝ちに出て玉ひしとの玉學の背は、今更耳に忍ばれて、當時母君の眼の奧に浮びし露も、消えやらず。殊に夜中の鐘聲、陰々と物する時は、いやまし故山の空の戀しく、御二人の影の現れて、忍ばれぬ空想に走せられ、月日の歩みの、さ程遲く、來む三月の待ち遠く、やるせなく候。されど、御姉君には、いと健かに、日々に母君を御勞り慰め玉ふ事よと、思ひ返す時のその嬉しさ、再び三たび机おし撫てほゝえみ候。御二人の御事故、必ず〳〵秋霧にとも冒され玉はざる樣、御身折角御自愛の上、二人を一つに母君を御慰め、且つは家事にいそしみ玉はれ度幾重も〳〵念じ上まいらせ候。かしこ。



茸狩に誘ふ文

秋田　庄司さん

きのふあたりより、秋の日にはめづらしくはれ渡り候へば、そらの曇らぬまに、且つ、此の間のあめにてきのこもさぞやそろひしなるべく、此間にいづれにか來り度思ひ居り候折りふし、新屋なるしるべの家より

松林の初茸、此の二三日は盛りの由にて、此の期をのがすまじく申し越し候へば、かねての御約束ゆゑ、一寸御知らせ申し上げ候。明日は幸ひ日曜日なれば、お姉様と御一緒なら來り度しと、妹も言ひ居り候へば、是非にも願ひ上げ候。

皆様のお笑ひを的にして、又々例のいでたちにて來るべく、さて、此度こそは例の網目を嚴目に致しても、わらびがりのかたき打ち致し度、それぞれの用意いたし居り申し候まゝ、君しおそろしと思しめさば、援軍幾萬たりとも、此方にては差支之れなく候。いかに大勇の君たりとも、不意うちにては、み腰大事と、一寸御内報申しおき候、なほわりごの用意は、先方に言ひおき候へば、其の御心配なく、明朝六時頃に伏屋までみ足まげられ度く、まち上げ候。

余は御目もじの上になん。

友の許に

武州　中山武子

君と誠に袂を別ちし折は、荒金の土さへさくてふ頃なりしに、げに流れて早きもの飛鳥川とやらはや朝夕は、秋風いたく、身にしむ頃と相なり、燈火親しむべしとか、今や勉强の好時節、定めて御勉學の事と、御察し申し御羨やましうてなん。春中よりの君が御病氣は、御全快遊ばされ候や、御伺ひ申し上げ候、君には益々志ざす方へいそぎ給ふに、こなたはますます失望のふちにしづみ、貴き光陰を、たゞたゞむなしく過し居り候。されど幸に壯健に候まゝ、憚ながら御休神下され度候。月野氏には、縁談とゝのひ、近日某所へとつがせ給ふとの事、そよとの風の便りに聞き侍り候。彼の君が日頃より理想したまへる樂しきホームも、遠からず作らるゝ事と存じ候。御氣の毒なるは、大河氏にて、いぬる日、父君みまかり給へる爲め、英語塾さがり給ひて、御歸國遊ばされ候、君も知らるゝ如く、同氏は小學時代より實に天賦の才なりと、先生の稱賛るしばしば耳に致し候を、今中途にてやめ給ふは、いかにも惜しく、殊に御契約なり居る婿君には、今尚英京に御遊學故、將來やはり英語も必要と存じ候まゝ、種々御すゝめ申へ候共、只御家事の都合よりとのたまひて、うべなへ給はず、惜し事に候。

此の文書き終り候折りから、神無月の冴えたる月の戸の隙間よりさしこみ候に、君が寄宿舍の窓にも、同じく照らし居り候はんと思ふにつけ、君には今此の清き月に對し、いかなる理想の夢にあくがれ給ふにやと給ばれて候。

尚申上たき事は、秋の木の葉の數つきず候へ共、後る雁にと、先はなしき餘とめ申候。かしこ。

悔の文

武州　遠藤千代子

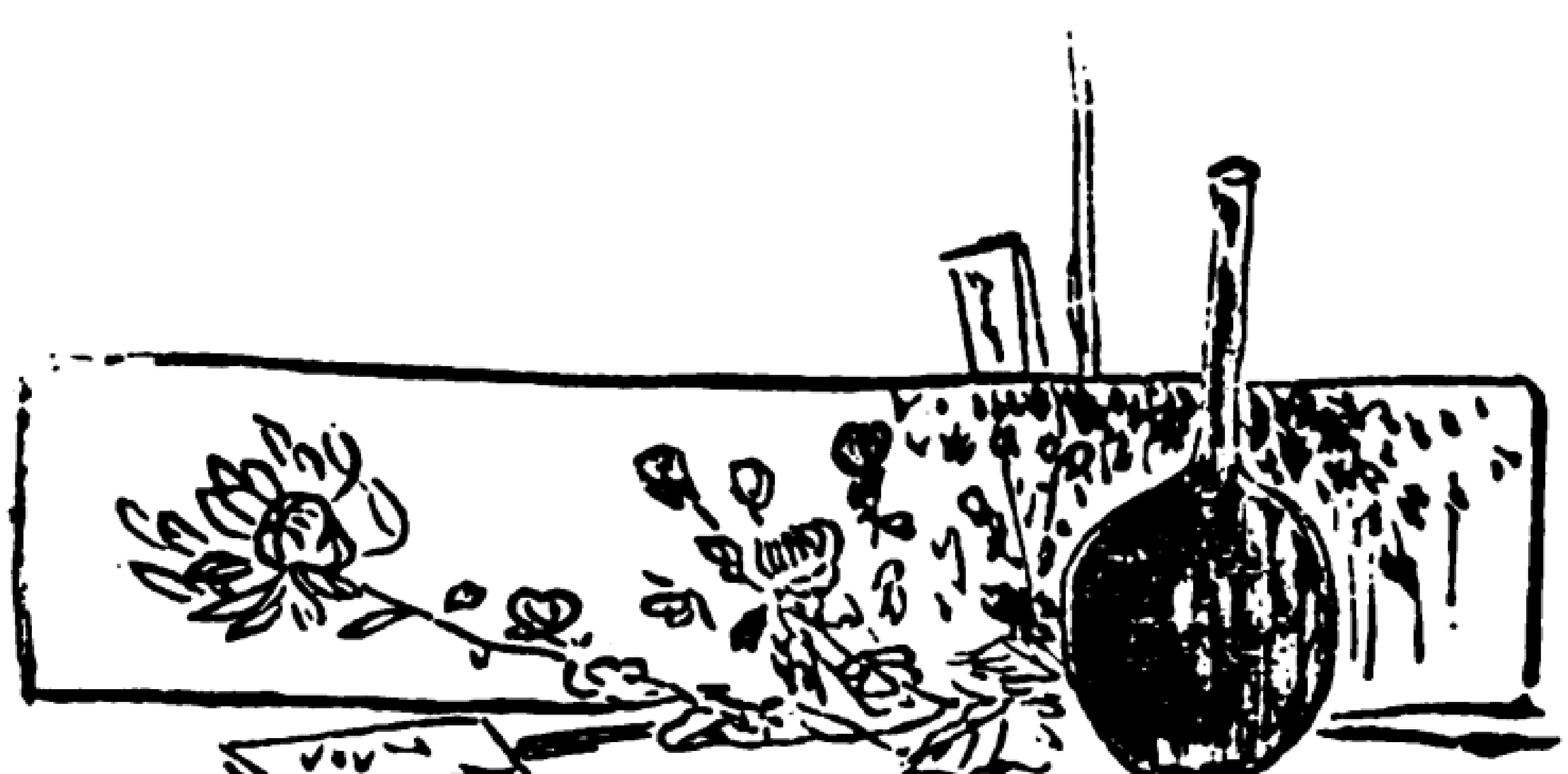
あはれにもかなしき事こそ承り及び候へ。昨日まで見奉りし御姉君か、れてよりの御いたつきは、さることながら、御よはひさへ未ださかりにましませば、さりともとたのみまゐらせしに、あはれや、かひなくて、けさ朝つゆと共に消えさせたまひ、とこしへにかへらぬ旅にたゝせられ候よし、魂うばはれたらん心地に、うつゝともおぼえまゐらせず候。そなた樣の御心のうち、そもいかばかりにおはしますらむと、よそならず推し上げまゐらせ候。さりながら、これとても、定まれる世のならひにて、さればこそ佛者の言葉にも、生者必滅會者定離とか申候へ、あきらめられがたうおぼしまどはせ玉ふは、さる事にて候へとも、なき御かたみの御みづからの御身を御大切に遊ばさるゝが、かへりてなき御あとの

御承愛と存じまゐらせ候。志ばかりのこのしな、せめて御前へ御手向け下されれ度、いづれ後ほどまうのぼりて、御くやみ言きこえあげまゐらすべけれど、とりあへず御弔ひのみ申しまゐらせ候。

山里より都の友へ

愛媛　籾山かめ

降りつゞきし空の、やう／＼晴れ渡りしかば、いと嬉しくて、先何より聞こえ上げんかなどゝ、心なやましつゝ、御地の有様のあまり心もとなく候まゝ、一筆御伺申奉るになむ。扨ても當地へ參り候てより、叔母なる人も、いと情深く、近きあたりの人々も、皆田舎そだちのまめやかにて、日々朝露しげき野路をたどりては、名も知れぬ千草など取り集めて、文机にかざし、あるは、月明かなる夜のそゞろあるきなど、中々におかしう侍れど、何様御許様を袖廿分ちまゐらせ候事とて、淋しさ云はん方なく、たゞ今日や來給はんか、明日や見え給はんかと、それのみ一へにまち居まゐらせ候。今年はいたく時雨の深き故にや、木の葉いつもより早く紅葉して、昨今は裏の山の白糸の瀧に、さながら錦を著せし如く、暮き姫神の御動きさへ、いとあはれに侍るを、まして御許様の來給ひて、ともに興そへ給はむには、いかに嬉しからんと存まゐらせ候。今しも叔母様は御許様にあるじまうけせんとて、裏の畑へあぜ豆とりに出で行かれ候ひしかば、妾もごもく、などつくりてまち奉らむを、あはれ同じき御心も御座せば、今日は是非とも御車よせ給へ。まち奉るになむ。



山里にある乳母の許に

日本橋　生方ひで子

それとはなけれど、戀しければ、文さし出し申候。此一日二日、風、特の外身にしみて、軒ばの紅葉ちりはてぬ間は、今朝はつ霜をおき初め申候に、近き山にや、雪のふりけむなど、人の申合へるを聞くにも、もし其あたりより見わたしの何山か自ら成つる、其麓の御里うらがれ渡る頃になれは、いつも御元の持病の起りてと覺え居候まゝ、いとゞ物の思はれ申候。此秋のさま承り度く候、こなたは一同無事に候間、御案し下されまじく候。實に月日の過ぐるは早きものにて、去年、御元が、門の柳のもとにて、以來は年に一度ならでは參るともなるまじきに、お顔よく見せ給へと、頼すりよせし時の光景、未だに目につき居事。秋の始末御つきなされ次第、一日も早う御出京あるべく、霜など降り出んには、道の程も危かるべくと存じ候まゝ、殊に持病のれうまちすにて、寒さは大禁物の由に候へば、寒くなる迄、御宿りの積りにて、御出下され度候。去年おん元が紀念にと植ゑゆきし菊の萬朱薇、此秋、試驗に出しし山水畫、被布、三枚襲の雛形など、御元に見すべきもの、あまた蓄ひ置き候。先はあら／＼かしく。

外國留學中の兄の許に

長崎　古賀秀子

別れ路の夕の悲しかりし事も、三年の昔と過去り申候處、兄上樣には土地慣りの御障もなく、日夜御勉學の程、誠に嬉く存候、御學びの爲とはいへ、懐しき古國を跡に、異國の空に居らせ玉ふ御身の、何かに物淋しくおはし玉ふ御事と御察し申居候。されど、來ん年には、日頃御苦學の功顯れて、學びの業卒へさせ玉ふとか。兄上樣の御喜びはもとより、父母君私の喜は譬ふるに物も御座なく候。此上の御願には、天晴れ月の桂手折らせ玉ひ、御歸國の後は、多年學び得玉ひし事を、御國に盡し玉はらんことを、偏に願上候。私も學校卒業後は、兄上樣の仰に從ひ、専門の教師に就き、英數學學び居候間、御安心遊ばされ度候、先便にて御送り下されし御地名所の寫眞、誠に珍らしく、公園等の美なる景色に、目を驚かし申候。殊に、女子大學校の壯觀なる建築を見ては、誠に羨ましく、我國にも斯かる學校あらばと、誠ゝ殘念の思致し候。父君樣は今十年若かりせば、見物に出掛けんに等、申居られ候。右の有樣にて、皆々無事に候故、古里の事は御心配御無用に遊ばされ度候。御文中。雨の夜月の夕は分けて古里の事思出て狹衣濕せど、來年を樂しみにとの仰言、承る身も同じ思に候ものを。日々寒さに向ひ候折柄、御尊體御自愛の程、海山遠き古國の空より願ひ申候。かしこ。

都なる姉の許に

小石川　稲吉ていこ

御姉樣、今日此頃の都の景色は、如何で御座りますか。

片田舍でも、御情深い立田姫は、いつもの樣に、御見舞遊して、紅葉の錦を、庭一面に飾つて下さいました、其の梢の下には、いつも、御姉樣の御噂で、花が咲きますの。此手紙に、一葉封じ込ましたのは、貞が、御姉樣を思ふ赤き心との積りですの。日曜あたりに、瀧の川とやらへ、御出で遊ばしたら、御本の栞りに、なる樣なのをねー。

御父樣は、御好の事とて、いつも、御機嫌よく庭いぢり、御母樣は、御姉樣の春着なと、機を織つて御出で遊ばしてよ、私も此頃では、自分の衣服位ゐ、縫ひますの。

作爺は、相變らず、可笑い事ばかりしますのよ。余り笑つて御母樣に叱られます。でも、鋏を腰に付けて、居ながらさがしたり、手に持つてゐる物を、忘れたりするのですもの。て、御姉樣の事を「勉强サー仕なさつたら、眼鏡サーかけて、學校の先生樣に、なんなさるベー」て、いやな爺ねー。

來年は、御卒業で、嘸御忙しうございませう。家の事は貞が居ますから御心配遊ばすな。妹のくせに、生意氣な樣て御座いますが、御心配は御勉强の御邪まだと聞いてゐますから、一寸申上ますの。左樣なら。

雪見に友を招く

高知　竹村よし子

昨夜は風いとふきあれて、身をつんざくばかりの寒さに候處、今日起き出てゝ、妻戸おしあけ見るに、いつの間に降りたりけむ、昨日まで枯れてのみ見えし梢ども、花ならぬ花を付け、庭もまがきも、白妙なる今朝の眺、我園ながらいと〳〵珍しう覺ゆるに、空名殘なう晴渡り申候へば、小供は嬉しげに雪まろびして遊び居候。あやしき伏屋に候へ共、面かくしたる此雪に、鏡なゆる池の氷だにあるを、今朝は岸のいはほにも花咲きいて、かゝるあかぬ眺めを、一人にて見んは如何と存じ候まゝ、御思召も御座候はゞ、御こし下され度、じこくうつりて、朝日のさしいでなば、あたらよき景色の消失せなん。されば雪の消ぬ中に御出下され度、埋火かき起し、御待ち申上候。かしこ。

病になやめる友の許へ

兵庫　佐久間やへ

思ひながら、其後はゆくりなう、打絶えしが、我もはや閑なれば、君は終日紅葉にあくかれ給ひ、夜はよもすがら月をめで給はんと思ひしに、今日風のたよりに承れば、思ひきや、此頃病に襲はれて、勝れたまはぬとのこと。打驚きて、膽魂も打ちつぶれ、消ぬばかりにはべりしに、尙承れば、いと輕く在らせらるゝとかや。先は少しく心安うなむ。こは必ず、きのふけふの氣候のうつり變りのため、よからぬに打ち犯され給ひて、まことや、一時のものゝさはりにて、煩はせらるゝことゝ推しはべるになむ。

されば、氣候もとゝのひ、醫師の藥も打ちめぐりなば、やがて快よくならせ給はんことを、待ち居ることになむ。とりわけ、おのれの神かけし祈りもあれば、いかでか驗しのあらざらぬ。且つ、日頃清潔を貴まれて衞生に怠りなかりしかば、少しも怠りのけしきに向ひ給はゞ、急に本復せられて、健かになられんこと、疑ひながらむかし。然はあれども、なべてのことは、不若待時といへれば、務の身とて、つまさるゝことなう、家のため、世の爲め、ゆる〳〵自ら愛し給ひて、一日も早うもとの健康に立かへり、道の爲にいそしみ、盡されんことをこそ、偏にねぎ上ぐることになむ、儘ならぬ務めの身にしあらねば、直にひたばしりに參りて伺ひ申すべきを、なめげにも、まはらぬ筆にかくなむものして、雁のたよりもて、驚かしぬれば、なべては推したまへてよ。又水莖の餘滴ながら。

花もみぢ、見ても、香もなし、色もなし、君かすぐれでありと思へば。

なやめりと、君がたよりを、きゝしより、月の光りも、くもりけるかな。

をちなれば外にすべなし
君がため
たゞ神々に
いのりけるかな

此腰折れども、うかびぬれば、御笑ひ給はん種草にもと、恥かしさも打ち忘れて、かくはすゝめつるになむ。あなかしこ。



松茸にそへて

遊津留

とくより約し置かば、必ず雨降りいてんなど戯れ玉ひし君か御言葉の、いとゝ心にかゝり乍らも、朝疾きいてし時は、風靜に空晴れて、時雨のけはひも見え申さず。こはのたまひし君かいまさぬ故にやなど、先づ笑ひ興しつゝ、打連れいて立ち、只今歸宅致候まゝ、今日の遊興のしるし迄にと、いさゝか分ち參らせ候。今年はわきて雨多く後に引續きたる好天氣にて、茸類發生殊に美事に見受けられ、妾の如き不器者にも、いと目に止り易く、興少からず覺え候に付ても、君のもれ玉ひし事、いと〳〵

口惜しき限りと御嘆きし合ひつゝも、友の誰彼弟妹のかけりありく様のいとおかしくて、覺束なげに採り行く姿の姿の、如何に滑稽なりしよと、歸る家路の物語りなど聞え上げなば、如何にくつかへり玉ふらんと、獨りほゝゑまれ居候。二里と申せば、さして驚くへき行程にもあらぬを、なれぬ山ふみに皆々疲れはて、實にあし曳の枕詞のふる實、今日の登り身にしみて、いと意氣地もなう、自ら語り出でん事も覺束なき口惜しさに、せめては高き香の失せぬほどを、かれ〳〵御嗜好の由なる父君か夕餉の御膳に上せ玉ふにも、御間に合ひ候いゝ、如何に嬉しからんと、打ふるふ手に、亂るゝ筆の見苦しさも顧みず、いそぎ一言そへ參らするになん。余は御目の前にこそ。

妹におくる

佐賀　坂本直子

靜ちやん、大變寒くなつたのね。阿父さんも、阿母さんも、御達者てお出てなの。そして、靜ちやんは、相かはらず毎日々々學校と琴の御稽古とに御通ひなのだろうね。

時に、靜ちやん、喜んでお呉れよ。姉さんは、やつとの事で、今朝退院しましたわ。どうも長らくの間、種々と心配ばかり掛けて、ほんとにすまなくつてよ。

そして、あの、姉さんが入院中には、何度々々も御手紙を送つて呉れて、ほんとにほんとに有り難たかつてよ。姉さんは、靜ちやんの御手紙をみるのが、何よりも嬉しかかつたわ。學校にさへ行かないなら、すぐ姉さんの側に來て、看護をして上げたいつて。……。妾嬉しくつて、嬉しくつて、泣きましたわ。

靜ちやん。姉さんは死んだつて忘れはしないわ。今にはじめぬ靜ちやんの御親切は……。

それから、あの、阿父さんや、阿母さんにも、靜ちやんから宜しく傳へて下さいよれ。大急ぎて御知らせまで……。

夏休みに都の友へ

大阪府　三田花

我のまだ都に在りける程は、昨日や今日とばかり、雨のみふりつゝきてければ、暑さも左程に覺えざりしに、わが身の國に歸りて此かた、雨俄かに晴れ、暑さの勢も、いとゞ増して、昨日に變ろ熱の空、瓦礫なとかす夏のさかりとなりてしかば、都のうちはいかに暑さのはげしからむにと思ひ侍る。

愛らしの君には、別れてより仰せ給ひしごとく、昨日は從兄の灘に遊び今日は住吉の色こき松園に足を運び、朝は友と共に神園に遊び、夕は月砕けて流るゝ澱江に棹し、さては、平常より嗜ませ給ふ歌を詠じ、あるは文ものしたまひて、久しく學び舎の窓にいそしみて疲れりし勞りを慰め給ふやらん。わが故里は、山背く水縁なる處とて、風は涼しく、月も涼しく、昨日は細き谷間の流れに、胸をあらひ、今日はいと高くけはしげなる山の頂に昇りて、清氣を嗅ひ、朝は妹と共にさま〴〵の草などつみ集め、夕は弟と共に涼しき月を岡の上に見る事をのみ、此上あらぬ樂しみとしつ。されば、都に比して、幾倍かの涼味ありと思はるゝを、特に庭の楓の靜々と茂り合ひてし處より、風を生じて、玉兎一輪窓に涼しく脊倍るゝ夜中こそ、げに都に在す君か戀しくもあれ、慕はしくもあれ。あはれ大空にかゝる此月、こはこれ全じ月ながら、都にて見れは都の月山にて見れば山の月、海にて見れば海の月、あゝ今宵わが窓にうつれる此月はしも、都に在す親しの君か窓にも、全じく照り輝けるならん。

一聲二聲時鳥の名乘行くを聞いては、君を慕ふ念のいとゞまさりて、仝じくば都の空に名のれかし、待ちわぶる友の窓の邊りを篤と、聲のみ瓏す時鳥に諭へし事もありき。斯かれば、何につけても、君の裏を忍ばれてならず、昨偶都の友の二人の君が、旅行の途中なりとて、わが草の家を仰きたまひ、有馬のいでゆに伴ひて湯あみしつ、あちこちの名どころをさぐりて後、六甲山を踰うて、住吉にとて赴かせ給ひぬ。

若しおん身にして、草の庵にてる月の姿を望まば、一時も早く來ませ、田園の荒れまさりたる破れ家には、食ふによし山海の珍味はなくとも、坐するに金殿の室はなくとも、深り酒らんとする邊り、徐ろに坐をなし、玲瓏の月に對して、相共に語り明かさんか。來ませ、來ませ、都の友の愛らしの君、風や月や水やにつけても、君まつこゝろいよゝふかし。さても才敏く情濃き君よ、深山には侍れど、煙吹く車の便さへあるを、來ませ〳〵、幽邃の片山里、よしや都の華やかさは見るに由なしとするも、松青く水清らけく風多きに、月の一輪大空にすやけくかゝれる夜半は、また華の都に増すものあらん。

いとしの弟の、わが爲めにとて植ゑてし朝顔の、いとながく生ひ延びて昨日しもゆくりがに花の三つ四つばかり笑ましげに咲きそめて、百艸の處せまきまでに生ひ茂れる庭も、亦みやびなるものにぞありける。御雲しくば君來ての後にもの語らんほどに、此處には只筆をつまみて書い述べつ、さらば。

都なる友に贈る文

山口　松村とし

蟬の羽衣かとまがふ薄衣だに、身につくるをいとひし三伏の炎暑も、いつしかさりて、袷の渡る風の音のみかは、よろづの風光、何となくうら、

さびしき頃と相成候折柄、御許様にはいつもすこやかにて、學びの山を深く分け入り給ふ由、いと〳〵うれしう存し候。さるにても、私事は小學校卒業の後は、朝な夕な家の手助けなどとして、立ち働き、餘暇國文をなちなる人に學び候へ共、わざとることとの繁くて、思ふにまかせず候。日々に見ゆるものは、鋤とる翁と草刈る童と、聞くものとては、樵夫のいく世つたはれるひな歌と、千篇一律なる馬士唄とのみに候。かくて、一生をすごすことかと思へば、御許さまのいとど羨ましく候。さて、追想すれば、御許様とと露おく袖を分ちまゐらせしは、きのふの如くおはゆれど、飛鳥川のながれて早き月日は、やがて半年にもあまり候。御許様の故郷にいましししときは、もろともに花をめで、月を賞し、或は文を作るにも、歌よむにも、二人ならではなししことなく、其交情のあたゝきことは、同胞もおよばざりしほどに候ひしが、君はひたすらに學の蘊を極めんとて、今鼓鋼生のなかば、はるけき東の都に旅立たせ給ひしよりは、互に隔てなくいひかはす友もなく、日毎唯ひとり心ほそく思ふにつけても、都の空のいとなつかしく思はれ候。御申上たきことは、かず〳〵有之候へども、先はこれにて筆とめ申し候。かしく。

海外の兄のもとに

牛込　はる子

夕ぐれの雁の聲、晴の露の色にも、秋のあはれのいとしく、何となう心さびしきけふ此ごろ、御なつかしき兄君には、異國の空高き邊、つゝがもなくておはしますにそ、御伺ひ申上候、次に私も無事まなびおり候まゝ、憚ながら御心安う思召し下され度候。さて、此月のはじめ、母君よりの御便りにて、一同事なきより承り、よろこびをり候まゝ、兄君も何卒御安神下さら度候。ことに、祖父君には、高き御齢にも、いさゝかの

病とてなく、弟ら打ちつれ、羽黒川に釣たれ、飯島山に茸かり、はた、庭の朝清めなどに、長閑かに過しなられ候よしなれば、野分おもしろき朝などには、紅葉をたきあたゝめ給ふ酒の香も、さぞかしと推しなり候。あはれ、祖父君の八十路の齢頂け給はん其來ん春よ、兄上には月の桂打ちかざし、萬里の波濤も壓するの概もて、年ふる里に歸りますらん、其ほどこそ、兄君が青雲の窓の八重櫻匂ひこぼるゝ頃ならめ。あゝ、其折の祖父君はじめ皆々様の御よろこび、はた此身の喜び、如何に候はんか。

あゝ、雁なきて、松山すだく此月の夜、兄君にもさぞかしライン河の此月に、吾妻の山にいでにし月よと、秋の故里しのびいで給ふらんなどゝ推しつゝ、例の寫眞帖とうでゝ、かくは認め申候、時せつがら、異國の霜露におかされ給はで、御いそしみ給へかし。かしこ。

都の友に

磐城　永田きよ子

光陰は矢の如く去りて再びかへらずとは、古聖の金言。明日よと海邊の遊び待ちこがれ候ひしも、いつしか秋風身に染む候となられ候。御許様には、さしたる御變りもあらせられず、日々の御學び、陰ながらうれしく存じ候。妾も變らず、せまくはあれども、學びの庭に遊び居り候間、御安神成され度候。

さてとや、近頃東都の新紙は、筆を揃へて、女學生の腐敗てふ、聞くもいまはしき事書き並べ、某々女學校生徒の非行を摘發し、其の德操を傷け、他人の惡事醜聞を聞くを悦ぶ、一部社會の好奇心を迎へんとせり。想ふに、火なき所に烟はたゝぬとか。新紙の云ふ事、強ち僞りなりとも云ひがたく候。されど、東都の流行は、海老茶袴とやら、女とあらば藝妓酌婦は云はずもがな、淫賣婦に至るまで、とく〳〵と女學生を氣どり大道を横行すと。新紙は、海老茶をもて、直に女學生とし、彼等醜行者女學生の頭上に歸せしめんとするならんかと存じ候。なれども、或は一部墮落生はなきにしもあらざるべしと思はれ候。されども、そは東都女學生の幾分の一にも足らざる少數ならん。且つ、彼等云ふ處、短所をのみ連載し、たへて長所を記せざるは、公平の觀察を缺くものと考へられ候。

尙ほ妾は一言なき能はず。彼等新紙は、醜事を發はきて何せん意にか、日進月歩の社會、漸く女子教育の盛ならんとする今日、世人をして此に一顧轉せしめんとやする。風紀を矯正せんとならば、今少し靜かに事せられて然かるべきかと存じられ候。

兎あれ、妾の望みは、御許様の學舘共に、いやが上にもあがり候て、學生たるの模範となり、我等の指導となり、世の父兄をして、遊學てふ觀念ないだかしめ、益々後進者の教育思想を發達せしむる様、心かけられん事に候。草々。

もちの夜友の許に

北信　すみれ

唯今はわざ〳〵お仲殿御つかはし下されまことに難有御禮申上候仰の通り去年も其前も村雲のにとへはふるけれど大方花に嵐のそれよりもつれなく、徒らなる夢にいし〳〵、柿栗の備物あだに相なり申候て見ぬ影うらみの顏、宵宵、軒のたまだれ更くる迄かきつゞりし事もおはし候を、こよひのさても晴れはたり候ことよ、これをばおもうまなる秋、おもうまゝなる夜とや申さん、

御高殿に今集り給ふは師の君が門下に其人ありとしらるゝ例の姫様顯様才學いづれを歸上姝君とさだめ難き御方々を初めとし御車數多よせ給ひ

てお玄關にはいろ〳〵の御はきもの所せき迄にならべられ辭の御はなを紫のふとを、まことにお庭の七草も面伏せゝらるゝやうにとお仲殿の御物語、きゝ參らしゝ母は早くも鏡臺はが前に押しやりてそゝけたるをば取つくらふけしき、私ぜひ〳〵其末席けがし參りて、月の御前襟折よみ參らせたくは候へ共、何としてか昨程より頭なやましう持病の齒痛さへさし添ひて心苦しく候ひしが母に知らせて獨り居間にとぢこもり我ながらこよひは月につれなく枕にしたしまんものと存じ候ひし折とてまことに千載のうらみには候へ共寢上いたし難く「秋も秋こよひもこよひ月も月ところも所君も君」にしていなみ參らするは忍び難く御座候へ共弱き身の今更詮方なく、これしたゝめつゝも千草の上の露のこと涙とゞめかね申候

一點くもなきこの良夜、うつくしき人、才ある人、位あるも位なきも歌の親しみを交へて、御高殿のおばしまに小筵かゝげてあの影御らん遊しつゝ、やがてみこゝろにうかぶを其儘御短冊に色紙にはた薄やうに御したゝめ遊すらんおもかげ、うつゝのやうたどられ候、定めし〳〵お桂樣、かれての秋好ませ給ふ御心を例の卷の御方にほこり給ふべく、お花樣またこよひばかりは、春の野山をお忘れ遊ばすらんと推し上候。

厭世の詩人西行も「月故惜しくなる命」と申候を我等凡俗の躰、あすの命をも知らで猶百代千代をとこひねがふものはまたこん年の秋こそは必ず〳〵と今より萬づの神にいのり居り申候、御うたむしろの終ふる迄露なかゝしそ、風なみだしそ。さてもお琴樣の御調お庭の松風にかよひて月の世までものぼるべく、かしこにこのかぐや姫あらぬ罪を告白して再び地上に降り給ふらむか、同人樣よりの御ことづてもたしかに〳〵承まはり申候我の參らずは歌もおいや琴もおいやと仰せられしとか、そは大方お仲殿の饒口ならんとおしはかられ申候、あまり圓滿にあまりに滿足なろは、寃神のそれみありときく、數ならねどもはれひとり不參の故なもてこれが妬みをまぬがれ給へ、あはれ秋も秋、月も月、人も人にして我身のみ參りがたきは詩の神に見すてられしとや申すべく秋の女神立田姫願ふは錦繡が菊紅葉の御供にはぜひかはらせ給へといのり居參らせ候この一籠けさ山邊のしるものより送りこし候まゝ御咏ひたまはり度甘きはわが心と見そなはせ給へさてお使御またせ申てしたゝめしこの文前後のみだれよしなに御推もうじのほど願上候末葉になりて恐れ入り候へ共御父母樣へよろしう〳〵御傳へたまはり度く又申すまでもなけれど、たれ樣かれ樣御一同に不參の御はび幾重にも御取計らひのやう願上候我なば罪人とのゝしり給ふもあるべく、恐くき女と御いかりの方もあるらむまことにうらめしきはこの病にて候を、あなかしこ

紅葉狩に友を誘ふ文

福岡　井上桂子

千早振神無月とや、時雨をはこぶ夜嵐のさとおろしきてはらはらと散りしくを。さてこそ、兼て御許樣と契りおきし高根の紅葉、さこそは有明の月の月影の吹きおろされけめといとゞ心許なん思ひ惱み居候折から、鹿の音はたと聞えぬ。あな嬉し、さてはまだ彼峯の花のちらずして鹿さへ賴む木の下にてば鳴くか。されど無常は春の花のそれのみにもあるまじ、有爲は秋の月のそれのみにも限るまじ。實にやあすありと思ふ中だに木枯の絕間なき此頃、あれは又今日をおいて何れの日か彼峯の紅葉訪ひ申すべきぞと思ひ候へば、只あやなくも心せかれ候ふて裏庭に立出づるもとや遲しほのぼのとあけゆく峯上見上ぐるに、さても美くし、霜のたて露のぬきとやたゝえけむ紅葉ばのいつの時雨にや染出されけむ紅ゐのふりての色一しほ鮮やかに遠目には宛ら錦の帷かとも思はれ候を、

木の芽ぐふ林園の二つ三つ其のあはひにほのみゆる、げに秋は山里なこそと覺えず笑顔にいり申候。吹く風をうちつけにうくる山もせの様さへかくの如くなれば、まして其奥の岩垣のあたりさてば鮎返へしの瀧のほとりより少し下りし早川のみなもの眺めいかにおかしう候はむか。折ふし空の何となうしめりがちなる彼時雨の糸をたてぬきに錦織りかくもみぢ葉のはらはらとちりしきて流れもあへぬ花のしがらみせきつくる美はしさを見るよすがともなり申さむか。よし、妾に林間酒を煖めて紅葉を焼くのみやび心はあらざれどせめて綠苔を拂ひてものし給ふ程の歌短册は具へおき侍るべければ、あの鹿の入らぬ間ぞ、この月の落ちぬ間ぞ、親しき友のたれかれおん誘ひ合はされ紅葉にうもれし岩の掛道とく曉かけてふみ分け給へや。

折柄さとひとしきりおろしくる山風の彼の峯のもみぢ葉一つはらはらと文の上に散りければ嵐の音諸共卷きこめて參らすになむ。見給へ此色の濃きことを。

ふるさとの友の許へ

宇都宮　坂本松子

冬は御波にも音づれ候か葉も落ち盡したるべき檜山の邊夜毎の夢に繰返して懐かしさは一日一日と深くなり申候例の頑者の事とて此方より交らんと思ふ人は彼方よりさけられ彼方より睦交さんと近寄る人は此方にて遠ざかり候ものから別に心安き友といふもなく同じ學びやより來りし人々も場末の里の淋しくて末枯の尾花を吹く風の窓打つ我が住居には片寄れりとて訪ふもなければ只一人明け暮れ書をのみ翫び居り候されど甲斐なき友數多く接たんより賴みある人一人二人に心明さん事まさりなんと思ひ居り候へば敢へて悲しき心地も致さず候へどゝ暮れ行く年の淋しき夕には心細からぬ事もなくそゞろに戀は君が空に走り候遠ざかる者はと昔の人はいひ殘し候へども近きは明日相見ん心賴みもあれば懐しかられど遠は呼べど答ふる聲も聞えれば一入懐しく親しく行き通ひし昔あまりに心なかりし様なとも思出され果ては心の中の悲しさを繰り返す事もおはしまし候かゝる處に淋しく暮す身をあはれと思召候はゞ御玉章御惠り下されたくくれ〲も願上候かしこ



名流雑爼

五十年後の臺所

石井研堂

炊の釜より立昇る湯氣は、春の曙の霞雲とも見え、擂鉢の遠雷僅に止めば、沛然柄杓を傾けて、美曾汁はさながら夏の夕立後の濁浪を擧げ、お三の頬は、吹竹にて吹く火と共に紅くして、霜に飽ける楓林に、夕陽の相映ずる如く、鱠の雪淺漬の霰、俎の上には時ならぬ冬景色を粧ひ出し、朝に夕に、この狹き臺所内に、四季の來往、殊に子供の啼聲、猫の飯せゝり、牛乳の煮立ちてこぼるゝ騷に、御飯の焦くさい香するなど、一時にかちあひ、戰爭中に火事と煤掃ある樣で、どこから手を付けて善いのか分らぬ騷ぎを繰返して居た時代もあつたさうだ。其忙しさ想ひやるべしである。

十年一昔とはいへ、僅五十年きり過ぎぬのに、今日の樣はどうであらう。たとひ五昔前の人に聞かせても、とても誠には思ふまい。三度三度の食物は、すべて供給會社から仕送り、茶酒湯水、呑口の栓をひねりさへすれば、立に辨じ、もう此節では、どんな頑固人でも、自宅て煮炊する者なく、從つて鍋釜水瓶七厘等、臺所道具といふてたものは、能く／＼の場末の地にても往かなければ、見ると出來ず。さても世の中といふものは、變れば變るもの。

が、五十年前までの人々が、古來の臺所組織に安んじて、時勢の進歩に伴ふとをせなんだのは、寧ろ怪むべきてある。

宅のお婆さんの話によると、今の供給會社の出來る前までは、御飯も汁もお肴も香の物も皆名々の家で調理割烹したものださうて、御飯を炊かうとするには、先づ米櫃といふ大きい櫃があつて、それに白米を買ひ込

んておき、一升でも二升でも、炊くだけの量を水て研いで、糠を流しおき、それを翌朝――多勢の家ては晝も夕も、――炊くのであるが、其火を焚き付けてから、火を引き、御飯を蒸すまては、手放すと出來ず、付き切り同樣との事。ざッと、米研ぎが十五分間、お釜に入れて焚き付けてから、お鉢に移すまてが四十五分、跡で釜やお鉢を洗ふ手間が十五分と見て、一日に一度炊の家でも、お飯の爲めにばかり一時十五分の暇が潰れるのである。戸數五十萬の東京中を計算すれば、一日に六十二萬五千時間、一ヶ年には、二萬五千年の時間數と同しくなり、それに、五十萬軒て銘々釜下に炊く薪が又たそれに準じて富士山ほとの容積となるのてある。それが、今日ては、僅十五の本社支社の割烹で、間に合ッて居る。つまり、一軒分をたいても、一萬軒分をたいても、手數はそんなに違はず、薪の儉約になる量も、中々少しはかりては無い。特に、此組織になッてからは、三度が三度、暖かいのを送ッて來るから、古飯を溫めるの、お結にして燒いておくの、來客が有つて足りないから、炊足をするのといふ手數もなく、今日は赤の御飯にしやう、松茸のにしやう、牡蠣のにしやうといふた處が、たゞ電話て通じてやりさへすれば濟む。

たゞ、御飯だけても、こんなに損得があるので、お汁やお肴一切の料理を、自宅てやつたのては、一日の時間は全て食物拵にばかり潰れて仕舞ひさうに想はるゝ。五十年前の婦人に、これぞといふ事業を成功したものゝ無いのはこの爲めてもあらうか。分業は富を致すの要法といふとは、五十年處じやない、百年二百年前の經濟學者がいふてた筈だに、食事の方は、どうして分業にならなかッたのてあらう。尤も、「蟲が涌く」といふ諺がある男世帶や、職工の多い工場なとには、辨當屋といふがあッて、三度三度辨當を送ッてたさうだが、それが、一般の供給をやらなかッたのは、不思議に思はるゝのてある。

なんか話してる時、正に午後の五時半て、供給社から例の通り電話がかゝり、奧さんが

「今日もオムレツと、お吸物を二つ。種てすか。蝦し

んじよなそてよいてせう。‥‥それなら雁でもようございます。‥‥旦那が少しお加減がよくないから、御飯は柔かめの方を願ひます。さう。それから、林檎を三つ。‥皮はこちらで剝きますから、丸のまゝでようございます。さよなら。」

いふて、返事が終るか終らぬに、供給口の戸が明いた。妻君は、直に之を受けて、食卓の上に移す。品數は、注文通り、オムレツ、吸物、飯、小さき蓋物は、香の物なるべし白磁の皿に、坊の顔色に似たる紅林檎三つ、しかも小刀まて添へてあツた。

この供給會社から、需要人の宅に送る仕掛は人手にて持運ぶにはあらず、ガス、水道などの仕掛の如く、鐵管の中を通りて來るとなるが、其管は、眞空て角筒の狀を爲し、其の一方に、密合する筐――お料理を入れたる筐を――當つれば電氣同様の速力にて他方に送られ他方から筐を當つる時も亦同しく、つまり、管内は眞空なれば、外部空氣の壓力の爲めに押込るゝ理窟なので、何の會社も、注文を受てから、三分間以内に料理を屆るといふが、競爭の一つの條件となつてをるのである。

この眞空管は、料理會社でのみ使つてをるのではない。各種の商店、官衙、皆之を布設して、小荷物の送達をしてをるので昔は、郵便物を赤塗の小車に載せて、人が牽き、本局支局の間を歩いたものであるが、今日では信書でも小荷物でも、皆この管に頼つて送ツてをる。で府内には、この眞空管交換局があツてたとへば洋服やが、甲の家に洋服を送りやうとするには、交換局を呼んで、甲家の管と運絡をさせる、其上で送ツてやる。若し又羅紗屋が、見本帳を洋服やに送る時も、交換局で接いて貰ツた上に、送ツてやる。至て電話の交換法に能く似てるのである。

さて石田家では、晩餐の御料理が來たので、親子三人會食を始めた。會社より屆く時間は五十年前の人々が臺所で作ツたものを、食堂に運ぶよりも迅いから、お吸物などは、熱くて口を着けられぬほどである。

食卓を圍んだ三人は、思ひ〳〵に、箸を執る、お吸物を吹く、小刀を使ふ、小さい響を出し始め、奥さんが、蓋

物の蓋を取ッて、箸を付けんとしたとたんに『おや〳〵これは何お香〻だらう。‥‥何てせう。鹽辛！おういやだ。どうしたのでせう。』と、顔をしかめながら、坐右の電話口に就き、あとの二人も、一寸箸を休めて、その方を見て居ッた。『只今頂いたお香々ね。鹽辛ですッて。どうしたんでせう。さう。それでは、直によこして下さいな。オムレツに、からしが付いてませんてしたから、一所にね。』いふてる内に、ほんとうの香の物と、からしが届いたので、さきの蓋物を返してやり、

『三百三番にやる鹽辛が、家へ間違ッて來たのですッて。私は、あの品を見ますと、胸がむか〳〵して來ますので‥‥。』なんか話しながら、座に還り、三人又箸を執り始めたが、御飯は、釜の内の氣壓を高くして炊いたので、其熟し方申し分なく、お肴も、吸物も、五人十人分づゝ料理したものとは、雲泥の美味。

『僕は、お吸物大好。乾さない椎茸おいしいね。』

『それ〳〵溢れますよ。お話はあとにして、横見をしないてお上り。』

『おとうさんが、お話をしながら食べろッて。ね、おとうさん。』

『ほんとうですか、おとうさん。』

『急いで食べると毒だから、お話をしながら食べるが宜いと、言ふたやうだッたね。』

『さうれごらん、かアさんは知らないのです。』

『それならよいよ。おとうさんがさうおッしやッたのでは‥‥。』

やがて三人の食事の濟ふとした時、太郎が起ちて、

『僕がお湯を注ぎませう。』

『火傷してはいけませんよ。一號の栓は煮立ッてますから氣をお付け。三號栓ですよ。』

『分ッてますよ。知ッてます〳〵。』

太郎は、幾つかある管口の前に立ち、所謂三號口の螺旋を半捻れば、水晶の如き溫湯、瀧を作して出つるを土瓶に受け、卓の上に出す。三人之を飲みて、更に林檎の皿を引よせ、皮むきは旦那の役にて、これも忽ち平げ盡しこゝに樂しき晩餐もお仕舞になッた。

奥さんは、會社の食器を一つにして、眞空管に送り返し、箸とお茶碗だけは、水道栓の下に洗ひ淸め、これだけて、跡片付けも濟み、明朝の支度をするにも及ばず、三人直に庭に下りて逍遙しながら、四方山の話をして居ッた。

「今日、歸りに、三橋の處を通ると、人が黒山のやうに集ッてるから、何だらうと思ッて寄ッて見ると、麥酒管が破裂して、麥酒を二間も高く噴き上げて、雨になッてるのだ。まだ會社から、工夫が來ないので、脇に巡査が居ても、手の付けやうなく、唯往來の邪魔にならないやうに制してる丈け。あの邊に客待してる車夫なんかは、みんな、口を天に向けそれを受けて飮んてる、又、兩手の掌に承けて飮んでる者もあり、氣早い男は、屋根にする亞鉛板を卷て漏斗の形にし、四斗樽に幾本も受け溜めてるもあり、傘を倒にして承けてるものもあッたが、人間といふは、隨分意地汚いものだね。あれだけでも、會社では、とんだ損失をしたらうよ。」

「僕も見たかッたね。お汁粉の雨でもあるなら、僕は、どんなに遠くとも往くね。おかアさんもさうでせう」

「かアさんは、そんな降ッたのなどは、たべませんよ。太郎と違ひますから。」

「それだッて、會社の人が言ッたのですもの。こちら様では、一番お汁粉の御注文が多いッて。お汁粉のお話をしたら、大層食べたくなッて來ましたよ。」

「今御飯が濟んだばかりですから、いけませんよ。どうでせうね。おとうさん。」

「そんなに食べたいなら、取ッたらよからう。」

「僕かいふてやりませう。おッかさんの分も。」

太郎が電話口に出て、取よせたのは、御膳、田舍、薄茶、雑煮なんか十杯ばかり。三人は第二の晩餐會をやッて、次に玉露の薄ぬるいのを五六碗づゝ受けて飮み、十時ころまでお話をして居ッた。

この家には、お正月前に、暖室の蒸氣管も引ける筈になッてをるが、さうなれば、煮炊はせず、湯も茶も沸かす用なきが上、室内を暖めるには蒸氣管、室内を照すに

は電氣燈で用が濟み、何一つ火の種を使ふ道が無くなるので、マッチなんどは年中一本も使はずとも善くなるとのことである。

すでに、こんな風に、天下一般養炊を廢したので、家に雇人の要なく、食器は無し、臺所、戸棚、下女なんとの名は、古語辭典に見る計り、其實物は容易に見られず、

吹レ火朱唇動、添レ薪玉腕斜、
遙見二煙裡面一、大似二霧中花一、

などの詩は、何を詠んだのか、判斷のつく者が、全く無くなつたとのこと。さても〳〵、世は變れば變るもの。この上の進歩は、飲まず食はずに生きてる法を付けてくれる、會社でも起るのであらうかと、石田の妻君のお話を其まゝ。

（完）

公德養成の結果。

老嫗ありて道を相讓りけるが、其一人は曰く、貴嫗は年幾何ぞ。曰く七十なり。曰く、吾は六十九なり。先々お先にと。

山家の秋　京都　上田和歌子
萩散らば紅葉かさして歌よまむ都に知らぬ秋の山さと

寺　京都　上田和歌子
鐘の音に千年のかみを忍ぶかな昔あれにし蜂の岡寺

寺　伊豫　織田歌子
撞き終へて法師たゝずむ鐘樓の苔むす屋根に木の葉かつ散る

寺　向島　溪水
家鳩のけふ〳〵群れきて遊ぶなり秋雨はれし古寺の庭

寺　山口　阿部敬子
夕な〳〵なく梟の外にまた訪ふ人もなし谷の古寺

寺　美濃　高木庭子
孫の手をひきし翁の行く先は落葉かさなる古き山寺

雁　阿波　深尾波太子
ふるさとにいます母君いかにかとながむる空に雁なきわたる

山家秋　岐阜　山田ふじ子
野路にゆきし背子が姿も見えずなりて袷の袖に秋風ぞふく

雁　横濱　みさ子
在明の月をは跡にのこしおきて何をいそぐか雁の一つら

山家秋　弘前　今ちか女
夕まくれ小男鹿わたる谷川のせゝらぎさびし山かげの庵

婦人粧飾術

マスター、オフ、アーツ　青木衆雄

其一　ふけとり

婦人の頭髮を大事にする事は世界各國何れも同じ事である就中吾邦などは其極點で又頭髮裝飾の方法も一番能く進歩して居る、元より婦人の身嗜であるから充分の注意を要する次第であるが左りとて唯外裝にばかり全力を注ぐのは甚だ心得ぬ話しであるむしろ衛生的に注意することそ最も肝要の事であらう先づ第一に毛髮保護の點に就て最も邪魔になる者は雲脂である、此れ迄隨分刀圭家中で研究した人もあるけれとも充分な方法を示したものがないから今茲に私が近刊の米國ルイスピール醫學雜誌中より抜粹して世の婦人方へ紹介しませう同雜誌に示せる處方は少許の硫黄華を清水に溶解し能く掻き混ぜて澄した後壜中に貯へ置き毎朝此れを布に浸たして頭部を拭ふのである、尤も幾分か毛髮を粗くする恐れがあるにより僞里斯林若干を混すれば頗る妙なるべし、此方法に依る時は頭部は極めて清涼を感じ、其後二ヶ年間位は少しも雲脂の發生によりて苦しめらるゝ事なしと云ふのだ猶ほ他に注意すべき事は元來雲脂は皮膚の新陳代謝より發生するものであるから吾邦婦人の如く梳櫛にて劇しく毛髮を梳き又は皮膚を摩擦する等の事は却て刺激の結果益々雲脂の發生を促がすものだから成る可く爲ないが良い

其二　おつくり

婦人としてその容色の白きを好み且つ皮膚の美なるを欲するは其裝飾上當然であるのみでなく婦人として最も必要なる身嗜みである元より如何なる秘藥を施こすとも常に身軀の清潔に留意せざる婦人は到底其希望を遂する事能はざるにより必竟衛生上の思慮に富める婦人の外はこの秘方も其効を奏すること覺束なきにより清潔を旨としての後にあらされは全く無益の事である其秘方は

一白蠟　半唡

一鯨腦　半兮
一ラノリン　一兮
一巴旦杏油　三兮
以上四品を陶器製の器に入れ能く溶解するを待ちて後
一橙花水　一兮
一安息香丁幾　三滴
右の品よく混加して掻き混ぜ壜に貯へ置くべし成るべく火氣のある所を避くべしこれは從來吾邦に行はるゝものと異りて奏効頗る著して時々數滴を掌に受けて面部に塗る時は皮膚艶麗を加へ且つ芳香馥郁として尤も愛べきものであるこれは現今米國交際社會に於て賞用せらるゝもので元と藥劑學大家の處方であると云ふことだ

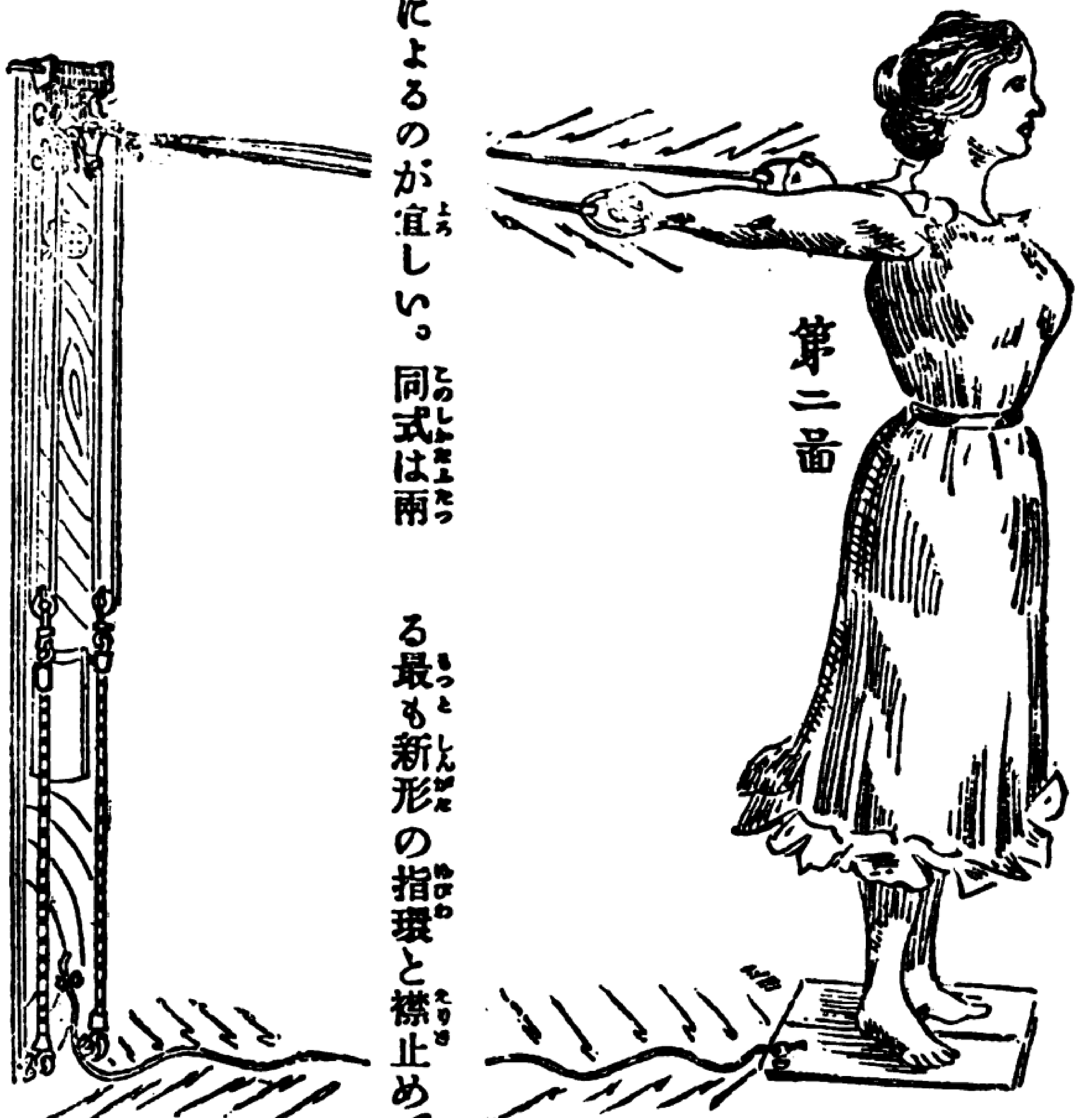
其三　お姫様のうんどう

御姫様の御養生と云へば、海水浴か溫泉行きなど、贅澤極まるものゝ様に、思はれるけれども爰に云へる室内運動は、其様な不經濟の事てはない、一躰身躰の發育の盛んな時は。外部からも此れを刺激して。充分の發達をさせる事は。勿論てある。邸内が廣い故に。各種の遊戯運動によつて。思ふが儘に其目的通りにする事が出來るけれども。中等以下の家にあつては。其様な譯に行かぬ。依て玆に。一種の室内運動の方法を紹介致しませう。夫れは近頃歐米各國に於て。專ら行はるゝホワイトリー式の室内運動法て。男子婦人共に用ひらるゝものであるけれども。殊に婦人方に適當するのである。第一圖に示した二つの把つ手と。


第一圖

三つの滑車と。一條の紐とて。事が足ると云ふ極めて簡單な方法てある。尤も其人の年齡と。躰力の强弱とによつて。適當の重りを其下に吊るし置て。慣るゝに從つて其錘を增すものてある。運動の方法は。四肢

と全身との運動で前後左右に屈伸するのてある。呼聲は勢一杯に唱へて。運動を快活ならしむべし。夫人令嬢方にて。此の運動方法によつて。胸圍を擴め。筋力を増し。仲には脂肪肥滿の方さへ。治したものもある。然れば若し神經系統の疾病を患ふる人であれば。第二圖に示したフォルチス氏式によるのが宜しい。同式は兩足の下に備へた鐵板と。蓄電池との作用によりて四肢全身の運動と共に。電氣を患部に導き。頭痛。不眠症。神經痛。僂麻質斯其他一切の神經系統の諸病を全治せしむると共に筋肉の發育を助け。

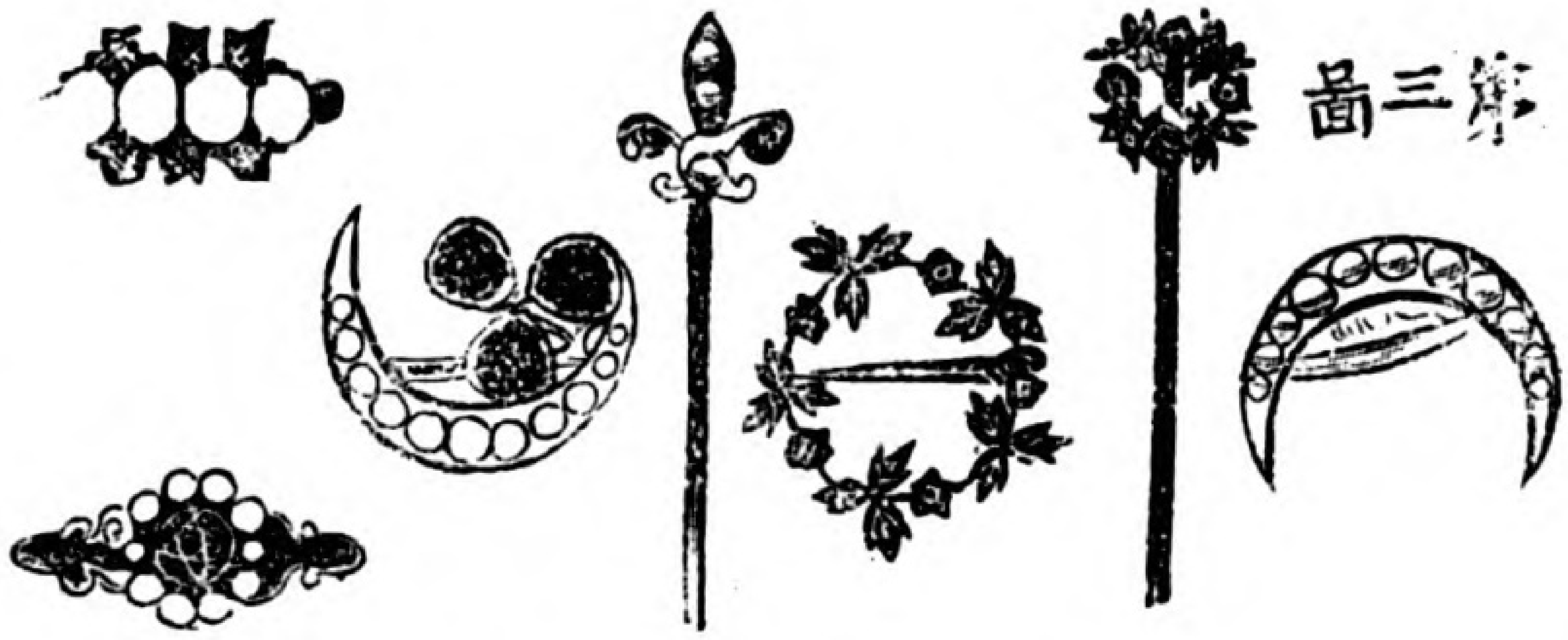


身躰は健康を増すのてある。婦人用の室内運動としては。最も新しいものて其効用亦極めて著しきものてある。

其四　指環と襟止

第三圖に示したものは此頃佛國の巴理及び英京の倫敦で。専ら流行る最も新形の指環と襟止めてある地金は多く黄金を用ひて光澤消しがしてある。珠玉は現今の流行の眞珠を鏤ばめたもので。眞珠の間に小さい金剛石を象嵌したのが最も好評判である。爰に示した見本は。巴理府屈指の装飾品商の意匠に出來

第三圖



た最も新らしい流行の雛形を紹介したものである

其五　蒸風呂

吾邦の人は。性來潔癖であつて少くとも隔日位には沐浴するのを例としてゐる。殊に婦人方にありては裝飾上のみでなく。衞生上からして身躰を清める事は必要であるに相違はないが。しかし。身躰の脂垢を去ると同時に皮膚を柔らかくする。從て心神を爽快するものは。蒸風呂であらう。近來第四圖に示したものは。歐米諸國に於て專ら流行る室內用蒸風呂の雛形で酒精洋燈によりて（醫用吸入器と同樣な仕方）冷水を沸騰させ蒸氣を充滿する工夫である。時には冷水中に香水を混て。馥郁香氣を發たしめて心身の快味を感ぜしめ。又皮膚病の人などは。冷水中に藥液を投じて蒸氣に混ぜれば。奏功が顯著であるばかりでなく人々が其好む所に從つて自由にする事を得るのは。何より結構である。箱の上部と橫側は。開閉が出來る樣になつて居て出入が自在である。此れに其製作が至つて容易であるから。吾邦でも採用したいものです。殊に婦人用としては最も適當のものであらうと思はれる。平常の浴湯に比べると。身躰を暖める事が徐であつて健康上最も都合よいのみならず。流行寒冐。節肉疼痛。關節疼痛其他僂痲質斯症等には。最も効驗のあるのは疑いない。就中肥滿性の婦人で此れを常用せば。窈窕柳腰となるのは請合である

第四圖



其六　空氣蒲團

空氣蒲團は。近頃米國で新案したもので。船中。病院。其他自宅用としても頗る便利なものである。一見如何

にも贅澤品のやうに思はるれけども。實際は。比較的費用も少なく。運搬の便利なのと。寢心地の宜いのとは。此れを用いて見ない人には分からぬ事である。殊に衛生上よりするも健康を增すのは勿論で。彼の病人の如き永く臥床にあるものには。殊に適當なるは論を俟たない。上部即ち枕を置く部分は。枕の轉ばぬ樣に堅くしてあるから極めて心地がよい又不用の折は。空氣を拔いて。疊んで置けば少しも邪魔とならぬ。近來旅行用として携帶する事が大に行はれてゐると云ふ。吾邦の如く。旅舍の設備が不完全である所では。別けて便利であらう。米國のロード、アインド洲プロビデンス市製造會社でこしらへる製品は。最も優等であると云ふ吾邦の護謨會社でも。早晩此れを製造するであらう。其雛形は第五圖の通である

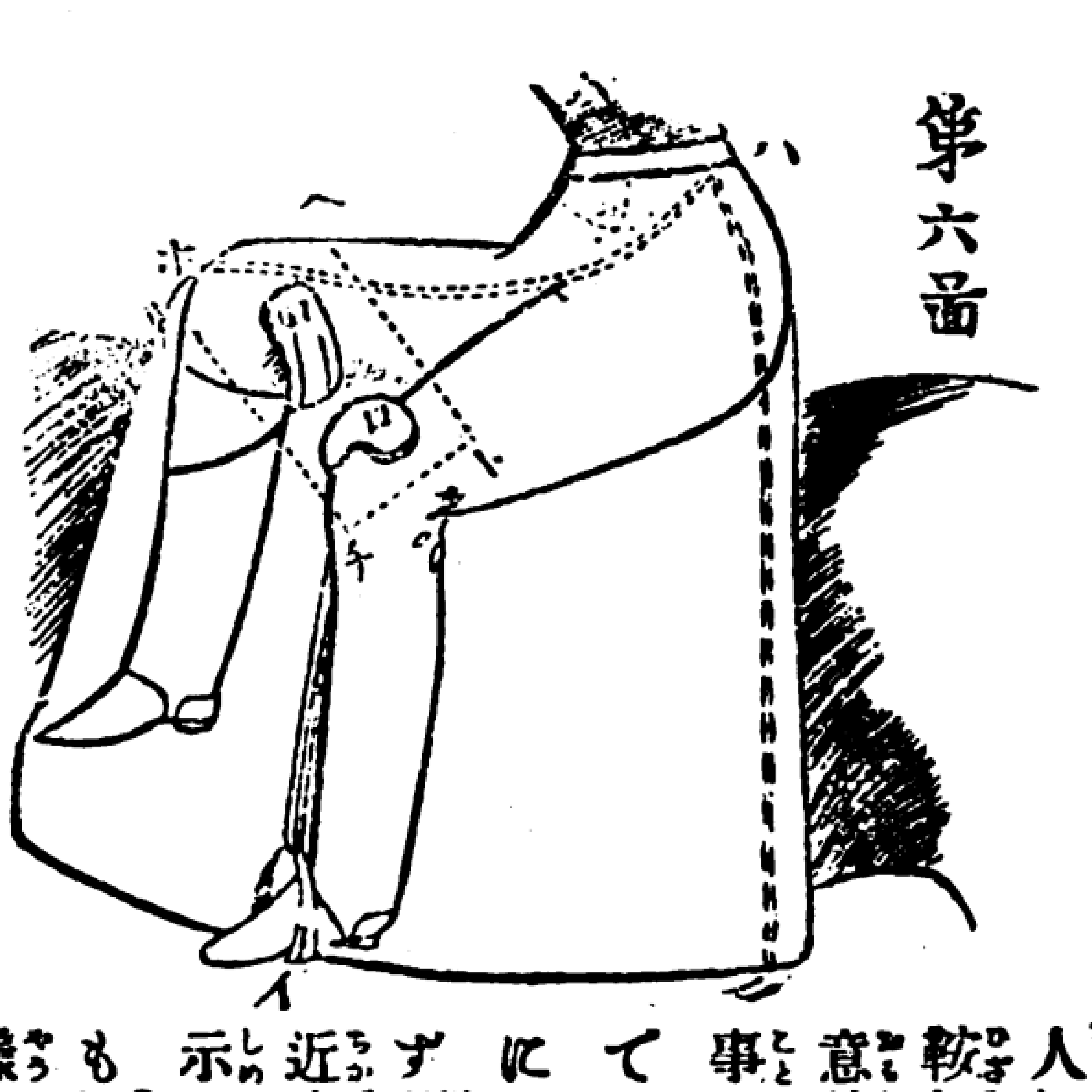
第五圖



其八　馬乘

婦人の騎馬は。誰れしも知る通り一ツの鐙(イ)と。二ツの鞍鈕(ロ)(ロ)とによりて。馬背に横乘りするものであるから。男子の騎馬法に比ぶれば危險の場合が多い其危險の内でも。落馬の折衣服の裳(無論洋裝の婦人に就て云ふ)が。鞍鈕に引き掛りて意外の負傷を招く事が多い歐米諸國でも。此れが豫防について少なからず研究を積んで。近來漸く第六圖に示したやうな鞍鈕も極めて滑り易い樣にして。衣服の裳も特に騎馬用のものに限り。其縫ひ目を疎にして。落馬の際誤つて裳の鞍鈕に引き掛る事があるけれども騎手の身躰の重量によりて。容易く縫ひ目の解ける樣にしてある。(ハニ)(ハホ)に示した點線は。即ち此の

第六圖



縫ひ目てある。此れは如何にも簡單て。頗る睹易い理てすけれども。此の新案は實に頃日案出したもので。過日倫敦府に於て其專賣權を爭つて。訴訟を提起したる位てある。又新案の鞍鈕の位置は。騎手の兩膝の間に。長方形を畫いて。(ヘトチリ)其中央點から上下に向つたものであれば。騎手は頗る乘心地のよいばかりてなく。疾馳時外れる恐れが少くて。其上落馬の時に當りても。滑り落つるのに便利で。從て裳の鞍鈕に引き掛る樣な事は。極めて稀れてある。

獨逸御伽ばなし

一と口ばなし

三人の惡漢が宿屋を立つ際に、金貨の夥多這入つて居る嚢布を宿屋の主人に預けまして、「これは大切なものだから、三人が一所に取りに來た時てなければ、仲間の誰れにても渡さぬ樣に」と堅く約束をして出て行きました。百步許り往つたかと思ふと、一人の惡漢は手拭を忘れて來たから取て來ると、仲間を欺して立戾つて來まして、未だ戸口に立つて居た宿屋の主人に向つて、「相談か變つて、嚢布を持つて行く樣になツたから、何卒渡して吳れ」と云ひますと、主人はまだ間がないことてすから、別に疑ひもせず、錠を卸して仕舞つて置いた嚢布を、直ぐ出して渡しました。この惡漢は嚢布を受取つて、何喰はぬ顔をして、仲間と伴れ立て往きましたが、その晩仲間の買物をして居る隙を伺つて、逃けて仕舞ひました。二人の惡漢は一人の奴が嚢布を持つて逃げたとは、氣が附きませんから、翌日になつて、宿屋へ遣て來まして、預けて置いた嚢布を返して吳れと、主人に請ひました。主人は一人の惡漢に最早嚢布を渡して終つた後てすから、餘程當惑しましたが、そうかと言つて、其譯を話せば約束を違へたことになりますから、唯二人に向つて、渡すことは出來ませんの一天張りて居りました。二人は大變腹を立てまして、私等の品物を私等が返せといふに、返さない法はない、愈々返却しないなら裁判所へ訴へるからと、威勢を張つて、强迫しました。そこで主人が言ひますには、「私は決して嚢布を返さないと言ふのてはありませんが、しかし昨日三人一所に來ない時には、誰れにても渡して吳れるなとの御約束てありますから、それて私は貴方がた二人には渡されないのです」こう言はれて、二人の惡漢は、何とも仕樣がありませむ、そうかと言つて、一人の奴の行衛も分りませむ故、二人は悄々と元來た道へ引返しましたとさ。

秋のすさび

鈴木冷露女史

今はむかし

夕つく日花やかに愛宕山の頂きにかゝりて、御濠の松かげ長閑に水底に沈み、工事半ばに手とゞかねてゝ彼處、丈にも余る草村に三つ二つ蜻蜓とびかふ、日比谷公園のあなたより、年の比は六十路をさへ超へぬらんと思しき魚やが、同じ出立の若者と共に空盤臺の輕げなるを擔げて、道草がはりのすゝろ話しも種盡ぬらん、しばしは言の葉もなく歩みよりつゝ、やかて右にをれて大神宮の御前わたりにふと立とまり、何に感じてか老の眼にはや涙の露さへ宿りぬ、突然に濁聲高く無邪氣なる若者をふり返り見て、

オイ吉、己いらどう考へても狐につまゝれて居るとより思はれねへや、見ろ、昔しや此邊は修理樣とて、東の果のお大名のお屋敷、南は一面名に高き鍋島三十五萬石の大屋形、汝達にいつて聞かしても僞とより思ふまいが、天秤棒も折れる程擔ぎ出した、朝荷も大方賣切れての歸りがけ、そこらの窓から聲かけて、何があるかと尋ねられ、人柄を見るそこは商賣、

お殿樣けふは生憎昨日からのシケ續き、何もないが鯛が一枚、

鯛かヨシ／＼片身いくらか、直段はともかく置いて行けとあるに、三朱の處を二分といつても否應なしの金と引かへ、今じやあおめへ髯生やしたお歴々ぶる奴さんが、鮭の切身はなんぼする何二錢五厘とは高いとかヤレ安いとか、聞てる方が汗の出るいひ草、蛤むき身と聲高く歌つて通る後ろから、耻しそうな女中の手招き、一すじといへば今の一錢是へ入れてといはるゝまゝにさし出せば、

此中でとつておくれと、耳白のお錢さし其まゝの鷹揚さ、金の數知らぬを會稽と、しつけられた武家育ちの奥床しい其爪の垢でも煎じて、飲ませたいは、節操も義理も親も主も、金故なら賣り飛ばそうといふ今世の薄情者、大臣參議も名と外見ばかり、せんじ詰めりやあ女

郎より劣つた、淺間しい口惜しい、こんな下卑た世の中にやあ一躰誰がしたんだい、時世時節と諦めちやあ居れど、あんまり情な過るといふもの生命がありや仕樣もねへが、考へて見ると己らあ全く馬鹿〳〵しくて活きて居る空ありやあしねへや、そこへ行くと水戸樣だ、こんな世になる事が廣大なあの智惠で見え拔いて居たものだから、異人を入れない用心に、骨を折つたあの品川の臺場、どうしたものか埋めりやあ崩れ築けば壞れ、何の事アねへ金て埋め立てた大普請、おまけに其頃は役人か大樣て、泥舟一漕何程ときめてかゝつても、其處の模樣て半分積んで行かうとよしや、空でいかうと一ツ直段の賃くれたもの、今世の係りはホンに重箱の角を楊枝の先のせせツくましさイヤハヤ論にも贊にもかかつたものか、

早い話しが其御臺場も、三十年立つや立たぬに敲き毀して仕舞ふ世の中、愚痴をいふ丈け野暮とア思へと、有難てい昔の樣子は夢にも知らず、一心不亂に稼いても稼ぎ足らいで、牛や馬ちやあるめへし喰ふや喰はずにあせり死する、若い手合の事思ふとおらあ心から涙がこぼれて、可哀相でたまらねへや。

大内山の烏狩

すぎし五月の半斗り物へ罷りし歸るさ、櫻田御門に來かゝりぬるに宮城の御内より銃の音あやしう響き渡ていと物六ヅかし、傍の人について問へば、今年も又烏狩の御事ありといふ、さればこそ見渡せば、日本銀行のあたり迄、むら〳〵と舞ひ騷ぎ啼きつる〻悲しき聲に和して、銃の響きはます〳〵しげく、百發百中の手なみに其筋の人々が平生の、鍛への程もしられていと眼さまし、音に應してはら〳〵と落るけしきの哀れなるに、法被きたる人が數多うづくまり居て、手に〳〵亡骸拾ろひありく樣、鬼やらう豆おひ歩く節分の夜の幼子にも似通へり、分けても撲たれて堀の中に陷りもだえ苦しむ雛鳥の樣目も當られず悲しかりしが今も猶髣髴に立ちて、朝明け夕暮のいつはあれと、此鳥の聲聞く度毎にいひしらぬ感慨に打たれてなん、つく〳〵思へば

凡そ世に活きとし活けらん限りのもの、一として天地の恩含まず、將た些の要なくしてあらんや、擧げていはんも如何はしけれど、彼の蚊虱の如き、打見は人の世に害てそあれ何の益やあると疑はるゝ毒虫も、つぶさに觀ぜは或は人類が肉體衣裳の不潔を戒め、或は夏の夜のさらでもゐぎたなき轉寐に、足手厭はぬ蚊の群の襲はざりせば、眠り忘れて身の務め怠り果てけん、秋も末野の露の底に、つゝれさせてふ虫の聲、蜂蟻などのあるかなきかも分かぬ小きもの丶一つだに、人の心を訓へ勵ます、いと高き神の遣はしめならずとせず、さるを目前の利害の爲めにのみ是非するはとりも直さず御心を無みする業にて、眞の人のとらなんや、申も惶かれども大君は天地に次げる御恵みのもとゐ、御慈しみの源、凡そ普天の下率土の濱、何ものかよく此御蔭離れて片時もあり得ん、されば近き程には動物虐待を禁令あらせ玉はんとし、銃獵の制度も厳しく定め掟てさせて、御徳の及びおよはぬくまもあらず、去ればこそいと廣き都の中に、上野の山、愛宕の森其外幾他の木立茂みもあるものを、そこに宿は少くして、四季折々に群り生ひそふ大内山の栢には、萬世の後願はぬ乍ら、よしや假りに外寇の來侵すあり、國の内は一時亂れ立つ事ありとも、天つ日の御光曇らぬ極み雲霧のつひに如何とも爲し難きかごと、こゝに計りはあやしき物の音に寐覺驚さるゝ憂ひはあらじと、頼み安んしすがりこそすれ、始め德川氏こゝに住ける昔より、よな／＼來集ひて鳴聲の喧ましかりしを殺戮を意とせさる武家のつかさも、物の哀れは汲み分けて、唯空銃の音のみ高くをびやかして、年に一度驚かせしに過ぎざりきといふものを、如何で今の世にかゝる禍ひのおのが族にのみ降りかゝるとや思ひよるべき、況して其かみ皇宗東を征し玉ひし時、御軍を導き奉りて類ひなき功蹟建てゝ此方、未だ曾て一朝も人の怠りの朝ゐゆるさぬ、おのが職責を忽せにしたらず、且萬物の靈長たる人すら、踏むへき道を誤りて、逆事の絶ぬ世によく昔乍らに親に仕ふる分を忘れす、孝々と啼く其聲によりては、大勢の善惡をも判し得といふ、いみしき靈鳥をや、晝は更なり夜を籠めて、忍

びて睡る時乍らに殺すに至れる事の起りは、啼き噪く聲の大御耳に煩はしきはさる事ながら、二つには折節鳥けものゝ腸なんど持て來て、御園生に落す事あり、御二方の御出ましに、大御眼汚し奉る懼あるに之れよるといふにありき。

つく〳〵思へはいと高き大御心を心と躰して仕へ奉ろふ數多の司人等は、ともかくも御代を壽ぐ鳥の音のかしましさは、生々相愛す天の意を代り司らせ給ふ大君の聞かせて、罪といふべき罪もなきはかなきものを殺し盡さん爲めに夜晝絶へぬ物の音にも、勝りて物憂しと思すとすらんか朝夕まゐる幾千百の御園守將た其筋の司人は何の要にとて淺からぬ御手當被け玉はるものぞ、彼の養はれす、預らす、おのが力に落ちたるを拾ひ、こぼれしものをあさり來て、からく活き行く悲しきもののかたま〳〵落すは知りつゝ尊嚴を蔑ろにしたる心がしなる振舞ならんや。

そを掃ひ淸むる身の職分の怠りを余所にして、罪を無心の鳥に歸す淺間しさよ、之れ盖し鴉の落す見苦敷夫にもまさりて汚れ穢れし腸を綾錦にをし包みて、明暮内外に仕ふるものなからずと告げ示させ給ふ聲なき天の御聲ならずとせんや。

德川氏の祖家康昔し武藏野の荒れたるを拓き、我世無窮と禱りこめたる千代田の城に、三百年榮花の夢の曉の光りに、時勢の趨く處を達觀し、年比の僭上を謝し奉りて、十五世の孫慶喜、粛て大權を返上ありしより、早くもこゝに三十餘年、以來偏に世に遠かり身を謙りて、風月をのみ友とし浮世の外に明し暮して在せしを、今年始めて召出させて、上なき爵位授け給ひつるが恰も五日間打續きとり行はれつる其鳥獵の一の日に當りしも不思議や、鳥巳に靈あらば、今昔の感如何ありけん、あはれ今年危く遁れても、來ん年もまた來ん年も年毎に、一度は必ず、降りそゝぐべき炮の雨にいつしか洩れ得ぬ露の命と知るや知らずや、昔ながらに嬉しげに鳴連るゝ此鳥の聲のいはん方なく悲しきものゝ一つに聞きなさるゝは我獨りにや。

婦人病

西京大宮通花屋町となんいへるに、淡島明神と申が鎮まり給へり、此神の御由來を問へば、昔の世の保將た人の心の奥床しさも忍ばれてなん。

いづれの御世にか、都近き國の守の一人娘に才色一世に秀て氣品あやしう立まされるがありけり、此噂あまりに高かりければいつしか雲の上まで聞えて、辱くも宮の中に召出されたり、推計らせ給へるにも勝りて清らかに凡ならぬ心を盡して仕う奉り給ひければ、御寵とみに一所に集りはてゝ、三千の御后色なく氣をされ給へり、此世を我世と迄時めき給へるは夢の間なりけり、先の世の御緣しや如何ありけん、抑も叉數の思ひを身一つに受け給ひぬるつもりにやあらん、思ひもうけぬ淺間しき病にかゝり給ひつ加茂の川水双六の賽などより外に、天が下に御心に任せぬふしなき御位の光りにも、是のみは如何ともなし給ひかねて御名殘はとても角ても盡せぬ乍ら、泣く〳〵御暇給はりけり、御后はまして悲しさ耻しさに魂も消なん計り歎き渡らせ給ひしが、夫よりは人げ遠き片田舍の蓬の門もさしこめてあるかなきかにかきくらし給ひけり。

しみ〳〵と詠めはてなき大空に、思ひ棄てゝもいとゞなほ、春の花秋の月の何くれによせてなれし雲井のなつかしさやる瀬なきに付ても、御衣の袖涸くひまなく變り果たる身を恨み、世を歎ちて御心も末は狂はしき迄見え給ひしが、ふと思し染むふしありければ九重の宮ゐに近き、某の池に身をなげて世になき人の數には入り給ひぬ、やがて御亡骸の懐ろには、帝に宛てゝ上り給はんとする一通の御ふみこそ、紅ひの錦に包みてぞへ給へれ、御涙乍らにみそなはしける帝の御心の中こそ、まして如何ありけん、幾程もなく今の處に御社建てさせてあつく祀り聞え給ひしか、今は際の御筆に、後の世かけて此忌はしき病にかゝり、我がごと人にうとまれ世に棄てられなん悲しき女達の來り縢らは如何なる業病もとみに癒やしなんと、書殘し給へるにたがはず、靈驗極めてしるかりければ、改りぬる世のけふ此頃も、御前に拜かみ奉るもの絕へすとなん。

是を見るにも其かみは一度此病にかゝりしものは、人かましき餘生送り得さりし迄愼み恥らひしに引かへ、今は樣々の治療の道開けたれば、世も怪します病むものも意にかけねとこゝに此年月大學病院に高等看護婦の何に當り、數多經驗ある人の聞せし物語りにぞ、いひしらぬ味ひはわれ、いてや飾らぬ其言の葉の有のまゝを左に、

イヤモウ婦人科產科はツマリ精神病科とは至つて御緣の淺くない方で、一つ間違へは巣鴨へと申さねばならぬ譯ですから實に骨も折れ氣も痛みますが、慣れて見れば又他の科にはない樂しみの事も多う御座います、然しいかに慣れても〱慣れ切れず恐ろしく忌はしきは彼の婦人科の內診といふ事て御座い升。御婦人ても開けた方は一向平氣で、御承知の台の上に上られますのみか寧ろ耻かしがり受診を厭がる場所なれぬ人などゝ蔭から指しゝて居らるゝのを見受けますが、私はこゝに至つて、何が野蠻か何が文明か、さつぱり意味か分り兼て參り升、如何て御座いましよう、可愛い令孃や最愛の妻君をなんぼ病氣とは いへ、澄してこゝへ連れて來て、夫も診察するは充分成効した老錬の學者博士と許り限りません、中には年の若い經驗のないや〱の學士連のいはゞ研究の材料に捧げて、ヌマツはよいおもちやにされるので御座い升、其殘忍な親や夫に聞かせたいのは、診察後醫師達が內幕の評議て御座い升、成程根底から撿めて完全な治療を施しますのですから病氣は確に癒りも致しましようが、此內診といふ一事の爲めに、精神 上道德上彼我の上に蒙る新らしき瘡は延いて一般社會の上に、どれ丈けの弊害を產み出すかといふ事は、永年携はつて居り升丈けに知り拔いて居り升から猶更恐ろしう感じ升。一躰親の遺傳とか、不攝生なとから參る處女の事は別と致し、第一未婚の人には澤山ない、此婦人病の主なる原因は 十中の八九迄は必ず夫の不品行に基るし、いつしか妻の身に傳染さすので御座い升。考へても御覧下さい情ないでは御座いませんか、內を外に放蕩さるゝ夫丈けても、妻の身には巳に病の種て

ある處へ、お土産には恐ろしいいまくしい病氣を持ち來され、せん方盡きての果々は、産みの親の前さへ憚つた肌身を、他人の前にさらして、種々の名の下に弄ばれ盡し夫を恥ともなんとも思はぬ今世の女の淺間しい有樣を、昔の人が夢にも見たならば、其身まづ愧死ぬ事て御座いましよう。

村松清陰

浦擣衣
浦風の寒き夜すからあまをとめ打つや砧の音の身にしむ

深夜聞笛
さ夜ふけて遠く聞ゆる笛の音は月見る人のすさひなるらん

秋夕傷心
何となく思ひ沈みて物事に悲しかりけり秋の夕くれ

月前鹿
小男鹿の妻とふ聲にさそはれて山の奥の月を見しかな

海邊眺望
いさり火の影は白みてあけそむるなかめはるけき竹芝の浦

金婚式の賀に
高砂の尾の上のまつに年をへて千代もとよはふ友鶴の聲

風前薄
うちまれく尾花か袖に風たちてすゝしくなりぬ武藏野の原

聞荻
昨日今日軒端の荻の上風の身にしむはかりなりにけるかな

漁車
山をぬき谷をうつめて小車の通ふみ代こそうれしかりけれ

枯野夕
山の端に日は入りけてゝ冬枯の野面に寒く嵐ふくなり

落葉不待風
影なくゝおく霜霜に堪へかねて風吹かぬ日もちるもみちかな

秋旅
錦なす山ゆき野ゆきひたふるにいそかぬ旅のおもしろきかな

草花
秋草のさき亂れたる野邊見れば春の眺めに劣らさりけり

葛
秋風をうらみかほにも眞葛原たえすうらはのうらかへるらん

擣衣
秋もやゝ涼くなりけん遠近にうつや砧の音の身にしむ

旅宿夢
故郷の母やまつらん草枕旅の夢路に見えぬ夜はなき

秋夕
思はしと思ひなからも如何なれは學の夕は物思ふらん

富士山
立ちかくす雲のたえ間にほの見えてみ空につゝくふしの神山

渡千鳥
行きくれてわたりに舟を尋ぬれは友なし千鳥なきしきるなり

萩露
棹鹿の聲の哀れにさそはれてもろくもちる萩の白露

氷汲鍋
夕まくれ眞野の入江に來て見れは聲もさひしく鍋なくなり

狩場嵐
はしたかのしるしの鈴の音たにも聞えぬまてにふく嵐かな

秋夜讀書
古の人の書とし語りをれは秋の夜さへも短かりけり

冬の草木譜

國府志が子

◎寒　菊

古釜の錆をおしみて茶筅の新しきをきらひ床の一輪活けに小首を傾げむ茶人ならずとも寒菊のやさしくあはれなる姿をめでぬはなかるべし。露をおもげに花英のうなたるゝさま霜にかれたる葉の日に照りてくれなゐなせる色など繪がゝん人に繪具の丹精をならさすだけの寂れはありなむ『しぐれふる庭にけふしも初見草花さきにけり霜や置らむ』とて、寒菊を初見草といふもげに、霜降りし朝のまづ知らるゝは花におかれし初霜にぞある。霜見草ともいふはむべ也。

◎冬　牡　丹

濃紫のくれなゐと、艶をきそはむ百花の王としめてられにし芳春の名殘をば、冬枯れて時雨そぼふる荒庭に、大輪の蓜ならずとも、霜にもおちず姿をよそに、いとけなぎなる花の色、をゝしくもこの一本に、とめたるをげに、過ぎにし春に後れしとも、來ぬべき春に先むずるともいふべしや。冬牡丹としいふなるその花は、春さきいづるそれとは全く別種のものにて、八月より葉いで十月より花さき、臘寒のときにいたりても花しぼまず。人工もて造化の力をぬすみたるを怪しむべしとや。時をこそ得ね、花といふ花のなき頃かくさきいづるも亦、花の德ならずしやは。

◎水　仙　花

氷の肌とも玉の膚とも、清きをたぐふべきものもなければ、水にすむとしきこゆる仙女の姿にくらべてや、水仙花とぞいふなる。千葉のものをば眞の水仙といふなれど、やさしくたをやかなるは單葉のものにしかじ。單葉のものをば金盞銀臺と名づけて、唐人のめでたるも、汚れなくとうときさまをいふなるべし。

◎秋　無　草

「花ちりてその名はかりに秋無草かたみにおけるけさのしらつゆ」といふなる、その秋無草とは、各草の總名とぞきく。枯れくちたる木の葉ちりぐに脱ぎはてゝ、

裸ならぬ林もなき頃、野邊に生ひ敷く草、莖短かく赤ら枯れたるその葉先を薄き日かげにあぶられつ、やうやう寒さをしのげるさま、いとあはれなる風情なり。

◎茶　の　花

さびしきは白くむれたる花にやあらん。低く茂れる葉と幹とにやあらん。つれなき冬のさびしさを一木に集めたるは、げに茶の花の姿なりとぞ。陸羽とやら宋の頃茶にて名だかき人の作りし茶經とか、茶の花をしるして「樹は瓜廬のごとく、葉は梔子のごとし。花は白薔薇のごとく、實は椶櫚のごとし」といひしは、よくもいひたり。瓜廬といふは我邦になき木なればさだかならねど、廣州の地に出て其葉も茶に似て至つて苦く澁しといふ。宇治は茶所名所ときけど、白薔薇ごとき花の數〳〵、茶摘み歌さへいまさびしさを慰めもやらず、つれなきやもめのうれひにやつれしさま、たゞ宇治はうきのたねなるべし。

◎八手の花

葉のくき一なれど岐は七つ八つにわかれ、形かへての葉の如くにて濶く大なるは、魔人の掌なるべしとか。されば八手といふとぞ。白き粒を集めたる花の簪にも似たるは、葉の大いなるにくらべて、ひとしほの趣きあり、俗に八手の觀音あるにたぐひて、八手の葉をほどけの手にくらべ、その花をばほどけの華鬘になぞらへて、八手の木をほどけの木といふは、其葉も花もよのつねならぬ形なればなるべし。

◎山　茶　花

冬の花としいへば、水仙と山茶花とはまづかぞへ立てらるゝなるべし。雪の絹うすうかぶりて枝々の花にさむき艶のこよなくうるはしきは、山茶花の園ふかくさむさおそるゝ姫人に似たる風情なり。その木も葉もその實も、なべて海石榴に同じけれどその葉はまた茶にも似て、實はそれよりも圓くして長し。花さくは冬を盛りとすれば、冬の花としていともめでらるゝぞむべ、霰も霜も此花をば心なくはなやまさずてあれかし。

◎柊　の　花

葉のふちに五出の尖りありて、雷鳴よけとさへせら

る丶おそろしき木なれども、白き小やかなる花のいとやさしく咲きいづるは鬼子母神の赤子抱きたらむ心地ぞせらる。柊の花としいへば花の形も葉の如くとげとげしくはおもはるれど、げにふさはしからぬ花の形、いとこまやかに素直なるもをかし。

○批把の花

批把の實は舊の三四月にみのり、毬をなして黄梅のごとく、皮も肉も薄けれど皮には毛あり、肉の味ひは甘くして酢く、その核は小さき栗のごとし。批把の實はみな人の知るところなれど、その花には心づかぬも多かるべし。冬の眞中に白き花さくその花のあひらしきは、その葉の驢耳ごとき形をなし密にむれつきて、四時しぼまぬみどりにうつりあふに引立ち、ことさら一きはのうるはしさを覺えられ、いとなつかしき花なるに、心とめぬ人多きぞいぶかしき。

◎深　山　樒

山ふかきいはほのかげなどに高くはのぼらねど、匍ひ伏して蔓をなし、みきの色は灰色の白さを帶びその葉は莖のがしらにむれ生ひて形ち藪萊紫の葉にたぐひてやゝ長く大なるが、冬をしのぎてしぼまず、深山樒といふはこれ也。その花は冬にいたりてそが梢のあひだに五つひらのこまかきをつけ、穂をなしてむれ、いとたへある花なり。紅楊色に實を結ぶとぞいふなる。そのこまかき白き花の山かげなどにさきいづるは都人の見知らぬ花なるべし。

◎榧　の　花

榧といふは、文木と名のある木にて、杉に似て杉と異なり、木に文采ありてうつくしく、木は桐のやうなれど葉は杉のやうにて、木に牝と牡とあり、牡は華さきて牝は實ると棗のごとく、核長うして橄欖のごとし。核に尖るものとがらぬものとあり、稜なくして薄き殼は黄白き色をなし、その仁は生にて食ふべく、また焙りて收むべし。一木にても數十斛の實を取るべしと也。牝の榧には冬に花さき、その木の妻あるにつけても、その實の淡き甘味あるにつけても、何となうなつかしき心地ぞする。とほき山里または片田舍などならでは、この

花をみるともまれなれば、これも都人には知られぬはなとしいふべきか。

○蠟　梅

世に蠟梅をば臘梅とかきあやまりて、臘月にさく梅のとと思ひあやまるもいと多し。蠟梅といふは、黄梅ともいひてもと梅の類にはあらず、梅と時を同うしてさきいて、またその香も梅に似たるうへに、その色蜜蠟のごとしとて、かくは名づけられし也。木の高さは二三尺高きも四五尺の上へは出でず。葉は柿の葉のやうなれども、小さくして長く、花は臘月にいたりて小さき黄色の花をさき、その香は蘭のごとくにて梅よりもつよし。浪華にてはこの花をば唐梅といひて、もろこしより渡りし者とぞいふなる。若き頃鉢植にて故郷なる家の椽先にありしをいまも覚えてはあれど、その花小さくして梅鉢形の單瓣をなし、梅の花とは全く別の物なりし也。その香のうるはしきは人のめづるもむべなりとぞ覚ゆれ。

○寒　梅

寒梅といふは寒紅梅とも八朔梅ともいひて、ほかの梅とは種類の異れる者なるを、世に早梅とか早咲の梅とかなどゝ取りまぜて、けぢめあるよをしらぬはあやまりとすべし。俳諧などにては冬の梅といひて早梅などゝ別にするはむべなりかし。此花は冬至の頃よりひらき梅の魁にて、花小さく八重の紅梅なり。されば唐土にてはこれを寒紅梅といひ、冬至より臘月にかけてさくを正時にあへりとし、その八朔頃に咲くは狂咲なるべしとのよ也。されば冬至梅とて冬月にひらける八重にて淺紅の花單葉の紅なる花などもあれど、みな此寒紅梅の一種なるべしや。

◎早　梅

蠟梅にも寒紅梅にもあらで、冬至の前より咲きいづるよのつねの梅をば早梅とぞいふなる。これはその時を得ぬ仇咲きにて、冬の暖かなるにさそはれ、時を早めて咲きいでしまでなり。されば寒紅梅のごとき紅梅にもあらず又八重にもあらず、白くして單瓣のものにて、時を早めて咲きいでしは、みな早梅と名をつくべき者。

なりとぞ。

◎室咲の梅

同じ早梅なれど、自然の暖さなどにさそはれしにもあらず、室のうちあるひは倉のうちなどに爐火をたき暖めて、その火氣に感じゝめて咲きたるは人工によれるとて、別にそを室咲の梅といふべしとぞ。同じく梅とはいふものゝ、早梅や室咲の梅などは、いづれもちがひあることにて、また寒紅梅といふ寒梅や蠟梅といふ黄梅とも取りまぜぬこそ肝要なれ。

◎冬櫻

冬櫻といふも、よのつねの櫻とは別の物にて小さき樹なり。花も葉も彼岸櫻には似たれどその枝は垂れず冬にその花を開くものにて、まれには八重のものもあり。是れも歸花などにはあらで全く別の櫻とぞ聞く。盆にうえて机のかたはらなどにおき、そをめでんにはこよなきものとかや。又冬木の櫻といふとは、世に歸花と同じやうに思ふ人もあれど、これはたゞ冬枯の櫻をいふにて、花さけるをいふにもあらざれば、歸花とは混ずべからず。

◎冬椿

寒梅や冬櫻とちがひて、冬椿といふは、まさしく早咲の椿をいふものとや。椿はすべて寒より春にかけて咲けど、あるは寒椿などいひて、春に咲くものと分けるをもありとぞ。これはいづれも種類こそことなれ、同じく椿なりと知るべし。早き遲き、八重單瓣などさまゞあれど冬椿といひ、寒椿といひ、別の種あるにはあらずとの事也。

◎寒竹

寒竹といふは孟宗竹のことにて、幹の色黒くして細く、冬に筍を生ずれば、他の竹とは種類の別なるものとぞいふ。風尾竹をも孟宗竹といへば同じ物なるべし。冬の竹をばすべて寒竹といふはあやまりなるべしとぞ。雪ふかくつもれるうちに寒竹の筍すなほに生へいづるは、まことたえあるながめ也。雪吹ける雪に枝折れんところ筍の生へればこそ、寒竹のことさら孟宗竹とさへよばれて、晋の孟宗といひし孝子の名をつけられしなる

べけれ。

◎冬　枯

「山里は冬ぞさむしさまさりける人めも草も枯れむとおもへば」山里ならぬ片里の、都大路をはなれをれば、淺茅が原の野の面に冬枯れぬ草もなく、川隔てたる墨田の堤、冬木の櫻葉さへむなしく、水鳥泳ぐその背をかすかにあぶる日の力、いとも細りておぼつかなき鐘の聲、筑波颪のたえ〴〵に水の面をわたるもいと淋しとて、さてはこのもとへ語らひにきし繪人が、冬の草木を描がゝんとてその數々を算へ立つるに思ひつき、灯の影を分ちうけ、はしたなき筆の雫のこほるをもしらで、かくはものしたるなれ。冬枯のかれはてし草木のうちに、なほかばかり多くも繪やまた歌にすべきものありとはおもひがけなきことなりかし。冬をさびしといはん人、つれ〴〵のあまり、長き夜の寒をしのぐ火桶のかたへに、歌や文などつくらんときの友どちにもならばやとてかくはしるしぬ。

清　臣

浦鶴鳴月

さしのほる和歌の浦曲の月清し三声過にむれて鶴そなくなる

夏秋虫

秋くれて霜夜更けゆく月かけにたえ〴〵残る虫の聲かな

残菊

おく霜の色と見るまて袖垣に残りて匂ふ白きくの花

秋興

見渡せは見渡すかきり千草の秋の花野のおもしろきかな



農家の生活

有本樵水

何時であつたか、小金井君子さんの書かれたものゝ中に、（露西亜の民草）と云ふのを見て、弗と思ひ合はしたことがあつたので、都の方々には未だ曾て見も知られざる、我日本の民草――即ち百姓の生活方を紹介爲ませう。（露西亜の民草）は露西亜の百姓の日常生活を寫したので――（日々食ふは古き麵包のみ。新ならば多く食はむ憂ひあればなり）――こんな風に極めて質素なる生活は、我日本も同じく、都の華美贅澤なる方々は一歩地方へ踏み出したなら、定めし一驚を喫することであらう。其處て、尤も陰氣な、質朴である越後の風俗から生活方を申しませう。

人は海邊なるは快活なれど、越後は同じ海邊にても北國の端なれば極めて陰氣て、而うして古來小大名が澤山あつて、各藩割據と云ふ有様てあつたから、今日猶其の餘弊に依つて、兎角越後人と云ふと團結力が乏しい。所謂一種の個人主義である。然し、現今は既に交通機關も備はつて來たから、是れからは追ひ〳〵克くなるであらう。又生活の程度も漸次改めらるゝ事とならうが、まだ當時の生活は甚だ朴質なもので、越後は大根が半食てあると云ふ通り、全く克く大根を食ふ國である。先づ日常の三食はカテ飯と云つて、粉米の中へ大根を微塵に刻んだものと菜葉の漬けたのを矢張り細かにして、何れも粉米と等分にして夫れをビイロウて蒸して日々の三食とするのである。これは中以下の百姓て、或は粉米に大麥を等分に雜ぜるのもある。普通の米の飯を食するは餘程贅澤の方だ。が、それとても決して都の人の食べるやうな上米では無い。皆五年も七年も過ぎた、鼻の前へ持つて來ると、プーンと干臭い、少し冷めるとボロ〳〵になつて、滋養分も至ッて乏しい總菜と云へば、年中鹽漬菜葉の鹽辛いのをクチャ〳〵に煮たのや、ニシンをベタ〳〵に味噌て煮たのや、ヒジキ其の他の海藻類野菜類ばかりて、これも中等の社會の遣り方て、それよりも下等なる彼の小作人と云つて、富豪

者の田畑を借り受けて耕作してゐる百姓に至つては年中に魚類の總菜を食膳に見るは頗る稀なるもので、明けても暮れても干澤庵と生味噌を突いて、朝は暗い中から、晩も手許の見えなくなるまで、如何なる炎天にも雨の日にも、蜂や蟻の食を求める如く、倦まず飽かず孜々として、樂しみとては秋の收穫を見るの外。日々の仕業を終へて、勞れた足を引摺りながら家に歸つて、嗅くなつて一杯の濁酒に一日の勞れを忘れ、其の不味い食事をも舌皷で濟して、それから若いものは笛や尺八を携へて夜遊びに出懸ける。月夜などに小川續きの土手の上を吹き流して歩くのが、これ又彼等に取つては云ふべからざる愉快を感ずるのである。下等社會に至つては其の寢所なるものは土間へ藁を敷いて、其の上へ藁莚を敷いて、薄い煎餅のやうな、蒲團と云ふも名ばかりの、ボロ／＼のものにくるまつて眠りに就くのである。

越後は有名なる鮭の產地で、生鮭の美味は何處へ行くも決して讓らない。けれども價も高いのと、飯も澤山食ふと云ふので、下等社會は自分で買ひ求めることは無く、僅かに町に出て、自分の耕作に依つて栽培した大根蕪を賣つて儲けた時に、其の頭や骨を買つて來て、大根などゝコツタに煮て漸やく生鮭の味を知るくらゐのもので、それも季節中に一二度くらゐのものである。鹽鮭を食べるは偶まの客人として餘所へ行つた時か、正月の外はこれも禁物だ。

酒は無論濁酒で、中等社會は中汲と云つて、濁酒の滓の沈澱した、上部の澄しを以て客に振舞ふので、勿論近頃は自家用料製造といふ事が廢せられたから農家では定めしこまるであらう醬油もタマリと云つて、自家の味噌樽から味噌を搾つて取るのである。この國の習慣て何んな貧しい家でも、年中食べる味噌は必らず家で煮て置くので、それだから非常な長降りが續いて苗が枯れたとか、長照りが續いて稻が枯れたとか、或ひは收穫近くになつて水害等のために悉皆流失でも爲やうものなら、それは實に大變なもので、地主と小作人の間に非常な騷動が持ち上るが、この消息に至つては全く都

の人は夢にも知らぬことである。

○鮭獵

これは信濃川、阿賀川等の大河續きでは大抵の處で捕れるが、其の捕る方法は舊七月から年末頃までの季節で、全躰鮭は海魚であるが、卵子は眞水でなくては孵らないので、それで河へ卵子を落しに上るのを、網場があつて、多勢で地曳を引くのである。其の中にも個人として鮭獵をするものに、尤も面白い捕方がある。先づ河の中央へ一人で小舟を浮べて、流れないやうに、舟を横にして兩端を確り繋いで、裸躰になつて鮭の上つて來るのを、一生懸命に水底を瞰めてゐて、若し上つて來た姿を認ると、突然河の中へ飛び込んで抱き上げるのである。これを阿房待ちと稱して、それで生活を立てゝゐるのだ。で、まだ水の温かい時ならば可いが、この阿房待は何れも舊九月末から十一月頃の寒い時だから、如何にも馬鹿〳〵しい遣り方で、阿房待とは稱し得て妙なりだ。

○京都風

越後は古くから船の便を以て京都と交通してゐたので、自然京都の風習が輸入されてゐる。殊に新開の新潟の如きは、風俗――言語の或る一部分を悉皆京都に擬してゐる。が、京都の人は煮豆を食べると袖口が切れると云つて、煮豆は決して食べないさうだ。けれど、越後人は全く正反對で、煮豆を非常に食ふ。何んな家でも大根と煮豆は必らず絶やさない。總て豆は他の國よりも餘計に食ふやうである。上州は味噌とトチと變ださうだが、越後は豆味噌で、朝晩の味噌汁にも其の身が豆を石臼の上で、木の槌で叩き潰したのと菜葉。若くは大根の千六本などをあしらふ。豆腐も豆をフンダンにつかつた譯か知らないが、都の豆腐のやうなフタ〳〵ものでは無く、至極コチ〳〵の、二三里も先から藁苞に入れて持つて歸られると云ふ風である。これだけは京都と相違してゐるであらう。而うして新潟の言葉が面白い。お前さまと云ふことを、お前そんと訛る。で、恁う云ふ

話がある、或る娘が家の前へ出て見ると、丁度十五日頃の月が眞圓く出たので、それを姉さんに知らせやうと思つて、「姉そん、早う出て見そんせ、お月そんが出そんしたさかに」

もう一つ新潟の名物と云ふもは、粥を食ふことてある。概して越後人は粥や雜炊を好く、これは寒國の人情として、兎角温かいものを好くからでもあらうが、眞夏でもノベツに食ふ處を見ると、強ち温かいばかりで無く、普通の御飯ばかり食べるのと、毎朝一食づゝ粥を雜ぜるのとは、其の飯米の計算が違ふのであらう。て、新潟市人は、必らず毎朝規則のやうにして粥を食べる。これも普通のと特別とでも云ふやうなものがあつて、普通のは白粥で、特別のはお茶粥で、年中に飲むお茶を天日に干して置いて、それを再び火に罹けて煮出した汁でお粥を拵へるのだが、新潟市は海濱で、前に信濃川を扣へて、向ふ川岸には今はステーションのある地て、沼垂と云ふ驛がある。この河幅は半里もあらう。其處を毎朝潟新市民の粥を啜る音が渉つて沼垂まで聞えると云ふくらゐだ。これらは慥かに京都の風習を眞似てゐるので、平常はお金を出して魚類を買ひ求めることは無くて、前の堀や裏の田甫て鮒鰌を捕つて食べてゐる、又漬物は、これも上方風てあらう。全く東京の人よりは上手てある。尤もこの國ばかりで無く、會津から秋田へ懸けて、外て味はうことの出來ないほど巧みなのて。

秋になると、大人と云はず、子供と云はず、皆田畝や用水溜へ出てメダカを捕るのである。これは非常に油のあるもので、三升も五升も一時に鹽と醬油で辛く煮込んで、瓶のやうな器に入れて、堅く蓋をして年末頃か若くは翌春などに取出して食べるのだが、其の時は飴のやうに煮凍つてゐて、なかく可い味のものだ。

○風俗

京の着倒れと云ふくらゐ、京都は食物は碌なものを喰はない割に、着物は非常に贅澤を盡すさうだが、然ういふ京都を眞似た越後は、着物は一向搆はん、何んな上

流社會でも、極めて質朴のものだ。近來は大いに相違して來た。けれども、日常の生活既に此くの如くなれば、風俗又それに準じてある。先づ山の手なれば、風の吹く毎に娘どもは林や山に入つて杉松の枯れ枝等を拾ひ集め、春の木の芽の出盛る頃にはいろ〳〵な木の芽、摘草をして、それを近くの町――五日目毎に立てらるゝ市場へ持ち出して賣り捌き、お金に替へてそれで年中の――盆會正月の半襟、髪飾類、前掛、下駄のやうなものを買ひ、着物は年中の夜仕事に糸を績んで置いて、縞柄や織りやうを工夫して、自分で織つて着るのである。髪は平常は朝暗い中、或ひは夜仕事を仕舞つてから、寢際に一人で結ぶ。其の外村の鎮守の祭禮等には多勢仲間同志で結ひ合ひするのである。で、下等社會では薪木を買ふと云ふことは極めて稀で、大河筋のものは出水の折に、方々の山から流れて來る流材を拾ひ集めて置いて、それを燃料に用ひ、娘どもは機を織つたり、いろいろな賃仕事をして市の日に町へ持って行つて賃錢を受取つたり、買ひものするので、隣家から隣家へ誘ひ合はして、多勢揃つてゾロ〳〵出懸けるが、この時は皆赤い襟や赤い前掛の紐を結んで、新しい手拭で頰被りをしてメカして出掛けるのである。

それから秋の末かけて冬の寒い朝な〳〵、學校へ行く子供等は林の中へ寄り集まつて、松葉杉の葉を掻き集めてからに、火を焚いて一と當り當つて學校へ行く。又この國は雪の名物だけに、近頃は大分降らなくなつたさうだが、以前は何んな處でも四五尺は降り積つたもので、深い處は一丈以上は大丈夫降つた。然う云ふ處では屋根へ降り積つた雪を取除けるに、外では雪掻きと云ふが、こゝでは雪掘りと云ふ。それは雪を掘つて家を出すからである。で、町では皆廂を通行するのだ。通路は町の兩側から屋根の雪を掻き下すので、家よりも高く積つてゐるから、皆廂を歩くのである。これは雪の冬ばかりでは無く、年中廂はあるから、何んな夏の炎天でも、大夕立の時でも傘無しに用達しが出來る。廂の前へは障子を嵌めてあるから、商家は嚴冬の雪の日にも、店を開け放して置たからとて、決して東京ほどの寒

氣は感じない。一躰この國は雪が降るが、風は存外溫かい。子供と犬は慾う雪が降り積ると大喜びで、頭には雪簑を被り、足には藁靴を穿いて、喜々として轉び廻はつて學校へ行くさまは、都の少年女子達に見せたいものだ。

　眞夏の長照の時に、偶ま二日も降り續いて、作物の元氣を回復すると、つゆ休みと稱して百姓は喜びの餘り、一日農業を休んで祝ふので、中にも裕なるもの餅を搗たり、粽の餅を拵へて近處へ配るのである。而うして此の休み――即ち明日休まふと云ふ今夜――その事を村中へ知らせやうと云ふ時に、若いものが奇り集まつて相談を定めた上て、一々言ひ廻はるのはなか〳〵の手數てあるから、村の内に架けてある橋板を叩くとか。或ひは山の手にかゝると丸木橋の外、叩くやうな橋板が無いから、然う云ふ土地では版木を鳴らすのだ。この版木は奉公人を使ふほどの内ては大抵無い處は無い。多くの奉公人や、傭人を野良仕業から食事に招ぶ時に鳴らすので、それには一定の撲ちやうがある。食事の知らせは長く太鼓を撲つやうに撲つて、仕舞に調子を取つて三つて止を搖ち、午飯後に小一時間の休みがあつて、其の間に皆晝寢をするのであるが、それを覺さす時には此の版木を三つ撲つて時間の來たことを知らせるのだて、明日のつゆ休みを知らせる時にも矢張三つ撲つ。すると、傭主や奉公人は、「おや〳〵明日は休みださうな」と何れも合點するのである。

　この祝ひ休みに搗く餅や粽の餅類に着せる餡――これは只煑た小豆を潰したもので、決して砂糖や蜜を入れるので無い。盆正月でも其の通りで、渾て食物に甘味を加へることは無い。全然鹽ばかりで拵へてある。然し、傭主は自分等のものには然うで無い。十分砂糖も使ひ、蜜も使ふ。

　此くの如く主人と奉公人の階級が甚だしいから、盆躍りに唄ふ俗謠に非常な不平を漏らしてゐる。（盆だてがんに、茄子の皮の雜炊だ）これを一齊に唄ひ連れて躍るのだ。が、今はこれを唄ふものも聞くものも、何のことてあるか、殆んど無意識に見做してゐるもの丶、盆と

云へば、地獄の釜の蓋も開くと云ふほどなるに、獨り奉公人の哀しさは、主人等は平常は茄子の皮ごと食ふが、盆だけは皮を剝いて食る。けれども、奉公人には何の手當もせず。其の茄子の皮を雜炊の中へ入れて食はせると云ふ。一種哀れなる滿腔の不平を漏らしたものだ。

秦（？）貯この國では、雜炊の中へ必らず何か雜物を入れるものとしてゐる。菜葉とか大根とかをコテ〳〵に入れるので、少しでも米を補なふ意りであらう。それだから或るケチン坊家の古雜巾を煮込んで食はせたと云ふこれは如何にも食えなかつたさうだ。

○旅行

此の頃こそ旅行〳〵と殊更に云ふもの丶、これは久しき以前から我日本に於て奬勵されてゐた。曰く伊勢參宮。曰く善光寺參り。曰く出雲の大社。曰く讃岐の琴平神社。或る地方では伊勢參宮と出雲參りを爲ないものは、男女ともに緣付くことが出來ないと云ふくらゐて、善光寺參りも同樣非常に奬勵されたものである。此節は全國に汽車の便があるから、何處へ行くにも寐て居つても行けるが、昔は皆徒歩したものだから、其の勞苦はなか〳〵思ひ遣られる。然し、それだけに又慰さめることも多大であつたらう。國々に依つて其の名稱も種々で、或ひは富士行者。或ひは大峰山登り。或ひは身延山。成田山參り。曰く何々と、特種の設けはあつても其の行き方は今日の旅行と幾りは無く、廣く世間の風俗人情等を見聞させる奬勵法であつたに相違ない。

それから平常の佛參 ——宮詣での如きも、衞生上からの運動法であつた。が、その時分は人智頗る未開で、衞生上の理屈は分らなかつたから、宗敎の力を以て是等をさいどしたものであつた。

○茶の湯

女子は是非茶の湯を知らなくては成らぬ。これは强ひてお茶を吞むことを勸めるのでは無い。これを稽古すると、もの丶順序を明らかにすることが出來る。或る人は西洋人は非常に順序が正しい。子供でも物の始末

は順序を以てするから、一遍片付けたものを取出すに、決して方々を探すやうなことは無いと云つたが、我日本人も最う少し一般に茶の湯を習はせたなら、順序の正曲は必らず西洋人に譲らない。右の手に取るべきものは否應なく右に爲なければ爲らない譯になつてゐるので、深く味はへば味はうほど正しく、掃方から雜巾掛けまでも説明してあるのみならず。料理法から建築法――園藝等、恐らく世の中に必要なる事は漏らさず研究が出來るのであるから、其の奥義を極めると云ふことの甚だ容易ならぬ業たることは、古來婦人にして茶の宗匠となつたものが一人も無いのを見ても明らかである。されど一遍は是非習ふべき必要を認めて勸める。

○園藝

これは前に、女子の遊戯の中へ云ふべきであつたが、ツヒ前後したのである。

境遇に餘裕のある人は、所謂女子の遊戯として、園藝の嗜好を有たなければならぬ。と云つて、數寄を好んで態々遠國から珍石名木や、好事なる芳草を買ひ求めるには及ばない。郊外散歩の折に普通の野草を採つて來ても、其の培養に依つては隨分面白いものである。頃者大いに流行を來たしゐるけれど、貴夫人令孃方に朝顏の培養は尤も妙である。衞生上の嗜好としても、單に慰さみとしても、これくらゐ興味のあるものは無い。それも自分で一切遣らなくては何にもならない。玄關の書生さんや奉公人を、如何に主人なりとも其の勤めの外に無闇に追ひ使ふのは、甚だ思ひ遣りの無いと云ふものである。



動物園

（上）

木村小舟

時は丁度十一月三日、天長節の當日でした、空は佳なりに晴れ渡つて、近郊の散歩には至極お誂え向きなので、朝から家を飛び出し上野動物園へと志した。

不忍池の破れ蓮を、物哀れに杜の木蔭から透かし見て、名高き黒門には、三十餘年前の砲丸の名殘を認め、東照宮に行列の石燈籠を横に眺めて通り抜け、兎角して動物園の札賣所まで來たのはいゝが、扨て思ひの外の大入です、この分では折角樂しみにした、奇禽珍獸にも、親しく餌を投り、親しくからかつて、穴の明く程その正體を見ることは出來ないかと、早くもいらぬ心配までして見ました。

さて入口を通つて、さも幽静閑寂な木蔭の石段を、二つ三つ下りますると、其邊りには白い山茶花の花瓣が、三片四片散り布いて居て、如何にも奇麗な、何とも言へない風情、どうして之を私どもの樣な、汚ない下駄で踏むことが出來ませう、と驚いて傍を見ますると、早くも此處にはお馴味の丹頂の白鶴、いつ見ても變らぬ、氣高い姿をして、雌雄仲睦まじく暮らして居ります。

元來此鶴と云ふ鳥は、啻にその姿が立派なばかりでなく、總べての處が、他の鳥類の摸範とするに足るものだと思はれます。

鶴は屢々亂鳴する物では有りません、けれども一度鳴く時は、其聲は優に天までも屆くと云ひますのも、全く無理では有りません、即ち鶴の氣管は、他の鳥類と異なつて、彼の樂隊の用ふラッパの樣になつて、クル〳〵と幾重も幾重も捲いて居ますので、從つて此處を通つて起る音聲は、非常に高調で、且つ鋭いので有ります。

昔し名高い料理人が經驗した事ださうですが、鶴の胃袋には、何時見ても餌物が、多く入いてないとの事です、夫れに又此鳥は、餘程奇麗好だと見えて、毎日食べる魚類も、必ず一度水に入れて、きれいに洗ふて、夫れから口に食ふのです。

この樣に鶴は衛生法を知つて、自ら長壽を全くする物だと思はれます、で昔しから、鶴は千年の齢を保つなどゝ申して、縁起のいゝ事には、屹度鶴の繪などを書きます。

處で又此繪に就いて、よく間違ひの有ることゝ云ふのは、鶴の尾の黒くかゝれた事です、成る程一寸見ますれば、如何にも尾が黒く見えますが、あれは本當の尾でなくて、實は長い翼の尖端が、丁度尾の樣になつて見えるので、眞の尾の羽と云へば、まことに短かくて、そして其色も眞白なので有ります。

この鳥は脚と嘴とが、素敵に長う御座いますのも、又一理ある事で、本來が渉水類、水を渉つて魚などを捕つて食ふには、是非とも脚と嘴とが、長いのが肝要で御座います。

渉水鳥類は、一般に氣候に依つて遠征を致します、で此鶴なども、春から秋の頃までは、彼の寒いシベリヤの地方に棲むとの事で、夫れが秋の中頃から、續々南の暖かい方に移るのです。

處が又此際には親切にも、山雀だの、四十雀だの云ふ小鳥、これも同じく、棲家を南方に移すものを、その廣い背中に、澤山負んぶして來るとの事です。

昔しは日本にも、鶴が澤山棲んで居たさうで、頼朝が鶴を逃がして遊んだ話もあり、又現に鶴見と云ふ處も有りますが、近頃の樣に鳥銃のひゞきが盛になつては、うか／＼遊んで居ることも出來ないのか、今は影さへ稀となつてしまひました。

鶴の圈を後にして、小さな一つの橋を渡りますと、この園での大立物、有名な象の居る小舍は、早や我が目の前です、こゝには流石に觀覽人が、黒山のやうになつてそして皆夫れ／＼に、色々象の好きさうな食べ物を、投げてやるのです、すると象は、瞬く内に夫れを鼻の先きで卷いて、そつと口に入れ、さも甘さうに舌打しながらムシヤ／＼と食べます。

一體象と云ふ獸は、馬鹿に足か太くて、あんな不器用な態をして居ますけれども、又よく人に馴れるもので、餘程可愛らしくて、憎めない處が有るさうです。

て印度などの田舍家では、子供の守りを、象にさせる事も御座います、象は我飼主の子を、後生大切と守りまして、若し子が目を覺まして泣き出せば、しづ〳〵搖籠を動かして、安らけく眠らせ、又虻や蠅が來て、子の顏を刺したり嘗めたりする時には、一々熱心に追ひ拂つてやります。

其位だから、又自分の子を可愛がる度も、なか〳〵一と通では有りません、若し親象が子象を連れて、旅でも致します時に、途中に大きな河流が有つて、子象の困るやうな折には、重い子象を、自分の鼻でしつかり捲いてそして高く、夫れを水の上にさしあげながら、悠々と渡り越すさうで御座います。

啻に親子の仲が親しいばかりでなく、友達との間柄も、非常に親密で有つて、例へば大勢群を催ほして、他地方に移り棲まうと致しまする場合などに、仲間の内に出産でもする者か有れば、乾度二三日の間は、全群が滯留致して、母子共に健全に成るを俟ち、更に旅程に上るのださうで御座います。

この樣に優しい象でも、對手が惡く出ますれば、酷く其感情を害するものです、昔しの事ですが、西洋の或る田舍に、一軒の裁縫店が有りました、店の前では多くの若者共が、頻りに洋服を仕立てゝ居ます。

玆に又此の近所に、一頭の象が飼つて有りましたが、夫れが毎日の樣に、この裁縫店の前に遊びに來ますので、自然に若者どもゝ象と懇意になり、毎日々々、お菓子なりお芋なり、いろ〳〵食べ物の殘りを、象に呉れてやりました。

象は毎日御馳走になつて、大さう喜こんで居ましたが、或日のことでした、いつもの通り象がやつて來ましたが、相憎その時は、何も食べ物が無かつたので、止せば好いのに若者は、面白半分で何氣なしに、ミシンの針を以て、象の鼻先をチク〳〵刺してやりました。

すると象は何喰はぬ顏付して、その場を立ち去りましたが、さて暫らくすると、再び以前の裁縫店に立歸つて來て、突然窓から鼻をさし入れて、汚ない〳〵泥水を一升、ざんぶと仕立場に流し込んで、折角の反物を滅茶

々々に穢してやり、其まゝさつさと歸つて行つたさうです。

此の動物園に居る象は、過ぐる明治二十一年の春、暹羅國王から、わざ〳〵御寄贈になりましたので、以前は牝牡二頭であつたのが、今はたゞ一頭牡が殘つて、毎日幾多の觀覽者に、盛に愛嬌を振りまいて居ます。

象の小舍を右に見て、少しく小高い處に上りますると、こゝには稍奇麗な洋風の小舍が出來て有りまして、其の中には、彼の有名なる獅子の牡牝が、嚴然として蹲り、目をいからして觀覽者を睨まへて居るのです。

獅子と云へば百獸の王、假りにも死獸の肉は噉まないと威張つて見ましても、こうして狹い檻の中に收容されては、さて如何することも出來ますまい、その故か同行の一人の申すには、春に來て見た時よりは、餘程痩せて衰えたですと、成る程背中の骨片が、一々明かに讀まれます。

牛馬を嚙み裂く獅子王も、人類を恐るゝことは又中〳〵て、吾より進んで格鬪するの勇氣は、決して御座いません、只自己の命を全くせんために、餘義なく人に手むかひを致すのです。

亞非利加の土人は、その狩り獲りました多くの野獸を、獅子の爲めに奪られるのを恐れ、獲物の傍には白い手巾をかけて置きます、すると夫れが風のために、ヒラ〳〵と動きますので、獅子は一心に人の居ることだと思ひ、少しも近寄ることを致しません。

世によく『獅子身中の蟲』と、申すことが御座いますが、如何に勇猛無双の獸王でも、知らぬ間に、躰の中に寄生蟲を宿し、果てはその爲に、敢えない最後を遂げることも有るさうです。

が獅子は、門齒が大きくて肉を裂くに妙て、且つ其舌の表面には、無數の細かい、丁度針みた樣な物が、澤山に突き出て居ますから、骨片に附いて居る僅少な肉でも、巧に探つて食べてしまひます。

動物園の獅子は、まだ今年の一月のこと、獨逸ハンブルグの動物園から、わざ〳〵買ひ受けた貴重な動物ですから、どうか長壽を保たせて、彼の象と共に、永く此

園の一名物と致したいものでは有りませんか、聞けば牡は四歳、そして牝は三歳だとの事です。

今この獅子王が、突然この鐵柵を打ち破つて、思ふまゝ荒れ出したら、この多くの人々は、どんなに騷ぎ出すでせうか、など丶多愛もない空想を描いて居ますと、紫白子は懷中から、例のコダックを出して、この獅子の新築小舍を、撮影されました。

獅子の小舍と向ひ合つてるのは、見るも無態な駱駝三頭、行儀よく足を折つて、小さな穢ない穢ない小舍に音なしく蹲つて居ます。

この獸の背中には、丁度馬の鞍のやうな形をした、大きな二個の瘤が御座います、之を駝峰と申します、駝峰は普通二個ですが、種類に依りましては、只一個のも有りますから、從つて双峰駝、或は單峯駝など丶云ふ區別も御座います。

亞非利加地方の人々は、この駱駝のことを、沙漠の船だと呼んで居ます、彼のサワラの大沙漠と云へば、誰知らぬ者もない無水の海洋、茫々涯なし三千里とも申したい處、加ふるに烈日燒くが如く、身體の肉も、今は溶解さうに思はれるところを、彼の駱駝は、よく土人の命令を守り、背には五十貫の重荷を負ひながら、一日優に十五里程の道を行くとの事です。

こ丶に又不思議なこと丶云ふのは、例の駝峰と今一つの胃袋とで、御存じの通り馬や牛は、半日餌物を食はなくても、身體がめつきり弱つて、汗ばかりかいて、道が一向にはかどらない、處がこの駱駝は、一日や二日餌物は食はなくても、その身體には別に疲勞も何も有りません

と云ふのは例の駝峰、元來根が多量の脂肪から成り立つて居ますので若しも口から、餌物が取れない樣な時には、さしづめ先づ駝峰の肉片を、少しづ丶胃袋に送つて、相變らず盛に運轉させて居ます、ですから二日や三日は、別段餌物を採らなくても、直に彼の牛や馬みた樣に、へたばる事は夢更無いので有ります。

駱駝の胃袋！、これは又一種特別調法なもので有りまして、普通食物を收めておく物の外に、猶一つの水を

入れて置く處が有るのです、夫れて駱駝が、いざ之よりして、涯もない長途の、沙漠旅行に取りかゝらうと云ふ場合には、必らず近所の河か池かて以て、實に純粹な眞水を、この水袋の中に、一ぱいに詰めます。

處が不思議な事には、この體中の胃の中にある水！、夫れは幾日經つても、決して腐敗しないばかりか、其の量も又、甚だしく減じないのてす。

駱駝を牽いて、百里に亘る大沙漠を、旅行致しまする土人が、日はカン／＼と焦がすやうに照り、一寸息を休すめる木の蔭さへなく、しかのみならず兼ねて携えて來た、力と頼む水嚢の命の水も、一杯一杯飲む内には、とう／＼一滴も餘さずなつて仕舞ひます。

さて無くなつて見れば、又今更のやうに思はれて、一層飲み度く思はれるは、誰しも同じ情でせう、其故かして口から咽、咽から胸までが、すつかり乾上つて、もはや息さえも出來なくなります、仕樣模樣も御座いませんので、餘義なく熱沙の上に身を横たえて、死を俟つの外、道も有りません、あゝ之焦 熱大焦 熱の苦しみては御座いませんか。

茲に彼の駱駝は、慈悲の菩薩ともなりまして、死を俟つ主人が危ふき生命を、身を殺して救ふとは、あゝ何たる不憫な獸でせう。

卽ち彼の旅する土人は、最早や九死一生の場合てすから、何物を顧慮する閑隙も御座いません、只一物、水！水さへ得れば、この焦熱の苦悶を免れることが出來る、水！あゝ水、水袋を有つて居る汝駱駝よ。

酷いことだとは思はぬてはない、宥せとばかり我が忠實なる彼を撲殺して、早速腹の中の水袋を取り出して、急いて夫れを一口飲みながら、僅に息を繼ぐとの事てす。

が併し一頭の駱駝、價は決して安くない、だから之を殺してしまうて、僅に水袋だけを取るやうな事は、千に一萬に一の話しださうてす。

獅子や駱駝の小舍の有る邊は、一躰に地も高くて、そして眺望も、先づ可なりによろしい、夫れに私等の足も大分疲勞て、大分弱つて來た樣に思はれますから、兎も

角く先づ一休みと、心いらずのベンチに腰を下しました。

彼方の木蔭にある檻には、キヤツ〳〵と云ふ、變な調子て鳥が鳴いて居ますし、此方の柵ては、オー〳〵と云ふて、さも物凄く獸が吼えて居るかと思へば、高い木の上ては秋の蟬が、ヂー〳〵とさも呑氣らしく謠つて居ます。

この樣に大さうな賑がさて、如何に疲れた足も、又いつの間にやら浮き立つて、一寸した阪を下りますると、此處には鷲の金網が御座います。

鷲と申せは先づ禽類の親株、彼の獸王の獅子と對等の位置にあるもので、其嘴の鋭さ其目の光り、其羽の生えかたから色合、その爪の具合まて、飽く迄も猛禽の特性を備えて居ます、されば此鳥、常に他の小さな鳥類を捕つて、我口腹の慾を充たし、時に依れば人類の幼兒をさえも、遠慮なく掠め去るとは、よく昔話などに聞きます。

併し猛くして威あり、溫しくて愛ある點から申せば、彼の鷹に劣ること數等と見るのは、矢ッ張り私の僻目ばかりでも有りますまい、鷲と隣り合つて、愛らしい鷹も居ます、形こそ小さいですが、所謂鷹眼鋭く人を射て一種冐すことの出來ない風をして居るのは、少なからず私等の意に叶ふ處です。

あゝ昔しの大名が、禽鳥を狩るに用ひたのも此の鳥、近き日淸海戰の日、我高千穗艦上に降つて、祥瑞を示しましたのも此の禽。

(下)

さて順序は、少し後戾りを致しまするが、こゝに一疋の狐が居ます、御覽の通りあの樣に小さな獸ですが、あれでなか〳〵、容易ならぬ狡猾な奴て、そして又我日本ては、昔しからよく化けるのつくの、何の彼のと云ふ、一種の詰らない迷信が御座いますから、獵夫も大抵は、この獸に限つて銃を向けることを好まず、そのまゝ見逃して仕舞ふので、從つてその實物を見ることは、なか〳〵難いのです。

狐の躰は、あの樣に小さいけれども、その顏付は誰が

見ても、餘程狡智に丈けて居るらしく思はれます、併し化けるなどゝは以ての外、つくと云ふのも、要するに人間が自らつけるので、狐の方では一向御存じがない、即ち之は一種の、精神病に過ぎないのですから、誰も彼も安心して、よく其の正躰を見ておくが、何よりの肝要と思はれます。

　横手を一寸振り向きまするど、此の處は鳥類の一大倶樂部、鵞鳥はガアく、鷺はギヤツく、雁も居れば鴇も居ます、丹頂も棲めば傳書鳩も飛ぶ、水は浮んで游き廻るもの、木の枝に止まつて休んで居るもの、大變な騷ぎです。

　夫れに又お可笑いのは雀で、彼は躰が小さいものだから、巧にこの天網をくゞつて、檻の中の遺利を、遠慮もなくむさぼつて居ます、あゝ一は、この狹くして苦しき、網を逃れて青空にかけらんことを欲し、一は又好んで網に入り、以て甘餌に飽かんことを願ふのですが、思へば樣々な世の中では御座いませんか。

　これから少し彼方に行きますると、大きな緑蠵龜が居ます、これは先日例の鳥島へ振遣された、軍艦高千穗が、小笠原島に立ち寄りました時、その父島で、捕獲致したものださうで、躰量實に、二十八貫目程あるのです

　一躰綠蠵龜は、我小笠原島か、但しは又彼の南亞米利加など、世界に有名な產地です、この龜が海から上陸して、海濱の砂中に穴を穿つて、その中に卵を產み落とし夫れを自然に日光の力で、孵して兒龜と致さうとするのを、土人は早くも發見して、丁度汐干に蛤でも拾ふ樣に、砂の中から堀り出して、みんな食べて仕舞ふさうです。

　又海中に居る龜を取るには、小判鮫と云ふ小さな魚の尾を、丈夫な細繩で縛つて、海に放つので、之は又我國の鵜飼に、一寸似て居ます。

　この小判鮫と申す魚は、頭に小判形の吸着器を有つて居ますから、突然龜の傍に泳いで行きまして、甲の處にへばり付き、どうしても離れることを致しません。

　この時土人は、急に手の綱に重みを感じますので、急いで夫れを牽きよせ、大きな龜を易々と手取りにする

のですが、こゝに此小判鮫と云ふ魚は、なか／＼妙な奴です。

漁夫の間では、古くからこの小判鮫のことを、沙魚の水先案内だと申して居ります、夫れは又如何云ふ次第かと云ふに、元來沙魚は近目ですから、少しも遠方が見えない、だから此の小判鮫を頼んで、安全な處へ案内をして貰ふのです。

處が此の沙魚と云ふ奴は、よく漁夫の餌物にかゝつて、うつかり釣られてしまふのです、だから彼の案内者たる小判鮫は、主人を見殺しにすることは出來ないと云ふので、自分も一緒に沙魚の體にすがつて、釣られて來るので、扨てこそ水先案内と呼ばれるのです。

けれども實際はさうでなくて、小判鮫の沙魚の腹に附くのは、自分で運動をしなくて、大きな鮫や沙魚に連れられて行く途中、潮のまに／＼流れ來る、多くの甘い食物を、勞せずして採るのですが、さて本人が釣れる時には、手早く小判を離すことも出來ず、泣く／＼一緒に釣れて上がるので、なまけ物の小判鮫には、決して珍らしくも有りません。

正覺坊と小判鮫とのお話で、大きに御退屈様、さて其左手には、熱國から渡つて來た、例の駝鳥が、實に變な態をして、觀覧人を集めて居ます、何だかあまり、氣味のよくない鳥では御座いませんか。

あの羽のない長い／＼首、夫れは凡そ三尺も有りませうか、何だか休まずに、延ばしたり縮めたりして居ます、毛も何も生えてないあの長い足、これも又三尺に近く御座いませう。

駝鳥の足は雛の羽をとつて仕舞つた樣で、そして翼はと云へば、小人島の雛も同然、小さくて見る影もない哀れな風、いや眞に無態なもので御座います。

が、あれて力は實に強いので、一度怒つて荒れ出した日には、牛馬の嫌なく蹈み倒すとのことです、この鳥は亞非利加の元産で、例の獅子とは、實に同鄕のよしみ有る、親しい間柄と云はなければなりません。

常に沙漠のオアシス中に棲んで、卵子をその砂の中に産み、大切に夫れを育てるのですが、永い間の孵卵期

には、雌は少しも卵子の傍を去らず、熱い〳〵日に、もゆる樣な砂の上に身を曝して、如何なる敵が近寄るとも、泰然自若として少しも動かず、熱心に愛雛が孵化の日をまつこの事で、一寸思ふて見れば、愛情も何も一向知らない樣な此の鳥も、流石に我が兒を思ふ心は、淺くないものと見えます。

さて此の駝鳥は、その羽毛が帽子の飾りになりますので、毎年亞非利加から、歐洲の各地に輸出する羽の金高でも、實に二十餘萬圓の、莫大を致すとの事で有ります。

駝鳥は又あの樣に大きな鳥でずから、網や黐枝て、小鳥を捕ろ樣な、安い調子には參りません、ですから之を捕らうとする者は、是非とも立派な、そして勇壯な馬に乘つて、遠く何處までも、追ひ詰めねばなりません。處があの通りの長い足ですから、たゞ一足飛びに、一丈位づゝ馳けて、丁度二三日の間に、三百里程走つて、とう〳〵力がつき、そのまゝ頭を砂の中に埋めて、そのまゝ少しも動きません、ですから獵者は、茲に初じめて馬の足を休め、一擧して居ると申します。

駝鳥によく似た鳥に、鴯鶓と申しまするは、本來濠洲に產する奇妙な鳥ですが、やはり此の動物園に飼はれて居ます。

この鳥も矢張り、野外に澤山群をなして遊ぶのですが、駝鳥よりはいくらか温順しいと見えて、土人は之を捕るのに、妙な藝をやります、夫れは他でもない、人間が鳥の羽で縫ひ合せた、衣服を着まして、一方の手をば高くさし上げ、それを鴯鶓の首の樣に見せかけ、時々その首を下げて、餌物でも拾ふ風にして、だん〳〵鳥に近より、いきなり討つてかゝるのださうです、何しろ其化け方が上手なので、鳥もうつかり瞞されてしまひ升。

又一種奇妙なのは、麝香鹿です、この獸は中央亞細亞分けてヒマラヤ連山の間に棲むのですが御婦人方の大さう重寶がられる、彼の麝香を產するので、その名が著れて居ます。

さて又其麝香は、牡獸の下腹にある、小さな囊の中に收まつて居るのですが、その香の強いことは、實に驚く

べき程て、この獸を屠る者は、餘程注意をしなければ、香氣の爲に劇しい頭痛を起すものだとの事です。

南側の小高い山の半腹には、鹿の檻が御座います、牡はあの長い角を振つて、頻りに地を蹴いて居ます。

鹿の角は、毎年必らず一度拔け變ります、そこで此の角は、鹿の年齢に依りて、その分岐に多少が有るものですから、牡の年齢は、譯なく知ることが出來ませう。

鹿の生れて一年の間は、角と目ざす物は一本も御座いませんて、二年になつて初じめて角が生える譯ですが、之とて未だ枝は出來ませんて、たゞ一本丁度牛の角の樣に見えます。

さて三年目には、初めて小さな枝が、丁度一本だけ出來、四年には又その上の處に一本、同じく五年にも一本そこで六年には、都合四本の枝と一本の幹と出來るのですが、之迄が角の繁殖期か、六年以上は増加の順序も殆んど不調です。

寧樂の古都、さては安藝の宮島に遊んだ人は、永く記臆に殘ることで御座いませう、神鹿幾十よく人に馴れて、袖を引き足に從ひ、只餌物を求むる可愛ゆき姿を、その他夏の林叢に、遠くかすかに呦々の聲をたづね、秋の山家に宿つて、紅葉に愛ふ哀聲をきくも、いとゝ詩胸を清むるでは有りませんか。

鹿の飼はれて有る林て、私等三人は、しばらく足を休めて、他愛もない話をして居ましたが、やかて又、何だか足が辷りそうな、急な阪路を一走りして、以前素通りをさした猪の小舍へ來て、又一寸足を止めて見ました。

猪は彼の豚の親類です、豚と云へば恐らく獸類中、最も愚鈍て、そして又最も意氣地のないものです、猪はその豚の一屬だと云へば、彼の性行も又押して計ることが出來るやうなものです、けれども流石に深山に棲むだけに、豚と比較しますれば、特別の長所が無いても御座いません。

猪の長所！、夫れは先づ鼻と牙とです、若し農夫が、山間の畑に野菜穀物を作り、その近傍に彼が棲んて居たならば、乾度その作物は、鼻と牙との爲に侵かれて、殆んど代なしになつて仕舞ひませう。

併し肉は佳いので、昔しから山鯨だと申して、大さう賞美します、御覧なさいあの尾の様と云ひ、足の格好といゝ、本當に不器用では御座いませんか、夫れに豚の親類丈け有つて、不潔の處を好むものか、臭い〳〵實に厭になります。

この隣りには熊が居ます、これもあまりに氣味のいゝ物では御座いません、貴方は木曾の熊膽丸の奇應丸だのと云ふ、名高い薬を知つて居ますか、あれはみんな此の熊の膽から製造したもので、昔しから熊は木曾の名産です。

處が實際は北海道、即ち北極に近い方に多く棲むので、アイノ土人は毎年熊祭と云ふのを行ひます、聞けばこの地方では、熊の骸骨を家の四方に立て並べて置くので、その數の多いもの程、有福を意味するさうです、以て如何に彼等の社會には、この獸が尊まれて居るかを、押しはかる事が出來ませう。

彼の金太郎の昔噺に、猿と熊とが角力を取つたと云ふ事が有りましたが、實際熊は後趾で立ち、そして木の幹を强く揺り動かして、柿や栗の實を落とし、夫れを拾つて食ふのです。

北海道の川には、鮭が非常に澤山居ますので、熊はよく夫れを捕ることを知つて居ます、鮭の群を作つて川を逆るとき、熊はその岸に靜かに待つて居て、突然兩手で强く、鮭を討つて殺します、こうして澤山捕つてから一本の長い竿に、みんな其鮭を貫して、自分の穴に背負つて行こうとしますと、鮭は途中でみんな竿から抜けて落ちてしまつて、穴に行きついた頃には、モー一疋も殘つて居ないので、熊は大さう怒り急に荒れて騒ぎますけれども、矢張自分の落度で、どうすることも出來ません、そのまゝ本當の泣寢入となるので有ります。

先年虎の居た檻には、今は北極の熊が居ます、虎はどうしたのだらうと、私は紫白子に尋ねて見ました、すると虎はとく死んでしまつた、が死して殘すは皮ばかりでなく、剝製にされて居るだらうとの事です。

さて此白熊は雪の多い北極地方に棲むので、自然淘汰の結果、その毛は雪よりも猶白い、實に氣味のいゝ物

です、紫白子は夫れを撮らうとして、居ると、熊は絶えず動いて、首を振つたり、後方向きになつたり、意地の惡い程樣をかえて、どうしても格好の位置に直らない。

私はその間に、又一寸後戻りをして、最初見落した水族館を一見しました、こゝて云はゞ地下なので、二三段々を下りると、煉瓦造りの處に、硝子越して淡水産の魚の泳ぎ廻るのが、見られるやうな仕掛けになつて居ます、しかも其種類の如きは極めて僅かで有つて、鮒鯉金魚など、世に有りふれた物と、夫れに鯢魚が居るのてす

金魚は御存じの通り、あの樣に美しくて、まことに花やかな物て御座いますが、あれも矢張り人が拵えたのてす、拵えた物ー、はて變な樣にも思はれますが、實の處人爲淘汰に依つて、鮒と變化せしめたのださうて、日本て出來たのは、未だ今から漸く百五六十年前、大和郡山の藩士某の、抑えの池から鮒の赤いのが出來、大きに重寶がられて、今日の立派な金魚の基となつたのださうて有ります。

ですから歐米諸國には、日本の樣な、美しい金魚が居ませんので、只今では、海外に輸出するのも、少なくは御座いません。

金魚の班なども、みんな職人が手をつくして、作り出すので、專門に之を研究したならば、餘程面白い事が出來ませう。

鯢魚!、これも又日本の特産て、西洋の動物學者が、喊に羨しがるものてす、併し其實は、態の惡い臭いく動物てす。

谷川の清水の湧き出る樣な處に居て、稀には長さ三四尺のも居ます、形は一寸蠑螈に似て居りますが、何だか獰々しい處が有る樣です、要するに鯢魚は、蛙の一屬て有つて、只一寸尾が御座いますから、有尾類と申すさうです、そこて山間の漁夫が、ここのお大將を捕りますると、直に火あぶりにして殺し、そしてその肉を甘がつて食べるのだと聞いて居ます。

水族館の欝陶敷い處を通り抜けて、一寸彼方を見ると、以前あまり急ぎましたので、ツイ見落して仕舞つたのが、まだ澤山あります、何だか間の抜けた樣ですが、

呑氣は私の性質、又こちらへ足を向けました。
　こゝにはカンガールが居ます、この獸は餘程面白い奴です、頭の邊は一寸鹿に似て居ますし、耳の長い所は兎の樣で、そして全躰は鼠に近くあります。
　この獸は、本來濠洲の特産物として、こゝに居るのも矢張り全國メルボルンの、動物園から、わざ〳〵贈つて來たものださうで、先づ珍らしい種類でせう。
　カンガールと云ふ名も、實は濠洲の音なので、今では夫れが、立派な學名になつて居ます、之に就いて面白い話があると云ふのは、歐洲人がはじめて濠洲に來て、この獸の名は何と言ふかと、尋ねますと、土人共はたゞ、カンガルー〳〵と呼んで居ました、ですから其歐洲人は、この獸の名がカンガルーと云ふのだと、一ずいに思ふて、直にさう名を付けてしまひました。
　處が後てよく聞いて見ると、カンガルーと云ふことは、獸の名てはなくて、知らずと云ふ、土人語だと云ふことが、ちやんと解りました、併し今さらカンガルーの學名を取り消すことも出來ませんので、そのまゝ知らずが、この獸の名となつて居るなど、なか〳〵滑稽な話では御座いますまいか！。
　さてこのカンガルーは、他の獸のやうに、胎盤を有つて居ません、ですから折角子を孕んでも、長く腹で生長させることが出來ないです。
　その代り又重寶なことには、お腹の處に一つの袋が附いて居ますから、未だ人間で申すなら、やつと六月か七月位な、不完全な子を産みおとしても、直とこの袋の中に拾ひ取つて、こゝて乳を飮ませたりいろ〳〵して、丁度半年ばかり養ひ、夫れから漸くのことで、赤ン坊となるのです、だからこのカンガルーの事を、又袋鼠とも申すので有ります。
　私はこゝまで來て、不圖氣がつき、定めし紫白子は寫眞を撮つたらうと、急いで引き歸し、吟風子と三人、又小さな橋を渡り、石段を三つ四つ登つて、今度は入口でなく、出口とかいて有る處を拔けて、全く動物園を辭しました。
　あゝ面白う御座いました、と傍の休み所に、先づ一寸腰を下し、温い茶に舌打ちして、さて今迄見たことを、ざつと手帳に記して見やうとしたが、忘れ性のいゝ私には、以上のこと丈けしか書くとが出來ませんでした。

山茶花

堀内新泉

子として、親に孝を盡すは、元より當然のことて、凡そ人の子たるほどの者は、誰も彼も皆一様に、親には孝を盡してこそ、それが眞個の人であるのに、近頃はその人の、例へば老い行く春の紅のやうに、日は一日と稀になるのは、誠に心ぼそい次第である。

けれども、濁の蓮に花咲く世は、一概にまた左樣ばかりとも限らない。これは老ひ行く春の花と謂はうか、但しは濁の中の蓮花と謂はうか、阿波國名東郡別府村に樒柴まきといふ娘があつた。まきの家は代々農を業として、父を喜平といひ、母は辰と云つて、夫婦ともに行狀正しく、家業大事と稼ぐので、餓ゑる氣遣ひも無ければ、凍える憂ひも無く、春の花も心長閑に眺め、秋の月も明らかに拜んで、世を樂しく送つて居つた。

まきは即ち此の夫婦の中の一人子てあるので、兩親の寵愛は尋常一樣ては無い。さらぬだに我が子の顔は、花とも玉とも見えるのが親心であるのに、まきは孩子の時分から、其の優しい心をば面に見はし、誠に柔順しい顔をして居るので、兩親ながら此の子に情を、傾け盡し、色附き初めた梢の花をば、心に高い樂みを有つて居る人の、朝夕仰いて莞爾をするやうに、兩親はまた朝夕に此の稚兒の顔を眺めて、これはかりは金て得られぬ樂みを喜平夫婦は正に得て、まきや、まきや、と我が身に代へて愛して居る。

親の餘りに愛する子は、我儘者に成るといふ、それは即ち子が親の愛に馴れるのだ。まきが兩親の我が一人子に對する仕方は、謂はゞ勞ひ愛し過ぎるほどであつたが、去りとは有がたい子てはあるまいか、まきは幼い時分から親の愛には馴れなんだ。即ち親の愛する儘に、假初にも我儘めかしい行狀を爲ず、よろづの擧動雅閑て、小兒には珍しく食物にも口綺麗なので、病みわづらうことも少く、我ゆゑ親に苦勞をかけるやうなことは嘗て無い。

兩親はこれを見て、金のなる木の我が庭前に生へた

やうな思ひを爲し、匍へは立て、立ては步めの親心に、氣も浮き立つて身も輕く、これも子の爲、彼も子のため何んでも早くこの身代を切ては今の四五倍位にして、娘に讓ッてやらねば成らぬ、と明けても暮れても兩親ながらに、それをば心の勇にして、野に山に勞を厭はず稼ぐ中、まきはまた若草のみづ〳〵しく生立つて、はやその年齡の六ッ七ッにも成つては、一人おとなしく留守居して、兩親を心安く野山に稼がせ、日の入相に兩親の、疲れた足を曳きながら我が家を指して戻つて見れば、可愛やまきは、何時何うして覺えたとも無く、小器用に夕餉の膳を調へて、茶を沸し、燈火の用意まで、はや整然と爲し終つて、兩親の今や歸り玉ふ、と心も切に待つて居る。

斯う成つては、又尙更に、兩親の心は倶に勇み立つて花のお山の絕頂まで、登り遂げたやうな思ひがする。世間の人も目を止めて、『まだ辛と乳房を離れたばかりの兒で、彼樣な怜悧な兒がゐられたものか。喜平どのは善い娘を有れた可羨しい』。と云ふ噂は、至る所でまきが兩親の耳に入るやうに成つた。兩親の心の中の喜びは實に思ひやるべして、世の憂きことも人の辛さも、孝心なる我が子の笑顔一ッに忘れて仕舞つて、夫婦は顏に皺の波打つことは氣にもせず、眠た間の夢にも待るゝのは、あはれこれから十年後の、柳の糸は東風に舞ひ櫻は雪の袖を擴ぐ可き裔である。

花咲く頃は風雨多しとやらで、世には偶ま心に任せぬこともある。さる代にはまた思ひの外なる幸福の來ることもある。それも是も世の習慣だと思つて了へば、別に驚くことも無い、また此の覺悟が無くては、喜びと悲みから出來た此の世は渡れない。とは云ふものゝ、この圓滿な一家族の上に、突然として悲慘なる出來事の起つたのは、誠に可傷しいことだと云はねば成らぬ。まきが八歳の夏に當り、一種の激しい惡疫がこの地方に流行した。まきの母は則ち此の惡疫に侵されて、朝は那等の異狀も無く、父と倶に田の草取に行つたのが、夕べは避病院の一室に果敢無くも息を引取り、物悲しげに烏鳴く野邊一ト條の烟と滅えたことてある。この時の

まきが心の中は、何樣にあつたであらうか。この世は夢か昨夜までこそ、明日は死別となるとも知らず、母が添寢の夢暖かに眠つたのであるが、今夜と成つては、可惜うれしい夜半の夢から醒めた樣な心地がする。天も愁ひに曇つたものやら、螢ほどの星二つ輝かぬ向うに山際に闇を破つて、物淋しもとろ〳〵と燃え上る靑い一片の火焰こそ、彼が私の母樣の今燒けるのぢやと心細くも眺めては、自分もいッそ彼の火焰に身をば燒かれて死にたく成り、又してもわッと泣き入り、慟哭きつ悶えつ爲る有樣は、世の幼きを有つ母達に、『成程兒のある間は、死んでは成らぬ。』と云ふ强い感じを與へたのである。物の攫つて行つたやうに、まきは母をば亡つた其の時から、悲み他にすぐれて、食物も喉を通らず、盡きぬ涙に目は二ッの、夏果て方の李なんどを附げたやうに泣き膨し、悄々しくも面やつれして身は骨立ち、今は一人の父親の慈愛に縋り、小い胸に將所作に、天晴の大人も耻づるばかりの孝行を盡しつゝ、昨日今日と便り少く送る中にも、雨降れば雨につけ、風吹けば風につけ、特には同じ年配の兒達の誰も彼も一樣に美しく、他は皆在る母樣の手に結うて貰うた髮を見せられた其の時は、『アヽ私ばかりは何うして。』と浦山しいやら悲しいやらで、悄々として我が家に戻り、佛檀の位牌に向つて、『アヽ母樣。』と母在ふねば垢もついた袖口に目を押へて俯向くことも、流石兒童の日には一度や二度ではない。

父親喜平は傍に居て、これがその目に着かいでならうか。『アヽ不憫な者ぢやわい。亡者も嘸や後に心が遺るであらう。』と野に出て鍬を持つ間も、我が子のことが忘れられない。これも俄に匹偶を亡つては、氣の勇みがそれと倶に弱つて來て、根ッから仕事の埓もあかぬ。誰も親鳥とも倶に鳥屋に入る可き夕方にもなれば、母を亡ひし娘や待たんと喜平は早目に仕事を止め、急ぎ足にて戻つて見れば、母の死後は又一トしほと娘のまきは忠實に成り、飯も炊いてあれば、可愛やおかずも早整然と拵へて、父樣今やと門に出て、物待顔に待つて居るのがいぢらしくて成らぬ。それやこれやで父樣は夜

も抱いて寢て、撫てつ擦りつ撫恤つて、我が身の爲だとあるならば、またとは一ッ取換の無い、ア、勿躰ない其の御生命ても、さら〳〵惜みは仕玉はぬまて可愛がつて下されど、娘はそれに心慕つて、あやまちにも我儘めかしいことは爲ず、日は一日と親大切に事ふるので、これを見る世間の人も陰では左樣云ひ、父喜平も心竊に、「我が子ながらも眞個にこれは稀な子だ、この頃の此の子が每日の所作柄が、誰の目にても七ッや八ッの幼兒の手て爲る業だと見えやうか、或ひこはれは亡妻の靈魂が手傳うのてはあるまいか。』と眉を顰めることもあるが、元よりそんな事のあらう筈は無く、これ偏に其の孝心の致すところてある。

父娘が斯うして暮す中に、櫻の花は二度咲いた。木の葉は三度紅葉した。まさも二ッの齡を重ねて、はや十歲といふ齡にも成つては、身の脊丈もずつと伸びて、島田に結うのも最う一ト息だと云ふことに成つた。喜平は此の娘を一日も早く育てあげて代を讓り、我は若隱居の心あせらぬ身に成つて、愛らしい孫を脊中にねんねおころり位の役目も輕う世を送らう、と今は唯それのみを夜の寢覺にも樂んて、これから更に二度添を貰つて、何う爲うなどの考へは、夢にも有つては居ないのである。喜平自身は其のやうに確乎と思案して居つても、これを他の目から見れば、喜平が年は未だ四十に片手の指の數ほども間があるので、この儘世を淋しう送らせるのは氣の毒なものだ。何處にか好いのがあつたならば、と當人に懇意なものは、內々心を配つて居ると、同じ村の者ではあるが、小供の頃から大坂に奉公に行き、その後向うて緣付いたと聞いて居つた女で、年配も喜平が二度添には丁度好いのが、これは又夫に死別れたとやらで折よく村に戻つて來た。人々は旱に雨の思ひを爲し、喜平にこれを押付けて、謂はゞ無理往生にウンと云はせて、子を懷ふ慈悲心胸に滿々たるまさが善き父樣をして、再び妻ある男にしたのは、さて善いやら惡いやら、世は何事も一寸先は暗くて影も見えぬのが、人は却ッて宜いかも知れぬ。

まさが今度の母樣はおきわと云つて、三十ばかりの

身材のすらりとした瘦形の、色も白い縹緻も美い、又た流石は大坂育ちの何處と無く身の動作に至るまで、泥臭い田舍育ちの女に遙立勝つて、これを其處邊の婦衆に比ぶれば、炭團の中の卵と云はうか、鴉の中の白鷺と云はうか、兎に角眉目形の美しさは人の目を引くほどであるが、薔薇に刺あり、海棠には食べる實の無い世の中は、女も美人の其の多くは、心が邪險か、業が出來ぬか、二ッの一ッは附物だと云ふ人もあるが、この說喜平が後添には善く適つて、縹緻は他に勝れて居るが、一月二月と倶に起臥して見れば、第一心が狂犬のやうに邪險で、仕事と來ては農家には此が何より必要の鍬鎌なんどは無論採れず、着物の綻び一ッも縫へず、藝と云つては何んの補欠にも成らぬ三味線を少し引くばかり、それは宜いとした所で、第一稼ぎ嫌ひの遊びずきで、衣裳撰びて食物吟味、百姓の嚊アといふ身で、着物の裾を長く曳き摺り、仕事と云つては、縱の物を横にも爲ずに、酒は浴びるやうに飲むは、煙管は常住離さぬは、亭主は尻の下に敷いてグウとも云はせず、義理ある間の娘は憎んで物慘酷しい目に遭せ、それは／＼我儘三昧の仕度放題、これを一口に云つて了へば、一家の爲に成ることゝ云つては、無駄に灰にする煙一ッ消盡に入れる程のこともせぬ代には、一家の不爲に成ることゝ來ては、百圓札で尻も拭きかねぬ世帶倒しの莫連女、いや早沙汰の限りである。

後にて聞けば大阪では、卑しい勤めを仕て居つたと云ふ此の阿婆摺者の、何んの因果か我が母親と成つて後のまきが心の悲みは物に比へて云はうやうも無い。

獨身て居て下さつた時の父樣は、實に我が身に優しくて、それこそ眞個に暴い言葉の一言もおかけなされたことは無かつたのが、今度の母樣と添ひ玉ふと倶に、御心がころりと變つて、全て他人を見たやうにお成りなされた。最初の間は未だ左樣でも無かつたが、次第に母樣同樣な御氣風に成り玉ひて、先づは言葉の暴くなる、果は撲つたり蹴つたりの御折檻、これも皆私の不調法、また／＼御孝行の足りないから、とまきは四邊に人無き折は、獨り淚にくれなゐの袖口に目を抑へては泣い

て居る。

まきが悲歎は左もさうずて、世は十人の中九人まではこれだから、家を思ひ身を思ふ男は、同じく妻を定めるにも、善くその爲人を見るのが肝腎なことで、一雨浴びれば直にも褪める色艶なんどに迷ふのは、怜悧でないと云はねばなるまい。喜平は元來正直な、仕事にも善く精を出す男であつたが、今度の二度添を迎へて後は、全で異つた男に成つた。人は變るのは結構だ。いや人は日々變らねば成らぬのだ。愚者は賢人に變り、怠惰者は稼手に變り、惡人は善人に變り、貧乏人は金持に變るのは結構だ、進むのは可喜しい、また人は是非とも斯ういふ風に變らなければ、即ち進まなければ、世に生き榮えが爲ないのであるが、等しく變るにも變りやうがあつて、この反對に變るのは困る。喜平も其の後變つたのは嬉しいが、惡く變つたのは悲しい譯だ。勿論喜平は根が稼手の節儉家であつたので、當初はこの女には愕いた、實のところが、『この調子でやられた日には、おれが身代の無くなるのは瞬く間だ。』と震ひあがつたのであるが、男を手玉に箸より輕く採りつけたおさわは、此家は一ト息吐ける所だと見て取たので、直に喜平を丸めかゝつた。喜平もまた此女は不可〳〵と思ひ〳〵こゝが弱い男の弱い所で、虚然と其の手に乘つて、おさわの虚懸に塡り込み、全で夢中に成つて、白い物の藍にても染むやうに、漸々とその惡い感化を受けて、これまでは嫌ひで通した酒も飲むやうに成る、朝寢もするやうに成る、果は女房同様に仕事も爲ぬやうに成る、と云ふ風に喜平の行状は日逐をふて惡く成り、終には我が子の愛も忘れて仕舞ひ、それも此を賞める事ばかりで憎む點とては更に無い娘を捕へて、邪慳なるその繼母も同様に口拙く叱り懲し、或は手暴く打擲して、無慈悲極まる親とは成つた。他ゆゑに我が最愛の子を殺さんばかりに成ると云ふは、親として世にありさうなことでも無いが、悲しいかな現在あるとして見れば、何うも是非ない譯である。これと倶に近所の者は、喜平の行状の天地も啻ならず變つたのを見て、『人も惡い女に連添うては、彼程までに變られたものか。』と誰も彼も眉を



冬木立



罪め、道て喜平夫婦に合つても、その行跡の餘りにも人の行く可き道筋を外れて居るので、齊しくこれを卑み惡んで、我から言葉をかけるのは、身の汚れと爲るやうに成つたが、昔も今も變らぬのは、獨りその娘のまき一人て、いかに兩親から慘酷しい憂目に遭されても、唯々小い我が身を責めて、残酷い親とは思ひもせず、何んな身に餘る事を云ひ付けられても、私の手足で出來さへする事ならば、と何時も笑顏でたゞはいくと兩親大切に事ふるので、村人等は道て此の尊い孝女に會う時は、誰も彼も道を讓つて、皆一様に其の安否を尋ねるのを身の名譽とするのである。社會の自然の制裁は、極めてゆるやかな様には見えても、善なり惡なり其の爲す所に從つて、その孰れに對しても、極めて嚴しい反響を與ふるもので、謂はゞ社會の制裁は、我々人間の善惡邪正を直ちに斷する神様だと云つても宜いのだ。

話は進んでまきは今年十一に成つた。それと倶にまきは益々不仕合な身の上に成つた。何が此の子をして然らしめたかといふに、喜市といふ弟の生れたのが、ま

きをして生死の境に立たせたのである。抑も兩親がまきに對する情無さは、最早その絕頂に達して居たのに、今度弟の生れて後の兩親のまきに對する無慘無慈悲さ殊に繼母おきわのまきに對する處置は、何うかして早く殺して仕舞はうとするやうであつた。言葉の上の責折檻、或は煙管將拳に所も嫌はず打擲するのは未しものことゝして、三度の食事も滿足には與へぬやうに成つた。それでまきは何うかと云ふに、その境遇の上から云はゞ我が身の仇とも見る可き弟の生れたのを心から悅んで可愛がる。またこれが爲にまきの役目は俄に殖えた。わづか十歲や其處邊の小い腕に一家族の飯炊くことから跡仕舞、走り使ひの餘暇〳〵には、馬鹿よ阿房と叱られながら繼母の、肩を揉むやら脚を擦らせられるやら、これ丈でも雪に葉おふる小笹の中々堪へ難い所に以て來て、今度はまた始終孩子を未だ幅の無い脊中に括りつけられて、相變らずの水仕業から用達も我が身一ッでする上に、濕布の世話まで增したので、まきは每日朝から夜の夜更まで寸暇も休まず稼ぐのに、繼母おきわは何時も怖い顏をして、三度の物も腹一ッは食べさせぬので、積る苦勞の數々にまきは脊丈も伸び切らず、枝から捩れた花の蕾のやうに、日は一日と瘦せ萎れて、目もあてられぬ有樣に成つた。けれども、有つて生れたやうなまきが孝心は、中々に息ある間は撓まんともせず、何うかして母の心の和らぐやうに和らぐやうにと身を責めて、孝といふ孝を悅び勇んで盡して居つた。村人等はこれを見て、喜平夫婦を惡むこと太だしく、それと倶にまきの不幸を憫んで、我も我もと窃に食物を惠んでやつて、風前の燈火と云はうか、怒濤に漂ふ小舟と云はうか、危い心細いまきが此頃の身の難儀を神に代つて助けて居た。

物は皆各自に定つた命數を有つて居るもので、何んなに辛く吹けばとて、小松も暴風に倒れはせぬ。まきはこの苦みの中にも一年二年と段々に年を重ね、十三四の頃にも成つては、これ偏にその心懸で、誰に何時何うして習つたとも無しに、針持つて小器用に物縫う術も覺ゆれば、鍬鎌も中々達者に取るやうに成つた。わづか

此程の小娘で、はや女一人前にも成るものを、相も變らず繼母は、猫が鼠を狙ふやうに、意地惡の蛇が蛙を覘ふやうに、噛まうか、呑まうか、とまきが一擧一動に爪を磨ぎ、或は口を開くのであるが、一方は唯柔和忍辱に事へて孝を怠らず、その中には母の心の春の氷とゆるく解けて、何時か一度は麗しう笑顏の拜まれることもあらうか、とそれのみまきは樂んで居る。

まきは其の後滿七年間、流るゝ水の絶間無く、兩親に孝行大事と事へ通して、今年は已に十七の春を迎へた。山に美玉あれば草木爲に潤うと云うがやうに、まきが心の優しさは、自然とその色白き面に見はれて、誰が見る目にも懷かしい。それは兎に角近郷近在に名高い孝女て、加ふるに男も及ばぬ稼手であるので、心ある世の親達は皆この娘に目を着けて、我が家の嫁に仕やうと先を爭ひつゝ、緣談は昨日も今日もと諸方より引續いて申し込まれるのであるが、まきは恐らく嫁には行くまい。憎み憎んだ繼母はじめ、二度添ゆゑに惡く變つた父親喜平も、今我が娘を他に遣つては其の日を暮しかねるのだ。とばかり云つては耳遠いが、喜平夫婦は其の後空しく世の年月を送つた上に、年には二三度も夫婦連て大坂見物に行く、吉野川一ツ隔てゝ向うは德島の市に芝居見物茶屋めぐりなどゝ身分に過ぎた奢侈沙汰をやつたので、身代は何時の間にやら他の手に渡つて了ひ、これはと滅切弱つた所に以て來て、夫婦ともに枕も揚らぬほどの大病に罹つたが、これは疾くより繼母おきわが身に其の萠はあつた例の病氣で、それが今この春の木の芽と倶に夫婦ながらに發したのである。他は皆これを見て『それ見たことか好い氣味だ。』と手を拍いて笑う中に、獨り驚き悲しむのは廣い世間にもまき一人で、何うがなして兩親の病氣を治したいものだと志し、願うて叶うことであるなら、晝夜ともに兩親の側に居て、看護仕度は山々であるが、今は其の日の米代から、醫藥の料に至るまでも、我が手一ツで稼ぎ出さねば成らぬので、晝は野山に汗を流し、夜はまた夜で病人の看護片手に內職を勵み、上は賦役親族四隣の交際から弟の教育、一家の生計、兩親の看護　これに加へて一

家族が四季折々の着物の世話から養炊のことなどに至るまで、我が身一ツに引受けて居るので、まきは今その年頃に成つたからと云つて、中々他家に行ける譯のものでは無い。若しまきが他の家に嫁つて仕舞へば、兩親首弟までが野倒れて死なねば成らぬのだ。まきが此の間の苦心は、實に何んとも云はれない。朝は星を頂いて起き出て、夜はまた内職に夜深して、枕に就くのは眞個の霎時、花なら今が盛の身の、髪一ツ結はうでも無ければ、口紅一ツ指さうでも無く、明けても暮れても身を粉に碎いて稼ぐのも、我が身の爲を思うては無く、その心を尋ぬれば、あはれ參慘や可愴しや、『ア丶何うかして父樣母樣の御病氣を治して進げたいものだ。』と云ふより外は思つて居ない。それで兩親は何うかと云ふと、別に嬉しいなどゝ云ふ心は、胸に浮びもせぬ樣子で、まだ〱此の孝女を折々は口拙なく罵るとは、さて〱世には可憎親もあられたものだ。けれども、まきは少しも恨まず、父親にも母樣にも、常に笑顔の莞爾として、自身の口には食べられぬことのある程貧しくても、兩親には各自の口に好む物を供へて怠らず、その看護の手厚さは、中々に物有る家の人々も、敢て及ばぬ所である。

兩親は枕を並べて一年の餘も呻吟いて居つたが、偏にまきが孝心の致す所で、二人ともに最早一命には別條も無いまでに身の健康は回復したが、母は元より仕事嫌ひの遊び好き、父喜平も其の後は先づ癈人も同樣な身体に成つた。まきは兩親の我が手助には成らぬまでも　身の自由丈は孰れも不足なく出來るやうに成つたので、その喜びは一方ならず、これから野山の事も心の儘に挊げるから、今一トしほ勉め勵んで、兩親に及ぶ限りの孝行を仕やう、と其のみ心の張にして、二月三月も稍心安く挊いだ頃、今度は弟の喜市が酷い眼病に病ひついた。兩親をかけた醫者に早速診てもらうと、『是は例の胎毒から來たので、治るや否やは覺束ない、先づ治らぬもの、だと思つて居て貰はねばならぬ。』と云うことである。これを聞いた優しい姉の驚きと悲みとは兩親の病氣の時にも劣らない。成らぬ中にも生身の爪

を紛すやうな思ひを爲て、それから後は雨にも風にも此の時八ッの弟を脊負つて、往復では二里の餘もある德島の眼醫者の許に、加かも滿一年といふ長い間通ひ詰めて、一眼丈は疵も附けずに取止めてやつた。世の人〻のこれを見て、齊しく感嘆すると倶に、この事やがて官に聞えて、時の縣知事の具申に依り、多年孝悌の道に克く盡した廉を以て、明治十四年勅定の緑綬章を頂き其の善行は世に隱れ無きものと成つた。

さりながらまきの家は、諄々しきまで述べ來つた以上の次第で、赤貧洗ふが如しである。まきは此の時已に業に妙齡に達し、今にして嫁入りせねば、あはれ花の盛は過ぎるのであるが、今良家に貰はるゝ儘まきが他家に嫁つて仕舞へば、一家は直ちに其の日の糊口に窮するのである。けれどもまきは、親兄弟の爲ならば、假令や我が身一ッの果は何う成らうとも、そんな事は思ひも仕ない。たゞ親大切に稼いては專ら孝養を盡して居る中、まきは二十歳の春と成つた。折から母方の伯父て、これは疾より大阪に出て、今では大きな商人に成つて居るのが、殆んと十幾年振で墓參に來て、彼方、此方、て喜平夫婦が不身持、これに盡すまきが孝心の啻ならぬ樣を聞いて、一ッは怒り一ッはまた愍んで、或る時まきを宿屋に呼び、『いかに親だからと云つて、彼樣な義理も情も無い奴等に孝行も絲瓜も要つたことか。其許の身は最う遲くとも今年の内に緣を求めて嫁かねば、盛を過ぎては花は眺める人が無いぞ。私と一緒に大阪に來い、一人の姪ぢや、この伯父が其許の身に惡いやうな事はせぬ。』と云つた。まきは懇に是を謝し、『有難う存じまするが、只今私が家を出ましては、兩親首弟までが早速難澁致しまする。假令や私の一身はその爲何のやうに成りましやうとも。人は二度無い大切な親を棄てゝ、我が身一ッを安かれと計るのは、私には何うも出來ないことでございます。假令や其の爲一生涯寡婦暮は致しませうとも、私は弟の一人前の者に成るまて家に居て、我が大切な兩親に事ふる積りでございますると。』優しい顏にも動かぬ色を見せて云つた。伯父も殆と其の志に感心して、『あア私は金よりも、其許

のやうな子が急に欲しく成つた。兩親は如何にも惡いが、其許の志は又何處までも助けてやりたい。其樣聞いては何うも無理から連れては行かれぬ。私が今の言葉は間違つて居つた。それにしては其許が今の身の上は、如何にも可憐さうであるが、おゝ、それぢや死んだ妹に香典として、其許に金を千圓やらう。弟の一人前に成つた上は、それて一生一人で送らうとも、また其の金を持つて嫁入仕やうとも、孰れは其許の好きなやうに仕ろ。』と云つて、伯父は大阪に歸つたが、その後間も無く約束の金額を相違なく送つて來た。

この時のまきが喜びは知る可して、その金を一文半錢も他の事には使はず、悉皆田畑山林に仕て仕舞つたが、所有者は誰かと云ふに、皆弟喜市の名前に仕た。流石の繼母もこれには邪慳の角を折つた、即ち迷ひの夢から醒めた。世には一時の心の迷ひて、成程惡い事を爲る人があるが、心からの惡人と云ふは無いものだ。此方は今まで彼程までに邪慳に仕たのに、娘の方では此程までに親切に仕てくれるかと云ふ所に氣が付いては、これまでは邪慳一偏の繼母も、俄にまきの顏が神か佛のやうに拜まれて、有難いやら尊いやら、是まで犯した罪の可怖しいやらで、今はその名を呼び棄てにするのも勿躰ない樣に成り、これまでは犬が猫を呼ぶよりも酷い言葉を使つて居たのが、俄然に變つてまきやくと言葉も優しく懷しがり、今度はまた他に勝れて可愛がるやうに成つた。

人の誠の一念は、岩をも透す世の習慣で、まきが十年一日の如き世にも稀有なる孝心は、終にその兩親を善道に導いた。さてこれよりしてまきが家は、水溫んで春の氷の解けるが如く、日は一日と親子の間は睦じく成り、花にも月にも麗しい笑顏を合するやうに成つた。まきは枯骨に肉附きし思ひを爲し、更に孝悌の道を勵み努めて、その後また十年一日の如く兩親に事へ弟を愛し、一方には殖產の道を講じて、また昔の我が家に復した時は、その齡丁度三十歲で、弟の齡も丁度丁年に達したので、我が目てこれならばと見た嫁を貰つてやつて、我は一反の田地も取らず、一切の家產をば弟夫婦の者

に讓り、『人は二度ない親樣ゆゑ、何うか孝行專一に賴みまする。』と云つた時は、兩親ながら娘を拜んで、ほろ〳〵ほろと涙を流して。さて善にも惡にも此方の心次第では、人は何うでも化し得るものだ。

　まさは其の後半年ばかりは家に居て、我が自然に悟つた一家の持ちやうから農事その他のことは更なり、子として親に事ふる道から、親族四隣に交はる心得まで弟夫婦に善く敎へ、そのまた弟嫁に優しいことは、世にも例の無い程である。德は日ならず是にも及んで、弟嫁のまきを慕ひ敬ふことは、左ながらに赤子の慈母に於けるがやうで、世の中の憂きことも、將嬉しきことも姉には明して其の胸を晴すのである。まきは弟夫婦の善く我が敎訓を守り、兩親にも善く事へつゝ家業大事と稼ぐのを見て安心し、今は用無き我が身である、兎やせん角やと思ふ時、まきは其の隣村の去る家から緣談があつた。さていよ〳〵此の緣談が纏まると、兩親首弟夫婦も今更のやうに名殘を惜み、一方では繼母が涙を流して、『御前樣が居なく成つたら私は何う仕やう便が無い。世には例の無いこととても無いから私丈は連れて行つて貰はれまいか。』と云つては泣く。また一方では弟嫁のまきを人無き所に招き、『姉樣最うお休め成さらぬか。それでなくては私は最う。』と流石年丈に無邪氣なことを云つては止める。まきは此の間に立つて、其を宥め此を勵まして、明日はいよ〳〵芽出度嫁入と云ふことに成ると、別れを惜むは獨り其の一家のみには限らず、『この村の女の手本が無くなる。』と云つて、一村の者これを惜み慕はぬ者無く、我も〳〵と贈る贐はまきが家の一間を其て塞いて仕舞つた。

　さて以上述べ來つた所は、孝子としてのまき女、兄弟に友愛厚きまき女の傳記で、吾が拙き筆はまだ一家の妻としてのまき女、並びに母としてのまき女には及はぬのである。我が聞く所に依れば、これから先のまき女が話は、その素直なる黑髮と倶に長いのであるが、今度は先づこの邊で休めると仕やう。兎にも角にも我がこゝに其の半生の經歷を傳へたまき女の如きは、これを今日の去る現狀に比し、萬綠叢中の紅一點とも稱した所で、別に批難の聲は聞くまいと思ふ。

（終）

水夫の娘

江見水蔭

上

小松原の砂地、臺石が浪の音にも動ぎさうな古い新しいさま〴〵の石塔。中に、極めて新しい墓石のある前に、五人の參詣者が佇んで居る。

老人夫婦と、娘一人と、水夫の服を着て居る一人の男は五歳ばかりの娘の子の手を引いて居る。

線香の烟に蟆子も近寄らず。樒の枝を挿した花立には、露が早や宿つたのか、手向の水か、あらずば五人の涙か。

既に禮拜は終つたのに、去りも得せず、唯立つた儘無言で其所に洩れるのは溜息。

漁村鷹見浦の燈臺守、二十餘年勤務を繼續して居る、池邊番作といふ老爺には、老妻お光との間に二人の娘。長女の名をお安と云つた。次ぎの娘はお銀が名である。

お安は水夫松田正造の許へ嫁に行つた。然うして、お榮といふ繼子を可愛がつて育てゝ、其子が五歳になつた時に死んで了つた。其亡骸は浦の松原の墓地に葬られたのだ。

「私くらゐ女房緣の無い者は少いだらう‥‥一人は氣に入らないで去つて了ひ。一人は向ふから出て行つて了ひ、此方からも去りたくない、先方からも出て行きたくない、然うした中のは死んで了うし‥‥」

墓前の水夫は斯う云つて、手を引いて居る娘の子の襟の毛を撫上げながら。

「子にも緣が薄いのだらう。お安が自分に子の出來ぬのを心配して、厭ッぽいと噂のある私の心變りを苦勞にし

て、これを繋ぎ留める大事な命綱といふ考へてか、去つた先妻が連れて行つて居た此娘をわざ〳〵引取に行つて來て、自分が産んだ子の樣に可愛がつて吳れたが……船乗稼業で家に居るのがタマの他は……今度は又丸て手放して、祖父さんや祖母さんや叔母さんにあづけて、外國行……這んな事になるのだッたら、お安が此子を引取りに行つて吳れなかッたら好かッたとまで、愚痴も出て來る。本統に不憫なのは此娘だなア」

と又眼に涙の新しい泉。

「然うだよ、其通りだよ。お安の了簡ぢやア、此娘を實の子と思つて、年を取つても此娘に掛るつもりであッたらうが、不意打に死んで了つて何んにも成らない。や、何んにも成らない處なら我慢も出來やうが、お前に取つては足手纏ひを、殊更にこしらえて渡して逝つたやうにも當るし。此娘だッて又折角お安に馴染んで居たのに、急に居なくなッたので、どんなに悲しいか心細いか知れめえ。這んな事に成るといふのが、誰かの内に分つて居たら、全く引取らすのぢやアなかッたが……」

と老燈臺守も窪んだ眼に雫を溜める。

「それだけれど、何も因緣だアね。前世から斯ういふ事に定まつて居たのだらうから、此上は死んだ佛への供養にもならうと云うもんだよ。可憐さうなお榮坊を、實の親よりも繼親の優しいお安の心に成つて、妾達が面倒を見て遣りませうさ」

と老母は顔の皺を水脈でもあるかの如く、涙といふ涙を流し込んで云ふ。

「兄さん、決して心配しなさんなよ。お榮坊は妾達が、大事に〳〵あづかッてよ。妾はお榮坊が前から可愛くッて〳〵仕樣が無いんだもの……今度のやうにならないからッて、妾は此娘が大好きだし、此娘も亦妾を慕つて吳れるんだもの。ねえ、お榮坊……」

と娘は近寄り、抱上げて、頰に接吻した。

「姨ちやん、母アやは石に化つたんだねえ……」

左の冷めたい掌を、お銀の頰に當て、右の小さな手の甲で眼の端を擦りながら云つた。

四人は又泣く。

「ねえ、母アやはお化だッて、父ちやん、云つたが、本統だねえ。這んな石に化ちやッた」

「母アやは本統に化けるのが上手。今では石に化けてるけれど、今夜からねえ、母アやわね、叔母さんに化けてねえ、お前を可愛い〳〵しるとさア」

お銀が斯う云ふと、お榮坊は隙さず。

「さう、母アや、叔母ちやんに化けるの。ぢや、叔母さん、何に化けるの」

「叔母さんはねえ、コン〳〵に化けてねえ、若しお榮坊が、阿父ちやんの後を追うて、阿父ちやん〳〵と云ふやうだと直ぐと出て來てお灸を据えますよ」

「厭だなア、母アやも化けないで、叔母ちやんも化けないで……母アや――、母アや、何故石に化けたのだよう―」

思出したやうにお榮坊は叫んで、其石塔に縋ろうとした。

四人は顏を見合せると、我はいづれも、誰の眼にも溢れる涙、それを見つ見られつ、又もや瞼から絞上げて、此上は血をこぼすより他の涙は無い。

正造は咬縮めて居た齒のわなゝきから口を切つて。

「こ、こんな事をいふ不憫な子を遺して、と、とても船へは乘られない。外國へ行くなんて事ア迚も當前なち出來ないのだが、お前さん達がゐるので安心して、如何かまア出て行かれるといふもんだ……安心して私は

出て行きます。本統に安心して私は出て行きます‥‥なアお榮坊、必らず死んだ‥‥なに、一寸居なくなつた阿母の事や、これから居なくなる俺の事なんかア、後を追うて泣くぢやアないよ。なア、お榮坊、好いか、分つたか‥‥」

お銀の手からお榮坊を抱戻して、其頬と頬と一ツに合しながら、太い指で横撫でに涙を拂ひ。

「好いか‥‥分つたか‥‥」

「阿父ちやん、お船に乗るの‥‥」

「然うだ」

「妾、行きたいけど‥‥」

と首を傾ける。

「そんな事言ふものでは有りませんよ。さア〱叔母ちやんとこへ一所に‥‥さア〱」

と又お銀が抱取る。

此時手放したのが當分の別れと思へば、正造の手はぶる〱〱、風に狂ふ木枝に異らず。

「な、なに分にも、頼みますぞよ」

中

土が落ちた。岩が落ちた。松の木が根から抜けて落ちた。人間も此所から落ちた。皆落ちて海に入るのだ。下には恐ろしい海波が、何んでも好い落ちて來ぬかと、千古常に其大いなる口を開いて待つて居る。最う、しかし、落ちべき物は悉く落ちて、落ちやうの無い膽見の海角に、木造、四角形、白塗、第六等、不動白色の燈臺が立つて居る。其後には燈臺附屬の家屋があつて、其中には池邊番作夫婦と、娘のお銀とで生活して居る。今宵からは一人

殖えた。それは小さなお榮坊である。
月明かに海上を照らして、燈火の光達距離は六里。それから先までも見渡される。窓から首を出してお榮坊は。
「阿父ちやん——、阿父ちやん——、母アやが居ないよ——、母アやが居ないよ——」
あれ程晝間、人々て、嚙んで含める樣に云つて聽かしたのに、死せる母を慕ひ、行ける父を戀ふ。
「何故お前はそんなに分らないのだらうねえ」
とお銀も持餘し氣味で、少しく強く言ふ。
「だッて姨ちやん、彼處に船が見えるちやないか‥‥あれに阿父ちやん、乘ッてるのだねえ」
と乘出して指示す。
「阿父ちやんの船は、もッと〳〵大きいのだからねえ、あれには乘つて居ないのだよ。だからね、最う、そんな事云はないで、さア、最うお寐よ」
とお銀が後から抱下して、寐床へ連れて行かうとする。足をピン〳〵跳ねながら。
「厭だよ、厭だアよウ。もッと見てるんだよ——」
何故お前はそんなに強情なのだらう、と、つい、呵りたくもなる。頭の一ッも打ちたくなる。が、不憫な子である。親を慕うのである。無理はない、道理である。死んだ姉さんが此子を生の母親の手から連れて來た時にも、さぞ此樣で困んなさつたてあらう。其時は未だ頑是なかつたのだから、猶の事困んなさつたてあらう。と云つて自分の生の子なら、呵りも出來やう、脅しも出來たろうが、繼しい子だけに‥‥斯ういふ時には、姉さんは、如何してなだめすかしてゞあつたか。
生の母親の方は慕はないで、繼しい母親の死んだのを、此樣に大騷ぎして探すまでに、如何して馴染まし得たのだ

らうか。妾が亦如何かして、死んだ姉さんを忘れさせる樣に、馴染まして見たいものだが、如何したら好いのであらうかと、お銀が胸には悶へる後の苦勞。それを知らぬお榮坊は、いつの間にやら手からすべり拔けて、又窓へ走寄り、踏臺に乘らうとして、轉げ落ちて、何處を撲つたか、けたゝましき泣聲。

「それ、御覽な。だから言はないこッちやア無いよ」

膝頭の打傷へ唾を附けて、揉んで遣つて。

「さア〳〵お寐よ。今夜から妾が母アやだからね」

「母アや……かい」

「母アやだよ」

「母アや――」

と一聲、ぴたりと寄添うて、顏をお銀の膝に埋める。

* * * * * * * * *

硝子窓から射す月の影。腕に眠るお榮坊の顏を見入つて、お銀はつく〴〵考へた。

だましたり、すかしたり、おどしたり、それが何になるものぞ。此子を如何したら馴染けられるだらうと、苦勞した處で何になるものぞ。恐らく姉さんだとて然うであつたらう。唯只此子が可愛かつたのであらう。自分もたゞ此子が可愛ければ好い、可愛い〳〵と思ふて居たなら、此子も亦自分を本統の母親のやうに思ふてあらう。それ、それ、とお銀は思着いて、ひしとばかりに抱寄せた時に、夢でも見たのかお榮坊は、不意に飛起きて。

「母アや――母アや――」

下

お榮坊は、それから番作老夫婦の情とお銀の愛とて、そだてられて、今日は昨日より、翌日は又今日よりと想像されるまでに能く馴染みて、いつしかにお銀を實の母親のやうに思込んで了つた。

それてお銀が、北野町へ買物があつて出て行くと云つても、後を慕うて離れゝばこそ、村はづれの並木まで尾いて來て「行つては厭だよ、行つては厭だよ」と泣叫び、一時も傍を離れまじき心。

然うなれば益々可愛く、町からの歸途には土產物に何か彼か求めて、待ちくたびれて泣きつかれて、强ねて居るお榮坊に與へるお銀、それて直ぐと笑顏は見られるのだ。

然るに、此所に一事件を生じた。父の番作と母のお光とは、お銀に向つて相談をはじめた。

「なアお銀……斯ういふ事が持上つたのだ」

と番作が口を切つた。

「それも二ッ重なつて來たんだがねえ」

とお光が次いて云つた。

「如何いふ事なんですか」

と何心なくお銀が問ふ。

「いや、一ッはお前の出世になる事だ。最一ッはお前の身の固まる事で……まア斯ういふ事は親の了簡通りにも行かないのだから、能く考へた上て返辭を爲るが好い」

と番作は烟草を喫む。

「本統に然うだよ」とお光は茶を飲む。

「出世する事ッて、それは何んですか」
と其方からお銀は問出した。
「や、それは何んだ、お前も知つてる、あの浦の松原の中へ、立派な別荘を持つて居さッしやる、あの、華族の御隠居様がな、お前を小間遣ひに寄越したら如何かと仰有るので……然うすれば御隠居様も、御退屈だもんだから、書物手習、それから禮儀作法、縫物までぼつ／＼敎へてやらう、それを樂しみに仕たいといふお向ふのお望みだ。其上に餘分の給料まで遣らうと仰有る。いや、それには及びませんと云つたら、如何て人を遣ふからには、タヽといふ譯には行かんから、それなら衣服でもこしらえてやると——如何だい、這んな結構な話は又とあるもんぢやアない。如何だな、行く氣は無いかな」
と父の言。
「それも好し、又最一ッの方は……お前も滿更知らない人ではない、あの、そら、隣り浦の南島の息子が、海軍へ出て居たのが、年明きで歸つて來て、何んでも水兵の最一ッ上で、兵曹とかいふ役ださうだよ。其方から緣談を申込んで來たのだがね」
と母の言。
「どちらでもお前の考へ一ッだ。氣に入つた方へ行く事にしたら……」
と父が又言はうとするのを、お銀は遮つて。
「それは何方でも妾は異存は無いのです。親の極めて呉れた事に、そんなに間違ゐは無いと思つてますから、それはどちらでも好いのですが……然うして妾が居なくなつたら、又お榮坊が母親を失くする事になりますから……」

「おう……」
父母は一時に思はず口走つた。
「それでは又お榮坊が不憫ですから、妾はどちらへも行きますまいよ」
「おう……」
と再び二人は叫んだ。
「お榮坊が物心づいて充分聞分けがつくやうになつて、最う妾が居なく爲つても好いといふまでは、妾は矢張家に居ませうよ。其内には正造さんも、船乗の方を如何かして、陸で働くやうに爲つてかも知れないから……然うしたらお榮坊を渡して、安心して何處へでも行かれますよ」
此時のお銀の身内からは、光達距離六里以上の光輝が射して見えた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

嵐の朝、怒濤は天を衝き、狂瀾は地を穿ち、大なる海をして益々擴張せしめんとして勉めて居るかとも見えて居る。
燈臺の火は滅した。けれども、かゝる日の勤務として、番作は臺上の窓から海上を展望して居らねばならぬ。老いたる眼に双眼鏡を宛て、彼方の岩礁、此方の島影、瀬の方、洲の方、遠き水平線の其方まで。
亂れ飛ぶ水鳥は、走る雲、散る浪、其間を縫うて高し低し。
水鳥悉く雲に入り浪に隠れた時に、遙か――遙か――遙かの沖に、煤烟を認めた。
それが次第々々に近寄るにつれて、マストも見え、チムニーも見え、船體も見えた。檣上に國籍と船名との信號旗が掲げてあるのが見え出した。

「……鳥海丸……」

信號帳を繰つて見て、其船名を知つた。何時何十分、鳥海丸通過と燈臺の日記に誌さねばならぬ。それで番作が筆を取つて書かうとして、思出したのは、鳥海丸の名は、正造が乘込んで居る滊船のそれてある。外國から歸つて來るのてあると氣が着いた。

燈臺の上から叫んだ。

「皆來いよ、お榮坊來いよ。父親の船が見えるぞ〳〵」

老ひたるお光も、若きお銀も、稚きお榮も、急いて燈臺の上に登つて來た。狹い所が一杯だ。

「阿父ちやん、見えるかい」

「阿父ちやんは見えないが、乘つてる船が見えるのだ。あれだよ、あの船だよ」

と番作は指示す。お榮坊は喜んで。

「大きな船だねえ、大きな……」

お銀はお榮坊を後から抱きて。

「危いよ、落ちるよ、今にね、阿父ちやんは、廻はり〳〵してね、翌日か翌々日は歸つて來てだよ。擇山お土産を持つてね」

「然う、嬉ちいねえ」

お光は老眼をしよぼつかせて。

「しかし此暴浪では、さぞ船は大變だらうねえ……」

と心配の言葉。

「船が大きいから大丈夫のやうなものゝ、何しろ、この暴浪だからなア‥‥」

と番作も亦心配。

「あッ、あの、まア、船のゆれ方は‥‥あッ沈んだかと思ふ樣に浪を冠つて‥‥」

とお銀も心が心でない。

「面白いな‥‥船がぎッちらこ〳〵して」

とお榮坊ばかりは平氣である。

「いけないよ、面白かないよ。此暴浪だからね、お前ねえ、如何か阿父ちやんの船が無事に港へ着きますやうにと神樣へお願ひ申すのだよ。神樣をお拜みよ、いゝかえ」

とお銀がさゝやくと、お榮坊は直ぐと手を合せて。

「阿父ちやん、船、お願ひ申ちまつ」

「あゝ、其通り〳〵、さアお榮坊に負けない樣に、私等も神樣へお願ひ申さう」

番作が金刀比羅大權現を拜む。お光が法華で南無妙法蓮華經。お銀は異心で何の神となく心に念じた。

偏北風!!! 名代の荒海。暗礁脈。大逆潮。

四人の祈禱の聲は唇から出ると直ぐ風に奪はれて、合掌の手も開くとばかり。

若し番作が、再び双眼鏡を取つたなら、鳥海丸の後檣の遭難の信號旗の掲げてあるのを見たらうが‥‥

鳥海丸の水夫松田正造の眼からは、鷹見浦の燈臺が殊更に能く見られたらう。小さな手を合せて拜んで居る娘の姿は認められなかたらうか。

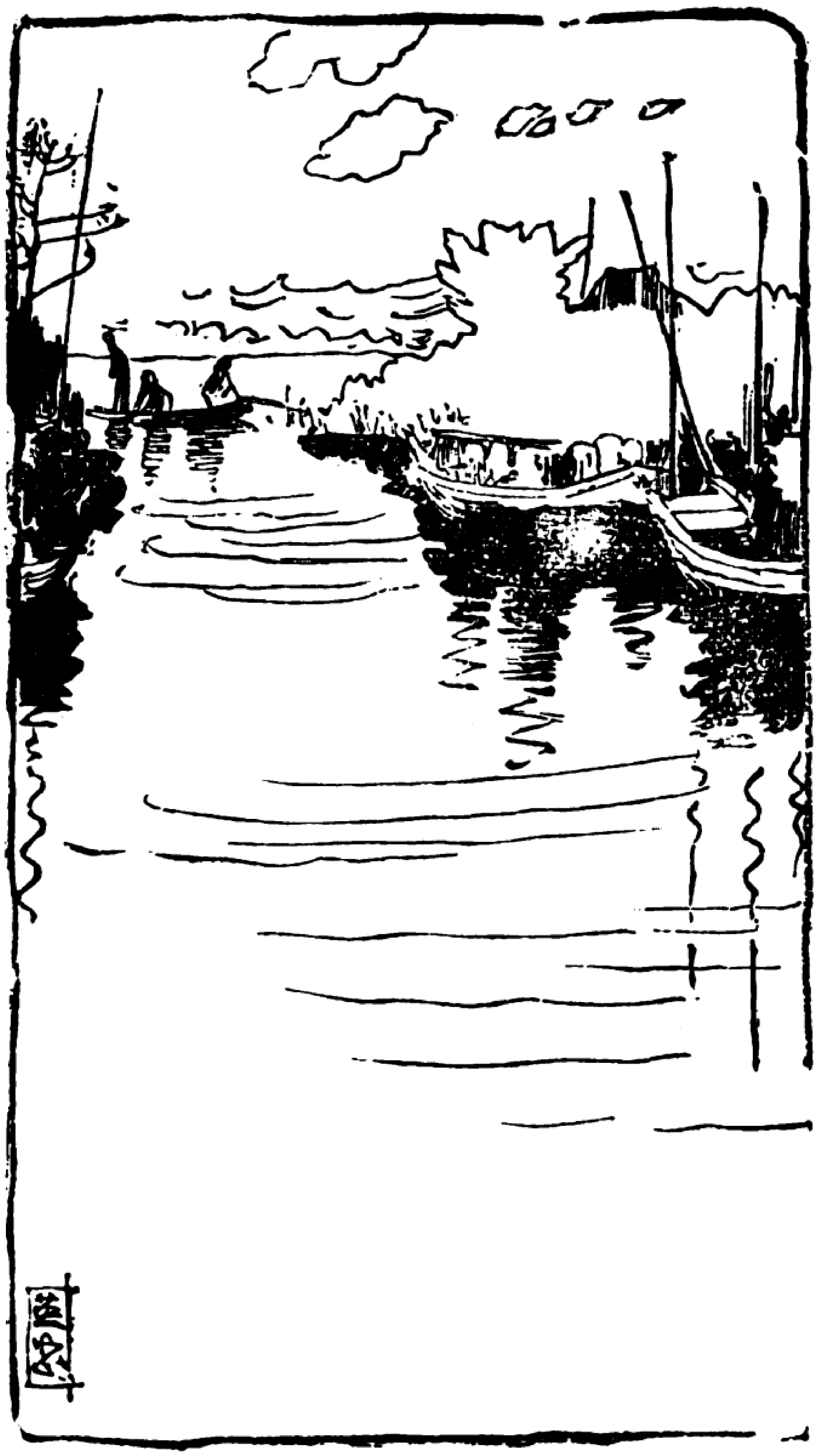
*　*　*　*　*　*

鳥海丸はつひに長崎港に入らなかつた。松田正造は、つひに歸來らなかつた。

お銀は、別莊にも行かず、南島にも行かず。水夫の娘のお榮坊の成長するのを樂しんで待つて居る。

お榮坊は、父の歸來らざるを、それ程に悲しまず、何處までもお銀に親しんで、束の間も離れるのを厭がるのである。

嗚呼、光輝ある燈臺守の娘!!!



彙報

●女子美術學校落成式

女子美術學校（本鄕弓町に在る）は爾來漸次校務を擴張し、講堂、寄宿舍等の建增をなせしが今回愈々落成を告げしを以て十一月一日落成式を執行せり、來賓は松方伯、淸浦司法大臣、千家東京府知事、其他の貴紳女流にては棚橋絢子、三輪田眞佐子、跡見花蹊、松前藤子、千家俊子、其外斯界の名流百餘名にして校長幷に佐藤醫學博士、の挨拶あり次て松方、淸浦、千家各來賓の演說祝辭あり畢ッて一同校内の各室を巡視して生徒就業の景況を見、再び講堂には茶菓の饗應ありたり。同校は昨年四月の開校なりしが開校當時は生徒七十名内外に過ぎざりしも爾來入學者頗る多く目今は既に三百五十名に上り、諸般の設備も槪畧完成して授業の方法その緒に就き校務も茲に一段落を告ぐるに至りしが、同校をして今日の盛況に立至らしめしは、一に校の目的か今日の時勢に必要なるの致す所なりとはいへ又、本校の發起者たる佐藤博士幷に令夫人が熱心なる盡力に負ふ處ろ大なりといふべし

●成女學校紀念祝賀會

同校創立第三週年紀念祝賀會は去る十一月三日天長節の佳辰を卜し、午後零時より麴町中六番町の同校構内に於て擧行せられたり、今其の景況の一斑を記さんに、式は先づ校長代理水谷直孝氏の君ヶ代、卒業生總代福原文子の式辭、生徒總代鈴木いの子の祝辭を以て始まり、次いで德富蘇峰氏の來賓演說あり、女子の方針を諄々說き去り說き來る所獨特の妙旨ありて輕快いはん方なし、了つて餘興に移るや邦語唱歌、英文朗讀、對話、英詩暗誦　英語唱歌、箏、擬劇等數番の演伎ありたるが中にも、村の一家の對話は社交上作法上の演習にも成りて最と面白き業なり、筋は田舍に住ゆる奧樣の許へ先きの師の君はる〴〵尋ね來て、久振にて面會を遂げ、兩人の子女を紹介せて共に談笑歡語するといふにあるが、其間下女の取次、蒲團茶菓の進め方、奧樣の接待振

やら子女の話振やら等、日常居措の一節を遺憾無く巧に做こなされたり、巖本かし子女史譯小公子の擬劇は優にして雅なるもの、伊藤まつ子の侯爵威嚴ある男らしく、鈴木いの子のモドント亦た巧手にして其人らしく、眞の劇を見るとも仲々斯くは氣高く演ずまじと思ふ程いと嚴かに美しうものせられたり、田中とよ子仝とし子兩孃の箏(きぬた)はしめやかに淋たみやびやかに奏でられたり、杉山わかなの英詩暗誦は淀みなくすら〳〵と誦んし得て輕妙、其の他山根たか子松前いく子兩孃の英文朗讀、二年生三年生の合唱英語唱歌、英語擬劇等、孰れもよく練熟しるを以て見ても此校が如何に多く外國語に力を致されしかを窺ひ知らるべし、右餘興の數々畢つて、生徒の手づから調味したる食品茶菓を供し、四時半といふに茅出度閉會を告げたりしが、是より先き校内には、同校建築費の幾分を補ふ料にとて生徒の寄附に繋る編物、刺繡等の製作品幷に雜誌この花を陳列しありて來賓者の購買を求めたり、されば來賓達は幾多才媛華孃の眞心に出てたる手業の程を床しがりて、家苞にもと求め歸へられたるも多かりしが如し。

●女學生の倫理及信仰思想

大阪府清水谷高等女學校が同校生徒に就て試みたる倫理及信仰思想の各設問に對して左の如き結果を得たり之が答案方法に就ては或は不完全なるものありて思想の表示に欠くる所ありたらんやも知る可からずと雖も要するに高等女學期に於ける女子が懷抱せる思想の一斑を知るに足らんか、即ち倫理思想第一問節操の如き一學年に於て僅に百分中十八なりしもの、そが年齒と共に學級の進む毎に漸次増加して四學年には六十三餘を示すに至れり、第五問の育兒は初年百分の一、七に過ぎざりしが四學年に至りて三十九、四に上れり、第七問に於ては圓滿なる家庭の生活を最多數に表示し、又た第九問に於ては忠孝その大部分を占めたり、次に信仰思想に就ては佛教を表白したるもの最も多きが如し、倘は仔細に之を點檢せば女生の思想が如何なる經路を辿りつゝあるか、其の觀念その信念は如何に支配されつゝあるかの大概を察するを得べし、是れ實に教育上興味ある調査にして幾多有力の參考資料を與ふるものといふ可し。

◎倫理思想

▲第一問　女子に最も必要なる德義

種別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	平均百分比
節操	一八、〇	三四、二	三〇、〇	六三、八	三六、五
行儀	三二、〇	二四、二	一二、五	一六、七	二一、〇
和順	九、〇	一〇、〇	四一、七	七、六	一七、一
實家	三一、〇	一〇、〇	六、三	四、五	一三、〇
慈善	一、六	六、三	二、一	一、五	二、九
雜	三、二	七、九	五、三	四、五	五、二
不明	五	七、四	二、一	一、五	四、〇

雜の部は學問、忠孝、公德、愛國、寬大、忍耐、誠實、節儉等を合せたり

▲第二問　女子にありて最も不德と思ふこと

種別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	平均百分比
不節操	一五、五	二四、二	二二、〇	四八、五	二五、二
嫉妬	一七、二	三〇、五	二七、一	二三、五	二四、六
粗暴	二五、四	一三、二	一一、八	一〇、三	一五、二
傲慢	五、七	七、四	一六、六	一〇、三	一〇、〇
多辯	一〇、〇	一〇、〇	九、四	四、七	八、五
邪慳	四、九	二、一	六、二	—	三、三
雜	一六、四	六、八	四、二	二、九	七、六
不明	四、九	五、八	三、一	—	三、五

雜の部は華美、不孝、妄恩、詐僞、陰險、愚痴、短氣、虛弱、不忠、害他、偏頗等を合せたり

▲第三問　女子に最も大なる性質の長所

種別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	平均百分比
溫順	四二、六	三五、三	三四、四	五一、五	四一、〇
綿密	七、五	一二、六	三八、五	三一、二	二二、五
慈愛	四、一	一五、三	一四、六	一二、一	一一、五
優美	一三、一	七、四	四、二	一、五	六、六
齊家	九、八	一〇、〇	四、二	三、〇	六、八
雜	一七、二	一二、一	一、一	一、五	八、〇
不明	五、七	七、四	三、一	—	四、一

雜の部は裁縫、熱心、品行、節操、學問、報國、忠孝、口辯、忍耐等を合せたり

▲第四問　女子に最も大なる性質の缺點

種別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	平均百分比
嫉妬	一六、四	二三、七	一九、五	二八、八	二二、一
狭量	六、五	一五、三	四二、四	二一、二	二一、〇
柔弱	一五、六	一八、九	二八、七	一九、七	一八、二
多辯	一〇、四	七、九	三、一	九、一	七、六
淺智	五、七	一二、六	五、二	一、五	六、三
雜	三、三	二、六	三、一	三、〇	三、四
不明	四二、一	一八、九	七、三	一六、七	二一、四

雜の部は虛飾、主我、過敏、保守、依賴心、輕操等を合せたり

▲第五問　女子の第一に勉むべき事業

種別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	平均百分比
齊家	九、〇	五七、九	六〇、四	五四、五	四五、五
育兒	一、七	一五、八	二八、一	三九、四	二一、三
裁縫	一八、〇	一二、六	二、一	一、五	八、六
雜	二〇、五	九、五	九、四	四、五	一一、〇
不明	五〇、八	四、七	—	—	一三、八

雜の部は禮義、忠義、儉約、學問、和順、孝行、貞節、慈善、養蠶、出納、手藝、交際、綿密、內助、謹愼等を合せたり

▲第六問　女子に最も適當なる仕事

種別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	平均百分比
裁縫	五〇、〇	五二、一	二八、一	一二、二	三六、四

家事	一八、九	三二、六	四六、八	四〇、九	三四、八
看護	四、一	二、六	一、四	二四、二	一一、四
育兒	五、七	二、六	二、一	一〇、六	五、三
雜	二一、三	一〇、〇	八、三	九、一	一二、二

雜の部は孝行、學問、裁縫、教師、料理、機械、醫師、交際、技藝、慈善業、整頓、綿密を要する事業を合せたり

▲第七問　女子に最も幸福なる境遇

種別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	平均百分比
圓滿なる家庭の生活	一三、九	一一、五	四三、七	四五、五	二八、七
學藝に長じたる時	二五、四	二一、六	八、三	一五、七	一八、〇
良緣を得たる時	一八、九	一四、二	六、二	四、五	一一、〇
良子女を設けたる時	四、九	六、八	六、二	一八、二	九、〇
父母長く存すること	九、八	七、九	四、二	一、五	五、九
他の愛敬を受くる時	四、一	六、三	七、三	一、五	四、八
良性質を備へ得たる時	三、三	四、七	六、二	四、五	四、七
雜	四、九	六、三	七、三	三、〇	五、四
不明	一四、八	二〇、五	一〇、四	四五、一	二、大

雜の部は安樂、國のために盡したる時、慈善、富貴、健康等を合せたり

▲第八問　女子に最も不幸なる境遇

種別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	平均百分比
早く兩親を失ふとき	一七、二	一六、三	一九、八	一三、六	一六、七
無教育なること	一五、六	一八、四	九、四	一〇、六	一三、五
虛張なると	六、六	一四、二	一四、六	一六、七	一三、〇
早く夫に分るゝ時	一一、五	八、九	九、四	一二、二	一〇、五
一家の不和	四、一	五、三	一三、五	一八、二	一〇、三
不良の夫を持つとき	五、七	六、三	二、一	一、五	三、九
雜	一六、四	一〇、五	一二、五	一三、六	一三、三
不明	二二、八	二〇、〇	一八、七	十三、六	一八、八

雜の部は出產すること、貧乏なること、子なきこと、不育の子ある婚を得ざる、世の擯斥を受くる等を合せたり

▲第九問　世間にて最も賞讃すべき行爲

種別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	平均百分比
忠孝	三二、八	四四、七	三二、三	三六、四	三六、六
愛國	一三、一	一一、六	一六、七	二一、二	一五、七
慈善	一五、七	一三、二	一三、五	七、六	一〇、〇
禮讓	一二、三	六、三	一〇、四	三、〇	八、〇
公益	〇、八	四、二	六、三	四、五	四、〇
節操	三、三	三、七	三、一	四、五	三、七
雜	二七、九	一四、七	一五、六	二一、二	一九、八
不明	四、一	一、六	二、一	一、五	二、三

雜の部には勤勉、儉約、齊家、學藝、溫和等を合せたり

▲第十問　世間にて最も擯斥すべき行爲

種別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	平均百分比
不忠孝	一八、九	一七、九	一一、五	一九、七	一七、〇
盜賊其他の犯罪	一三、九	二六、八	一三、五	一〇、六	一六、二
狡猾邪慳	九、八	一三、二	二〇、八	一五、二	一四、八
不品行	一〇、七	六、八	一一、五	二一、二	一二、六
貪慾	五、七	六、八	四、二	四、五	五、三
國の禍を顧みぬ行	一、六	三、七	六、二	六、二	四、四

雜	二七、九	一三、七	二一、九	一五、二	一九、七
不明	一一、五	一一、六	一〇、四	七、六	一〇、三

雜の部には無智、不規律、吝嗇、高慢、嫉妬、怠惰、無作法、忘恩、公德を敗ること、多辯等を合せたり

◎信仰思想

▲第一問　各自の信奉する宗教は何なるか

種別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	平均百分比例
佛教	五六、〇	五五、四	四一、三	二五、〇	四四、五
神道	二、六	二、八	二、二	二一、九	七、四
基督教	二、六	八、五	五、四	九、四	六、五
無宗教	二、六	一〇、七	七、六	一一、〇	八、〇
雜	一九、八	一九、八	三五、九	二五、〇	二五、一
不明	一六、四	二、八	七、六	七、七	八、六

雜の部は妙見、春日、太陽、聖天、住吉神社、金光教、天満宮、天照太神、出雲神社、頁心、儒教、稻荷、摩耶社、湊川神社、高津社、神功皇后等と記せらるものを合せり

▲第二問　人死するときは靈魂如何になるか

種別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	平均百分比例
消滅すとするもの	一六、四	二五、九	二六、一	三一、三	二四、九
淨土又は天國に行くとするもの	三一、〇	二八、八	二〇、七	二〇、三	二五、二
輪廻を說くもの	一三、八	一六、九	一五、二	九四、一	三、八
單に永存すと說くもの	一六、四	一三、六	二七、二	二一、九	一九、八
家内又は墓地に在りとするもの	一二、一	九、六	三、三	一、六	六、七
不明	一〇、三	五、二	七、五	一五、五	九、六

▲第三問　神佛は如何なる靈能を有するか

種別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	平均百分比例
靈能を說くもの	七五、八	七〇、六	七六、一	七三、四	七四、〇
靈能なしとするもの	一六、四	二三、二	一八、五	二五、〇	二〇、八
不明のもの	七、八	六、二	五、四	一、六	五、二

●巖谷小波氏の歸朝

先年獨逸國伯林なる東洋語學校の招聘に應じて渡航せられたる巖谷小波氏は今回其任を畢へて歸朝の途に就き去一日午後七時新橋着の滊車にて無事歸京せられたり、出迎の知友無慮二百名、猶氏の歐西覽考談、幷に泰西家庭談等有益にして趣味ある記事は追々本誌上に顯はるべし。

●女學生の趨向

本年四月に於ける全國高等女學校入學志望者及入學者に關し文部省にて調成したる統計に依れば、本科入學志望者總數一萬三千八百三十一人にして、内入學を許されたるもの九千百五人なり、而して更に之れを各學年別にすれば、一學年志望者七千五百十九人、内入學者四千八百五十三人、二學年入學志望者三千四百七十七

人、内入學者二千二百五十九人、三學年入學志望者二千四百三十四人、内入學者千六百八十一人、四學年入學志望者二百九十七人、内入學者二百四十六人、五學年入學志望者百〇八人、内入學者六十六人なり、更に一學年入學者四千八百五十三人に就て其經歷を區別せば、高等小學四學年卒業千〇二十四人、同三學年修了千百二十七人、同二學年修了二千六百〇二人、其他の者百人之に依つて見れば入學者の最多數は高等小學二學年修了者にして、次は四學年卒業者なりとす、此の如く學級の高きものよりも却つて卑きもの丶入學者の數多きは、高等女學校第一學年入學資格は高等小學校第二學年修了程度のもの多きを以て斯の如き現象を見るに至りたるものなりと云ふ。

●流行の衣裝髮飾

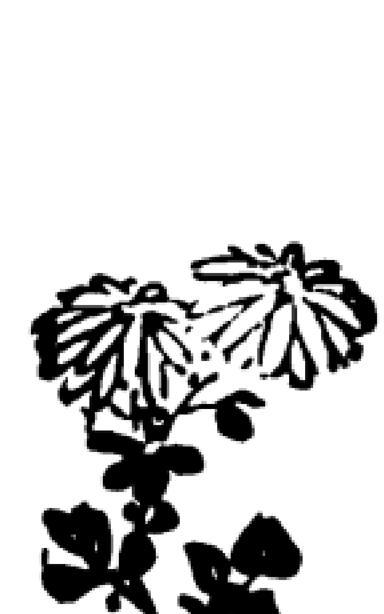
●七五三の祝　髮置着袴帶解の祝ひ日も彌今日となりしが七歲の女子五歲の男子三歲の女子を持てる親々は今日を晴と愛兒を着飾らせて何れも土地々々の產神へ參詣して身祝ひをするうち麹町の山王神田の明神招は湯島の天神芝の神明などは主なる大社ゆゑ當日の賑ひもまた一層ならん

▲▲○七歲の女兒の祝ひ着には先づ模樣もの丶上衣地質は無論縮緬て色合は當世流行の黒といふ所を紫又は紫根左もなければ空氣熨斗は褐色の優美なるものにして紋は五所大さは鯨の八分位染方は晴染ならば下の模様は松竹梅か鶴龜また時節柄菊或は紅葉なども好し中には薔薇牡丹水仙などを染る向もあり下着は小供の事ゆゑ上下三枚同一のものより中着を赤、下着を白にし地質は二枚とも紋羽二重にして紋に鶴又は四田を出したものか左もなければ下着を二枚を赤にしたるもの多し次に帶の模様は吉野龍田川又は鶴牡丹の丸などは最も上品て地質は繻珍の薄地ものに人氣あり

◉三歲の女兒になると友禪染のものが多いが三枚襲は少く重に二枚襲になつて模樣も小さく而して赤色の多いのを好み地質は縮緬か紋羽二重の類過は赤色帶は七歲の女兒の分と差して異つた所もなけれど扱は兩端に房の下つたものを賞するやうてある

▲▲五歲の男兒の衣服上衣は相變らず五つ紋の熨斗目て色は褐色熨斗目模樣は七五三の筋か又は松を上部に描き間に雲をあしらふとか或は鳳凰に翼をひろげて居る所か左なくは松竹梅此の下着は上が黒なれば配合上先づ白茶か水淺黃羽織は地質を羽二重か寧ろ紬にして色合は黒か褐か褐色此羽織袴衣と同一の熨斗目を用ふるのが先づ本式の熨斗目を附けぬものは祝儀外にも用ひやうといふ經濟上から割出したものに過ないのてあるまた羽織の紐は白か又は鶯茶色なり帶は紋博多或は繻珍の色合は茶か紺または褐色て模樣は小さな美しいもの多し袴は仙臺平五仙平または繻珍の鎌倉模樣か段の縞か淡い茶又は焦茶などもあり其他鹽瀨を紫根樣の色に染て鷸經袴の如く後に紐の付たものは至つて可愛らし

▲髮飾　▲▲七歲位の娘はモール、ツマミ又は朱花の菊牡丹の十輪から二十輪位の小花を寄せ合した前差し又は本銀簪の白上り菊牡丹の十五輪から二十輪位の寄せ物へ同じ銀白上りの短册を下げたもの大に流行す



女學世界第貳卷第十六號記事豫告

（十二月五日發行）

每月一回五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）……金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内〔定刊數……十二册／增刊四回……三、六、九、十一月價格同一〕

郵稅　一册　二錢

廣告料

二十四字詰　一行／半頁廿二行／一頁六十四行

特等　一等　二等　三等

一行……四十三錢　三十五錢　三十錢
半頁……十三圓七十六錢　十一圓二十錢　九圓六十錢
一頁……割引三十三圓　割引二十七圓　割引二十二圓　割引十八圓

△等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

明治卅五年十一月十五日發行（第貳卷第十五號）

編輯人　松原岩五郎
發行人　内山正如
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍（東京市京橋區西紺屋町二十六七番地）

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

博文館各雜誌發行表

定價

雜誌	定價	郵稅	發行
太陽	一冊參拾錢	郵稅參錢	每月一回
少年世界	一冊拾錢	郵稅一錢五厘	每月一回
中學世界	一冊貳拾錢	郵稅貳錢	每月一回
女學世界	一冊貳拾錢	郵稅貳錢	每月一回
文藝俱樂部	一冊廿五錢	郵稅貳錢五厘	每月一回
太平洋	一冊六錢	郵稅五厘	每月曜日
圖書世界	一冊參錢	郵稅五厘	每月一回

拾壹月發行日

雜誌	號數	發行日
太陽	第十四號	五日發行
中學世界	第十四號	十日發行
女學世界	第十四號	五日發行
文藝俱樂部	第十五號	一日發行
少年世界	第十五號	一日發行
圖書世界	第四號	廿五日發行
中學世界定期增刊 珠星壁月	第十五號	二十日發行
女學世界定期增刊 冬木立	第十五號	十五日發行
太平洋	第四十四號	三日發行
	第四十五號	十日發行
	第四十六號	十七日發行
	第四十七號	廿四日發行

廣告料

雜誌	料金	詰
太陽 一行一回	金四十五錢	五號活字十八字詰
少年世界 同	金四十錢	五號活字廿四字詰
中學世界 同	金三十錢	五號活字廿四字詰
文藝俱樂部 同	金四十錢	五號活字廿四字詰
女學世界 同	金三十錢	五號活字廿四字詰
太平洋 同	金四十錢	五號活字廿二字詰
圖書世界 同	金十五錢	五號活字廿四字詰

（後付の一）

帝國百科全書

新刊

法學士 小原新三君著

行政法汎論

全壹冊

正價 特製 金五拾錢 郵稅 金拾錢
並製 金卅五錢 郵稅 金八錢

（博文館發兌）

法律學中尤も浩汎尨雜なるものは實に行政法也隨て之に關する學說夥多にして之が觀念を捕捉し能はざる也著者は現に立法行政二要部に在り傍ら斯法に關し敎鞭を取らる丶もの數年夙に博識にして見地の卓拔なるを以て名あり其法理を斷ずるは恰も快刀亂麻を斷ずるが如し學者及實際家の苟も一讀せざるべからざる良書也

新刊の法律書

明治法律學校長 岸本辰雄君序文
東京帝國大學法科大學敎授岡田朝太郎君校閲
明法學士 山口慶一君編纂

新舊對照 刑法蒐論

全一冊 洋裝 紙數六百六十頁
正價 金八十錢 郵稅 金十六錢

東京 博文館發兌

刑法改正案出で丶端なく世論の沸騰を招き贊否騷然二期の議會を經て未だ決せず本書は玆に見る處あり法曹界に最も用ひらる丶學者の意見を蒐め改正案と現行刑法とを對照して其理由を擧け又判決例の適用を示し特に岡田法學博士の校閲を經たるものなれば普く講法家の好資料たるのみならず諸種斯學に關する試驗に應ぜんとする者の爲めに金科玉條と謂ふべき也

（後付の二）

商業叢書新刊

法學士森山守次君著

歐米商業實勢

（博文館發兌）

全壹冊　洋装　上製正價六十錢　郵稅金十錢　並製正價四十五錢　郵稅金六錢

旋轉變化測るべからさるものは夫れ天下の商勢か著者親しく歐米の諸州を歷遊し躬から其境に臨みて備さに經濟的機運の伏在する所を觀察し歸來我商勢の萎微振はざるを覩て慨然として斯書を著す主として歐米各邦の商々に就て其財的實勢の古往今來を觀察詳査し金融貿易交通市場等箇々の狀勢と機局とを細說し精査詳究の致を極む節初冬に近く燈火親むべし天下の形勢に通ずるを以て念とするの士幸に愛讀を賜へ

語學書の發刊

露國神學士西海枝靜君著

實用露和會話

（博文館發兌）

全壹冊　洋装上製袖珍　正價金五拾錢　郵稅金六錢

西伯利亞大鐵道全通して日露の交通愈々頻繁なるべき今日我國に於ける露語教科書の著たる一も其需用を充すもの無し本書は單語イロハ順會話對話軍事會話書簡文例動詞變化法等の部門に分ちて露語を收むる者に取りて無二の實典たるのみならず軍人商業家に必要なる兵話商業取引文字を網羅し著者の用意周到詳密にして東洋唯一緊急須要の最良著也

（後付の七）

(後付の八)

新刊豫告

文學士 史學専攻 坂本健一先生編

世界史 下

（近刊）

洋装背皮金文字入紙數千頁頗美本

上下幾千歳の興亡は、常に世界的統一的趨勢を示し、最近に至り凡百の事相殆んど世界的となる、嘗て西人獨りアールヤ文明を重しとなし、偏に歐米列強を說きしは狹!、亞細亞文明あり、數學あり、昔匈奴、蒙古、土耳古の西せしは、今英露其他の東するが如し、東亞の老帝國は近く世界的大競爭場たらん、世界中東洋豈輕しとせんや、殊に今の時に當つて東洋新興隆の我國民が史的智識に基きて、東洋的感想を養ふを要するや。言を俟たず、是を以て、古今東西を通敍して、聊か國民に薦めんとするは既出邦文世界史中に於て、稍詳密を得たる本書編纂の目的なり、

曩に上卷を發兌するや、讀者社會より盛に歡迎せられて、世に行はるもの數千部、今や下卷の印刷に着手せり、世の斯學者は上下を通して購讀あれ、既に上卷を閲せられたる士は、本書が如何に詳密にして敍述の整到なる、講學上、研究上、至便至益なるかを知せらるゝなり、

既刊

文學士 坂本健一先生編

世界史 上卷

（金文字洋装背皮美本）

▲正價金壹圓六拾錢

▲小包送料四百匁

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

文學世界
每月壹回五日發行
第貳卷第拾五號
（明治參拾參年拾貳月廿五日 第參種郵便物認可）
（明治參拾五年 十一月十五日定期増刊）

坪谷善四郎君著

増訂 日本女禮式大全

全一册

洋製 上製金字入
和製 函入特製

▲口繪 彩色木版精巧畫及寫眞銅版女禮各式拾數葉入

本書が世の良妻賢母の友として、女學生の良師友として、歡迎せられたるは、發刊後既に十數版を重ねたるにても知らる。著書は此の如き好評を博すると共に、益〻責任の重きを悟り、更に全文を修訂して増補の新刊を成す。日本固有の女禮の美性と、泰西普通の禮式の外に女子の知るべき禮式技藝作文作歌、其他一切の事を網羅し、記事の豐富と文章の流麗に加ふるに、製本の美なる世に比類なし。女學生は勿論良妻賢母及令嬢を有せらるゝ父兄方は必らず、一本を備へ賜ふの必要あらん。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（定價金貳拾錢）

東京秀英舍印刷